

鈴木泰教授を送る

月本 雅幸

本研究室の鈴木泰教授には平成二十一年三月をもって東
京大学を停年退職されることになった。本来この『日本語
学論集』においても、同教授御退職の記念号を編むべき所
かとも思うが、同教授が固辞されたため、本年度国語研究
室の主任を務める月本が拙い一文を記して、同教授への感
謝の辞とすることとした。この点読者諸賢には御了承を頂
きたいと思う。

鈴木泰教授は昭和二十年七月十七日タイ国のお生まれ、
昭和四十年四月に東京大学教養学部文科三類に入学、昭和
四十六年六月に東京大学文学部国語国文学専修課程を卒業
された（この年は当時の大学の状況から卒業は六月であつ
た由）。同年七月に東京大学大学院人文科学研究所修士課程
に進まれ、同課程修了の後、昭和四十九年四月には博士課
程に進学、昭和五十年三月に中途退学をされている。昭和
五十年四月からは山形大学人文学部に専任講師として勤務

され、同五十四年二月には助教教授に昇任された。昭和五十
六年十月には武蔵大学人文学部助教教授に転じられ、昭和六
十一年四月には教授となられた。さらに平成五年四月には
お茶の水女子大学に文教育学部教授として移られ、平成十
五年三月までその職にあられた。本学には平成十五年四月
において頂き、六年間在職されたことになる。

御専門は古代語のテンス・アスペクトの研究で、御著書
には『古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の
分析―』（ひつじ書房、平成四年）、『同 改訂版』（同、平
成十一年）、『古代日本語時間表現の形態論的研究』（ひつじ
書房、平成二十一年）、『ゲースタディー日本文法』（共著、
おうふう、昭和六十二年）など、これに加えて論文多数が
ある。

また、この間日本語文法学会会長、日本語学会副会長な
ど、学界の要職を務められ、文部科学省関係の審議会委員

なども歴任された。

鈴木先生（以下、このように呼ぶことをお許し願いたい）に我々が感謝すべきことは数多くあり、それは教員・学生それぞれの立場から種々のものがあるが、私は特に以下の二点を上げておきたいと思う。

第一は、本研究室の名誉教授、故松村明先生の御蔵書の措置について、先生が大きな役割を果たされたことである。

松村先生の六万冊とも言われる膨大な御蔵書のうち、約二万冊は御遺族から平成十五年度、国語研究室に寄贈された。

この中の明治末までの写本、刊本七―四五冊は既に文学部の特許コレクションとして認定され、整理が行われて順次公開されつつある。だが、問題は松村邸に残された書物であった。松村先生の御遺志により、御遺族は国内のいずれかの大学への寄贈を希望されたが、昨今の日本の大学の状況を考えれば、それは極めて困難なことであった。

ところが、御着任早々の鈴木先生はその広い人脈を生かして、松村邸に残された書物の大部分を北京の日本学研究中心に寄贈する道筋を瞬く間に付けられた。また、それ以外の書籍は台湾の大葉大学と韓国の高麗大学に引き取られることになった。これらは全て鈴木先生のお力によるものであるが、こうして松村明先生がその生涯を通じて収集された膨大な書物は日本の国語研究室と、中国、台湾、韓国という東アジアの諸国で末永く後世に伝えられること

となったのである。周囲の我々は先生の人脈の広さと鮮やかな交渉の手腕に驚嘆したことであった。

そしてもう一つは、先生がそのお人柄により、研究室に新風を吹き込んで下さったことである。一般に学者は自説に立脚して主張するのがその職務であると言ってもよいのだろうが、先生にはそのような一面と共に、何とも表現したい温かく、かつ卓越したバランス感覚のようなものがあり、周囲の者を和ませる力をお持ちである。それゆえであろう、私は先生が前任校において広く学生から慕われ、同僚の方々の厚い信頼を得ておられたと人伝に聞くことしばしばであった。この六年間、先生の醸し出される雰囲気は間違いなく我が国語研究室の学生達にも良い影響を与えたものと思う。ただそれだけに、先生が職場を去られる時、周囲の同僚や学生は寂しさを常にも増して感ずるのである。今、我々もまた同様の思いを禁じ得ない。

こうして、鈴木先生は東京大学を去って行かれる。まことに名残惜しいことではあるが、先生の今後のますますの御研究の進展と御健康をお祈りし、感謝の辞としたい。

（つきもと まさゆき 大学院人文社会系研究科 教授）

東京大学国語研究室蔵『仮名論語』について（一）

柳原 恵津子

一、本資料について

『仮名書き法華経』『仮名書き論語』など漢籍・仏典等を仮名書きした資料群は、部分的ではない逐字的な漢文訓読法を知ることができ、また漢語類の発音・表記、音便をはじめとした日本語の音韻を仮名で示してくれるなど、日本語史のある一部分を考える上で欠かすことのできない役割を持つものとして広く用いられてきた。

このうち安田文庫旧蔵『かながきろんご』の名で知られる文献については、漢籍を仮名書きした貴重な資料として広く知られているにも関わらず、原本は多くの安田文庫の資料類とともに、おそらく太平洋戦争末期の空襲によって塵灰と化してしまったものと想像されており、今日では『安田文庫叢刊』（昭和十年）におさめられた川瀬一馬氏による翻刻をもって読み継がれている。川瀬氏による翻刻は私が言うまでもなく信頼に値するもので、このような国語学的

に重要な文献が早いうちに氏によって紹介されたからこそ今日もなおこの文献の概要をうかがい知る事ができるということはまさに幸運だといえる。更に氏はこの翻刻の冒頭に八葉の文献写真をも載せており、一部ながら本資料の体裁を確認することができるのである。

しかしこのような形で本文献に触れているからこそ、是非ともこの文献について知ることのできる更なる手段はないかと求めたいところであろう。筆者はその一助となりうる文献として、東京大学国語研究室所蔵の『仮名論語』を紹介したい。

この『仮名論語』は、安田文庫旧蔵の『かながきろんご』の原本を、明治四十三年に影写したものである。奥書を見ると「謄写 阪部梁文、校合 橋本進吉」とあり、橋本進吉博士の指示・校合のもとで作成されたものだということ

ことが知られる。

体裁は和装本、原本と同じく三分冊で、川瀬氏の書誌解説で知られたとおりの体裁をとっている。

本文を先にあげた『安田文庫叢刊』所収の原本の写真と対照してみても、相当程度（傍書・抹消などはもとより、筆の太さや、筆のとぎれ目にいたるまで）原本に忠実に記しており、焼失したと思われる原本のほぼ全貌を知ることができる資料と言つて差し支えない。

以下、この東京大学国語研究室本『仮名論語』の第一分冊・第三分冊の翻刻をおこなう。

なお、本資料は『かながきろんご』の名で広く知られているが、この名は本資料中には見られず、扉等には「ろんご写本」「論語古写本」などと記されており、謄写時のものと思われる題簽に『仮名論語』とあることを申し添える。

二、書誌的事項

まず、本資料に関する書誌的事項を記しておきたい。

本資料の体裁は袋綴装、三分冊である。川瀬氏による原本の解題には、この三分冊のうちの第一冊・第二冊は室町中期の写本、第三冊はこの室町期の写本をもとに江戸期に作られた副本で、正本副本ともに一部のみが伝わった不完全な伝本とあるが、東大国語研究室もこの体裁を忠実に

再現したものと思われる作りで、第一冊・第三冊と第二冊の間には筆致・一丁当たりの行数・一行当たりの文字数などの面で差異が見られる。また川瀬氏の述べる

第一冊 雍也第六の第二十四章から子罕第九の第五章まで

第二冊 郷党第十の第八章から同篇末まで

季氏第十六の第一章の半から同章末まで

子路第十三冒頭から第九章の半まで

衛靈公第十五の第五章から第十二章まで

第三冊 先進第十一冒頭から陽貨第十七の七章まで

という各冊の内容も安田文庫旧蔵本とほぼ同じである。ただこの翻刻に付された原文を見るに、正しくは

第一冊 雍也第六の第二十四章から子罕第九の第五章の半まで

半まで

第二冊 郷党第十の第八章から同篇末まで

季氏第十六の第一章の半から第二章の半まで

子路第十三冒頭から第十四章の半まで

衛靈公第十五の第五章から第十二章まで

第三冊 先進第十一冒頭から陽貨第十七第一三章の半まで

で

であり、この差異がなにによるものかは判然としない。

各冊とも料紙は薄斐紙を用い、間に楮紙を挟み二つ折りにした上で綴じている(五六)。

大きさは縦35・5cm×横23・4cmの美濃判、明治末期(おそらく謄写時のものである)の薄茶地無文表紙に同じく明治末期頃の題簽が添えられ、これに『仮名論語』とある。また各冊の背には「仮名論語 共三冊」の文字がある。

なお各冊表紙に東大国語研究室の請求記号を記したラベルが貼付されており、「国語研究室/第3棚/第4号/第1冊(孫番号)」の如くが記されている。それを見ると川瀬氏のいう第一冊に「1」、第二冊に「3」、第三冊に「2」との孫番号が記されている。これは川瀬氏のいう第二冊が全く前後脈絡のない断片の寄せ集めのような体裁だからかと思われる。筆致の一致(あるいは正本副本)という面から言えばやはり川瀬氏の番号の振り方がなお有効であるが、しかし本稿ではひとまず東大本のラベルに習い、川瀬氏翻刻の第二冊を第三冊、川瀬氏翻刻の第三冊を第二冊、と呼ぶことにする(他に表紙にラベルは2種、都合3種貼付されている。表紙右上部のラベルには「東京帝国大学附属図書館/No152385」、右中央よりやや下には「東京帝国大学文学部国語研究室/雑書門漢書類/3冊」とあり、これら

二つは明治期末のもの、上記した請求記号のラベルは右下にあり、これは戦後のものと思われる)。

三、凡例

(1) 本文の表記について

・ 本稿では東大国語研究室本『仮名論語』全三冊のうち、第一冊および第二冊を翻刻する。なるべく元の姿に忠実であることを旨とし、ページや行の区切りを原本の通りに示した。

・ ただし巻末の書写奥書は、一行の字数が多いという都合上原本通りの改行がかなわなかった。そこで奥書についてのみ改行部分を「」で記すこととした。

・ 原本で漢字の部分は漢字のまま、仮名の部分は仮名のまま表記した。漢字は全て新字体を使用し、仮名や疊符に付された濁点の有無も、原本のままに記した。

・ 本文中の漢字に振り仮名が記されている場合にはこれも忠実に記した。

・ 本文中のある部分の右側にいわゆる傍書がなされている部分も多く見られる。このような箇所については実際に傍書がなされている箇所には傍書の記事も記した。

・ 本文中小さな「○」印を挿入符として用い、その近

くの余白に挿入すべき字句が記されている箇所も多くみられる。そのような箇所については「○(〜)」のような記号を用いて、挿入すべき字句を本文中に記した。

・行頭部に小字で書かれた頭書については「小書き頭書」のように頭書部分を鉤括弧で囲って記した。

・紙幅の関係で行末部分が左傍に記されているような箇所については、同じように行末部分の左傍に記すよう努めた。

(2) 貼紙の表記について

・本資料は処々に貼紙がみられる。貼紙に記された記事については、その記事の冒頭部に「(貼紙)」とし、るしてから本文を記し、その記事の末尾には「(貼紙終)」と記した。

(3) 注記について

・存疑の部分等、翻刻する上で注記が必要となった箇所については当該部分の本文中に「※」「※」のように印を施し、その丁の末尾に注記を記した。

(4) 抹消部分・空白部分等の表記について

・本文中抹消された部分については、消された部分

が判読可能な部分については「[...]」でくくってこれを出来るだけ示した。判読不可能な部分については「■」で記した。

・本文中空白となっている部分については当該個所に「□」を示し、本文の脱文が想定されるか、などの注記を適宜を施した。

・重書された部分については、下に記された字が解読可能な場合には、下に書かれた字句を注記欄に記した。下に書かれた字が判読不能場合には特に注記はほどこさなかった。

・判読不可能な字句は「●」で記した。

・論語原文に存する字句がかな書きされず省かれているという箇所がごく稀であるが見られる。そのような箇所については、そのつど注記を施した。

(5) 紙の区切れ目について

・本資料の原本の形態は、第一分冊は元来綴本であったものが後に卷子本に改められたもので、第二分冊はもとより卷子本であったものようである。

このため、謄写に際し、第一分冊は実際の紙の切れ目に合わせて紙を使用し、実際の折り目跡の部分で二つに折って綴じており、これに対し紙幅のまちまちな第二分冊については、紙の区切れ目ま

では再現せずに、実際の境目に縦線を引くことでこれを示している。本稿ではこの第二分冊に記された紙の区切れ目を、「二」で記した。

(6) 篇・章の区切れについて

・各篇・章の境目に「一」で印を施し、その境目の行末尾に篇の名称・章の番号を川瀬氏の翻刻に添えられた原文に基づいて記した。

四、本文

〔第一冊〕

〈二才〉

(朱印) 「東京帝国大学図書印」

〈二ウ〉

ろんご写本

(朱印) 「文彦」

△印

二本の中

(貼紙)

このまきに

やうやてい六の末より

しかんてい九の

きやうひとそれわれを まであり

おくがきなし

(貼紙終)

〈三才〉

(本紙上部朱割印) 「東京帝国大学図書印」

『はくじんしやにたとひつげていはく (雍也第六、二四)

井にじんしやありといは それ

したかはんやし のゝたふまくなん

すれぞそれしからんくんしは

ゆかしむべしおちらしむ

へからずあざむくべししう

べからず『しのゝたふまくんしは

ひろくぶんをまんでやくする

にれいをもつてす又もつて

(二五)

〈三ウ〉

そむかざるべし『しなんしを

見るしろよろこびずふうしちかつ

てのたふまくわれすまじきところ

をせば天ふさがん／＼『しのゝたふまく

中庸ちゆうゆうのとくたる事【おもそれ】いたれ

るかなたみすくなひ事久し

『しこうがいわくもしよくひろくたみに

ほどこしてよくしうをすくはゞいかん

じんといふ〇〇しやしのゝたふまくなんぞ

〈四オ〉

じんをしもことゝせんかならずせい

げうしゆんもそれ〇なをやめりそれじん

しやはをのれたゝんとほつして

人をたつをのれたつせんとほつして

人をたつすよくちかくたとへをとる

じんの〇のみちといふべからくのみ

『じゆつじてい七

〔小書き頭書〕しのゝたふまく

のへてさくせずしんしていに

しへをこのむひそかにわれを

らうほうにひす『しのゝたふ

(二六)

〈四ウ〉

まくもだしてしるまなんで

いとはず人をおしへてうむまず

なんぞわれにあるや『しのゝた

ふまくとくをおさめずかくを

かうぜずきをきいてしたがふ

事あたはず〇よからざるをあらたむる事あたはずこれわがうれへ

なり『しのゑんきよせるときに

しん／＼じよたりよう／＼

じよたり『しのたふまくはなは

(二八)

(四)

(五)

〈五オ〉

だしひかなわがをとろへたる事

久ひさしいかなわが又ゆめにしう

こうを見ざる事『〇しのゝたふまくみちをねかひ

とくによりじんによりげいにあそ

ぶ『しのゝたふまくみづからそくしう

いしやうをおこなつつるときんはわれ

いまだむかしより■しうる事をなくんば

【なくんば】あらず『しのゝたふまくふんせすん

はけいせず ひせすんばはつせすひとつ

すみをあげてしめすにみつ

〔述而第七、一〕

(八)

(二)

〈五ウ〉

のすみをもつてはんせすんばすな

はちわれ■またせず『しもある人の■かた

はらにしよくしつるときんばいまだ

むかしよりあくまでにせずし

此目にしてこくしつるときんば

すなはちうたうたはず『し

がんねんにかたつてのたふまくもち

あるときんばすなはちおこなふすつる

ときんば■すなはちかくるたゞわれ

となんぢとこれあるかなしろがいわ

くしさん三くんをおこなはんときんば

〈六オ〉

(小書き頭書) すなはち

たれとともにかせんしのゝたふまくほう

こへうかしてしぬともくゑなからん

ものにはわれはくみせじかならず事

にのぞんでおそりはかり事を

このんでなさん物也『しのゝたふまく

とみしかもとめづへくんばしつへん

のしといふともわれまたせんもしもとむ

(九)

べか■らずんばわがこのむどころにしたが
はん『しのつゝしむところはさいせんしつ
『しせいにしてせうがくをきいて
三づつしゝのあぢはいをしらず
のたふまくはからざりきがくをおこ

(二二)
(二三)

(二〇)

〈六ウ〉

す事のこゝにいたんなんといふ

ことを『ぜんゆうがいはくふうしゑ〇(じ)のき

みをたすけんやしこうがいわくだく

われまさにとはんとすいつていわく

はく(※)いしくせいはなんびとぞしのゝたふ

まくいにしへのけんじんなりいわくうら

みありきやのたふまくじんをもとめて

じんをえたり又なんのうらみかあらん

やいでゝいはくふうしはたらんず

『しのゝたふまくそしをくらしい水を

のみひじをまげて枕にし

(二四)
(二五)

※この「く」「い」のうえに重書せり

(一一)

〈七オ〉

てたのしむふ事又そのなかにあり

ふぎにしてとみ又たつときはわれ

におゐてうかめる雲のごとし『しのゝたふ

まくわれにすうねんをくはへて

五十にしてもつてやくゑきをまな

びばもつておほみなるあやまち

なかるべし』のまさしくいふところ

はししよしつれいをみなまさし

くいふ『せうこうこうしをしるに

とふしるこたへずしのゝたふまく

〈七ウ〉

なんぢなんぞいはぎつつる

それ人となりいきどをりを

おこししよくをわするたのし

みこれをもつてうれへを

わすれたるおひのまさ

いたんなんとする事をしらずと

しかいふならん』しのゝたふまく

われむまれなからにしてしれるもの

にはあらずいにしへをこのんで

(二六)

『しくわいりよくらんしんかたらず
『しのゝたふまくわれ三じんおこなつ

つるときんはかならずわがしを

うそのよきものをゑらんでした

がふそのよからざるものをばし

かもあらたむ『しのゝたふまく天とく

をわれになせりくはんたいそれ

われをいかんがせん』しのゝたふまく

じさんしわれをもつて

(二七)

(二二〇)

(二八)

(二二一)

〈八ウ〉

しにかくせりとするかわれなん

だちにかくす事なしわれ

おこなふとしてじさんしとともに

せずといふ事なきはこれきう

也『しよつをもゆしてておこなふぶん

かうちうしんしのゝたふまくせい人

をばわれえて見ずなんぬ見る

事えてはくんしをだもこれか

也『しのゝたふまくせんせじんをばわれ

(一九)

(二二四)

(二二五)

〈八オ〉

びんにしてもとめたるものなり

※この「ゆして」三字存疑。

※この「ん」字「い」の誤か。

〈九オ〉

えて見ずなんぬ見る事えては

つねある人をだもこれか也なけれ

どもありとすむなしけれども

みてりとすせはしけれどもゆたか

なりとすかたかなつねある事』し

てうすれどもかうせずよくすれ

どもねとりをゐず』しのゝたふまく

あらんしらずしてさくせ^す※るものわれ

これなしおほくきいてそのよき

ものをえらんでしたがふおほく

※この「せ」字存疑。

〈九ウ〉

見てしるはしるがつぎ也』こき

やうともにいふ事かたしとうし

まみゆもんじんまどひぬしのゝ

たふまくそのすゝまんにはくみせん

そのし(※)りぞかんには【ふせん】た(※)ゞ

なんぞはなはだしき人

(二八)

をのれをいさぎよふしてもつて
すゝまはそのいさぎよきには
くみせんそのいんじをばやす
んぜじ』しのゝたふまくじん

(二九)

※1 この「し」字存疑。

(二六)

※2 傍書「くみせし」は「くみせじ」の誤ならん

(二七)

〈一〇オ〉

とをかれやわれじんをほつ

すればこゝにしんいたる『ちん

しはいとはくせうこうれいを

しれりやこうしこたへてのたふ

まくれいをしれりこうし

しりぞきぬぶばきをいつし

てすゝんでいわくわれきくくん

しはたうせず(※)きみごにめ

とれりとうせいなるがために

【これを】ごまうしといふきみ

(三〇)

※ この間「君子亦党乎」五字分の本文無し。

〈一〇ウ〉

しかもれいをしければたれかれ
いをしらざらんふばきもつて
まうすしのゝたふまくきうさい

はへありいやしくもあやまちあ
る(※)ときんば人かならずしる

『しと人とうたうたふ時にしてよき
ときんばかならずかへさし

めてのちにくわす』しのゝたふ
まくぶんはくなる事

※ この「る」字「る」の誤ならん

へ一オ

われなを人のごとし【み】に

くんしをおこなふときんば〇すなはちわれ

いまたうる事あらず』しのたふ

まくもしせい(※一)とじんとには

〇すなはちわれあに(※二)あえんやそも／まな

んでいとはず人をおしへて

うますすなはちしかいふといふべ

からくのみこうせいくはがいまくま

したゝていしまなふ事のあた

はず』しのやまひへいなりしろ

(三三)

へ二オ

はちやうせき／たり』し

おんにしてはげしいあつてたけ

からずけうにしてやすし

たいはくてい八

しのゝふまくた〇(〇)はくをばそれし

とくといふべからくのみみたび

(三七)

(泰伯第八、一)

(三一)

へ一ウ

いのらんとこふしのゝたふまく

ありやしるこたへていわくあり

るいにいはいくしやうかしんきにたう

じすといへりしのゝたふまく

きうがいのる事久し』しのゝたふ

まくおごりはすなはちいふそん

なりけんはすなはちいやし

そのふそんなるよりはむしろ

いやしかれ』しのゝたふまくくん

しはたんたう／たり小じん

(三二)

(三五)

(三六)

天かをもつてゆづるたみえて
せうずる事なし』しのゝたふまく
けうにしてれいなぎときんば
すなはちらうすつゝしんで

(二)

やまひありまうけいしとぶらま
そうし【いっていわくかいわく】とりのまぎにしな
んとするとき【はは】そのなくことかな
し

〈一二ウ〉

れいなぎときんばすなはちし
すようにしてれいなぎときん
ばすなはちらんすちよくにして
れいなぎときんばすなはちかうす
くんししんにあつきときんばす
なはちたみじんをおこすこきう
わすれさるときんばすなはち
たみいやしからず』そうしやま
いありもんでいしをよんで

(三)

人のまぎにしなんとする時に
そのいふ事よしくんしの
たつ
とぶるところのみちみつよう
はうをうごかしてこゝにほう
まんをささくがんしよくをたゞ
しうしてこゝにしんをちか
づくしきをいだしてこゝ
にひはいをさくへんとう
のこと■はすなはちいうしそん

〈一三オ〉

いわくわかあしをひらけわかてを
ひらけしにいほくせん／＼けう
／＼と〇〇てふかきふちにのぞめるが
ごどくうすきひをふめるがごとし
けふよりして〇〇さわれまぬ■かん〇〇ぬといふ
事をしんぬせうし』そうし

(四)

せり』そうしがいわくのうをもつ
てふのうにとひ多をもつて
くはにとふあれどもなきがごどくし
みてれどもむなしきが【か】ごどくし
おかせ(※)れどもむくひずむかし

(五)

わがどもむかしことにこゝにし【たがへりかつへし?】
き『そうしがいわくもつて六せき
のこをつぐべしもつてはくり
のめいをよすべししたいせつに

(六)

※この「せ」字「き」か

〈一四ウ〉

のぞんでむほうへから【くし】
くんし人のくんし人なり『そう
しがいはくしもつてこうぎ
ならずんばあるべからずじんをも
ふしてみちとをしじんこれ
をもつてをのんがじんとす又
をもからずやしんでのちにやむ
又とをからずや』しのゝたふまくしに
おこりれいにたちがあくになる『し
のゝたふまくたみにはもちぬ

(七)

(八)

(九)

〈一五オ〉

しむべししらしむべからず
『しのゝたふまくようをこのんで
まづしきをにくむはらん

(一〇)

なり

人としてじんあらざるをにくむ
事すではな○(ほど)しきはらん也
『しのゝたふまくもししうこう
のさいのびありともたとひ
おこり又やぶさかならば
そのよは見るに【たら】ざ【ら?】く

(一一)

〈一五ウ〉

のみ『しのゝたふまく三ねん
まなんでよき【は?】いたらざる
ときんば
うべからざらくのみ』しのゝたふまく
しんにあつうしてかくをこのむ
しをせんたうにまぼるきはう
にはいらずらんほうにはおらず
天かみちあるときんばすなはち
まみゆみちなきときんばすな
はちかくるくにみちあるとき【は?】

(一二)

(一三)

〈一六オ〉

まづしくまたいやしきははぢ
也

くにみちなぎときにとみまた
たつときははぢ也『しのゝたふま
くそのくらゐにあらざればそのまつ
りことをはからず』しのゝたふま
しゝがくはんしよのらんをはじ
むるときにやう／＼こととして
みゝにみてるかな『しのゝたふまきや
うにしてちよくならずとう
にしてげんならずこゝ／＼

〈一六ウ〉

としてしんあらずんばわれしら
ず『しのゝたふまかくもしをよ
ぶべからずんばなをう〇(じ)なてん
ことをおそるゝがごとくす』しのゝ
たふまきぎゝたるかなしゆん
うの天下をたもてる事し
かうしてあづからず『しのゝたふ
まのおほいなるかなぎよう
のきみたる事ぎゝたるかな

〈一七オ〉
たゞ天をおほいなりとす

(一四)

(一五)

(一六)

たゞぎようのつとるたう／＼
たるかなたみよくなづくること
なき事ぎゝたるかなそれ
せいこうある事くはんたるかな
それぶんしやうある事『しゆん
しん五じんありしかうして
天下おさまるぶわうのゝたふ
まく■われらんしうじんあり

〈一七ウ〉

(一七)

(一八)

(一九)

こうしのゝたふまきさいのかたい
ことそれしからずやたうぐの
あひだにこゝにさかんなりとす
ふじんありきうじんのみ也
天かを三ぶんしてそのふた
つをたもつてもつてめん
にふくしすしうのとくをば
それしとくといふべ●●●●(※)
のみ『しのゝたふまきうをは

※「からくのみ」か。川瀬氏は「からく」とせり。

〈一八オ〉

(二〇)

(二二)

われかんぜんする事なし
いんしよくをうすうしてかうを
きしんにいたすいふくをあ
しうしてびをふつへんに
いたすきうしつをいやしうして
ちからをこういきにつくす
うをばわれかんぜんする事
なし

〈一八九ウ〉

しかんてい九^{*}

しまれにりとときめいゆるし
じんゆるす『たつかうたうの人の
いわくおほいなるかなこうしの
ひろくまなんでなをなすとこ
ろなきこと』※しきいて【のたまふまく】
もんでいしにかたつてのたふまく
われなにをかとれるぎよを
とれるかしやをとれるわれは

※ 一の「と」の「二」の字存するか存疑。

〈一九才〉

（子罕第九、一）

（二）

ぎよをとれり『しのゝたふまくば
べんはれいなりいまいとはけん
なりわれはしうにしたがはん
しもにはいするはれいなりいま
かみにはいするはたいなりしう
にたかへりといへどもわれは
しも
にしたがはん』しよつをたつ
ころとすることなしかならずと
する事なしかたしとする

（四）

〈一九ウ〉

事なしわれと【あ⁺】るなし
『しきやうにをそるのたふまく
ぶんわうすでにぼつしたれ
ども
ぶんこゝにあらざれや天まさ
にこのぶんをほろほさんとせま
しかばこうしのものこのぶん
にあづかる事えざらまし
天いまだこのぶんをほろぼさ
ざるにきやう人それわれを

（五）

〈二〇オ〉

(奥書)

此の仮名論語は大槻文彦氏の所蔵本を影写せるものなり。」

此の巻の原本はもと綴本なりしを卷子本に改めたるものら

しく毎紙中央に折目あり、左右に余白ありて、左右の端に

近く綴目の孔の見ゆるもあり、卷子本に改むる際」左右の

端を截断したりと覺しく、綴目の孔の半」見ゆるもの又見

えざるものもあれど、中央の折目より」孔までの距離は皆

同一なり。」

巻初の附箋は何れも新し。」

今これを影写するに当り、もとの一紙を一紙に写し、もと」

の折目を折目となして、綴本に改めたり、而して各紙の大」

さは一々之を示さず、たゞその一班を示さんが為、巻初両

紙」の輪郭を画ける一紙を巻末に添ふ」

明治四十三年 五月

国語研究室」

〈二二オ〉

〔第三冊〕

〈二オ〉

(朱印)「東京帝国大学図書印」

〈二ウ〉

【論語古写本】

二本ノ内

(貼紙一)

「郷党第十ノ八條目ノ事」

〈二〇ウ〉

(貼紙一終)

〈二一オ〉、〈二一ウ〉

(この一丁に第一紙・第二紙の輪郭を記して料紙の大きさ

の一班を示せり)

(貼紙二)

「郷党第十ノ八章目ノ半ヨリ終マテ」
(同篇)

謄写 阪部梁文
校合 橋本進吉

季氏第十六ノ初章ノ半ヨリ

同章ノ終マデ

子路第十三ノ初ヨリ

九章目ノ半マデ

衛靈公第十五ノ五【條】目ヨリ

十二章マデ

奥書ハ無し

(貼紙ニ終)

〈三オ〉

(本紙上部朱割印)「東京帝国大学図書印」

しとおほしといへどもしよくのきに (郷党第一〇、八)

かたしめずたゞさけははかり

な

けれどもらんを■ぼさず

うるさけいちのほじくから

はず

はじかみをすてずしてくら

ふおほくらはすこうにまつる

とき【に】しよよへにせずまつ

りのしよは三じつ【に】いださず

〈三ウ〉

三じつにいでぬるをばくら

はずしよくするときに物かたり

せずいぬるときにものいはず

そしさいかうくわといへども

【まつる】ときんばかならずさいじよ

たり『せきたゝしからずんは

をらず『きやう人のいんじゆに

じやうしやいでぬるときに

「

(九)
(一〇)

〈四オ〉

「

こゝにいづきやう人のをに

やらふときにてうふくして

そかにたてり『人を

■

たはうにとふときに〈左傍「に」さいはい

してをくるかうしくすり

ををくれりはいしてうくのたふ

(一一)

きういまたたつせずといつて
あへてなめず『むまややけ
まく

(一一二)

めいじてめすときんばかを
またずしてゆく『太^たべう
にいつてことごとにとふ』ほう

(一一四)
(一一五)

〈四ウ〉

たりしてうよりしりぞひてのた

ふまく人をやふれりやといつ

てむまをとはず『きみしよく

をたまふときんば〇(かならず)せきたゞしう

してまづなむきみなまくさき「いけ^{なまくさき}」をた

まふときんばかならずじゆく
して

すゝむきみいけるをたまふとき

んばかならずかふしよくにきみ

「

〈五オ〉

「

にはんへときに君^{きみ}さいす

るときんばまづはんすやま

いするときにきみ見るときんば

とうしゆしててうふくをく

はへてしんをひくきみ

(一一三)

ゆうしんでよらんところなし
のたふまくわれにおめて

せよほうゆうしんのせくりものは※「^{ひん}よらん」

しやばといへども

「ところなし」まつりのしゝに

あらざればはいせず『いぬる時に

しせずをるときにかたちつくらず

しさいいものを見てはなれ

たりといへどもかならずへんず

※ 「しん」も抹消されるべき部分か

「

〈六オ〉

「

べんしやとこしやとを見ては

なれたりといへどもかならず

(一一六)

かたちをもつてすけうふく
のものにしようすふはんのものに
しようせいせんあるときんば
かならずいろをへんじて
たつとくいかづちなりかせふい

〈六ウ〉

てれつたるときんばかならず
へんず『くるまにのるときに
かならずたゞしくたつて
すいとる車くるまのうちにし

てしりへにかへりみずとく

ものいはずみづからゆびさゝず
『いろのまゝにこれきよすふる

「

〈七オ〉

「

まつてのちにゐるのたふまく

さんりやうのしちときあるかな

ときあるかなころきようす 三たびかひで

たつ

(貼紙「郷党第十終」)

「

(貼紙「季氏第十六ノ初條ノ半」)

(季氏第一六、一)

いへることあり? (※)

いわくちからをのへてれつにつくあたわ
さる

ときはやむあやうけれともたもた

すくつかへれともたすけすた

(一七)

※ この一行、紙の継ぎ目のため、行末数字分のみ見ゆ
(右半分を欠く)

(一八)

〈七ウ〉

※しんはすなはちまさにつくん

そかのしうをもちいん又なんちかことあや

まてりこちかうよりいてききよく

ひつのうちにわれなはこれたれか

(※₂) まちそやせんゆふかいはいく (※₃)

「

それせんゆかたうしてひにちかし

いまとらすんはせ (※₄) うせいかならすしそん

のうれいをなしてんこうしのたふまく

きうくんし■かれをにくむほつ

二字分の本文なし。

※1 三字分欠。「すけす」か。

※2 二字分欠。「あや」か。

※3 一字分欠。「ま」か。

※4 この「せ」字存疑。「こ」とあるべきか。

〈八才〉

せすといふをすてゝかならずさらに

ことほをつくるきうきくくにを

□□(※1)ちいゑをたもつ物はすくないこと

をうれへすしてひとしからざる

ことをうれうますしきことを

うれへ【ざれ】^{すて}やすからざること

□□(※2)けたし人しきときんはまつ

しきことなしくわするるときんは■

すこしきことなしやすからざると

きんは□□□(※3)それかくのごとくなるゆへに

えんしんふくせざるときんはすなはち

※1 二字分左側欠。「たも」か。

※2 二字分右側欠。

※3 三字分くらい空白。「無傾」「かたぶくことなし?」

〈八ウ〉

ふんとくをおさめてもつてきたすすて

にきたすときんはすなはちやすん

□□(※1)ゆふときうとふうしをたすく

ゑんしん■^{ふく}せすせさ(※2)れとも○(き)あた

はすくにふんほうりせきすれとも

まほることおあたはすかんだうをほう

1

たいにうこかきんことを【まわる】^{はかる}われおそ

らくはきそんかうれえけ^{いの}(※3)せんゆに

□□(※4)らすしてせうしやうのうちにあるらん^{こと}(※5)

※1 二字分空白。「いま」か。

※2 この「せさ」存疑。「き」とあるべきか。

※3 この「えけ」誤ならん。「いの」とあるべきか。

※4 解説不能。「あ」とあるべきか。

※5 この「らん」二字「るごと」の上に重書か。

〈九才〉

『こうしのたふまく天下道ある

ときんば

(二)

すなはちれいかくせいはつ天しより

いつてんか道なきときんはずなはち

れいかくせいはつしよこうよりいつしよ

よりいてはけたししうせいにしてしにっ

せ(※1)すといふことすくなし

こう

一

十一日実久番

(貼紙)「子路第十三」

(子路第二三、一)

「小書き頭書 四くわんめ

しろていしゆう三

しろまつりことをとふ(※2)まつしてらふせ

しむ

※1 「せ」字右半分欠。

※2 「子曰」二字分本文なし。

〈九ウ〉

えきこうの□□□□(※1)くうむ事なかれ■

『□□□□(※2)きうきしのみいとしてまつり

こと

(二)

□□(※3)しのゝたふまくゆうしをはさきん

せよ

□□□□(※4)わをゆるしてけんさいをきよ

せよ

いわくいつくんそけんさいをしつて

きよせん■のたふまくなんちの

しれらんところをきよせよなん

ちの

しらす■らところをは人それすて

めや『しろかいわくゑいのきみしを

まつてまつり●(※5)とをせんしまさに

※1 三字分空白。「たふま」とあるべきか。

※2 二字分空白。「ちう」とあるべきか。

※3 二字分空白。「とふ」とあるべきか。

※4 三字分空白。「せうく」とあるべきか。

※5 この一字解説不能。「二」とあるべきか。

〈一〇オ〉

いつれをか□□□□(※1)さきんせんしのゝ

たふまく【いつれ?をかさきんせん】

かならずなたゝしうせんかしろか

いわくこれあるかなしのさかれる(※2)

たり

いつくんそそれたゝしうせん

(三)

しのゝたふまくやなるかなゆふ

くんしはそのしらさるところ

におひてけたしけつしよす

※1 三字分ほど空白。本文の欠落は特にないと思われる。

※2 この「さかれる」「たり」存疑。

」

〈一〇ウ〉

「小書き頭書」四の二

なたゝしからさるときんはすなはち

ことしたかはすことしたかはさる

ときんは〇すなはちわさならすわさならさる

ときんはすなはちれいかく

おこらすれいら(※)くを(こ)らさる

ときんはすなわちけいはつ

あたらすけいはつあたらしさる

ときんはすなはちたみしゆ

そくをおくところなしかるか

※ この「ら」字あるいは「か」か。

〈一一オ〉

□□□□□□(※)ゆへにくむしは

なつくることかならずゆふへくす

ゆふことかならずおこなふへくす

くんしはそのことにおひていや

しんするところなからまくのみ

『はんち【か?】まな(※)ひんとこふしのゝ

たふまくわれらうのうにし

かすほつくる事まなひんとこふ

しのゝたふまくわれらうほにし

はんちいてぬしのゝたふまくせう

かす

※1 五字分ほどの空白。本文の欠落はなしか。

※2 この「な」字「の」の上に重書か。

〈一一ウ〉

しんなるかなはんすふかみれい

をこのむときんはすなはちたみ

「小書き頭書」四の三(※)

あへて

けいせずといふことなしかみぎを

(四)

このむとさんはすなわちたみ
あへてふくせすといふ事なし
かみしんを〇〇〇のむとさんはすな
はちたみあへて心もちいすと
いふ事なしそれかく■のことく

※ この三字存疑。紙の境目でほとんど見えず。白抜き字にて
書かる。張り合わせた下に見えたものか。

「
〈二二オ〉

なるときんはすなはちしはう
のたみその子こをきやうふし

いたる

いつくんそかもちいん『しのゝたふ

まく

しさんはくをせうすさつくるに

まつりことをもつてするときは

たつせすしはうに■つかひ

としてひとりこたふる事

あたわすおほしといへとも

〈二二ウ〉

またなにをもつてかせん
『しのゝたふまくそのみたゝ
しき
ときはれいせされとも〇おこなはるそのみ
たゝしからさるときんはれいと

「
〔小書き頭書 四の三〕
（六）

いへともしたかはす『しのゝたふまくろゑいの
まつりことはけいていのことし』し

（七）

ゑいのこうしけいをのたふまくよく

しつにをりはしめあるときに

して

【のたふまく】いやしくもあふす

（八）

〈二三オ〉

こしきあるときにしていわく

いや

しくもまつたしきかんにある

ときにしていわくいやしきも

よし『しゑいにゆくせんしほくたり

しのゝたふまくもろ／＼あるかな

せんゆうかいわくすてにもろ／＼

あり又なにをかくわゑむのたふ

（九）

まく

すてにとめり又なにをかくわ

えん

のたふまくをしへむ『しのゝたふまく

まことにわれをもちある物こと

あら

(一〇)

〈一四オ〉

その身をたゝしうする事

あははすんは人をたゝしう

せん事いかん『ぜんしてふ

よりしりそくしとゝたふ

まくなんそおそかつつる

(一四)

〈一三ウ〉

はきけつのみにしてかならん三ねん

にしてなすことあらん『しのゝたふま

く

(一一)

せんしんのくにををさむる事はく

ねんにして又もつてざんに【たち】

かたて

さつとすつへしまことなる

(一二)

かなこと事『〇(のゝたふまく)もしわうしやあら

は

〇(■)かなちまよう※としてのちにじんあらん『しのゝ

(一三)

たふまくいやしくもその身を

たゝしうせんまつりことに

したかわんにまおひしてなんかあらん

※1 この「う」字「に」とあるべきか。

(貼紙)「コレマテ

子路第十三ノ九條目ノ半マテ」

」

(貼紙)「衛靈公第十五ノ五條目に」

(衛靈公第一五、五)

「小書き頭書」(四五)※1)

しちやうおこなわれんことをとふしのゝたふ

まくことちうしんあるかうとつけい

あらははんはくのくにといふとも

おこなわれんことちうしん ■ ■ ■ ■ ■
あらす

※1 この「五」右半分欠。

〈一四ウ〉

かうとつけいあらすんはしうり

といふともおこなはれんやたてる

ときんは

すなはちそのまへにしんせんたるを

み■にあるときんはすなわちその

かうにをるをみるそれしかうしてのちに

をこなわれんしちやうしんにしん(※)す

『○(し)のゝたをまゝくちよくなるかなしきよくにみちあり

とも(六)

やのことしくにみちなけれともやの

ことしくんしなるかなきよはく

きよくくにみちあるときんは○すなはちつかふ

※ この「ん」字存疑。「よ」または「る」であるべきか。

〈一五才〉

くにみちなきときんはすなはちまい

てふところにしつへし『しのゝたふまゝく

ともにいふへくしてともにいわさるは

人をうしなへるなりともにいふ

へからずしてともにいふはことを

うしなへるなりちしやは人をも

うし

なはず又ことをもうしなわす

(七)

「

『しのゝたふまゝくしゝじん』(※はせいを

もとめてもつてじんを【やふ】^{はいす}る

こと

なし身をころして○もつてしんをなす

※ この量符満点あり。

〈一五ウ〉

ことあり『しこうじんせんことを

とふしのゝたふまゝくたくみよく

せんと

ほつするときはそのことかならず

まつそのうつわ物をとくすこのくにゝ

いてそのたいふのけんしやら(※)につかへて

そのしをともすせうしん『かぬん

くに【を】おさめんことをとふしのゝたふまゝく

かのときをおこな多いんのろにのれ

しうのてんのはく(※)せよかくはすなはち

※1 この「ら」字衍字、あるいはないか。

※2 この「はく」存疑。三冊目は「ぶく」。

(二〇)

(九)

（一六オ）

せうふをせよ■いせいをはなちめ（※一）い
じん【を】ざげよていせいはいんなり

め（※二）いしんはあやうし

『しのゝたふまく人として

とをき

（一一）

をもんはかりなきときはかなら

す

ちかきうれへあり『しのゝたふまく

（一二）

やんぬるかなわれいまたみすとくをこのむ事色を

このむ

かことくする物を

『※三 さうふんちうはそれくらいをぬす

める

（一三）

人か【せい】をはなちめいしんを【

らうかけいか【を】して【けんなる

事を

しつて

※1 この「め」字存疑。「ね」とあるべきか。

※2 この「め」字「ね」の誤か。

※3 この間「子曰」二字分の本文なし。

（一六ウ）

（一七オ）

（奥書）

此の仮名論語は大槻文彦氏の所蔵本を影写せるものなり。「此の巻の原本はもとより卷子本なりしことは各紙中央に折目なく且一字の両紙にまたかれるものあるにても明なり反古の「裏を持ちゐたる処もありて、紙幅の等しからざるものあるのみ」ならず、その文の甚しく相違せるもあり。

今之を影写するにあたり、初め数葉は一紙を一紙に写すこととを得たれども、その後の部分は然すること能はず。故に縦一線を画きて以て紙幅を示せり紙の高さは縦線の長さを以て「示し横線を画かず但両紙の長短の差甚しきものは、短き」横線を以て之を示せり。原本の一紙を一紙に写せる部分に「於て、一字両紙に亘れるものあるときは影写本に於ては一紙に」その全形を写し、他紙のこの文字あるべき部分は双鉤を以て之を「示せり。又紙幅の文字の他の紙の為に覆はれて隠れたる部分は」

（一七ウ）

また双鉤を以てせり」

明治四十三年五月

国語研究室

〈一八才〉

謄写 阪部梁文

校合 橋本進吉

〈一八ウ〉

(付記) 第二分冊の翻刻、および本資料の詳しい解題等については、後日に期したい。貴重な文献の翻刻をご許可くださった研究室に、厚くお礼申し上げます。

(やなぎはら えつこ 大学院人文社会系研究科 助教)

三卷本『色葉字類抄』に収録された長疊字の性質について (二)

藤本 灯

場合がある。

筆者は、前稿において、三卷本『色葉字類抄』疊字部中の「長疊字(漢字三字以上から成る熟語)」についての調査を行ったが、その大略は、長疊字という語の一群を提示する作業に終了してしまつた。そこで本稿では、前稿「3用例」において示せなかつた用例を新たに追加し、後日の

考究に資することとした。

《凡例》

概ね前稿と同様であるが、一部補足する。

* 割注、注文、詞書(山家集)をへくによつて示した。

* 内容上、該当語と関連深い前後の文脈を省略する場合は、(略)によつて示した。

* 前稿で用いた文献の遺漏を補う場合、文献名に※の記号を冠して示した。

* 原則として漢字表記の用例を掲げたが、仮名書きの例を示した

* 表記は概ね使用した文献の本文に従つたが、凡例等によつて底本の表記が再現可能な場合は、可能な限り復元を試みた。また、漢字を現行の字体に改めた場合がある。

* 「愚管抄」の「阿波国文庫本(巻三)」(五三〇頁以降)中の用例は用例数に含めなかつた。

* 今回の調査で新たに用例が得られなかつた項目については、見出し語の表示を省略した。

「一有若亡」

○大嘗会者祭何神乎(略)名目有若亡事歟(貴嶺問答よ)

○アハレくく有若亡、有名無実ナドイフコトバラ人ノ口ニツケテ云

ハ、タゞコレウニコソ(愚管抄356)

○有若亡アツ(消息詞390)

○有若亡之身、豈可堪忍乎(雑筆往来426)

○有若己(1,2)(大乘院雜筆集456)

○其弟共アマタアレドモ、右大将宗盛ヲ始トシテ、有若亡ノ人共ニテ、一人トシテ日本國ノ大將軍ニ可成レ、人ノミヘヌソヤ(平家物語上487)

「2 一字千金」

○登科兩字千金直(菅家文直213) *全二例

○一字千金万々金(江吏部集222)

○てんだいのぞす、一じきさんのちからをもつて、やうくくだめたてまつり(曾我物語495)

○一字千金之恩ヲ不忘ト、広嗣鎮マリ給ニケリ(平家物語下48) *全二例

「3 一人當千」

○一人當千の馬のたてやうなり(宇治拾遺物語327)

○判官と御内に一人當千の者にて候(義経記163) *ほか「一人たうせん」四例

○まことに一人當千とぞ見へける(古今著聞集278)

○爱国司云、一人當千ト云馬ノ立様ナリ、非直也人欺、不可咎ト制止シテ(古事談14) *全二例

○容顏美麗也。可謂一人當千(雜筆往來45)

○一人當千(ヨキヒトノコトナリ) (雜筆略注453)

○一人たうぜんといふ事、このときよりはじまりける(曾我物語157)

*全二例

○畠山庄司次郎重忠ニ六代ノ孫、武藏國ニ生長テ、新田殿ニ一人當千ト憑レタリシ篠塚伊賀守愛ニアリ(太平記238) *全三例

○明俊、一來二人ニウタル、者、八十三人也。実ニ一人當千ノ兵ナリ(平家物語上376) *全七例

○誠にまことにゆゝしく候。一人當千とは是をこそ申らめ(保元物語83) *全二例

「4 一搦手半」

○金堂の丈六の弥勒の御身の中に、金銅一搦手半の孔雀明王像一体をこめたてまつらる(古今著聞集72)

○薬縁法師者。近江国高島郡也。俗姓秦氏。生為人奴。不得自存。常勤驱役。不知仏事。只一生間。所造綵色一搦手半阿弥陀三尊而已。捨遣往生伝中123

○あやしみてこの木を切て、一搦手半の薬師仏をつくりたてまつりて(統古事談16) *全三例

○一搦者、從母肘節、至于其腕節也。手半者、其手之半分量也。所謂人在母胎時、至于第廿七日、人相皆備。以手掩面、踰躍而坐。

其時身長、与母一搦手半齋等也。当周時一尺三寸。而則造仏、取一搦手半者、胎内等身也。如此一搦手半身、滿其卅八七日已出生。由

養育故、成八尺・五尺身。造仏亦爾。得一搦手半像、由供養故成六

・八尺等之身(東山往來6) *ほか一例
○(略)一搦手半ノ薬師百体、等身ノ薬師一体、并釈迦阿弥陀ノ像、

各造立供養セラレケリ(平家物語上88)*全二例

○奉造観音像。其長一搦手半。其数一千「虫損」体(本朝新修往生伝88)

(○一搦手(類聚名義抄(圖書寮本)156))

「5 一生不犯」

○仏事をせられけるに、仏前にて僧に鐘を打せて、一生不犯なるをえらびて、講を行はれけるに(宇治拾遺物語88)*全二例

○南都に、又一生不犯の尼ありけり(古今著聞集88)*全四例

○砂門永快者。金峰山千手院之住僧也。一生不犯。兩界之行。不敢交衆。亦好独居(拾遺往生伝下88)*ほか「一生無犯」一例

○於天皇寺拜堂之時。寺三綱指一座曰。是一生不犯人之所昇也。垣舜再三観念。遂昇其座(続本朝往生伝11)

(○三時念誦。昼夜誦誦法花経。僧都一生無犯。但以人指磨触女人身

(大日本国法花経験記中88))

○此中ニ「天台ノ一ノ箱」ト名テ、一生不犯ノ人一人シテ見事ニテ、

輒ク開ク座主希ナリ(平家物語上88)*全三例

「7 反魂香」

○よきはかりにて、薬は合て服すべきなり。反魂香と云ものあり。

死人の魂をかへす香也。一鉢もたがひぬれば来たる事なし(続古事談

5-10)

(○返魂樹 十州記曰聚窟洲有返魂樹伐其根心於玉釜中煮取汁煎之令

可丸名曰驚精香或名震靈丸或名反生香或名却死香屍在地聞氣乃活(幼

学指南抄卷二七)

「8 傍若無人」

○事外ニ英雄之詞ヲコソ稱シ侍シカ。文場気色如何。答云、傍若無人也(江談抄5-71)

○傍若無人(消息詞390)

○殆可謂傍若無人候(新札往来472)

○雖傍若無人、不如権跡子孫永扇門風、苗裔共継家業(尺素往来88)

○佐渡判官入道ハ、我身ニ取テ仁木ニ差タル宿意ハナケレ共、餘ニ傍若無人ナル振舞ヲ、狼藉ナリト目ニカケ、ルトキ也(太平記88)

*全四例

○傍若無人(大乘院雜筆集88)

○此ヲ被申ケルハ、傍若無人ノ体、返々謂レナシ(平家物語上27)*

全三例

「10 万死一生」

○其ノシウトノ三守ノ右大臣。所勞付ニテ万死一生也(諸事表白579)

○ゆみやをとり、よをわたると申せども、ばんしーしやうは、いちごーどんこそうけたまわれ(曾我物語88)

○仙人祖沈病。万死一生(大日本国法花経験記中88)*全三例

○能盛、親盛ハ痛手負テ、万死一生トコソ承リ候へ(平家物語下172)

*全二例

○暫其程を過ぎむとためらひける程に、宿運や尽にけん、重病をう

けて、万死一生なりけるが(保元物語172)

「11女御代」

○女御代の御ことなど、すべてよのいみじき大事なり(栄花物語上10)

○*全一六例

○大相国モトノ妻ノ腹ニヲノコゴハエナクテ、女御代トテムスメヲモチタリケルヲ入内ノ心ザシフカク(愚管抄238)

○今度召女御代被渡雖為先□已吉例也(富家語100)

○サレド後ニハ女御代ニテ、東ノ御方トソ申ケル(平家物語上594)

○女御代、花山よりいささる(増鏡34)*全四例

「12人非人」

○此一門ニ非ザル者ハ、男モ女モ法師モ尼モ人非人タルベシ(平家物語上31)

「13長秋宮」*「長秋」の例は省略した

○長秋宮望月之簾(江都督納言願文集28)*ほか「長秋之宮」二例

「14長大息」

○又此日他所有僧。長大息曰。(略)後拾遺往生伝上中

○聞舍弟明快之補僧綱。長大息云。過去迦葉仏法中。同時発心之者三人。久沈生死。未得出離(拾遺往生伝上)○*「長大息」全二例、「長大息」二例

「15知恩報恩」

○運籌帷帳、何疑於知恩報恩(菅家文章(散文篇)55)*全三例

○これらみな、古来の仏祖の、古来の仏祖を報謝してきたる知恩報恩の儀なり(正法眼蔵227)

○仏弟子は必四恩をしつて、知恩・報恩ほうずべし(日蓮集(開目抄)338)*全三例

「17理不盡」

○就嫌疑、不可致理不盡之沙汰(雜筆往来中33)

○懸シ後ハ、三井寺モ弥意趣深シテ、動バ戒壇ノ事ヲ申達セントシ、山門モ又以前ノ噉儀ヲ例トシテ、理不盡ニ是ヲ欲徹却ト(太平記②5)

「18利口覆國」

○利口の邦家をくつがへすは君子にくむと云り(人となる道85)

○(悪利口之覆邦家(和漢朗詠集162))

「19被及給哉」

○(乞記大概、必可及給(釈氏往来198))

○(僧侶交名、所作注文、可及給(釈氏往来211))

「21和光同塵」

○和光同塵して念仏をすゝめ給はんが為に神と現じ給ふなり(一遍上

人語録(146)

○孝経註曰。和其光。同其塵(管蠡鈔157)

○わくわうどうじんはけちえんのはじめ、八さうじやうだうはりもつのおはり、なに事か御いのりのかんおうなからんや(義経記288)

○和光同塵之利物。如紫金在晴沙(江都督納言願文集134)

○(和光同塵結縁始と云事を)いかなればちりにまじりてますか、みつかふる人はきよまはるらん(山家集160)

○サレバ和光同塵こそ、諸仏ノ慈悲ノ極リナレト信ジテ、如此行儀異様ナレドモ、年久クシツケ侍也(沙石集63)*全三例

○無而歎有^レ仏^ヲ乃至六道四生、和光同塵随類變化^ノ形^ヲ、(諸事表白587)*全二例

○是諸仏方便。和光同塵耳。春朝在一条馬場。出舍死去(大日本国法花経験記上22)

○和光同塵ノ月明カニ心ノ闇ヲヤ照スラン(太平記219)*全三例

○我山者、是大悲権現、和光同塵之素意候(平家物語上76)*全九例

○夫和光同塵の方便は、抜苦与楽の為なれば、大慈大悲の神慮のたすけ、などかあはれみ給はざらん(保元物語58)

「22 王事靡盬」

○我是日本国王使也。王事靡盬(江談抄3)

○王事靡盬。履氷従事(江都督納言願文集290)

○王事靡盬、盍鑿於此(古今著聞集233)

○唯従王事之靡盬。偷憑仏力之不空(釈氏往来206)

○王事母盬、縦恨ヲ以テ朝敵ノ身ニナル共、戴天欺天命哉(太平記

213)*ほか「王事母盬」一例)

○官軍ツバキテ追懸シニ、王事靡盬^トナケレバ、鵲鳩帆柱之上ニ来居シテ、事故ナク備前国府ニ付ニケリ(平家物語下4)

○親治をはじめとして、以下の郎等ども、王事もろき事なければにや、十二人おめくといけどりにせられるこそむざんなれ(保元物語72)

「23 可被分給」

○仏ハ、御弟子、其ノ数多カリ。我レニ少分ヲ可分給シ(※今昔物語集174-13)

○焼香又以面白存候(略)縦雖兜樓婆、畢力迦、及海岸六鉢、准仙之百和。不可勝於此候。御所持分、不論新旧、可頒賜候(尺素往来91)

「24 賢不肖」

○賢不肖ともに進退にわづらふべからざるものなり(正法眼藏227)*全二例

「25 邯鄲歩」

○于時門下独有不遇者。歩邯鄲而遺恨。交納綺而多慙(江吏部集202)

○邯鄲歩(※世俗諺文)

「28 甲斐元」

○決定可及刎頸候へハ、無甲斐命惜候之故、勅諭ハ縦雖禁獄流罪命ニハ依不可及、乍悦所馳參也云云(古事談181)

○数万ノ官軍庭上ニ有ケレドモ、救ハムトスルニ甲斐無シ(平家物語上498)*「甲斐無シ」全二例、ほか「無甲斐」「甲斐ナシ」「カヒナシ」

「31 堂童子」

○やましなでらのそうども、堂童子までかつげ物などたまはず(栄花物語上446)*全二例

○(略)堂童子、治部省、玄蕃寮、掃部寮、謚取等祿物(十二月消息331)

○堂童子・優婆塞、忿々走来言(日本霊異記386)

○導師、高座にのぼりぬれば、堂童子、花_一をわか(増鏡372)

「32 大作家」

○父豊浦ノ大作家ニ火ヲサシテ焼死ヌ(愚管抄63)*全二例

○緒嗣大作家在法住寺北辺瓦坂東(江談抄912)*全二例

○いかでかおのれ程のやつめは、大作家をばかたじけなく打まいらせけるぞ(古今著聞集472)

○希代ノ見物ナルベシトテ貴賤ノ男女華ル事不斜、公家ニハ撰祿大作家、門跡ハ当座主槐井二品法親王(略)(太平記63)

○サリトテモ、宮原ヘモ打入り、大作家ヘモ乱入テ狼藉ヲモセバコソ奇怪ナラメ(平家物語下161)

「33 太皇太后」

○十六日に太皇太后宮女院にならせ給ぬ(栄花物語下52)*全五例

○然則太皇太后者、皇帝之族曾祖姑、天子之宜無服制者也(菅家文章(散文篇124)*全七例)

○太皇太后(謂天子祖母登后位者為太皇太妣。居夫人位者為太皇太夫人也)(貴嶺問答448)

○今昔、三條ノ大皇太后宮ト申スハ、三條ノ関白大政大臣ト申ケル人ノ御娘也(※今昔物語集④99・11・12)*全二例

○右大臣藤原良相者。贈太政大臣正一位冬嗣第五子也。姉大皇太后。兄大政大臣忠仁公。並与大臣為同胞矣。童稚而有遠識。弱冠而遊太

学(拾遺往生伝中13)

○太皇太后官職(拾要抄531)

○太皇太后(尊修寺本)橘嘉智子(水鏡208)

○太皇太后宮大夫(平家物語下89)

「34 蟻娘返車」

○譬如。蟻娘對車。蚊虻負獄(性靈集395)

○(訂正)蟻娘廻車(※世俗諺文)

○(○)かれが此比ぶげんにて、すけつねにおもひかゝ覽は、たうらうがをのを取て、りうしやにむかひ、ちちうがあみをはりて、ほうわうをまつふぜい也。あわれなる(曾我物語329)

○蠅ノ斧ヲ以テ立車ヲ返シ、嬰兒ノ蠅ヲ以テ巨海ヲ斥ス（平家物語上367）

○縦^レ以嬰兒ノ蠅^ヲ、量^ヲ巨海^ヲ、取^テ蠅ノ斧^ヲ、如向立車^ニ（平家物語下36）

○蚊虻群^ヲ雷^ヲ、蠅娘集^ヲ如^シ有^ル覆^テ車^ノ事^ニ（平家物語上268）

「35 増上慢」

○次に一行は道門増上慢の者を明す（日蓮集（開目抄）390）*全三例

○増上慢（類聚名義抄（圖書寮本）248）

「39 無上道」

○法花経には「我不愛身命。但惜無上道」とす（一遍上人語録10）

3)

○「我不愛身命。但惜無上道」の義なり（古今著聞集88）

○偏厭有為世。唯願無上道（後拾遺往生伝上18）

○我無上道ヲ成ジテバ、一切衆生ヲ以テ、伴トスベシ（沙石集136）*

全一例

○但説^レ無上道^ノ時^ニ（諸事表白597）

○さて堂のひつじさるの桂木にのぼりて、「我不愛身命但惜無上道」

と誦して谷へ身を投げれば（続古事談4-26）

○每自作是念、以何令衆生得入無上道速成就仏身（真言内證義239）

○花厳経ニ「聞此法歡喜信心無疑者、速成無上道、与諸如来等」ト

オホセラレテ候（親鸞集（消息）176）

○正直捨方便但説無上道（日蓮集（消息文抄）468）

○不期今生來。只念無上道（大日本国法花経験記中73）*全三例

○以此供養佛像、成無上道（日本靈異記494）

○此身の命を惜ず、只無上道を願べしとぞ仏も説せ給ふなれ（保元物語159）

○わかみはゆめにおとらねと、無上たうをそをしむべき（梁塵秘抄12）

0)

「42 孟蘭盆」

○又七月十四日ノ夜、孟蘭盆ノツトメノ為ニ御堂ニ參ジテ（沙石集44）

3)

○七月なかばのうら盆、のぞむ所、誰にかあらん（曾我物語399）

○十四日孟蘭盆（太平記②411）

○今召向盆拜是可准三宝礼。又二度有何事哉。孟蘭盆ハ為親也（中外抄下21）

○次来十五日孟蘭盆以前者（略）（蒙求賢鷹往来354）

○次来十五日孟蘭盆以前者（略）（蒙求賢鷹往来354）

「43 有名無實」

○アハレノ有若亡、有名無実ナドイフコトバヤ人ノロニツケテ云

ハ、タゞコレウニコソ（愚管抄386）

○すでにしやうごうはやくくれて、かいぢやうゑの三がくはなのみのこりて、うけうむにん、うみやうむしつなり（曾我物語421）

○未来の父母を扶ざれば、外家の聖賢は有名無実なり（日蓮集 開目

抄)388)*全二例

「44久修練行」

○たとへば、初心始学にもあれ、久修練行にもあれ、伝道授業の機をうることもあり、機をえざることもあり(正法眼蔵277)*全三例

○久修練行之室、書、勇猛精進之文(諸事表白602)

○カ、ル道心堅固ノ聖人、久修練業ノ尊宿ダニモ、遂ガタキ発心修行ノ道ナルニ、家富若キ人ノ浮世ノ継ヲ離レテ、永ク隱遁ノ身ト成ニケル、左衛門佐入道ノ心ノ程コソ難有ケレ(太平記③385)

「46不垂堂」↓75参照

○史記曰。千金子不垂堂。百金子不騎衛(管蠡鈔286)

○郷果村間皆潤屋 陶家兒子不垂堂(菊散一叢金)(江談抄411)

○陶家兒子不垂堂(和漢朗詠集116)

「47不足言」

○其琴非制者。不足言事歎(貴嶺問答450)*全二例

○不足言ト云ハコレナリ(愚管抄336)

○以言聞之微咲不敢陳一言。大略不足言歎(江談抄498)*全二例

○不足言之至也云々(十一月消息315)*全二例

○是ハ不足言ノ人、五闍提等ノ在世ノ悪比丘ノ如ク、決定地獄ノ心

ロバエ也(正法眼蔵隨聞記422)

○經釈ヲ読、学セザルトモガラ、往生不定ノヨシノコト、コノ條、

スコブル不足言ノ義トイヒツベシ(親鸞集(歎異抄)200)

○不抽忠勤者、不足言事歎(雜筆往来425)

○「略」東大寺の大仏をぬすむべきなり」とあざけりければ、聖人、

不足言にてやみにけり(続古事談418)

○是ハセメテ俗人ナレバ不足言(太平記①413)

「48不知恩」

○不知彼恩。忽弃置我(貴嶺問答451)

○若不赴彼請。恐非知恩(拾遺往生伝下二)

○而といえども、過去未来をしらざれば、父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり(日蓮集開目抄329)*全五例

「50不得意」

○不得其意事候哉(山密往来382)

○一夜御琵琶之調、有不得意之條(東山往来43)*全三例

○而臨書写之時、其料紙不足。尤所不得意也(東山往来拾遺457)*全二例

○同五月廿一日。病者云。持仏堂仏。只今奉安極楽。看病不得意念仏往生伝30)

「51不思議」

○阿弥陀仏の本願他力の不思議の身をば、いか程のちからとしたりるやらん(一言芳談200)

○他力称名は不思議の一行なり(一遍上人語録90)*全二三例
○不思議の事し給親かな(宇治拾遺物語97)

○人々皆、不思議之由、申合候者也(鎌倉往来566)

○きやつはふしぎのものゝいひやうかな(義経記88)*全二二例

○不思議ナリトオボシメシナガラ車ヲヤルニ(教訓抄33)

○サル不思議アリシカド世ニ沙汰モナシ(愚管抄24)*全八例

○かゝる不思議こそありしか(古今著聞集104)*全三二例

○大鳥無毛ナルヲ自地中掘出タリケリ、不思議事也、イカ、スヘキ

ト評定之処(古事談188)*全八例

○事ハ実ニ不思議ナレドモ、和讃ノ言ハイトヨロシカラス(沙石集55

6)*全一一例

○しかあれども、如来の正法、もとより不思議の大功德力をそなえ

て、ときいたればその利土にひろまる(正法眼蔵86)

○然レドモ、定レル不思議ニテ、魚、此処ヲ渡レバ、必ず龍ト成ル

也(正法眼蔵隨聞記224)

○法之不思議。用之无窮尽(性靈集336)*全二例

○其、人、不思議也(諸事表白579)*全四例

○醍醐味ト称スレドモ、是ハ果徳ノ上ノ不思議ノ妙菓也(真言内證義

227)

○六七千里ノアヒダ、一時ニオコリアヒニシ、時ノイタリ運ノ極ヌ

ルハカ、ルコトニコント不思議ニモ侍シモノ哉(神皇正統記15)

○イツ、ノ不思議ヲトクナカニ仏法不思議ニシクゾナキ(親鸞集(三

帖和讃)73)*全三三例

○タゞ不思議ト信ジツルウヘハ、トカク御ハカラヒアルベカラズ候
(親鸞集(消息)129)*全一四例

○タダシ、業報カギリアルコトナレバ、イカナル不思議ノコトニモ

アヒ、マタ病悩苦痛セメテ、正念ニ住セズシテラハラン、念仏マウ

スコトカタシ(親鸞集(歎異抄)207)*全一七例

○この事、きたいのせうじ、天下のふしぎとぞ見えし(曾我物語50

*全五三例

○漢高祖と云御門の世をとり給ふ事は、ことくは不実不思議の人

にておはしけれど(続古事談の13)*全六例

○不思議(大乘院雜筆集546)

○上人十廿日不食籠動。是不思議。上人断食誦經実如(大日本国法花

經験記中か)

○卦ル不思議ヲ承ル、誠ニテ候ヤラン(太平記①8)*全一二五例

○最第一の大不思議なり(日蓮集(開目抄)346)*全六例

○かゝる不思議の者共を、諸山諸寺の別当と仰でもてなす、故に、

民の手に渡り現身に恥に値ぬ(日蓮集(消息文抄)44)*全四例

○即是心波若經不思議也(日本靈異記108)*全六例

○於窪井本房聞之。凡隔本処十四五里。是仏不思議力歎(念仏往生伝

48)

○この真実語、不思議なり(人となる道333)

○此御薬を不思議に得て、あまの命の安心を決定する事の有がたけ

れ(秘密安心又略360)*全五例

○舞人ニハ左ニ光末、(指步テ梓打振タリシ、不思議也キ。太平楽

ナトコソイミシカリシカ(富家語29)

○ソレヲコソ希代ノ不思議ト承ニ、コレハ猶勝レタリ(平家物語上23)

*全八二例、ほか「不思議」「不思議」「フシギ」

○又信西吾朝の詞を以て奏しければ、君を始まいらせて供奉の人々、不思議の思をなせり(平治物語)*全五例

○二重を射通すだにも不思議におぼえ候に、伊藤五が鎧の袖うらかきて候(保元物語100)*全六例

○サテモ此処ニ宿スル事不思議也(反故集34)*全三例

○かたみにかたらふ人はあらざりけめど、おなじもんも色も侍らざりけるぞ、ふしぎなる増鏡15)

○これは般若の不思議なりとなん申し心に万法みなむなしと思て(水鏡(専修寺本)121)

○不思議(類聚名義抄(図書寮本)72)

「52 不対面」

○日来申サムト思ツルニ、不対面ザリツレバ不申ズ、己レガ命生給

ヘリシ喜ビ申サム(※今昔物語集①380)

「53 不可悦」

○非分之物不可望。過分之慶不可悦矣(東山往来)

「54 不覺人」

○紙ぎぬにえもんつくろふ程の者は、ふかく人にて有なり(一言芳談

19)*ほか「不覺人」一例

○あれほどのふかくじんの弓やとるほうこうをするか(義経記155)*全八例

○日本第一ノ不覺人ナリケル人ヲタノミテ、カ、ル事ヲシ出ツル(愚管抄234)

○文時大令歎示給不覺人之由。時人又以難之傾之(江談抄113)

○日ぼん一のふかく人、かやうにあるべしとおもひしたがはず、人にてはなかりけり(曾我物語38)*「ふかく人」全三例、「ふかくじん」一例

○敵ニ生取ル、程ノ不覺仁ヲバ、生テナニ、カハセム(平家物語上602)

○信頼といふ不覺仁が、あの門やぶられくるぞや(平治物語225)*全六例

○左大臣殿と云不覺仁にさへられて(保元物語171)

「55 不中用」

○一条撰政与朝成卿「左大臣定方男」共競望參議之時(天曆)、多陳伊尹不中用之由、其後朝成參一条撰政第(古事談212)

○不中用(消息詞390)

○旧往来者、当時不中用之物也(常途往来403)

○不中用者也。可被棄置(雜筆往来427)

○不中用(物ニアタラサルコトナリ)(雜筆略注155)

「56不退轉」

○一夏のあひだはいかにもころろに入つとめ、たひてんなくおこなひてあたりける(義経記110)

○長日護摩御退轉ナクヲコナハセヲハシマシケリ(愚管抄238)

○嗟呼十念不退轉(江都督納言願文集149)*「不退轉」全四例、「不退轉」一例

○每朝大仏頂理趣經尊勝陀羅尼二千遍。不動慈悲呪一万遍。即至臨終。永不退轉(高野山往生伝20)

○云手習、云読書、一向廃亡。頻雖突鼻候、猶不退轉候(御慶往来64)

8) ○其行退轉する事なし(古今著聞集87)

○毎日講唯識論。永不退轉(後拾遺往生伝下2)*ほか「不敢退轉」一例

○告門弟云。今年命期也。及孟秋之天。果而受病。若干行業等。不能退轉(三外往生記12)*ほか「未曾退轉」「敢無退轉」各一例

○只毎日燃八曼荼羅香一前。向西方供養阿弥陀仏。雖有急事。敢不退轉。只此一事。其平生之行也云々(拾遺往生伝中19)*「不退轉」全二例、「未曾退轉」一例

○天平宝字以来、更以無退轉(十二月消息333)

○この行持を不退轉ならん形骸觸摩は、生時死時おなじく七宝塔におさめ、一切人天皆応供養の功德なり(正法眼蔵33)

○悉ク叶^{アトイ}不退轉^事実^不審^候(諸事表白600)*全一二例

○此心不退轉者、天魔外道モ障難ヲ作ス便リ無シ(真言内證義326)

○今古無退轉勤行(新札往来462)

○イノチツキンマデ念仏退轉セズシテ往生スベシ(親鸞集(歎異抄)277)

○嵯峨清涼寺大念仏者、古今過現、不退轉之勤行(尺素往来40)

○更々不可退轉(雜筆往来138)

○又發誓願。生々世々值遇佛法。書写読誦一乘妙法。乃至成仏永不退轉(大日本国法花経験記上13)*「不退轉」全二例、「無退轉」一例

○今度、強盛の菩提心ををこして退轉せじと願じぬ(日蓮集(開目抄)352)

○毎日六万返念仏無退轉(念仏往生伝43)*全二例

○菩提行願不退轉(平家物語下533)*ほか「不退轉地」一例

「57不可思議」

○他力の称名は不可思議の一行なり(遍上人語録106)*全七例

○仰願不可思議弟子先是又有奉為先帝修功德之意(管家文章(散文篇)593)*全一例

○御前近キ舞ヲ、如然ニ舞ハ不可思議ノ事也(教訓抄102)

○ワヅカニ中一年ニテ不可思議ノヤウイデキニケレバイフバカリナシ(愚管抄166)*全六例

○仏法希夷不可思議(江都督納言願文集33)*全六例

○誠に此やう不可思議也。年来花嚴経の中に不審おほかり。悉解脱し給へ(古今著聞集100)*全六例

○親勝寺ノ大田房上人ノ門徒、不断ニ宝篋印陀羅尼ヲ誦シテ、不可

思議ノ功能多ク風聞ス(沙石集323)

○不可思議(消息詞390)

○おほよそ諸仏の境界は不可思議なり(正法眼蔵77)*全五例

○比丘衆ノ中ニ、不可思議ノ悪行スルモアリ、最下品ノ器量モアリ(正

法眼蔵隨聞記312)*全三例

○理趣妙句。无量无边。不可思議(性靈集45)*全二例

○末世トイヘドモ神明ノ威徳不可思議ナリ(神皇正統記156)

○ソノ徳不可思議ニシテ十方諸有ヲ利益セリ(親鸞集(三帖和讃)55)

*全三例

○如來の誓願は不可思議にましますゆへに、仏と仏との御はからひ

なり(親鸞集(消息)126)*全八例

○不可称、不可説、不可思議ノユヘニ(親鸞集(歎異抄)199)

○あまつさへ地りやうをうばわん事、ふかしぎなり(曾我物語55)

○而妙法力不可思議能伏一切(大日本国法花経験記下8)*全二例

○高僧等ノ神異ハ不可思議ニテ、サテ置ツ(梅尾明恵上人遺訓84)

○管弦ハ堀河院御笛(初句ヲ吹放テ、次句ニ移之間、ツレくナラ

ス不可思儀也キ)(富家語29)*ほか「不可思議」一例

「59御靈会」*「靈会」の例は省略した

○御靈会のはそおとこのたなごひしてかほかくしたる心ちするに、

このうちのおとこのほゝゑみまぎれさせ給ぞ、いみじうわびしき事

なりける(采花物語下178)

○兵衛府生時重をはじめて六衛府のものども、社をつくりて御靈会

をこなひけり(続古事談47)

「60御齋会」*「齋会」の例は省略した

○午上罷帰可參御齋会也(貴嶺問答440)

○一条院御時、御齋会之間及夜宿、義照院与千観内供同宿之間、隔

幕寝臥(古事談3-38)

○兼勤御齋会之聴衆(釈氏往来191)

○朝觀行幸臨時客ナトニ著タル織物下襲ハ、ナヨヤカナルヲ參御齋

会時著用常事也(富家語47)

○但形ノ様ニテモ、御齋会ハ可被行ニテ(平家物語上571)*全二例

○同四年正月に御齋会のうち論義ははしまりしなり(水鏡203)

「61御傍親」

○皇帝所絶、傍親無服者、皇帝皇子、為之降一等(菅家文章(散文篇)

544)

○通親ノ大臣ノ四男、大納言通方ハ父ノ院ニモ御傍親、贈皇后ニモ

御ユカリナリシカバ、收養シ申テカクシヲキタテマツリキ(神皇正統

記161)

「62姑射山」

○帝堯姑射花顔少(菅家文章(詩篇)376)

○姑射山之雪(江都督納言願文集28)*ほか「姑射」九例、「姑山」「射

山」「藐姑射」各三例、「姑射之山」二例、「姑之神仙」一例

○堯時下為師居姑射山(江吏部集296)*ほか「射山」一例

○しかのみならず、清涼殿の御遊には、ことごとく治世の声を奏し、姑射山の御賀には、しきりに万歳のしらべをあはす(古今著聞集196)

○いざさらばさかりおもふもほどもあらじはこやがみねの花にむつれ(山家集287)

○抑結願之日、可有射山之臨幸云々(釈氏往来205)

○龍瑞紀官永豫姑射(性靈集295)*全四例)

○姑射遙聞一処子(文花秀麗集296)

○射山仙洞ノ水湊ヲ詠レバ、白浪折カケテ、紫鷺白鷗逍遙ス(平家物語上1265)*全四例)

○はこやの山の峯の松も、やうく枝をつらねて(増鏡278)

○姑射膚 庄子曰藐姑射之山有神人居焉客膚若冰雪云々(幼学指南抄卷二)

○姑射山(幼学指南抄卷四)

○姑射肌 庄子曰藐姑射之山有神人焉肌膚若冰雪綽約若処子(幼学指南抄卷五)

「63興隆佛法」

○興隆佛法、護念国家、上奉翊過去聖靈等、下普及一切衆生界(菅家文章(散文篇)563)

○仏法こうりうの験たる人にも、さやうにひがごとなどをくはだてんにおひては、ちんもかなはせたまふべからず(義経記262)*「仏法こうりう」全四例、「仏法をこうりう」一例)

○申於公家建立一伽藍、安置興隆佛法(古今著聞集296)*全二例

○此所是殊勝之靈験之窟也、立伽藍興隆佛法ト思ニ、私力難及、其徳令当帝王給云云(古事談33)

○昔南岳思禪師託生和国。興隆佛法(後拾遺往生伝上)

○是則興隆佛法之媒(雜筆往来438)*ほか「紹隆佛法」一例

○然而且興隆佛法。可有御存知候(手習覚往来281)

○末代ハ證理ノ智無ケレバ、世間ノ面ヲ莊テ、俗境ニ近付ヲ先トシテ、剩ヘ寺ノ興隆佛法トテハ、田樂ノ猿樂ノ裝束ニ心ヲ費シテ一生ヲ暮スノミナリト云々(梅尾明恵上人遺訓63)

○或、有「諸家」氏寺、修不退、勤行、子胤相統、自興隆佛法之所也(平家物語上562)*ほか「仏法之興隆」一例

「65金剛不壞」

○よろづにみがきたてさせまゝに、院のうちも金剛不壞の勝地と見えてめでたし(采花物語下61)

○金色薬師佛像一軀、依賢王弘誓之力、保金剛不壞之身(菅家文章(散文篇)605)*ほか「金剛之不壞」一例

○住「金剛不壞之淨菩提心之座」事表(諸事表白583)

○以無所持而為方便。為発金剛不壞不退願。我自未得相似位以還不出(大日本国法花経験記上3)*全二例

○生滅トモニ常住ナレバ、金剛不壞ノ法身、我等ガ色身ナリ(道範消息80)

○如來の法身は金剛不壞なり(日蓮集(開目抄)409)

○此徳ちかくは人天のなかに無病長寿の報を得、遠くは無漏道に達して金剛不壞の身を得べし(人となる道376)

○況入壇灌頂シテ、金剛不壞ノ光ヲ放テ、大日遍照ノ位ニノボラム事、明德ノ中ニテモマレナルベシ(平家物語上225)

○成仏心ニ種々ノ異名アリ。堅固法身ト云ヒ、金剛不壞心ト云、金剛ノ正体ト云、鐵心肝ト云、大丈夫ノ漢ト云、此外モ堅固ナル名多シ(反故集381)

〔66 鴻才博覧〕

○サレド延喜・天曆・寛弘・延久ノ御門ミナ宏才博覧ニ、諸道ヲモシラセタマヒ、政事モ明ニマシクシカバ、先二代ハコトフリヌ、ツギテハ寛弘・延久ヲソ賢王トモ申メル(神皇正統記16) *全二例
○終日習学之。通夜可復読之。利根聡敏宏才博覧也(雑筆往来433)
○当世無双の厚才博覧也(平治物語190)

〔68 妖不勝徳〕

○後漢書曰。帝太戊立伊陟為相。亳有祥。桑穀生於朝。一暮大拱。帝太戊懼問伊陟。陟曰。臣聞妖不勝徳。帝政其有闕敷。帝其修徳。太戊從之。而祥桑枯死。仁勝凶邪。徳除不祥(管蠡鈔223)
○孔子家語曰。災妖不勝善政。夢性不勝善行(管蠡鈔224)

○但妖不勝徳。仁能却邪云々(新札往来476)

○妖若不勝於徳者、当御代、依政道如法、四海既帰一統畢(尺素往来504)

○加様ノ聖徳ヲ被行コソ、妖ヲバ除ク事ナルニ、今ノ御政道ニ於テ其徳何事ナレバ、妖不勝徳トハ、伝奏ノ被申ヤラン(太平記③166) *ほか「妖ハ不勝徳」二例

〔69 不可勝〕

○燒香又以面白存候(略)縦雖兜樓婆、畢力迦、及海岸六鉢、准仙之百和。不可勝於此候。御所持分、不論新旧、可頒賜候(尺素往来49)
○予申云、男ニテ坐ストモ殿不知食者、極定四位侍從敷。家隆ニ不可勝敷。僧ニテカクマテ御坐スルハ御力ナリ(中外抄下33)

〔70 朝来暮往〕

○弟子數輩。雖在戸庭。朝来暮往。去留不定(拾遺往生伝上10)
○爰一猿来住前樹上。終日聞経。朝来暮去。二三月間毎日不闕。来聞此経(大日本国法花経験記下126)
○朝来暮往無常時(文花秀福集311)

〔71 悪知識〕

○持戒ナレドモ壞見ノ者ハ、悪知識(沙石集120)
○疑云、当世の念仏宗・禅宗等をば、何智眼をもつて法花経の敵人一切衆生の悪知識とはしるべきや(日蓮集(開目抄)378) *全一例
○設ひ聖教に値と云ども、悪知識に値ならば、三悪道に墮入事不可有疑(日蓮集(消息文抄)479)

「73 桑田変」

○桑田縦変、日祭り之儀長伝(古今著聞集127)

「74 造次頼佈」

○遂以出家。造次頼佈。念弥陀仏(三外往生記38)

○沙門平願者。播磨国之住人。性空聖人之弟子也。行往坐臥。造次頼佈。只誦一乘。已經多年(拾遺往生伝中)

○念念歩歩造次頼佈。折リ臨終正念御。諸事表白(620)

○行住坐臥。現無礼。造次頼佈。到濫吹(雜筆往来420)

○其後、人々のゆくゑをきけば、おのくしゆくしよにかへり、き

つるほうものごとく、さうしてんばい、いつしんふらんになん

ぶつす(曾我物語424)

○一生之間。偏修浄土之業。造次頼佈。唯念仏号(続本朝往生伝37)

○口唱名号。心観相好。行住坐臥暫不忘。造次頼佈必於是(日本往生

極楽記序)

○河内国石川東修水神社禰宜利国。常唱弥陀宝号。造次頼佈。唯称

念仏(本朝新修往生伝7)

「75 糟糠妻不垂堂」

○後漢書曰。貧賤之友不可忘。糟糠之妻不可下堂(管蠡鈔283)

○宋弘申ていはく、「貧賤之知音不可忘、糟糠之妻不可垂堂、といふ

本文の侍るに、我、むかしまうしかりしときよりあひぐしたる妻あ

り。かれをさりて王女をあひぐしたてまつること、えなんあるまじ

き」と申ける(続古事談6-9)

○漢書ニ云ク、「貧賤ノ知人ヲ不可忘、糟糠ノ妻ヲ不可下(堂)ト

テ、貧キ時ノ知人ヲバ、富ラム時ワスレズ、賤妻ヲバ不下ト云ヘリ)沙

石集144)

「77 狐借虎威」

○世間ニ狐ハ虎ノ威ヲ借ト云フ事ハ此レヲ云フトノ語リ伝ヘタルト

ヤ(※今昔物語集①386-7)

○用于狐借虎皮之勢(日本靈異記422)

「79 明後日」

○自明後日廿一日、若宮御參籠、御精進之間。大小御沙汰不可有之

由(鎌倉往来567)

○我、此ノ寺ノ事勤メ畢。今ハ明後日ノ夕方帰ナムトス(※今昔物語

集③164-13)*全一〇例

○上人相語云。明後日可滅度也。仍今日沐浴。次日又沐浴(三外往生

記34)

○自明後日可令始行候之間、無何纏頭仕候(山密往来378)

○明日進ゼム、明後日奉加セムナンド思程ニ(沙石集281)

○俄爾長太息云。予明後日可焼身。今生謁見。只在此時。其処所謂

撫河郷紫津岡也(拾遺往生伝中23)

○其表属御手、明後日可有御開陣之由(消息手本(村田經次學習手本)

413)

○君は明日、伊づのこう、明後日、かまくらへいらせましますよし、
其きこえ有(曾我物語323)

○以明後日詣浄土辺(大日本国法花経験記中74)

○明日カ明後日カノ間ニゾ寄センズラン(太平記②45)*全二例

○又今明不房内、明後日(還日)不憚諸事(中外抄上122)

○可然者、明後日許、可參上候也(南都往来94)*全二例

○尼及衰暮。唯念弥陀。語僧都曰。明後日可詣極樂。此間欲修不断

念仏。僧都令衆僧三箇日夜(日本往生極樂記2)

○然者明後日、可有御同道也(蒙求臂鷹往来39)*全七例

「81御息所」

○承元三年三月十日、十八ニテ東宮ノ御息所ニマイラレニケリ(愚管
抄296)

○寛平法皇、与京極御休「息歎」所同車、渡御川原院、歴覽山河形勢(古
事談12)*全四例

○昔天曆御時元方ノ民部卿ノムスメ御息所、一ノミコ廣平親王ヲウ

ミタテマツル(神皇正統記139)

○何カ苦ク候ベキ。御息所ヲ恐デ此へ入進セラレ候へ(太平記②254)

*全二八例

○ちゝみこの、將軍にておはしましたし時のみやす所也(増鏡393)

「82神今食」

○十二月四日ナルニ、十二月ハ神今食ノ神事トテキビシケレバ(愚管

抄174)

○御修法ハ真言院、神今食ハ神嘉殿、真弓・競馬ヲバ、武徳殿ニシ
テ被御覽(太平記①399)*全二例

○仰云、主上大嘗会ニ神御陪膳令勤仕給事、神今食中院行幸之時同
事也(富家語91)

「84兒女子」

○又、兒女子牛飼童、酒酔郷之姿作舞(教訓抄71)

○兒女子ガ口遊トテコレヲオカシキウトニ申ハ、詩歌ノマコトノ
道ヲ本意ニモチイル時ノコトナリ(愚管抄322)

○兒女子之愚。何一到於斯(続本朝往生伝37)

「85勝他心」

○勝他ノ心ニテトクハ、中品ノ法施也(沙石集386)*「勝他ノ心」全
三例

○昔僧賀聖籠弟子八人於此山。令学仙道。其身漸踏薄楹板至於不撓。

各有勝他心。每朝至見風处。相難云。爾有米糞。然者皆不得仙罷矣(本

朝神仙伝38)

「87无所詮」

○若又効験ナクハ、面謁ニ所詮ナカルベシ(平家物語上291))

「88序破急」

○今常樂舞之。僅ニ序破急ガ略五拍子許也(教訓抄⁸⁰) *全二例
○今案者、序ハ破歟。破者又急也(教訓抄¹⁵) *「序破」「破急」「序
「破」「急」の例多数)

「90 死生不知」

○この事あやしくて、在地に披露しければ、死生不知の村人ども評
定して、「いざ行てみん」とて、そこばくきたりて、門に登てみけれ
ば、いとなまやかなる女房一人ふしたりけり(古今著聞集³⁴³)

○ししやうふちのげ道ども、おめきさげびて、みだれ入るときに(曾我
物語²⁴⁷)

○城中ニハ死生不知ノアブレ者共、此ヲ先途ト命ヲ捨テ戦フ(太平記

③ 125) *全二例

○富部三郎ガ郎党ニ、杵淵小源太重光ト云、死生不知ノ兵アリ(平家
物語上⁶⁵⁶) *全六例

「93 支度相違」

○アダニ御支度サウイノ事ニテ、ムゴニ御案アリテ、別ニ宣旨ヲク
ダサレテ(愚管抄¹⁹⁵)

○此ノ別当ハ年来和太利ヲ役ト食ケレドモ不酔ザリケル僧ニテ有ケ
ルヲ不知デ、構タリケル事ノ支度違テ止ニケリ(※今昔物語集⁵⁰⁴)

◎ *「支度違」全四例

○サテ支度相違シテ、カヘツテ売レテ責メ仕ハレケリ(沙石集²⁰⁴)

○不知、老少ハ不定ナレバ、若シ老母ハ久ク止マツテ、我ハ前ニ去

コトモ出来ラン時ハ、支度相違セバ、我ハ仏道ニ不入ラクヤミ、老
母ハ不許罪ニ沈テ、兩人共ニ益ナクシテ、互ニ得罪時如何(正法眼藏
隨聞記³⁹³)

○サレバ直冬大勢ニテ上ラント被議ケルガ、其支度相違シタリケリ
(太平記³⁶⁹) *全七例

○源氏ノ支度ニスコシモタガワズ(平家物語下³³)

「94 上求下化」

○上求下化勤修。自利利他行願(高野山往生伝²⁸)

○じやうぐぼだひのひざよろひ、げしゆじやうのすねあてし(曾
我物語²⁴⁸)

「95 自讚毀他」

○罵言嫉妬。自讚毀他。遊蕩放逸。無慚無愧(三教指帰¹⁴)

「96 自行化他」

○只守土風、尋常行仏道居タラバ、上下ノ誓自作供養ベシ、自行化
他成就セン(正法眼藏隨聞記³⁶) *全二例

○既含自行化他二德(性靈集⁴¹⁵)

○サレトモ菩薩ノ行、不離自行化他(諸事表白⁵⁹⁸)
○如是思惟。勸他説誦。自行化他。功德圓滿。永帰無常焉(大日本國
法花經驗記上¹) *ほか「自行既熟。為化他故」一例

○自他平等なれば、自行が即化他なり(秘密安心又略³⁶⁵)

「97 師資相承」

○前聖後賢。師資相承。古往今來(江都督納言願文集54)

○高祖大師者、師資相承、印信兩部兼備許可状。慇懃之文書。丁寧證驗也(十二月消息318)

○師資相承、至于今日。無一代中絶(新礼往来479)

○夫所以用契密对註者、必為令師資相承也(東山往来拾遺43)

○サテモ天台宗ハ南岳、天台共ニ靈山ノ聽衆トシテ、震旦ニ出給テ、

仏法ヲ弘メ給シヨリ、師資相承セリ(平家物語上87)

「98 子々孫々」

○やすひらがよしつねをうちたらば、ほんりやうにひたちをそへて、

子々孫々にいたるまで給はるべきよしなり(義経記370)

○タゞ予ガ子孫ノ末ニモ不審ヲヒラケト也。予ガ子々孫々ノサイカ

ク、コレニスグベカラズ事(教訓抄28)

○子々孫々遊万歳之陰。年々歳々宿千丈松之月(江都督納言願文集29)

3) *全二例

○すけちかがみにをきて、ししやうの大事、しんそんくまで、

これにしくべからず候(曾我物語5)

○人々イカニ申トモ、キミ君ニテ渡ラセ給ハミ、争カ入道ヲバ子々

孫々マデモ捨サセ給ベキ(平家物語53) *全八例

○或ハ無罪ノ家人ヲ殺テ財宝ヲ取タル者、子々孫々ニ到迄、取殺タル

怨靈、方々ニ有之(反故集28) *全二例

「99 生天得果」

○経文「一瞻一礼、功德、猶_レ説_レ生天得果、因也」(諸事表白620)

「102 衆大吠声」

○朝野合載曰。一犬吠形。千犬吠声。一人伝虚。万人伝実(菅蠡鈔287)

「103 駟不及舌」

○三寸舌端駟不及(菅家文章(詩篇)186)

○駟馬如龍不及舌(菅家文章(詩篇)202)

「104 士知己死」

○女為悦己者客(略)士為知己者死女為悦己者容(略)(※世俗諺文)

○「しはをのれをしるものゝために、かたちをつくらふ」と、もん

ぜんのことばなるをや(曾我物語223)

「107 非学生」

○弟子モゲニ非学生ナリケリ(沙石集12) *全二例

○多ク不知、非学生トコソ、云レンズレドモ、其ハ苦シカラズ(梅尾

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

明恵上人遺訓59)

「108 非参議」

○件度内大臣以下至中納言實平卿乘車、兼頼卿以下至非参議三位皆騎馬(江談抄128)*全二例

○此外先官ノ公卿、非参議、七弁八座、五位六位、乃至山門園城ノ僧綱、三門跡ノ貫首、諸院家ノ僧綱、并ニ禅律ノ長老、寺社ノ別當神主ニ至マデ我先ニト馳参リケル間(太平記315)

○非参議ニテ、二位中将ヨリ宰相大納言大将ヲ不經シテ、大臣関白

ニ成給ヘル例、是ヤ始ナルラム(平家物語82)*全二例

○大中納言・二位三位・非参議・四位五位などは、ましてかずしらず(増鏡363)

「110 非常人」

○相順処ノ眷属共、皆非常人、八臂六足ニシテ鉄ノ桶ヲ挾ミ、三面试题ニシテ金ノ鎧着セリ(太平記145)

「111 昭陽殿」

○又問云、昭陽殿翫花之戸、芳塵凝分不私(江談抄216)*全二例

○於戲昭陽殿之佳人(江都督納言願文集93)*全二例

○昭陽殿裡恩愛絶、蓬萊宮中日月長トナン恨給ヒテ、中々御言葉モナケレバ、玉容寂寞淚欄干タリ(太平記326)

○彼漢ノ李夫人ノ、昭陽殿ノ病ノ床ニ臥タリケムモ、カクヤ有ラム(平家物語上234)

「114 聖人無一言」

○君子無一言、論言如汗(雜筆往来33)

○仏語に一言なし(日蓮集(開目抄)349)

○天子に二言なしと云。争か虚言をし給べき(日蓮集(消息文抄)82)

「115 善知識」

○三には善知識の教にしたがはざる(言芳談207)

○なんぢ沙弥は、海雲比丘のぜんちしきにあひて、文殊をよくおがみ奉りけるにこそありけれ(宇治拾遺物語387)

○よろづにかたくにおぼしえて、まごころに念仏させ給はゞ、我御ための善知識ともなり、まうじやの御ためぼだいのためよりも

ならめ(采花物語下226)*全三例

○因善知識、得安樂果(菅家文草(散文篇)63)*全三例

○中将入道ハ三井寺ニテ、御堂ノ御薨逝ノ時ニモ、善知識ニ候ハレケルナドコソ申ツタヘタレ(愚管抄122)

○我今出娑界。欲赴安養。各念弥陀仏。可作善知識(高野山往生伝6)

○抑我善知識は、いづれの所より誰の人の来給へるぞ(古今著聞集(4)*全一〇例

○而間保延二年十月十五日。俄有病氣。衆人扶持。忽以沐浴。其翌日逢善知識(後拾遺往生伝下1)*全七例

○明日已剋。是入滅之期也。可為善知識(三外往生記38)*全二例

○但十惡五逆者ノ往生ストイフモ、善知識ニ逢テ、我十念ヲ唱テコ

ソ、来迎ニアツカリ、極楽ニモ生ズル事ナレ(沙石集22)*全一九例
○自伝。病是真善知識也。我依病痾。弥厭浮生云々(捨遣往生伝下56)

*ほか「善友知識」一例

○禪師はこれ天下の善知識、又五百人の大導師なり(正法眼蔵33)*

全六例

○善知識ニ隨テ、衆ト共ニ行テ私ナケレバ、自然ニ道人也(正法眼蔵

隨聞記23)*全五例

○善知識善誘之力(性靈集363)

○此「子息」是「我」善知識(諸事表白616)*全四例

○善知識ニアフコトモオシフルコトモマタカタシ(親鸞集(三帖和讃)

57)

○マタ、十悪五逆ノ罪人ノハジメテ善知識ニアフテ、ス、メラル、

トキニイフコトバナリ(親鸞集(消息116))*全一〇例

○命終ノトキ、ハジメテ善知識ノオシヘニテ、一念マウセバ(親鸞集

(歎異抄)206)

○仏、是をあはれみ給て、阿なんそんじやを遣奉て、ぜんちしきた

ち、いんどうし給けるとかや(曾我物語270)

○中将と契りをなして、おなじくゆきてかしらそられにけり。善知

識にあへるなるべし(統古事談2-58)

○臨終之剋。逢善知識僧(宝増)(続本朝往生伝84)

○沙門運長。桜井長延聖往昔同行善知識矣(大日本国法花経験記中60)

*ほか「善友知識」一例

○夢窓ハ此比天下ノ大善知識ニテ、公家武家崇敬類ヒ無リシカバ(太

平記②65)*全二例

○龍樹者極楽菩薩。為往生善知識也(東山往来102)

○善知識と申は、一向師にもあらず、一向弟子にもあらずある事な

り(日蓮集(開目抄)36)*全四例

○我をたすくる日蓮をかたきとをもひ、大怨敵たる念仏者・禪・律

・真言師等を善知識とあやまてり(日蓮集(消息文抄)463)

○逢善知識十念往生。予每見比輩弥固其志(日本往生極楽記序)

○見紫雲之人四人。同巳時依善知識勸(念仏往生伝35)*全二例

○或は善知識にあひ、或は内鑑明了にして、法の邪正をしり、事の

真偽を弁ず(人となる道393)

○有ガタルベキ善知識ナリトテ、弥ヨ彼ノ後世ヲ訪ヒケル(平家

物語上68)*全一二例

○早善知識ヲ求テ、出離ノ道ヲ修行スベシ(反故集307)

○保延二年十月十六日卒。最後遇善知識(本朝新修往生伝3)*全一

一例

○いとありがたきぜんちしきにぞ、こ女院はおはしける(増鏡407)

○又かならず善知識となり給へといへは修行者いとうれしき事なり

(水鏡②)*全二例

「116 先祖相傳」

○此久行之『探桑老』モ、先祖有相伝トモ不聞(教訓抄74)

○せんぞさうでんのしよりやう、いとう・かわづのかたをみやりて

(曾我物語125)

○先祖相伝ノ主ヲ帰チウシテ、滅シタル不当仁ヲバ争カ可有(平家物語 467)

○先祖相伝して既維行迄は三代に罷成(保元物語 101)

【参考文献】

*用例の所在は原則として頁数によって示した。

【管蠡鈔】

片淵琢編(1900)「博覧古言(一名・管蠡鈔)」(偉業館)

【教訓抄】

日本思想大系 23 (1973)「古代中世芸術論」(岩波書店)

【江都督納言願文集】

平泉澄校勘(1939)「江都督納言願文集」(至文堂)

【諸事表白】

天台宗典編纂所編(1996)「声明表白類聚(續天台宗全書 法儀

1)」(春秋社)

【平家物語】

北原保雄・小川栄一編(1990-1996)「延慶本平家物語」(勉誠

社)

【水鏡】

神原邦彦編(1990)「水鏡 本文及び総索引」(笠間書院)

【幼学指南抄】

卷二、五、一六、一九、二三、二五、二七

↓古典籍複製叢刊(1979)「幼学指南抄(大東急記念文庫・梅澤記念館)」(雄松堂書店)

卷三、四、九、一二、一四、一七、一八、三〇

↓木村晟編(1996)「幼学指南抄：故宫博物院本」(大空社)

【梁塵秘抄】*数字は歌番号

小林芳規・神作光一編(1972)「梁塵秘抄總索引」(武蔵野書院)

【類聚名義抄(図書寮本)】

宮内庁書陵部蔵(1976)「図書寮本類聚名義抄」(勉誠社)

【江談抄】【中外抄】【富家語】*数字は条番号

新日本古典文学大系 32 (1997)「江談抄 中外抄 富家語」(岩

波書店)

【江吏部集】【貴嶺問答】

群書類従第九輯(文筆部・消息部)(訂正三版1960)

【古事談】【続古事談】*数字は巻「」との説話番号

新日本古典文学大系 41 (2005)「古事談 続古事談」(岩波書店)

【東山往来】【東山往来拾遺】【南都往来】【鎌倉往来】

【御慶往来】

日本教科書大系第一巻(1968)「古往来(一)」(講談社)

【釈氏往来】【手習覚往来】【山密往来】【十二月消息】

【蒙求臂鷹往来】【消息詞】【常途往来】【消息手本】【雜筆往来】

【雜筆略注】【新札往来】【尺素往来】【拾要抄】【大乘院雜筆集】

日本教科書大系第二卷(1987)「古往来(二)」(講談社)

【宇治拾遺物語】【栄花物語】【仮名法語集】【菅家文草 菅家後集】

【義経記】【愚管抄】【古今著聞集】【山家集】【三教指帰】【沙石集】

【正法眼蔵】【正法眼蔵随聞記】【性靈集】【神皇正統記】【親鸞集】【曾

我物語】【大平記】【日蓮集】【日本畫異記】【文華秀麗集】【平治物語】

【保元物語】【増鏡】【和漢朗詠集】

日本古典文学大系(岩波書店)

【日本往生極楽記】【大日本国法華驗記】【統本朝往生伝】

【本朝神仙伝】【拾遺往生伝】【後拾遺往生伝】【三外往生記】

【本朝新修往生伝】【高野山往生伝】【念仏往生伝】

*数字は説話番号

日本思想大系7(1976)「往生伝 法華驗記」(岩波書店)

(ふじもと あかり 大学院人文社会系研究科 博士課程二
年)

近代文典におけるいわゆる推量助動詞

井島 正博

はじめに

近代文典は、文語中心に展開された。口語の研究は後発的であり、その際、著者の特別な意図を体现していたという点で有標であった。その点、現在の状況とは大きく異なる。本稿で見ているようにとする近代文典は、そのうちでも当時むしろ無標であった文語に関する文典の方である。

また、言うまでもないことながら、ここで論じたいのは、文語の文法そのものの記述ではなく、近代における文語文法——中古語を範とする古典語規範文法——の記述の仕方の史的变化、すなわち、日本語史ではなく、日本語学史というメタレベルでの日本語の歴史である（ちなみに、近年は、日本語学史をさらにメタレベルで研究する、日本語学史とでも言うべき研究も見られるが、ここではそこまで論じようとするつもりはない）。言い換えれば、近代におい

て、日本語研究者が日本語の文法とはどのようなものであるか、という認識の歴史である。

さて、日本語文法学史というものも、完全に中立的で客観的な歴史というものはあり得ない。あえてそれを目指そうとすれば、それぞれの研究を、単に時系列に沿って、ばらばらにめりはりなく列挙していくだけになってしまう。相互の影響関係や、それぞれの優れている点、不十分な点を指摘していくようにすれば、否応なくいずれかの立場に関与せざるを得ないことになる。それは避けられないことであり、隠蔽すべきことでもない。

それにはさまざまな立場がある。福井久蔵（一九〇七・一〇、三四・三、四二・四）のように、同時代的に個人間の交流による影響関係、語学外の社会的状況から描くこともできる。また、山田孝雄（一九四三・七）、時枝誠記（一九四〇・一二）のように、独自の文法理論を背景にそこに

至り着くまでの理論的な発展として描く描き方もある。さらに、それぞれの文典を比較検討することによつてその異同を明らかにしつゝ影響關係を文献学的に闡明していく古田東朔（一九七二・一一他）や山東功（二〇〇二・一）などの方法もある。

しかるに、ここで採用しようとするのは、時代による文法に関する認識の枠組の変遷を明らかにしようとする立場、すなわち、成功するかどうかを度外視して言えば、M・フーコーの觀念史に倣おうとする立場である。認識の枠組は、M・フーコーも論じるように、世紀という単位で変化するということが常態であろう。しかるに、その変化の時機は、生物の進化も、緩慢に連続的に進行したのではなく、ある時期に断続的に、いわば突然変異として進行したように、あるいは、科学革命も、通常科学といういわば停滞の時機をはさんで、ニュートンやアインシュタインの段階で突然革命を迎えるように、認識の枠組も短期間に変化するものであると考えられる。ここで問題にしたい文法理論も、学問的な認識の一部であり、明治という激動の時代は、学問的な認識の枠組も大きく変貌した時機であると言つても、特に目新しい指摘であるはずもなく、異議を差し挟まれることもないだろう。

そのような立場で文法理論の展開を論じていくとすれば、従来の研究方法とどのような点で異なることになるだろう

か。確かに従来のように、ここで見ていく近代第一期の文典は、研究というよりも（初等・中等）教育の方に軸足があり、新見に乏しく学史的にも価値のないものばかりである、という見解にもそれなりに理はある。そのような中で、大槻文彦の『広日本文典』や山田孝雄の『日本文法論』は現在の段階でも評価すべき点が少なくない、と言われることも尤もである。しかし、これはあくまで現代の文法研究を評価の基準として、いわば進歩史観に立つてそれ以外の文典を切つて捨てていくことになつてしまふ。

ここで採りたい立場は、むしろそのようにこれまで切つて捨てられてきた文典の方にこそ、その時代の認識の枠組が反映しているのではないか、というものである。現代の目から見ても、あるいは恐らく当時としても、月並みで目新しいところのない文典類は、むしろかえつてそのために、意図せずその時代の文法の認識のしかたをあまり歪めることなく反映していると考えられるのではないだろうか。そしてそのようなその時代の認識の枠組を“地”として、現代でも評価される、大槻や山田の文典が“図”として浮き出しており、場合によつては、静かな水面に小石を投じて生じる波紋のように、それらが認識の枠組に動揺を与えて変更を強いる、という形で、大小の認識革命を画している」と了解される。

そのような立場で議論を展開するとすれば、価値評価に

関しては判断停止して、それぞれの文典の背後に伏在する文法観をさまざまな観点からあばきだすことに力を集中することになる。どの文典がどのような点で他のものよりも優れているか、どの文典が他のどの文典の影響を受けているか、その背後で著者同士のどのような交流あり、どのような社会情勢が働いているのか、などは、もちろんまったく無関係なことではないので必要に応じて触れる必要があるが、主役を演じることはない。本稿では、そのようなものとして文法学史を描いていきたい。

さて、現在、古典語文法で一括して「推量助動詞」と呼ばれることを、われわれが何の疑いもなく受け入れている、ム・ラム・ケム・ベシ・マシ・ラシ・メリに打消推量のジ・マジは、近代の初めからそのようにカテゴリー化されていたわけではなかった。それが現在のような外延を持つ「推量助動詞」というカテゴリーが成立したのは、一九四〇年代に入ってからであるようである。ここではそれ以降、現代にまで引き継がれてきた、そのような外延を持つカテゴリーに、伝聞推定助動詞ナリを加えて、「いわゆる推量助動詞」と呼ぶことにしたい。

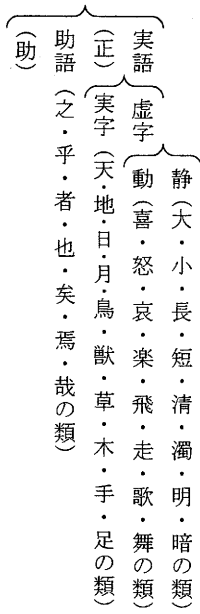
本稿では、近代に入つていわゆる推量助動詞という形に固定化するまでの有様をたどることで、現在、特に反省することなく自明のものとして用いている「推量」という概念を考え直してみる契機としたい。

1 カテゴリー化

ここで、当たり前のように「推量助動詞」という言い方を用いているが、どの助動詞が推量助動詞と考えられているか、と問う前に、そもそも助動詞がさらにいくつかのカテゴリーに分けられる、という認識がなければならぬ。勿論、さらにその前に、発話・文章が単語に分けられ、それが助動詞も含めた品詞に分けられるという認識がなければならぬ。第一段階の品詞分類は、近代初期にも見出されるが、助動詞をさらにいくつかのカテゴリーに分けたものは、少なくとも明治一桁の間は見出されない。そこでまず、第一段階としての品詞分類、そして第二段階としての各品詞、特に助動詞の分類がどのように進化したのかを系統立てて確認していきたい。

カテゴリー化そのものは、必ずしも近代になって欧米の文典の影響によって成立したものではない。古田(一九七二・一一)によると、近世の国学における語のカテゴリー化は、漢語学の影響が大きいという。荻生徂徠『訳文筌蹄』(宝永八年(一七一七))によると、形状字面・作用字面・声辞字面・物名字面という分類と、半虚字・虚字・実字・助字という分類を挙げるが、およそ、それぞれ形状字面ないし半虚字が形容詞、作用字面ないし虚字が動詞、物名字

面ないし実字が名詞、声辞字面ないし助字が助詞・助動詞に相当する。また同じく、荻生徂徠『訓訳示蒙』（明和三年（一七六六））に挙げられた、語の分類である「字品」における分類は以下のようなものであるという。



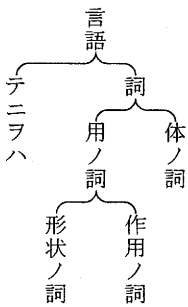
さらに、伊藤東涯『操觚字訣』（宝暦十三年（一七六三））は、実字・虚字・助字に加え、「嗚呼・如何・稍・亦・凡・嘗・抑・又」などを含む語辞を合わせた四分類をしており、東涯には、他に『助字考』（天禄六年（一六九三））、『用字格』（正徳元年（一七一））がある。

また富士谷成章の兄の皆川淇園が著した多くの語学書、『実字解』（寛政三年（一七九一））、『虚字解』（天明三年（一七八三））、『統虚字解』（寛政四年（一七九二））、『虚字詳解』（文化十年（一八一三））、『助字詳解』（文化八年（一八一））の中では、実字・虚字・助字の三分類を採っている。

このような漢語学における品詞分類の影響を受けて、近世の国学においても日本語の品詞分類が試みられる。富士谷成章『あゆひ抄』（安永七年（一七七八））では、品詞を人にぞらえて、名（名詞）、装（動詞・形容詞・形容動

詞）、挿頭（代名詞・副詞・接続詞・感動詞・接頭語）、脚結（助詞・助動詞・接尾語）の四類に分けていた。さらに、そのうちの脚結は、属、家、倫、身に四分類されるが、そのうちいわゆる推量助動詞は倫および若干のものが身に分類される。すなわち、可倫にベシ、不倫にジ・マジ、将倫にム・マシ・ラム・ラシ、来倫にケム、めり身にメリ、なり身にナリが配属される。

また、鈴木胤『言語四種論』（文政七年（一八一四））では、品詞を体ノ詞（名詞）、形状ノ詞（形容詞）、作用ノ詞（動詞）、テニヲハ（助詞・助動詞・感動詞・陳述副詞類・接尾語）に四分類する。テニヲハはさらに、独立タルテニヲハ（感動詞）、詞ニ先ダツテニヲハ（副詞・接続詞）、詞ノ中間ノテニヲハ（格助詞・接続助詞・係助詞）、詞ノ後ナルテニヲハ（終助詞・間投助詞）、活語ニツケルテニヲハ（助動詞）に細分化される。



それに対して、他方で洋文典に範をとる洋学系の品詞分類がある。箕作阮甫が翻刻した『和蘭文典 前後編』（天保十三年（一八四二）・嘉永元年（一八四八））の翻訳である

大庭雪斎『訳和蘭文語』(安政二年(一八五六))は、実辞(名詞)・性辞(形容詞)・陪辞(連体修飾語)・数辞(数詞)・代辞(代名詞)・活辞(動詞)・副辞(副詞)・冒辞(接続詞)・接辞の九品詞に分けている。

時代的には若干逾るが、そのようなオランダ語文法を日本語にあてはめたものとして、鶴峯戊申『語学新書』(天保四年(一八三三))が現われる。そこでは実体言(名詞)・虚体言(連体修飾語)・代名言(代名詞)・連体言(動詞連体形)・活用言(動詞)・形容言(副詞)・接続言(接続助詞)・接続詞(指示言(所在時刻を表わす格助詞)・ニ・ヲ・ヨリ)・感動言(感動詞・終助詞)の九品詞に分類している。

蘭学に遅れて英学が盛んになり、次第に英学が中心となるが、幕末から近代初期にかけて最もよく用いられた英文典の1つは、『英吉利文典』(The Elementary Catechisms, English Grammar 第五版 慶応二年(一八六六))である。そこには次の八品詞が挙げられている。

In English there are eight sorts of words, — Nouns, Verbs, Adjectives, Pronouns, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.

近代初頭には、クワッケンボスの英文典が大学南校(東京大学)で、ピネオの英文典が慶應義塾で用いられ、英文の文典そのものに対して、直訳(いわゆる翻訳)、独案内・

独学(英文の単語ごとに訳を充て語順を示す)などの、要するにアンチヨコ本が数多く出版されることになる。

クワッケンボスの G.P. Quackenbos "First book in English Grammar" (東京版 明治十五年(一八八二))では、次の九品詞が挙げられている。

How many parts of speech are there? Nine. Name them. Nouns, Pronouns, Articles, Adjectives, Verbs, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.

格賢勃斯(訳者不詳)『英文典直訳』(明治三年(一八七〇))によってその訳語を確認すると、すでに現代のものほとんど同じであることがわかる。

話ノ幾許ノ部分ガ其処ニアルカ 九ッガ 彼等ヲ挙ゲヨ 名詞、代名詞、冠詞、形容詞、働詞、副詞、前置詞、接続詞及ビ間投詞ナリ 8ウ

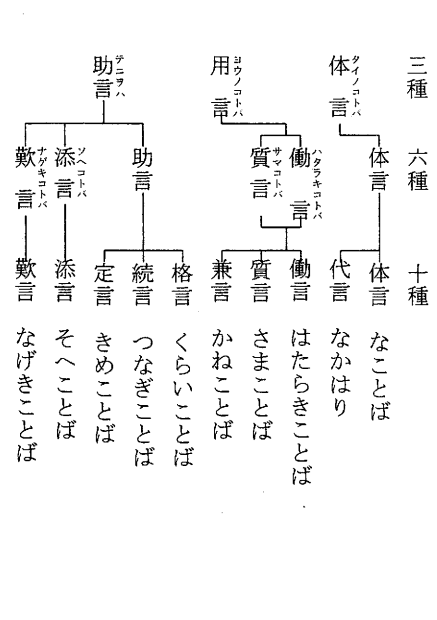
T.S. Pineo "Pineo's Primary Grammar of the English Language for Beginners"の翻刻である『ピネオ氏原板英文典』(明治三年(一八七〇)九月)は、品詞分類に関する説明はほとんどなく、いきなり名詞から章が始まるが、章立てから、The Noun, The Pronoun, The Adjective, The Verb, The Adverb, The Preposition, The Conjunction, The Interjection といふ八品詞が立てられていたことがわかる(クワッケンボスと比べると、冠詞が欠けている)。

以上のように、国学系の品詞分類は三ないし四に分け、

洋学系の品詞分類は八ないし九に分けるのが通例である。さて、このような状況の中で、近代の日本語文典はどのような品詞分類を採用したのだろうか。

古川正雄『絵入智慧の環』一編下(明治三年(一八七〇)九月)では、なことは(名詞ともいふ)・かへことは(代名詞ともいふ)・さまことは(形容詞ともいふ)・はたらきことば(動詞ともいふ)・そひことば(副詞ともいふ)・あとことば(後詞ともいふ)・つなぎことば(接続詞ともいふ)・なげきことば(歎息詞ともいふ)の八品詞を挙げる。ちなみに「あとことば」とは(格)助詞のことである。

西周『日本語典』(明治三年(一八七〇))は、稿本であるが、以下のような品詞分類が図示されている。ここで、「兼言かねことば」とはもとは動詞・形容詞であるが、名詞を修飾する連体修飾語として用いられたもの、また、「格言くらいことば」は格助詞、「続言つなぎことば」は接続助詞、「定言きめことば」は係助詞のことで、「添言そへことば」「歎言なげきことば」は説明がないが、それぞれ副助詞・終助詞のことであろう。国学由来の体言・用言・テニヲハの三分類と、洋学由来の品詞(特に「兼言」を設定することなどに伺える)とを上位概念・下位概念として折衷しようとしていることがわかる。



中金正衡『大倭語学手引草』前編(明治四年(一八七二)九月)では、実名詞(体言)・代名詞・形容詞・動詞(用言)・はたらき言葉)・分詞・副詞・後置詞・接続詞・感嘆詞(投間詞)の九品詞を挙げています。

黒川真頼『日本文典大意』(明治五年(一八七二)三月)では、「詞は、原三品にして、それがわかれて九品となりて、さまざまの用をなすものなり、さまざまの用をなすことは、九品うちあはねばなさず、されど、その原は三品なれば、此の三品を、よく意得れば、それがうち合ひ或はわかれて九品となることも、悟らるゝなり、三品とは、名詞動詞助詞なり」と断って、名詞・数量詞・代名詞・助詞・形容詞・動詞・副詞・接続詞・投入詞が順に章立てて論じられる。

ちなみに、助動詞（および敬語）は「法末助詞」として、助詞の分類に入れられている。また『日本小文典』（明治五年（一八七二）十月）では、名詞（又体言）・数量詞・代名詞・助詞（又てにをは）・動詞（又用言、又作用言）・係詞・形容詞（又形状言）・副詞・接続詞・間投詞の十品詞としている。さらに、『皇国文典初歩』（明治六年（一八七三）一〇月）は、『日本文典初歩』『日本文章法初歩』（ともに明治六年（一八七三）五月）を合冊したもののようで、そこには『日本文典大意』の冒頭の一節がそのまま引かれ、名詞・数量詞・代名詞・形容詞・動詞・助詞・副詞・接続詞・嗟歎詞という九品詞が順に論じられている。これは、国学系の体言・用言・テニヲハの三分類と、洋学系の九品詞が組み合わされたものと思われる。

太田随軒『太田氏会話編』巻二（明治六年（一八七三）八月）では、冒頭で「凡人の平生はなすところの詞は八種の別あり」と述べ、名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・前詞・接続詞・間投詞を挙げる。ここで前詞とは（格）助詞のことである。日本語では格助詞はむしろ名詞の後に接続するが、英語の前置詞に対応するものとして、この呼称を用いているものと思われる。

高田義甫・西野古海『皇国文法階梯』（明治六年（一八七三）八月）では、「児童まづ、此体・用・の二を心得べし、体言とは活用かぬ物をいふ、用言とは活用く詞をいふ、各

四種あり」として、名詞と動詞とをさらに四つに細分化するが、その後、受辞（助動詞）について触れている。前後の文典からすると、珍しく国学系の分類が採用されている。山田俊三『山田氏文法書』（明治六年（一八七三）一〇月）では、「八品詞のなをいちくはなせよ。名詞・代詞・様詞・働詞・副詞・後詞・接詞・歎詞」と、八品詞を立てている。

馬場辰猪『日本文典初歩』（明治六年（一八七三）は、ロンドンにおいて英語で出版されたものではあるが、*Words are divided into eight classes, that is, parts of speech — Nouns, Adjectives, Pronouns, Verbs, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.*と、日本の多くのものと同じく、八品詞を立てている。

渡辺約郎『皇国小文典』（明治七年（一八七四）四月）では、体言即ち実名詞・代名詞・数詞・形容詞・用言乃ち動詞・副詞・接続詞・間投詞の八品詞が挙げられている。ここには助詞・助動詞が挙げられていないが、（格）助詞は、「各ノ名詞ハ、四ノ格ヲ有ス、即チガノニヲ是レナリ」というように、名詞の格変化と扱われ、助動詞も動詞の変化と扱われ、受身は「打チカケ詞」（能動態）と対になる「受ケ身詞」として、過去（キ）、推量（アラフ）は「時ノ動詞」の中で過去、去、未

来として挙げられている。近代初期の代表的な洋風文典である田中義廉『小学日本

『文典』は『訳和蘭文語』を下敷きとし、同じく中根淑『日本文典』は『英吉利文典』を下敷きとしていることは、すでに明らかにされているが、これまで見てきたように、それ以前のほとんどの近代初期の文典は、少なくとも品詞分類に関しては、洋学系の八ないし九分類を採用している。

その事情は、田中義廉『小学日本文典』（明治七年（一八七四）一月）でも同じである。

詞は、萬物にわたりて、其数極りなしと云へども、これを約して七種とす。名詞又ナコトバ○形容詞又サマコトバ○代名詞又カハリコトバ○動詞又ハタラキコトバ○副詞又ソヘコトバ○接続詞又ツギコトバ○感詞又ナゲキコトバなり

卷二一オ・ウ

中根淑『日本文典』（明治九年（一八七六）三月）も次のように記す。

○言語論ハ、言語ノ本質ト変化トヲ論ズル者ニテ、之ヲ大別シテ八種トス曰ハク名詞、曰ハク代名詞、曰ハク形容詞、曰ハク動詞、曰ハク副詞、曰ハク後詞、曰ハク接続詞、曰ハク感歎詞、則之ヲ総称シテ八品詞ト云フ、

卷上27オ

しかるに、本稿で問題にしたいいわゆる推量助動詞については、そもそも当時の洋文典には対応するカテゴリーが見出しがたい。現代の英文法でこそ、推量は、認識的モダリティ epistemic modality ないし義務的モダリティ deontic

modality と呼ばれて、法 modality の中心的な研究分野であるが、当時は、第3節に見るように、法 mood の分野には含まれていなかった。

このように、洋文典の品詞分類の枠組を採用すれば、一方では、三ないし四にしか分けられない国文学系の文典よりも単語の分類が精密になる反面、助詞・助動詞、特に助動詞に関しては適当なカテゴリーが見出しがたい、という弊も生ずることになる（格）助詞はかろうじて前置詞に相当すると考えることができる。したがって、近代初期の洋文典を範とした洋風文典には、いわゆる推量助動詞について、ほとんど積極的に触れた記述が見られない。

しかるに、物集高見『初学日本文典』（明治十一年（一八七八）七月）は、『訳和蘭文語』を下敷きにしたと言われているが、それにも拘わらず、助詞・助動詞に関する記述がそれまでになく詳細である。これは、物集高見が元来、漢学、国学の素養を持った研究者であったことも関わっているだろう。すなわち、「接辞」（助詞・助動詞を含む）を、嘆辞・希求辞・命令辞・禁止辞・指示辞・現在辞・過去辞・将来辞・否不辭・疑辭・反辭・両辭・分量辭・想像辭・決定辭・比准辭・助辭・句頭接辭・一種接辭・崇敬辭に分類する。そのうち、現在辞にはナリ、過去辞にケム（「想像過去時ヲ見ス者トス」）、将来辞にはム・マシ、否不辭にはジ、想像辞にはラシ・ラム・メリ・マジ、決定辞にはベシ

が含まれる。

以上見てきたように、近代初期の品詞分類は、全体としては分類が詳細である洋文典の枠組が採用されているが、洋文典には対応物が見出しがたい助詞・助動詞、特に本稿のテーマであるいわゆる推量助動詞に関しては、国学系の研究が取り入れられている可能性があることを確認した。

ここで、文を単語に切り出し、そこで析出された単語をすべて有限のカテゴリに分類させるという志向は、いかにも近代的な発想であることに思い当たる。それが第一段階としては、品詞という形で八ないし九のカテゴリが用意されていたが、第二段階としては、それぞれの品詞がさらに下位のカテゴリに分類されることになる。洋文典にも共通する名詞や動詞などは、最初から第二段階のカテゴリが用意されていたが、日本語に特殊な後詞ないし助辞、すなわち助詞・助動詞は、洋文典のカテゴリをそのまま日本語に適用していた洋風文典の段階ではほとんど手つかずの状態で、本稿で問題にしているいわゆる推量助動詞も含めた助動詞のカテゴリ化は、明治十年代に入ってから、折衷文典と呼ばれるものによって行われたように思われる。これまで、助動詞のカテゴリ化には、むしろ国学系の研究の影響が大きいのではないかと示唆したが、それともう一つ、辞書の編纂の必要性が大きく関わっているのではないだろうか。実際、明治十一年に詳細な助詞・助動詞の

分析・分類を行っている、すでに挙げた、物集高見をはじめ、日本語文法に助動詞のカテゴリ化を定着させた大槻文彦も辞書の編纂に深く関わっている。

すべてを列挙してそれを一貫した基準で分類するという作業を、言語に適用した最たるものが辞書であるが、その前提として最低限の文法を必要とする。特に日本語の場合、まず文をどのように区切って単語と認定するかという問題があり、そのようにして析出された単語を有限個の品詞に矛盾なくすべて分類し尽くされなければならない。そのような試みとして、明治初頭には文部省主導で辞書『語彙』のための文法的な整理として、『語彙別記』（明治四年（一八七二）十一月以降）ならびに『語彙活語指掌』（明治四年（一八七二）十一月以降）が国学派を中心に複数回刊行されたが、国学派の文法では近代的な辞書を支えるに足るだけの理論的枠組を提供することはできず、頓挫する。その後、物集高見が辞書『ことばのはやし』（明治二十一年（一八八八）七月）を編集するにあたって、巻頭に文法的な枠組である『日本小文典』（明治十六年（一八八三）十一月脱稿）が置かれたり、近藤真琴が辞書『ことばのその』（明治十八年（一八八五）九月）を編集するにあたって、巻頭に文法的枠組である『はじめのまき』が置かれるという例もあったが（近藤真琴の『はじめのまき』は大槻文彦の『語法指南』の草稿を下敷きにしたと言われる）、何と云っても

近代的な辞書の筆頭は大槻文彦の『言海』（明治二十二年（一八八九）五月〜二十四年（一八九一）四月）であり、それが成功したのは『言海』の冒頭に置かれた文法解説『語法指南』（単行本は明治二十三年（一八九〇）十一月）が近代的な文典となり得ていたからであると考えられる。『語法指南』はその後、独立した文法教科書『広日本文典』（明治三十年（一八九七）一月）として学校教育にも用いられるが、そのことも『広日本文典』が近代的な文法の要求を満たしていたことを示唆している。

ちなみに、物集高見『日本小文典』には「言語」という節の冒頭に以下のように記す。

言語とは、事物の名、及び、事物の、動作、形容等を、声音をもて、表はすものをいふ。日本の言語は、形の上よりいへば、語尾の、動かぬものと、動くものと、他の語に附属する、短きものと、三種ありて、語尾の動かぬを、体言といひ、動くを用言といひ、他の語に附属するを、三爾乎波といふ。また、性質の上よりいへば、名ことば、かへ詞、わざ詞、さま詞、そへ詞、つなぎ詞、なげき詞、てにをはと、名づけらるゝ、八種のものあり、今は、其八種のものをいふなり。 12

そのうち、てにをはは「すゑ辞（助詞）」と「たすけ辞（助動詞）」とに分けられるが、たすけ辞はさらに七種類に細分化され、いわゆる推量助動詞は「第二 未来を表はすに、

用ふるもの」にム・マシ、「第三 現在の想像をいふに、用ふるもの」にメリ・ラム・ラシ、「第四 過去の想像をいふに、用ふるもの」にケム、「第六 決定の未来、即ち、半決定をいふに用ふるもの」にベシ、「第七 第六の辞の、うけしに、用ふるもの」にマジが挙げられている。

近藤真琴『はじめのまき』の「ことば」という節の冒頭は、以下のようになっている。

こゑのあやによりてものな、そのわざ、ありさま、ことのおもむきなどをあらはすことばといふ、ことばはそのかずおびただしといへども三くさのほかにいえず「一」なことば「二」はたらきことば「三」をいとはたらきことばはまたわざことば・さまことばの二くさにわかち、をごととはてにをは・つなぎことば・そへことば・なげきことばの四くさにわかち

12オ・ウ

このうち、「なことば」は名詞、「はたらきことば」は動詞・形容詞、「をごと」は助詞（要するに、国学の体言・用言・テニヲハ）におよそあたるが、助動詞は、そのうち「はたらきことば」の中の「すけことば」として挙げられている。そのうち、いわゆる推量助動詞は、「二 こんときのすけことばはむといふひとことなり」とムが、「三 あらましのすけことばはまのあたりにはかくあらぬことをかくあらましとおしはかりていふことばなり、さればまたおしは

かりのすけことばともいふなり、あらましのすけことばはらん、らし、めり、けん、てん、なん、まし、べしの八つなり」とラム・ラシ・メリ・ケム・マシ・ベシが、「四らうへのすけことばはそのわざことばのころをうらうへになすものなり、まうちけしのすけことばともいふ、ずといふひとことなり、またうらうへなるべしとおしはかるものはじ、まじのふたつあり、これをあらましのうらうへといふ」とジ・マジが、「七ながめのすけことばはかんずることあるときにいひいづることばにてなりといふひとことなり」とナリが挙げられている。

さらに、大槻文彦『語法指南』の「言語」という節の冒頭は以下のようになっている。

此篇ニハ、八品詞ノ目ヲ、名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接続詞、天爾遠波、感動詞、ト立テタリ。

9

第二、三、四節にも述べるように、指定ノ助動詞にベシが、打消ノ助動詞にマジ・ジが、未来ノ助動詞にムが、過去ノ助動詞にケムが、推量ノ助動詞にラム・メリ・マシ・ラシが、詠歎ノ助動詞にナリが挙げられている。

このように、品詞分類が第二段階として、助動詞の内部にまで適用されるにあつては、辞書の編纂が深く関わっているものと推測される。近代の辞書は、すべての語彙を何らかのカテゴリーに分類する必要があるわけだが、助動

詞を単に「助動詞」とひとくくりにするには、日本語の助動詞は実にさまざまな働きをする。そこで、助動詞という第一段階の品詞分類の上に、さらに助動詞の種類という第二段階の品詞分類が要求されたと考えられるわけである。

ただ、厳密を期せば、同じ明治十年代に、高知師範学校の教科書として、溝淵幸雄『言葉の橋立』（明治十二年（一八七九）十月）が出版されている。ここでは「詞ノ種類ハ甚だ繁雜ナル者ニハアレド皇国ニテハ常ニ体言用言テニヲハノ三部ニ大別セリ」、また「用言ハ動作作用言形状用言ノ二類ニ區別シ」というように、国学系の品詞分類を行っているが、そのうちテニヲハに関しては、「コトニハ其言ノ意ヲモテコレヲ分クベシソハ時限ノテニヲハ歎息ノテニヲハ疑問ノテニヲハ反語ノテニヲハ希望ノテニヲハ命令ノテニヲハ想像ノテニヲハ不意ノテニヲハ発語ノテニヲハ助語ノテニヲハ形容ノテニヲハ雑ノテニヲハ等ナリ」のように分類している。いわゆる推量助動詞は、時限ノテニヲハのうち過去にケム、未来にラム・ム・ベシ・マシ、命令ノテニヲハにベシ、想像ノテニヲハにラム・ラシ・ベシ・マジ・メリ、不意ノテニヲハにジが挙げられている。これもかえって、国学系の文典は助詞・助動詞に詳しいということの証左になるのではなからうか。

このように、助動詞をさらに分類しようという発想は、洋学系の文典をそのまま日本語に適用しただけでは生じて

こない。一方では、テニヲハの働きに注目してきた国学系の語学研究がそれに接ぎ木された結果、また他方では、辞書を編集するための文法的整備、すなわち洋学的な発想による近代的な辞書を作る必要上、明治十年代にカテゴリー化が助動詞の中にまで及んだと思われる。

2 未来—テンス—

明治初期の文典を通観するに、助動詞の意味記述ないし分類における最も強力な概念として、時制概念が用いられていることに気が付く。過去・完了助動詞に時制概念が適用されることは当然とも思われるが、いわゆる推量助動詞にも時制概念が大きく関わっている。なぜ推量助動詞に時制概念が適用されるようになったのか、その経緯を明らかにしたい。

国学の語学研究の中にも時間概念が見出されないわけではない。そもそも、過去・現在・未来という術語ないし概念は、仏教用語として導入され、それが中世に歌学に流入し、さらに近世になると国学に受け継がれる。

近世初期、『一步』（著者不明）は、早くも助動詞（および一部の助詞）を過去・現在・未来によって分ける試みを行っている。「過去の手爾於葉」としてキ・ツ・ヌ・タリ・タなど、「現在の手爾於葉」としてナリ・メリ・ラン・ケリ

など、「未来の手爾於葉」としてム・マシ・ベシ・ジ・タシなどが挙げられている。時間関係という単一基準によってこれらの助動詞を分類しようとするのは強引すぎるようにも思われるが、実は近代の文典の中にも、極端なものとは、同じように時制のみによって推量助動詞を分類しようとするものがあり、その発想の共通性に驚かされる。

富士谷成章『あゆひ抄』（安永七年（一七七八））では、過去・完了助動詞について、キが、「過ぎたる事を確かに定めて言ふ言葉なり。」、又が、「いぬ」といふ事をつづめて言へる脚結なり。「いぬ」とはここを去りてかしこにゆくを言ふ言葉なり。脚結にてもこの心を思ひわたすべし。したしくいはば、さはあるがたからんとおぼゆる事の終に成りたるやうの心なり。里「テシマフ」「ダンニナル」「ヤウニナル」、また所によりては「テシマフタ」「ヤウニナツタ」と「タ」文字を加へても心得べし。」と説明されるのは当然として、いわゆる推量助動詞に関しても、ムは、「未だ然あらぬ事をはかりあらまして言ふ言葉なり。みづから思ひ立ちて「いま行かむ」「いざ帰らむ」など言ふは裏なり。思ひやりて「とあらむ」「かからむ」など言ふは表なり。みな今より後をはかり、ここよりかしこをはかれる心なり。」と説明され、また「タムも、「里「タコトデアラウ」「タモノデアラウ」また「タデアラウ」と言ふ。過ぎたる事を思ひて「ける」なども詠むべき所を、我まさしく見ず・聞かず・

知らずなどあれば、寛^{くわん}げて「む」とひびかせり。」と説明されており、推量される命題内容がムは未来のもの、ケムは過去のものという認識があつたことがわかる。

幕末になつても、橘守部『助辞本義一覽』（天保六年（一八三五））では、過去・完了助動詞に関しては、キについて、「此きは、既^{ツキ}の義也。」ありきは、在既^{アリツキ}。「見きは、見既^{ミツキ}。」「ききは、聞既^{キツキ}。」「しりきは、知既^{シリツキ}の意にて、即在既^{ミツキ}。」「聞既^{キツキ}知既^{シリツキ}といはんほどの心ばへなり。中段のしは、去^サの義也。」「ケリについて、「此けり、ける、ければ、往來^{ユキキ}などの、來^キの言の活きたる辞也。」、又について、「此ぬは、所謂畢^{ツキ}のぬにて、往^{イヌ}の義也。されば「なりぬは、成往^{ナリヌ}。」「たえぬは、絶往^{タエヌ}。」「しりぬは、知往^{シリヌ}。」「きぬは、來往^{キヌ}。」「まどひぬは、惑往^{マドヒヌ}也。」「ツについて、「此つは、竟^{ツキ}の義にて、「見つは、見竟^{ミツキ}。」「きつは、聞竟^{キツキ}。」「いひつは、言竟^{イヒツキ}。」「おもひつは、思竟^{オモヒツキ}。」「くらしつは、暮竟^{クらしツキ}。」「なかりつは、無在竟^{ナラアツキ}の意也。」「と説明されているように、語源的な色彩は強いものの、「既く」「去る」「來」「畢んぬ」「往ぬ」「竟つ」のような、移動や終了の動詞と結びつけて過去・完了的な意味合いを推測させている一方、いわゆる推量助動詞に関しては、ケムの説明に、「さればむも、まくも、共に過去にも、未來にも、其事の未^メ目前^{ゼン}に、頭は來^キらざるにいふ辞也。」という指摘も見られる。その他、鈴木重胤『詞捷徑』（弘化二年（一八四五））では、キヤムに関しては、先に挙げた『あゆひ抄』の一節

を引くが、ケムについては、「さて此けんのけは、既^{ツキ}の義なり、と、或人のいへる如く、すぎたる事をたしかにいふことばなるが、それにんのそはりて過去をうたがひておしはかることばなり。」と説明する。さらに、黒沢翁鷹『言靈のしるべ』（安政三年（一八五六））には、ムについて、「んは総^{ソウ}て未來^{コトサキ}の事をいふ時に用うる辞也」、ケムについて、「けんは過去^{コトサキ}し事を疑ひ云辞なり」と、対比的に説明されている。

このように、確かに、本居宣長『詞玉緒』の系統を引く研究にはそもそも意味に関わる記述が少なく、助動詞の意味記述の中に時間に関わる一節を見出すことは困難であるが、富士谷成章『あゆひ抄』の系統を引く研究や、その他のものには、時間に関わる意味記述が散見され、近世においても、過去・完了助動詞ばかりでなく、いわゆる推量助動詞の意味のある部分は時間に関わるものであると認識されていたことが了解される。

しかし他方で、洋学の語学研究において、時制は、文法記述において、性と数、自動と他動、態、法と並ぶ代表的な概念である。しかもその際、かならず現在・過去・未來が組になって論じられる。

蘭語学において、物集高見の『初学日本字典』や『日本小辞典』に直接影響を与えたと言われる大庭雪斎『訳和蘭文語』（安政二年（一八五六））では、時制を以下のように

記述している。ちなみに、現代の英文法の術語を宛てれば、「方今時」は現在形、「帯既往時」は過去進行形、「既往時」は過去形、「過既往時」は過去完了形、「将来時」は未来形にあたる。

方今時【テーゲンウオールヂヘテイド】ハ、説話スル事其説話スル時刻ト瞬間ニ在ルコトヲ示ス者ナリ。

帯既往時【オンホルマークトフルレーデンテイド】不滿既往時ノ義又タ「ベトレッケルイケフルレーデンテイド」ト云此原名ニ本ツヒテ帯既往時トス」ハ、猶方今時ノ如ク、活辞体ノ変ヲ以テ成ル者ニシテ、説話スル事、其説話ノ時ヲ過去トモ、尚ヲ其説話スル時刻ニ継続シ、他事ノ始マル時ニ、未タ全ク過去リ了ラサル業作ヲ示ス者ナリ。

既往時【フォルマーキトフルレーデンテイド】ハ他ノ時刻、若クハ他ノ業作ヲ目スルコトナク、説話スル時ニハ、全ク過去リ了レル事ヲ示ス者ナリ。

過既往時【メールダンフォルマーキトフルレーデンテイド】ハ、他事ノ始リタル比ヒニ、既ニ全ク過去リ了リシ事ヲ示ス者ナリ。

将来時【ツーカーメンデテイド】ハ、事ノ將ニ成ントスルヲ示ス者ナリ。

さらについでながら、割注の中で、古典語のいわゆる推

量助動詞についても触れている。

【助辞「シユルレン」「ソウデ」ハ、本邦ノ「ラム」「ケム」「ナム」「ラメ」「ケメ」「ナメ」ノ類ニ当リ、支那ノ助辞矣ニ当ル、故ニ俗言ノ「デアラウ」「デモアラウ」ト云助辞ニ当ル。】 同 35才

また時代は遡るが、蘭語学の枠組で日本語を記述したものととして、鶴峯戊申『語学新書』（天保四年（一八三三））が現われる。そこではすでに、いわゆる推量助動詞について、メリ・ラン・ベシ・ラシを現在、ケムを過去、ム・マジ・マジを未来と時制によって分類している。

○現在格第七

聞くといふ詞にていはず、まづ聞くといふは現在用言なれども欠助辞也。次に聞くといふ詞に、現在格の助辞をつけてきくめりきくらんきくべききくらしといへば、完助辞の詞となる也。これを現在格とはいふなり。

○過去格第八

動かしたなびかれをりなどいふはたゞ全過用言也。

動かしてたなびかれてをりてなどいふは、全過格のてもじ全過用言をうけたる也。またそのにて同格の助辞けり等をつけて、動かしてけりたなびかれてけりをりてけりなどいへり。（中略）次になぬなばなんなめなましねにしにきにけりにけらしぬぬる

ぬれなどは去ノ字の意にてやがて万葉にはこれらの助辞に去ノ字をかけり。次にしきけりけるけれけんけめけらしは来ノ字の意なるべし。

○未 来 格 第 九

此未来格の現在過去の二格と異なるよしは、かの二格は、上の用言下の助辞なくとも、みづから語をなしてきくききけなどとはたらくを、この未来格は、上の用言に、下の助辞をつけてきかんきかましなどはなれば、語をなさぬ也。なほ漢語にて、不ノ字輝ノ字などをそへていふ語のいとし。この未来格にてても不ノ字輝ノ字の意也。ずでじ不ノぬは不ノ字の意也。ではスシテノ反ゼなるを転じてでといふ也。まじはじに同じなくなくなどは不ノぬに同じ。

英学に目を転じれば、幕末には『英吉利文典』(第五版 慶応二年(一八六六))の影響は大きい。本書は、中根淑『日本文典』の典拠であり、また、大槻文彦『広日本文典』も大きく影響を蒙っている。大槻自身が述べている。そこへは、過去 (the past tense) 、現在 (the present tense) 、未来 (the future tense) とごう時制 (tense) と、-ing を用いる非完了 (= 進行 imperfect) あるいは能動 (active) と ed を用いる完了 (perfect) あるいは受動 (passive) という分詞 (participle) との組み合わせとして表現の体系が論じられている。見てわかる通り、分詞という概念にはアスペク

トとヴォイスとが混在している。とにかく、この二つの枠組を掛け合わせると、present imperfect (現在進行形) 、past imperfect (過去進行形) 、future imperfect (未来進行形) 、present perfect (現在完了形) 、past perfect (過去完了形) 、future perfect (未来完了形) (括弧内は現代英文法の術語) という六つの形が導かれる (本書は問答形式で進められるが、答の部分のみを抜き出して示す)。

The present tense imperfect shews an action going on at this present time, but not finished; as — I am advising you now.

The past imperfect shews an action past, but not finished at the time spoken of; as — I was advising you yesterday.

The future tense imperfect shews a future action that will not be finished at the time spoken of; as — I shall be advising you to-morrow.

The present tense perfect shews an action finished, but still in effect existing; as — I have advised you now.

The past perfect expresses an action as finished some time ago; as — I had advised you before yesterday.

The future tense perfect declares that an action will be finished at some future time; as — I shall have advised you before this time to-morrow.

38・39

以上に挙げたような蘭文典、英文典は、語学研究書として編集・受容されたわけではなく、語学学習書として編集

・受容されたものと思われるが、そのような事情は近代に入って英語教育が大学教育に組み込まれてからも受け継がれる。近代初期には、クワッケンボスやピネオの英文典が広く用いられるが、それらが、近代初期の語学的な認識を形成することに寄与したと考えられる。

クワッケンボスの G.P. Quackenbos "First book in English Grammar" (東京版 明治十五年(一八八二))によると、時制をまず以下のように定義する(この書も問答形式をとっているが、答の部分のみを抜き出す)。

Tense is that property of the verb which distinguishes the time for what it affirms. 55

そして後に見る直説法 (indicative mood) の文の中には、次の六つのテンズが区別されるといふ。

The Indicative Mood has six tenses; the Present, the Imperfect, the Perfect, the Pluperfect, the First Future, and the Second Future. 55

(この部分を、格賢勃斯(訳者不詳)『英文典直訳』(明治三年(一八七〇))から抜き出すと、以下のような訳語が充てられている。それ以後に出られるいくつかの版の『英文典直訳』もこの訳語を踏襲している。

直説法ハ六ノ時ヲ持ツ、現在、半過去、過去、大過去、第一未来及ビ第二未来ナリ

上 57 才

それぞれの具体的説明、及び例を見ると、present「現在」は現在形、imperfect「半過去」は過去形、perfect「過去」は現在完了形、pluperfect「大過去」は過去完了形、first future「第一未来」は未来形、second future「第二過去」は未来完了形(術語は現代英文法)にあたるようである。原文の方も、過去形を imperfect、現在完了形を perfect とするなど、一貫性に欠け、整理が不充分であるように思われるが、訳語も、まだ「完了」という概念がなかったためでもあろうが、(過去完了形を「大過去」と呼ぶのはまだしも)過去形を「半過去」、現在完了形を「過去」と呼ぶなど、反って混乱しそうな表現を用いている。

The Indicative Present affirms that an action is taking place, or a state existing, at the present time; as, *I depart, I am.*
The Indicative Imperfect affirms that an action took place, or a state existed, at some past time; as, *I departed, I was.*
The Indicative Perfect affirms a past action or state as completed at the present time; as, *I have departed, I have been.*

The Indicative Pluperfect affirms a past action or state as completed at or before some other past time; as, *I had departed, I had been.*

The Indicative First Future affirms that an action is about to take place, or a state to exist; as *I shall depart, I shall be.*

The Indicative Second Future affirms a future action or state as about to be completed at or before some other future time; as, *I shall have departed, I shall have been.*

55・56

次に、『ピネヲ氏原板英文典』（明治三年（一八七〇）九月）は、クワツケンボスの英文典と比較すると、時制の説
明がすっきりしているように見える（これも問答形式であるが、問の部分は省略する）。まず、時制を次のように定義
する。

The word *tense* means *time*.

The tense of verbs denote the time in which an action or state of being is represented; as,

'I study,' (now):

'I studied,' (yesterday, or in some past time):

'I shall study,' (to-morrow, or at some future time).

その上へ、第二段階として、時制を過去・現在・未来の
三つに分ける。

There are three principal divisions of time: the present, the past, the future.

The Present Tense, denoting present time:

The Past Tenses, denoting time past: and

The Future Tenses, denoting time to come.

ゆゑに第二段階として、過去を三つに分

けるが、以下の説明を見てみると、現代の英文法の術語で
は、過去に「して」、*first past* は過去形、*second past* は現在
完了形、*third past* は過去完了形、未来について、*first future*
は未来形、*second future* は未来完了形にあたる。現代英文
法の観点からすると、時制を三つに分ける点はよいが、現
在完了形を *second past* と呼んだり、また進行形の位置付け
が明らかでなかったりと、アスペクトに関する配慮が充分
ではなう。

The First Past Tense denotes time past, without reference to any particular portion of it; as, 'He studied,' (yesterday, or last week, or many years since), or it represents an action or event as going on at a certain time past; as, 'He was studying when the bell rang.'

The Second Past Tense denotes a past time completed at the present time; as, 'I have studied,' (that is, at this moment, the studying is done), 'I have written,' (at this time the writing is completed).

The Third Past Tense denotes a past time, previous to some other past time referred to; as, 'I had studied,' (before I was called on), 'I had written,' (before I saw you).

The First Future Tense denotes time to come, without reference to any particular portion of it; as, 'I shall study,' 'He will write.'

The Second Future Tense denotes a future time, which is before some other future time; as, 'I shall have studied my lesson,' (before or when he shall arrive).

若干時代は下るが、栗野忠雄訳『英文典直訳』（明治二十年（一八八七）八月）の訳語を確認してみると、まず過去については「其処ニ三ツノ過去ガアル、第一ノ過去、第二ノ過去、及ビ第三ノ過去ナリ」また、未来については「其処ニ第一未来及ビ第二未来ト呼バレタルニツノ未来ガアル」と、ほぼ原語そのままの訳語を充てている。

このような幕末・明治初期の状況の中から出発した近代の日本語文法学は、時制概念をどこから取り入れたのだろうか。結論を先に言えば、それは洋文典から取り入れたということであろう。すでに見たように、近代初期の文典は、その理論的枠組を蘭文典や英文典から受け入れて、その是に指摘されているが、時制もその枠組の中に組み込まれているのである。そしてその中では、時制は動詞の機能の一つと位置付けられており、またそれには、現在・過去・未来がひとまとまりとなつて論じられている。近代初期の洋風文典では、まさにそのように論じられているのである。

古川正雄『絵入智慧の環』四編下（明治五年（一八七二）五月）では、「はたらきことば（動詞）」の章の中に「たすけことば（助動詞）」に関する記述が含まれているが、そこ

で時制が論じられている。このことは、時制を文型が担うというよりは、助動詞が担っているという了解があつたのであろう。さて、「はたらきことばのとき」を「めのまへのとき（現在）」「こしかたのとき（過去）」「ゆくさきのとき（未来）」に三分して、過去については、「いまよりまへにをはりしはたらきをいふときを第一の過去となづけ、いまをはれるはたらきをいふときを第二の過去となづけ、こゝにこれをわかちするすべし」として、第一の過去の例に「よみき・よみにき・よみけり・よみにけり」が挙げられ、第二の過去の例に「よめり・よみぬ・よみつ・よみたり」が挙げられている。未来については、「いまよりのちのことをおしはかりてなにくするであらうとやうにいふを、第一の未来のはたらきことばとなづけ、いまよりまへのことをおしはかりてなにくしたであらうとやうにいふを第二の未来のはたらきことばとなづけて、こゝにこれをわかちするすべし」として、第一の未来の例に「よまむ・よむらん・よむべし」が挙げられ、第二の未来の例に「よみけん・よみぬらん・よみつらん」が挙げられている。

渡部約郎『皇国小文典』（明治七年（一八七四）四月）には、簡単ではあるが、以下のような記述がある。「時ノ動詞ニ三ノ分チアリ、即チ現在、過去、未来、是レナリ、次ギノ例ヲ見ヨ」として、それぞれ動詞の言い切り、動詞ナシ、動詞十デアアラフの例が挙げられ、さらに「未来中ニ過去ノ

詞、アリ、譬へバ忘レタデアラフ、忘レタハ過去ニシテ、デアラフハ未来ナリ」と言う。

さらに、洋風日本文典の最初期のものである、田中義廉『小学日本文典』（明治七年（一八七四）一月）の「動詞の時限（二時制）」の一節を、若干長めではあるが、まず抜き出して示す。

動詞の時限は、過去、現在、未来の三時なり。又これを小別して、第一現在、第二現在（一に半過去といふ）過去、第一未来、第二未来とす。

過去は、既往の時に方りて、なしたる動作を示すものなり、即 彼ハ前日他国ニ行キタリ 予ハ此事ヲ昨年告ゲラレタリ 等のごとし

第一現在は、現今動作する仕業を示すものなり。即 予ハ今行ク 彼ハ目今教ヘラレル 等の如し

第二現在、即半過去は、現今なしたる仕業の、漸く終りたる瞬間を示し、或は既になしたる仕業を、目今説話する時限を示すものなり、即 彼ハ今他国ニ行キシ 今年後ノ鐘ヲ撞チヌ 或は 先刻マデ予ハ教ヘラレシ 等のごとし。

此時限は、平常の説話に多くありて、且要用のものなれども、文章に於ては、特に過去と混じ易し。唯文章中、現在を示せる副詞【今】と、説話する時限の現今なるとに従て、其區別を定む。故に第一現在と、過

去との両時限の、一和したるものと知るべし。

茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども、亦文意に従て、半過去ともなるものなれば、今暫くここに収む。

第一未来は、今より後に於て、作動せんとする仕業を示すものなり、即 明日此地へ来ルナラン 予ハ後日他国へ行カン 出デ行カン人ヲ止メム 等のごとし。

第二未来は将来の時限に於て、期すべき事を示し或は既に為したる敷を考察して、説示するに用うるものなり。即 彼ハ明日来ルデアラン 明日ハ此書ヲ讀ミ終ルコトモアルナラン 或は 行ク駒モ不破ノ関ヲバ越エツラン 明日ハ今時既ニ学校ニ到リテアラン 彼ハ最早彼地ニ到着シタルナラン 等の如し。【茲に越エツランは越ユテアランの約言なり】

卷三15ウゝ17オ

ここから読み取られることには、いくつかかる。まずは、古田（一九五九・三）などに指摘されているように、『小学日本文典』は『訳和蘭文語』の編成、内容を下敷きにして成立したということである。しかし、本稿の関心は、「も」とはそうであっても、それを日本語に適用したことによつて、日本語がどのように見えるのか、ということである。何よりここから読み取られることは、時制というものは、どのような助動詞が用いられるかではなく、文型、あるい

は文が作られるときの条件によって決定されるということである。(第二現在) 文章に於ては、特に過去と混じ易し。唯文章中、現在を示せる副詞【今】と、説話する時限の現今なるとに従て、其區別を定む。あるいは、「茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども、亦文意に従て、半過去ともなるものなれば、今暫くここに収む。」という一節は、文末にキやヌを使うかどうかではなく、文が用いられる条件によって、過去か(第一)現在かが定まる、ということを主張している。ここには、文末に用いられた助動詞(キやヌ)によって、一義的に時制が定まるといふ後の時代の議論(「過去」の助動詞、「未来」の助動詞というような枠組)とは一線を画している。

しかし一方、その中に、「茲に挙げたるシは、元来キの転にして、過去を示す助動詞なれども」という一節が含まれているように、すでに(あるいは、国学的な発想が混入して)助動詞が時制を担っている、という発想が混在している。実は、「第二十八章 法」「第二十八章 時制」(このように、第二十八章が重複している)の前に、次のような「第二十七章 助動詞」という章が置かれていたが、『訳和蘭文語』あるいはそのもととなった『和蘭文典』には、当然のことながら、そのような章は含まれていない。

此詞は、他の動詞と結合して、其詞をなせども、又独立して、意義をなすことあり。其他独立せずして、必

ず他の動詞と結合する助動詞は、ル【被】タ【タリ】略【タリ】テアリ【テアリ】の約言【シ】キ【キ】の転【キ】ケリ【ケリ】の約言【ケリ】タリ【タリ】の転【ナリ】ニアリ【ニアリ】の約言【ヌ】去【去】の義にて半過去を示す詞なり、○否不を示す副詞の又とは全て異なり、ムンナラン【ムンナラン】ニアラン【ニアラン】の約言【アラ】以上四言皆未来を示す詞【ナリ】なり。

卷三・12オ・ウ

このことは、時制というものは、動詞の変化によって担われるものか(洋学)、助動詞によって担われるものか(国学)、という二つの異質な基準が、すでに初期の『小学日本文典』の段階から胚胎されていたことを示している。

それに続く、中根淑『日本文典』(明治九年(一八七六)三月)になると、助動詞の意味の中に時制を取り込もうとするようになる。そのような議論は、言うまでもなく、中根がもとにした『英吉利文典』には見られない。

○助動詞ハ、常ニ動詞ノ後ニ添フテ、以其ノ意味ノ足ラザル所ヲ助ケ成ス者ナリ、即・流サ・流レ・トノミ云ヒテハ、其ノ意味未充足セズ、若之ニ流サン・流レリ・ト、助動詞ヲ加フルトキハ、其ノ意味全ク充足ス、而其ノ語総ジテ精密ニ時ヲ顯スコトヲ主トス、時トハ、過去・現在・未来・ノ三時ヲ云フ、

下8ウ

○過去トハ、既過ギ往キタル時ヲ形スヲ云フ、其ノ中

充分ト不充分トノ別アリ、充分過去トハ、其ノ時全ク過ギ去リテ、今已遠キ前ノコトトナリタルヲ云フ、例ヘバ・古昔勸学院ヲ置カレシ・ノ如シ、不充分過去トハ、其ノ事前ニ在リト雖、未全ク過ギ去ラザル者ヲ云フ、例ヘバ・近日府県ニテ無数ノ小学校ヲ建テリ・ノ如シ、

○現在トハ、今為ス時ヲ形スヲ云フ、之ニ亦充分現在ト云フアリ、是ハ其ノ事今僅ニ終ルヲ云フ、例ヘバ・余地理書ヲ読ミ了リタリ・ノ如シ、其ノ充分現在ニ非ザル者ハ、今方ニ之ヲ為スヲ云フ、例ヘバ・余今歴史ヲ看ル・ノ如シ、

下9オ・ウ

ただし、単にテンスと位置付けているばかりではなく、説明の中には「斯克在ラント推量スル」ないし「未来ヲ察スル」というように、「推量」の意味合いがすでに初期の文典から含まれていることは注目すべきだろう。

○未来トハ、今ヨリ後ノ時ヲ、予形スヲ云フ、是亦充分ト不充分トノ別アリ、充分未来トハ、其ノ事全ク将来ニノミ在リテ、他ノ時ニ関涉セザルヲ云フ、即・余ハ明日平箒ヲ終ラン・ノ如シ、不充分未来トハ、其ノ事他ノ時ニ在リテモ、大方是ハ斯克在ラント推量スルコト、猶未来ヲ察スルガ如キ用フルヲ云フ、即・彼ハ比例ヲ学ビタラン・又ハ・早已点鼠ヲモ為シヌ

ベシ・等ノ如シ、

下9ウ

『日本文典』では、さらにその後で時制と助動詞とをさらに密接に結びつけようとしている。すなわち、過去や未来の場合には、必ず助動詞を用いなければならないが、現在の場合には、助動詞は必ずしも必要ではない（ただし、現代の目から見れば、現在の助動詞とは活用語尾のことである）。ここから、時制の意味は助動詞が担っているという認識までの逕庭は僅かである。

○過去ノ動詞ハ、必助動詞ヲ仮ルニ非ザレバ之ヲ言ヒ出ス事能ハズ、即飽キケリ・飽ケリ・約セリ・射ケル・着シ・等ノ如シ、

○現在ノ動詞ハ、助動詞ヲ仮ラザル者ト、助動詞ヲ仮ル者トノ二アリ、助動詞ヲ仮ラザル者トハ、総ベテ・飽キ・飽ク・飽ケ・約シ・約ス・約セ・ノ如ク、語末ヲ種々ニ変化シテモ、唯其ノ語ノミニテ、意味ノ足ル者ヲ云フ、单声ノ・附・隨ノ如キ語モ、意味足ルトキハ、別ニ助動詞ヲ用ヒザルナリ、助動詞ヲ仮ル者トハ・落ツル・試ムル・約スル・射レ・着ル・ノ如キ類ヲ云フナリ、

○未来ノ語モ、過去ト同ク、必助動詞ヲ仮ルニ非ザレバ、之ヲ言ヒ出スコト能ハズ、即・飽カシ・飽キヌベシ・約セン・射ラン・着シ・ノ類ナリ、

下11ウ・12ウ

このように、『日本文典』では、時制の意味は助動詞が担

つているといふ考え方に傾いてきているのであるが、いわゆる推量助動詞も時制の意味ごとに分けられており、下10ウ・11オの表によると、ム・マシ・メリ・ラム・ラシが充分未来に、ケムが不充分未来に挙げられている。また不成助動詞（打消助動詞）も時制によつて分けられており、ジ・マジを未来としている。さらに、ベシは分類は明示されていないが、「動詞ノ体ヲ具ヘタル助動詞アリ、之ヲ半助動詞ト云フ、即・可シ【可シニ三種アリ、一ハ命令ニ用フル者、即・取ルベシ・ノ如シ、又一ハ預許ス意ヲ形ス者、即・為シ得ベシ・ノ如シ、又一ハラシノ意ニ用フル者、即・氷モ解ケヌベシ・ノ如シ、】（以下略）」とあるところからすると、その用法の一つは充分未来であるということになる。さうか。要するに、いわゆる推量助動詞はすべて時制、それも未来に分類されている。ただ、ここで注意しておきたいことは、前節でも見たように、まだ助動詞のカテゴリー化は行われておらず、充分未来の助動詞あるいは不充分未来の助動詞というカテゴリーがあるのではなく、個々の助動詞が時制の種類によつて分けられているにすぎない。

渡部栄八『詞のたつき』（明治八年（一八七五）四月）は、品詞を体言・用言・てにをはと分ける国学系の文典であるが、子供にわかりやすいようにと断つた上で、五十音図のアイウエオそれぞれの行について、「此五十音の右側にしるせる如く「ア」の横行は未来の詞「イ」の横行は過去の詞

「ウ」の横行は現在の詞「エ」の横行は下知の詞「オ」の横行は俗語なり」と述べ、未来について「さかん」といへば花さかんとおしはかりたる詞にて、即ち未来なり」と、未然形承接（ア行）のムについてのみ、未来であると指摘する。

安田敬齋『日本小学文典』（明治十年（一八七七）一月）は、洋文典の枠組を忠実に守り、「○助動詞トハ、動詞ノ、一種ニシテ、多ク動詞ノ、足ラザル所ヲ補ヒ、助ケ、文意ヲ、全タウ、セシムル、詞ナリ、」とするが、ここでいう助動詞は時制を担うものだけであり、表中に、ン・ナン・ラシが充分未来、アラン・ナラン・タラン・ツランが不充分未来として挙げられている（ただ、法を議論する中では第一未来、第二未来と呼ばれている）。春山弟彦『小学科用日本文典』（明治十年（一八七七）二月）では、助動詞が使役・受身の助動詞と、時制の助動詞とに分けられており、未来助動詞にム・ラムが挙げられている。さらに、「問 第一未来とは 答 動詞にムと転用する助動詞を加へて今より後に為さんとする動作をあらかじめいひあらはす者なり

学校にゆかば 算術をまなばん 等のことし」「問 第二未来は 答 これは未来のいきはへだりて其作動の景況を確定しがたくころもとなき時にいさゝか疑ひを含みていひ出づる時に用る者にして動詞の第一転にラムランラメと転用たる助動詞を加ふる者なりすなはち 吾はいづ故

郷へ帰らるらん 彼人はいま東京に至るらん 等の如し

と、ムを第一未来、ラムを第二未来と呼んでいる。さらに、

藤田維正・高橋富兄『日本文典問答』(明治十年(一八七七)

三月)でも、「問 動詞ノ時ハイカナルモノナリヤ 答 作

動ノ時ヲ言ヒ分クルモノニテ過去、半過去、現在、第一未

来、第二未来ノ五ツアリ」とするが、特に未来に関しては

「第一未来ハ後ニ作動セントスルヲ示スモノニテ即読マン

行カンノ類ナリ此詞ニハ第一階ニシテノ助動詞ヲ用キルナリ

第二未来ハ既ニ為シタルヲ考察シテ言フモノニテ即読ツラ

ン 読ミケンノ類ナリ」と論じる。物集高見『初学日本文典』

(明治十一年七月)にも、「活辭ノ時」という節が挙がって

おり、「時ハ説話ニ罹ル事ノ説話ヲ為ス時間ノ前後或ハ同時

ニ在ル者ヲ云フ而シテ其時ヲ分テ現在。過去。大過去。未

来。想像過去・ノ五時トス」とされている。ちなみに、未

来時はム、想像未来時はツラムの例が挙がっているが、後

者について「説話ニ罹ル事ノ説話ヲ為ス時ニハ已ニ過去ニ

属シタル可キヲ想像スルヲ示ス者トス」と説明されている。

ここで、里見義『雅俗文法便覧』(明治十年(一八七七)

八月)『雅俗文法』(明治十年(一八七七)十月)、谷千生『言

語構造式』(明治十七年(一八八四)一二月)、弘鴻『詞の

橋立』(明治十九年(一八八六)三月)などはいずれも国学

系の文典であり、表中に「将言」「将為」「将有」などの注

記があるので説明はない。これらは、洋文典の影響で「将

(未来)」という表現が用いられているわけではなからう。

明治二十年代になると、助動詞のカテゴリ化が一般化

するが、その後も稀にいわゆる推量助動詞すべてを時間的

に定義しようとする文典もなくなはない。高津敏三郎『日

中文典』(明治二十四年(一八九一)六月)では、助動詞を

「補助詞」と呼ぶが、未来をあらはす補助詞にム・ラム・

メリ・ラシ、願望をあらはす補助詞にマシ、過去の動作を

想像するに用ふる補助詞にケムというように、基本的に時

間による規定となっている。その後も、林甕臣『日本文典』

(明治二十七年(一八九四)三月)、中島幹事『中学普通文

典』(明治三十一年(一八九八)三月)、四宮憲章『新解日

本文法』(明治三十二年(一八九九)六月)、新楽金橘『中

等教育実用日本文典』(明治三十五年(一九〇二)四月)な

ど、いわゆる推量助動詞を未来の助動詞として一括しよう

とする文典が見られるが、これらは過去・完了助動詞も含

めて、時間という単一の基準によつて強引に律しようとい

う、強い統括意識が感じられる。しかしそのような演繹的

な理論構成のために、それぞれの助動詞の個性が見えにく

くなっているように見受けられる。

以上見てきたように、洋文典の枠組を踏襲して、いわゆる

推量助動詞を助動詞の変化語尾ないし接尾語と見て、あら

ゆる動詞の変化形は現在・過去・未来のいずれかの時制を

取らざるを得ない、という制約の中で理論を組み立てよう

とするのであれば、いわゆる推量助動詞は未来という時制の中に収めざるをえないのかもしれない(この時期には法の中に推量という分野は認められていなかった)。しかし、動詞とは独立した品詞として助動詞を立てるようになれば(むしろ近世はそのような考え方に近かったわけだが)、いわゆる推量助動詞は未来時制以外にさまざまな意味を担っても構わない、というように見方が変わってくる。その後も、林甕臣『日本文典』を典型として、時制を中心に助動詞が編成される文典も見受けられるが、それは助動詞の体系化を図るために、あえて時制に制約を求めたのであって、押し付けられた枠組であつたわけではなからう。

およそ明治十年頃を境にそのような認識の転換が起こつたようであり、「推量」ないし「想像」というような助動詞のカテゴリを設けるものが多くなる。しかしそれでも、「未来」というカテゴリがすぐに駆逐されたわけではない。特にム・マシに関しては昭和十年代まで未来の助動詞という呼び方が残っている。確かに、ム・マシが承接する内容は未来の出来事であると言っても間違ひではない。その点も含めて、次節で見ていきたい。

3 推量

現代語文法であれば、推量はムード、モダリティを論じる場合に、最も中心的なテーマとなるが、幕末・明治初期の蘭文典、英文典には、法(mood)という文法分野は存在するものの、ここに「推量」というカテゴリが設けられることはなかった。

大庭雪斎『訳和蘭文語』(安政二年(一八五六))には、不定法、顕示(≡直説法)、命令法、疑示方(≡疑問法)の四つの法が挙げられている。

不定法【オンベパールデウエイセ】ナル者ハ、活辞ノ作用ヲ普通ナル義ニ観ル者ニシテ、而シテ人ト数トヲ定メス、独リ時刻ヲ示ス者是ナリ。(後略)

顕示法【アーントーネンデウエイセ】ナル者ハ、活辞ヲ以テシタル動作状態等ヲ、時刻ノ異ニ從テ直率ニ顕示スル者是ナリ。(後略)

命令法【ゲビートンデウエイセ】ナル者ハ命令ヲ使ムルニ用ヒ、或ハ亦タ願望勸厲諫争等ヲ示スニ用ユ。(後略)

疑示法【アーンフーゲンデウエイセ】ナル者ハ、疑或シテ言ヲ為シ、或ハ言ヲ為ス切実ナラサル者是ナリ。因テ亦タ好欲約束許可奨誘等ヲ示スナリ。(後略)

しかるに、法の一節の後に、割注で「喩ハ西行ガ」コ
ロナキミニモアハレハシラレケリシギタツサワノアキノユ
フダレ」ノ「ケリ」ハ、「アハレガシラレルワイ、ト決定シ
タル「ケリ」ニシテ、也ニ当リ、「フリツミシタカネノミニ
キトケニケリキヨタキガワノミツノシラナシ」ノ「ケリ」
ハ「トケタデアラウ」「トケタソウナ」ト推量スル「ケリ」
ニシテ、矣ニ当リ「シユルレン」ニ当ル。故ニ「シユルレ
ン」「ソウデ」ト矣トハ、本法俗言ノ「デアラウ」デモアラ
ウ」ト云ニ当リ、推量シテ決スル辞ニテ、時刻ハ乃チ将来
ナリ。」(前編・中35オ・ウ)と説明されており、ケリの解釈
に關してではあるが、「推量」という術語が用いられている。
これはどこに起因するのだろうか。

『英吉利文典』(The Elementary Catechisms, English
Grammar 第五版 慶応二年(一八六六))では、いくつの
法があるかは必ずしも明らかにされていないが、少なくとも
も *indicative*, *potential*, *subjunctive* の三つの法に關しては触
れられている。

G.P. Quackenbos "First book in English Grammar" 1882 年
は、法について以下のように説明し、五つの法を設けてい
る。

Mood is that property of the verb which distinguishes the
manner in which it affirms.

There are five moods; the Indicative, the Potential, the

Subjunctive, the *Imperative*, and the *Infinitive*

54

格賢勃斯『英文典直訳』(明治三年(一八七〇))による
と、*indicative* には「直説法」、*potential* には「許可法」、
subjunctive には「附屬法」、*imperative* には「使令法」(それ
以後の『英文典直訳』では「命令法」)、*infinitive* には「不
定法」という訳語が充てられている。

法ハ働詞ノ此性質其ハ仕方其ニ於テ其ガ極メル所ノ
《仕方》ヲ差別スル所ノ《働詞ノ此性質》デアル

其処ニ五ノ法ガアル直説法、許可法、附屬法、使令法
及ビ不定法ナリ 卷上 56ウ

『ピネヲ氏原板英文典』(明治三年(一八七〇)九月)で
は、以下の六つの法が挙げられている。

Verbs have six modes: *indicative*, *subjunctive*, *imperative*,
infinitive, and *participial*.

時代は若干下るが、栗野忠雄『英文典直訳』(明治二十年
(一八八七)八月)の訳を見ると以下のようになっている。

働詞ハ六ツノ法ヲ持ツ、直説法、可能法、附屬法、命
令法、不定法、及ビ分詞法ナリ 171

ところで、近世以来の国学において、カテゴリーの名称
としての「推量」ではないが、意味の記述のために、「推量」
「推し量る」といった概念はすでに用いられている。

富士谷成章『あゆひ抄』(安永七年(一七七八))のム

説明に、「未だ然あらぬ事をはかりあらまして言ふ言葉なり。みづから思ひ立ちて「いま行かむ」「いざ帰らむ」など言ふは裏なり。思ひやりて「とあらむ」「かからむ」など言ふは表なり。みな今より後をはかり、こゝよりかしこをはかれる心なり。」

メリの説明に、「大かた「なり」とよむに似ていささかたがふべし。「なり」は近く見聞く事を定かに詠む言葉なり。「めり」はそのおほむねをおしはかりてつかね言ふ心あり。里に「オモムキヂヤ」「様子ヂヤ」など言ふに似たり。心得やすからぬ言葉なり。」とあり、鈴木重胤『詞捷徑』（弘化二年（一八四五））も同じ箇所を引用する。

また、鈴木胤『言語四種論』（文政七年（一八二四））では、ベシについて、「次ニベシハ、コレモ同ジ格ニテ、事ノ状ヲ推ハカリ定ムル詞ナリ。」と述べており、幻裡庵『詞玉緒延約』のラシの説明に、「△ラムはラミにてラと疑ヒミと推量たる語なるを音便にてラムといへるなり」「ラシはラと疑ヒシと思ひ定むる語なり。俗にいはばラムはデアラフ○ラシはキツトサヤウナラムとなり。」という一節がある。さらに、橋守部『助辞本義一覽』（天保六年（一八三五））のラムについて、「殆字の意に似て、其事に近づき、辺りづける形貌を見て、後々はしかじか成行らんと、推し量り、疑ふ詞ともなれる也。かくて彼めり、べらと、此らんとの差をいはば、彼めり、べらは、只近づき、辺りづける様子を、お

し量るのみにて行末を疑ふまでの定はなし。」説明されており、黒沢翁曆『言霊のしるべ』（安政三年（一八五六））には、ラムについて、「らんは推量る心の辞なり」という指摘がある。

以上見てきたように、「推量」あるいは「推し量る」という術語ないし概念は、近世の国学において推量助動詞の意味を説明するために常套的に用いられていたことを確認できたと思われる。それが蘭文典、英文典における時制という窮屈な枠組で、日本語のいわゆる推量助動詞を記述しようとした場合、日本語の実情にあつた説明をあてようとして、蘭文典、英文典の枠組をはみ出して、自然に用いられることになつたのではないだろうか。

さて、近代初期の日本語式文典においても、法に関しては、直説法・不定法・命令法・疑問法・接続法などを踏襲している。

古川正雄『絵入智慧の環』（明治五年（一八七二）五月）でも、法を「はたらきことばのいひかたのこと」として、五つを挙げている。「はたらきことばのいひかたとはそのもちひかたのことなり。このひかたいろくあれどもこれをつづめてつねのいひかた、つなぐいひかた、いひつけのいひかた、つきぬいひかた、うちけすいひかたのいつにさだむ」とあるが、その後それぞれ説明があるが、それぞれ「つねのいひかた（直説法ともいふ）」「つつなぐいひかた

(疑問法ともいふ)、「いひつけのいひかた(命令法ともいふ)」「つきぬいひかた(不定法ともいふ)」「うちけすいひかた」(言い換えなし、英文典では否定は法には含まれていないことよると思われる)という題名がついている。ただ、前節で未来時制について抜き出したところで、「いまよりのちのことをおしはかりてなにくするであらうとやうにいふを、第一の未来のはたらきことばとなづけ、いまよりまへのことをおしはかりてなにくしたであらうとやうにいふを第二の未来のはたらきことばとなづけて、こゝにこれをわかちしるすべし」と、「おしはかる」といふ言い回しが用いられていた。

黒川真頼『皇国文典初学』(明治六年(一八七三)一〇月)『日本文章法初歩』(明治六年(一八七三)五月)では、「文法は、十法あり、されど、旨とする法は、四法にして、その余の六法は、四法に附属せる法なり」として、まず四法、直説法たゞにとく・命令法おほする・疑問法うかがふ・禁制法いましむるを挙げ、続けて六法、附説法つけてとく・連続法つゞくる・標準法めあて・量限法はかる・含蓄法ふくむる・成就法なるを挙げる。

田中義廉『小学日本文典』(明治八年(一八七五)一月)でも、「第二十八章 動詞の法」において、以下のように論じる。

大凡文を綴り、或は説話をなすに方りて、作動の次第

を定め、自他の区別を現すに定則あり、これを動詞の法といふ。法に五個あり、即不定法、直説法、命令法、接続法、疑問法なり。

卷三・13ウ、14オ
中根淑『日本文典』(明治九年(一八七六)三月)でも同様である。

○動詞ハ、文章ノ中ニ於キテ、百般ノ働キヲ為ス者ナレ共、自法アリテ、其ノ中ニ統括セルコトナリ、抑法ト云フハ、過去・現在・未来・ノ三時ニ拘ラズ、其ノ語ノ属スベキ、定規アルヲ云フナリ、例ヘテ云ハバ、余行ク・ト云ヘバ、直チニ己ノ行クコトヲ顯スナリ、君行ケ・ト云ヘバ、人ヲ勸メテ、行カシムルコトヲ顯スナリ、今此ノ類ノ法ヲ分チテ、四箇トス、曰ハク直説法、曰ハク不成法、曰ハク疑問法、曰ハク命令法、
下・16オ・ウ

安田敬齋『日本小学文典』(明治十年(一八七七)一月)では、動詞の法という章があり、「凡ソ作文、説話ヲ、ナスニ、作動ノ次第ヲ定メ、自他ノ区別ヲ徴ハスニ、規則アリ、是ヲ動詞ノ法ト云即、不定、直説、命令、接続、疑問、等ナリ」と論じ、春山弟彦『小学科用日本文典』(明治十年(一八七七)二月)でも、顯示法・疑示法・命令法の三つが挙げられている。藤田維正・高橋富兄『日本文法問答』(明治十年(一八七七)三月)にも、直説法・命令法・疑問法・接続法と四つの法が挙げられている。しかしながら、洋文

典由来の法という文法領域を受け継ぐ文典はほぼ明治十年あたりを境にして見かけなくなる。

物集高見『初学日本文典』(明治十一年(一八七八)七月)は、作用言の法として、とりあえず命令法、希求法、疑問法、さらに崇敬法(希求法、中でも崇敬法は洋文典では挙げられない)が論じられている。しかし、いわゆる推量助動詞に関しては、接辞の中で論じられ、ム・マシを含む将来辞と、ラシ・ラム・メリ・マジを含む想像辞との他、ベシを含む決定辞、ナリを含む現在時、ケムを含む過去時、ベシを含む決定辞、ジを含む否不辭などのカテゴリーに分けられていた。そのうち、将来辞と想像辞に関しては、「将来辞は「教しえむ」「習はまし」ノ如ク作用ノ活辞ニ附テ其業作ニ未来ノ時ヲ見スニ用フル者トス」、「想像辞ハ「彼は書を誦むらし」「彼は字を習ふらむ」「雨零らば来まじ」「月出では去ぬまじ」ノらしらむまじノ如ク作用ノ活辞ニ附テ他ノ作業ヲ想像シ或ハ想像スル所ノ事物ノ形状ニ因テ不切実ナル作業ヲ見スニ用フル辞トス」というように定義している。このように、ム・マシについては未来という時制という枠組で説明し、ラシ・ラム・メリ・マジについては想像という「モダリティ」の枠組で説明しようとしている。

すなわち、いわゆる推量助動詞をカテゴリー化するため、時制としての「未来」と、モダリティとしての「推量」

との、主として二つの方向のせめぎ合いの上にカテゴリー化が行われている。前者、すなわちいわゆる推量助動詞をすべて未来と割り切ろうとする文典については前節で概観したが、やはりいわゆる推量助動詞の意味機能のすべてを時制であると割り切るには無理があるだろう。たとえば、時制という枠組みを採って誠実に議論しようとするれば、ケムを「過去未来」(高津敏三郎『日本文典』)などと明らかに矛盾した言い方をしなければならなくなる。

他方、推量助動詞全体を推量とするものは、大和田建樹『和文典』(明治二十四年(一八九一)四月)の「推量」、大宮宗司・星野三郎『日本小文典』(明治二十五年(一八九二)一月)の「想像辞」、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』(明治二十五年(一八九二)三月)の「想像辞」、大宮宗司『初等教育日本文典』(明治二十七年(一八九四)二月)の「想像辞」、渋谷愛太郎『てにをは入門』(明治二十九年(一八九六)四月)の「推し量る」、鳥山謙『国文の栞』(明治三十年(一八九七)七月)「想像」、味岡正義・大田寛『中等教育皇国文典』(明治三十一年(一八九八)七月)の「想像辞」、鈴木忠孝『新撰日本文典』(明治三十二年(一九九九)十二月)の「推辞」など、少なからざる文典がこの立場を採る。

しかしながら、圧倒的多数のものは、ム・マシを「未来」と時制扱いし、それ以外のものを「推量」(または「想像」

など)とモダリティ扱いをするというように(ただしジ・マジは多くのものが「打消」とする)折衷的なカテゴリーを採用している。「推量」と呼ぶほうが直観的にもしっくりくるところがある一方で、英文典から受け入れられた、過去・現在・未来という時制の体系の中の未来を担うものとして、ム・マシを当てはめることも捨てがたい、というような判断が背後にあったのではないだろうか。

そのような中にも、各助動詞には、時制的な側面とモダリティ的な側面とがあると考え、(一部のものであっても)その両者を併記することによって、時制とモダリティとのどちらかに位置付けなければならないという困難を回避したと思われるものもある。高橋清太郎『日本文法伝精神』(明治二十四年(一八九一)四月)、落合直文・小中村義象『中等教育日本文典』(明治二十五年三月)、西田敬止『応用日本文典』(明治二十七年(一八九四)一月)、岡崎遠光『日本小文典』(明治二十八年(一八九五)一月)、関根正直『普通国語学』(明治二十八年(一八九八)三月)、大平信直『中等教育国文典』(明治三十二年(一八九九)七月)、和田萬吉『日本文典講義』(明治三十八年(一九〇五)十二月)などにそのような処理が見出される。

このように、時制としての「未来」と、モダリティとしての「推量」とが併存する状況は、昭和十年代まで残り、昭和二十年代以降、やっと現在と同じく、すべてを「推量」

助動詞と呼ぶ体系に落ち着く。その間、五十年以上もの間、いわゆる推量助動詞は、およそ未来と推量との拮抗関係にあった、もっと具体的にはム・マシが未来、それ以外が推量と分属される不安定な状態にあった(ム・マシとベシ・ラム・ケム・マシ・ラシとはそれほど決定的に意味が異なるであろうか)。しかし、そのような不安定な状態は、研究者をいわゆる推量助動詞の本質について深く考えるよい機会ともなつたように思われる。

実は、山田孝雄『日本文法論』(明治四十一年(一九〇八)九月)において、「推量をあらはす複語尾」にメリ・ベシ・マジ・ラム・ラシが、「非現実性の思想をあらはす複語尾」にム・マシ・ジ(およびズ)が振り分けられ、形態的には、前者は終止形接続であり、後者は未然形接続であるという違いがあるのであるが、意味・機能的には、それらはそれぞれ、前者は「推量とは現実にしかあるべしと推測せるをいふ」、後者は「この複語尾は否説予想等すべて一回も経験に上らぬ事につきて陳述をなすに用いゝるなり」というように、現実／非現実(一回も経験に上らぬ)という明確な対立として、意味的・理論的に深められているが、それはム・マシが未来を表わし、メリ・ベシ・マジ・ラム・ラシが推量を表わす、というこの時代の助動詞分類のしかたと思いの外一致していることが了解される。

そのような観点でその後の展開を辿ってみると、松下大

三郎『標準日本文法』(大正十三年(一九二四)一月)、さらにその改訂版である『改撰標準日本文法』(昭和三年(一九二八)四月)において、「未然態」にム・マシ・ジが属し、「推想態」にケム・ラム・ラシ・メリ・ナリが属すというのも、その延長上であることがわかる。ただ、「未然態」は時相の一態であつて、既往、現在、未来に拘らず事件を未然の事件として取扱ふものである。「推想態」は動作動詞の一態であつて判定性の不明確であることを表すものである。「というように概念規定されると、山田孝雄によつて明確に現実／非現実という違いとして示された対立が、かえつて従来通り、未然態は時制上の未来として位置付けられることになり、また推想態は「判定性が不明確」、すなわちはっきり断定できない場合に用いられると、むしろ断定と対立するように論じられ、未然態(↑↓)と推想態(↑↓)と区別とはまったく異なつた働きをしているような印象を与えるようになる。

松尾捨治郎『国語法論攷』(昭和十一年(一九三六)九月)においても、ム・ベシが「時の助動詞」のうちでも「未来の助動詞」、またラム・メリ・ベシ・ラシ・マシ・ケムが「想像の助動詞」(そして、ジ・マジは「打消の助動詞」)に分けられているが、現代の目から見ると奇異な感じを覚えるものの、文法研究の歴史的な展開の上に位置付けてみれば、かえつて明治二十、三十年代の研究に近い理論的枠組に先

祖張りしているものであることがわかる。ただし、もうこの時点では、「未来の助動詞ないし想像(ないし推量)の助動詞」とはどのようなものであるか、というような言及は、恐らく自明のものと思われるようになったためか、なされなくなる。

しかし、そのような未来・推量の併存状態は昭和十年代までで、それ以降は現在と同じく、すべてをまとめて推量助動詞と呼ぶようになる。たとえば、時枝誠記『日本文法文語篇—上代・中古—』(昭和二十九年(一九五四)四月)では、ム・マシ・ラム・ケム・ベシ・メリ・ラシ・ナリ(推定・伝聞)を「推量の助動詞」と呼ぶが、推量の助動詞に関する説明は一切なく、いきなりムの説明が始まるし、山崎良幸『日本語の文法機能に関する体系的研究』(昭和四十年(一九六五)十二月)では、ム・ムズ・ラム・ムム・マシ・ラシ・ケラシ・ベシ・ベラナリ・ジ・マジ・メリ・ナリを一括して、「推量の助動詞」と呼んでおり、その説明も、かろうじて「これらの助動詞はいずれも言語主体の推量判断を表現するのに用いられる。」といった程度に留まる。

4 指定

さて、前節でいわれる推量助動詞は、長い間未来と推量との拮抗関係にあった、と論じた。しかし、正確には若干修正が必要である。一つは、ジ・マジを打消助動詞に入れて

る文典も少なくなかったということであるが、これは現代でも打消推量と呼ばれるように、打消も推量もどちらの側面も持っていることは自明のことであり、カテゴリーとしてはどちらかに入れなければならないが、どちらに入る可能性もある。もう一つは、ベシを指定助動詞に入れるものが散見されることである。高橋清太郎『日本文法伝精神』(明治二十四年(一八九二)四月)では「決定」、村山自彊『国

語学文典』(明治二十四年(一八九二)十二月)では「判決辞」、大久保初雄『普通教育国語文典』(明治二十五年(一八九二)二月)同『普通日本文典』(明治二十五年(一八九二)十一月)では「指定」、木村春太郎『日本文典』(明治二十五年(一八九二)十一月)では「指定辞」、大川真澄『普通教育日本文典』(明治二十六年(一八九三)四月)では「決定」、遠藤国次郎『実用文典』(明治二十八年(一八九五)七月)では「決定辞」、渡辺弘人『新撰国文典』(明治三十年(一九〇七)三月)では「決定辞」、岡直廬『中等教育国

文典』(明治三十年(一九〇七)三月)では「指定辞」、大久保初雄『日本中文典』(明治三十年(一九〇七)九月)で

は「指定」、和田萬吉『新撰国文典』(明治三十年(一九〇七)十一月)では「指定」、中島幹事『中学普通文典』(明治三十一年(一九〇八)三月)では「決定」などと、それ以降も多く見受けられる。

これは直接には大槻文彦『語法指南』(明治二十三年(一八九〇)十一月)の影響であると考えられる。大槻はその後も『広日本文典』(明治三十年(一八九七)一月)、『中等教育日本文典』(明治三十年(一八九七)一月)、『日本文典初歩』(明治三十年(一八九七)十一月)、『日本文法教科書』(明治三十三年(一九〇〇)十一月)、『日本文法中教科書』(明治三十五年(一九〇二)五月)と繰り返しベシを「指定の助動詞」とであると論じている。

ここで単に、ベシだけが指定助動詞とされるのであれば、それほど問題とはならないだろうが、いわゆる断定助動詞ナリ・タリと合わせて指定助動詞というカテゴリーを立てているところが注目される。

○指定ノ助動詞 次ニ挙グルなり、たり、べし、等ハ、事物ヲ指シ定ムル意アレバ、コレヲ指定ノ助動詞トス。

大槻文彦『語法指南』55

(24) べし 心ニ推シ量リテ定ムル意ノ語ナリ、「斯クアルべし」、「我レ行クべし」、「ノ如シ」。又、強ク指定シテ、命令スル意ヲモナス、「疾ク行クべし」、「速ニ来べし」、「ノ如シ」。

同 57

これは、ナリ・タリが名詞に承接して「こうこうである」と断定を下しているようなニュアンスがあるのに対して、ベシが動詞に承接して同様の働きをしているように思われる、ということなのだろうが、それ以外にも、ベシは、他の推量助動詞がおよそ終止・連体・已然の三つの活用形しか持たないのに対して、およそすべての活用形を持っているという点など、特殊であることからそのような処理がなされたのであろう。

確かに、ナリ・タリとひとまとめにしてカテゴリー化することは、恐らく大槻文彦の独自の考えであるようだが、ベシの特殊性ないし断定に近いという特徴はそれ以前にも少なからず指摘されていた。

富士谷成章の『あゆひ抄』の「べし」の条に、「その勢を知るに、かくありてよき程なりと測り定めて言ふ言葉なり。里に「コロアヒ」など言ふ程の心なり。まさしく当てるには、心得て「ネバナラヌ」と言ひ「ハズ」と言ひ「ソナ」と言ふ、また、「コトガナル」などの里言、互に得たる所あり。」

中根淑『日本文典』（明治九年（一八七六）三月）でも、「動詞ノ体ヲ具ヘタル助動詞アリ、之ヲ半助動詞ト云フ、」として、半助動詞にベシ・得・能フ・度クが挙げられている。

物集高見『初学日本文典』（明治十一年（一八七八）七月）

では、ベシを決定辞に所属させ、「決定辞ハ「褒むべき事ぞ」「感ずべき志なり」ノ如ク活辞ニ見ル、時ハ未来ニナリ或ハ想像ヲ呼ブニ似テ決定ノ義ニ乏シト雖モ然レドモ其未来ニナリ想像ニ似ル所ノ動作モ遂ニ然ラザルコト能ハザル事理ナルハ作業ニ先テ已ニ疾ク決定セルヲ以テ亦「往くべし」「聴くべし」ノ如ク命令ヲモ示シ得ル者ナリ故ニ辞義ヲ説キ来レバ将来辞ニモ収ム可ラズ想像辞ニモ入ル可ラザルヲ以テ姑ク此名ヲ命ジテ「辞ニ置ク」と論じている。

このように、ベシをナリ・タリとともに指定助動詞とするかどうかはさておいて、ベシは他の推量助動詞とは異質であるという認識は広く持たれていたようである。

おわりに

本稿では、現代の目から見て研究水準が低かったとして、あまり顧みられることのなかった近代文典も、文法的な認識史という観点から見直してみれば、現代の文法認識とは異質な文法観が見えてくるのではないか、という問題関心のもと、いわゆる推量助動詞に焦点を当ててみた。主語あるいは名詞、過去・完了助動詞についてはすでに問題関心の近い研究が見られる。現代語文法がある意味で逼塞しつつある現在、このように現代語文法の理論的基盤を相対化してみることは、今後の研究の進展にも有益なことなので

はなかるうか。

資料（近代の文典資料そのものの出典は、今回は紙数の都合でリストアップしない。ただ、多くのものは、国会図書館蔵本である。したがって、以下に示す資料はおよそ近世のものである。）

荻生徂徠 訳文箋蹄・訓訳示蒙、伊藤東涯 操楓字訣・助字考・用字格、皆川淇園 夷字解・助字詳解・虚字詳解（以上、『漢語文典叢書』汲古書院）、箕作阮甫 和蘭文典 前後編 大庭雪齋 訳和蘭文語（以上、『近世蘭語学資料 和蘭文法書集成』ゆまに書房）、英吉利文典 杉本つとむ編『日本英語文化史資料』八坂書房、富士谷成章『あゆひ抄』あゆひ抄新注』桜楓社、一步・鈴木胤 言語四種論『勉誠社文庫』勉誠社、鈴木重胤 詞捷徑・鶴峯戊申 語学新書・橘守部 助辞本義一覽（東京大学総合図書館蔵本）

参考文献

福井 久蔵（一九〇七・一〇）『教育並に學術上より見たる日本語文法史』大日本図書
福井 久蔵（一九三四・三）『増訂日本文法史』成美堂
時枝 誠記（一九四〇・一一）『国語学史』岩波書店
福井 久蔵（一九四二・二）『国語学史』
山田 孝雄（一九四三・七）『国語学史』宝文館
古田 東朔（一九五七・一一）『洋文典における品詞訳語の変遷と固

定』『香椎瀉』第三号（福岡女子大学）

古田 東朔（一九五八・七）『明治以後最初に刊行された洋風日本文典—古川正雄著『絵入智慧の環』について—』『香椎瀉』

第四号（福岡女子大学）

古田 東朔（一九五八・一〇）『日本文典に及ぼした洋文典の影響—特に明治前期における—』『文芸と思想』第十六号（福岡

女子大学）

古田 東朔（一九五九・一）『中根淑『日本文典』の拠つたもの—明

治初期洋風文典原点考2—』『解釈』第五卷第一号

古田 東朔（一九五九・三）『田中義廉『小学日本文典』の拠つたもの—明治初期洋風文典原点考3—』『解釈』第五卷第三号

古田 東朔（一九六〇・一）『物集高見博士『日本文語』の拠つたもの—明治初期洋風文典原点考4—』『解釈』第六卷第一号

築島 裕・古田 東朔（一九七二・一一）『国語学史』東大出版会

古田 東朔（二〇〇二・八）『明治前期の洋風日本文典』『国語と国

文学』第七十九卷第八号

山東 功（二〇〇三・一）『明治前期日本文典の研究』和泉書院

仁田 義雄（二〇〇五・三）『ある近代日本文法史』和泉書院

（い）じま まさひろ 大学院人文社会系研究科 准教授

*近代文典におけるいわゆる推量助動詞の分類対照表

・各助動詞の枠内は、意味の記述(の一部)を抜き出したものと、助動詞の種類(カテゴリー)とを区別していない。
 ・ナリに括弧のあるものは断定助動詞のナリと伝聞推定のナリとを区別していないと思われるものである。
 ・斜線が引かれているものはそもそも助動詞が挙げられていないもの、「説明なし」とあるものは助動詞は挙げているが説明のないものである。

| | | | | | | | | | |
|----------------------|------|------|------|-------|------|-------|------|-------|------|
| 文部省編輯寮「語彙別記」明4・11 | ム | マシ | マジ | ベシ | ラム | ケム | ラシ | メリ | ナリ |
| 古川正雄「絵入知慧の環」明5・5 | ウ | マシヤウ | マイ | 子推しある | デアラウ | | | トニエマス | ヂヤ |
| 高田壽・西野吉海「皇国文法階梯」明6・8 | 将ウ | ウ | | ゆくべき | アラウ | タナラウ | サウナ | オモヘル | (チャ) |
| 渡部栄八「詞のたつき」明8・4 | 未来 | | | | | | | | |
| 田中義廉「小学日本文典」明8・11 | 未来 | | | | | | | | |
| 中根淑「日本文典」明9・3 | 充分未来 | 未来 | 打消 | 充分未来 | 充分未来 | 不充分未来 | 充分未来 | | |
| 藤田正・高橋寛「日本文法問答」明10・1 | 第一未来 | | | 第一未来 | 第一未来 | 第二未来 | | | |
| 安田敬齋「日本小学文典」明10・1 | 未来 | | | 未来 | 未来 | | | | (現在) |
| 春山弟彦「小学科用日本文典」明10・2 | 未来 | | | 未来 | 未来 | | | | |
| 里見義「雅俗文法便覧」明10・8 | 将 | | | 不為 | 将有 | 将来 | | | 也 |
| 里見義「雅俗文法」明10・10 | 将 | 将為 | | 不為 | 将有 | 将来 | | 辺有 | 也 |
| 物集高見「初学日本文典」明11・7 | 将来辞 | 否不辞 | 想像辞 | 決定辞 | 想像辞 | 過去辞 | 想像辞 | | 現在辞 |
| 中島操「小学文法書」明12・1 | 未来 | | | | | | | | |
| 溝淵幸雄「言葉の橋立」明12・10 | 未来 | 不の意 | 想像禁止 | 命令 | 想像 | 過去 | 想像 | | |
| 五十嵐政雄「言霊真澄鏡」明13・3 | 未来 | | | | 自疑 | 去言の疑 | 他疑 | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|---------|-----------------|--------------|----|---|----------|---------|-----------------|----|---|------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 大槻修二「小学日本文典」明14・5 | 未来を押し量る | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 浅井薫「作文用字詳説」明17・7 | 将 将為 | (説明な) らんかの約り | 不ノ脛 | 不可 | 可 | 将 将既有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 石橋保義「語格合勢鏡」明17・11 | 将言 | 将為 | 不言 | 不可 | 可 | 将 将有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 谷千生「言語構造式」明17・12 | 将 | 将為 | 不可 | 可 | 可 | 将 将有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 弘鴻「詞の橋立」明19・3 | 将 | 将為 | 不可 | 可 | 可 | 将 将有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 林壘臣「俗解てにをは初学ビ」明19・5 | 将 | 将為 | 不可 | 可 | 可 | 将 将有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 里見義「日本文典」明19・6 | 将 | 将為 | 不可 | 可 | 可 | 将 将有 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 物集高見「てにをは教科書」明19・10 | 未来 | 将来 | 未だ然ぬ うらけし | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 谷千生「詞の組立」明22・4 | 将言 | 将来 | 不言 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 那珂通世「国語学」明22・24 | 思料 | 将来 | 反説 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 大槻文彦「語法指南」明23・10 | 未来 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 落合直文・小中村義象「日本文典」 明23・12 | 想像辞 | 将来 | 不然辞 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 手島春治「日本文法教科書」明23・12 | 未来 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 大和田建樹「和文典」明24・4 | 推量 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 高橋清太郎「日本文法伝精神」明24・4 | 将有 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 高津歙三郎「日本文典」明24・6 | 未来 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 権田直助「詞の経緯の図」明24・9 | 未来 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |
| 村山自彊「国語学文典」明24・12 | 将来辞 | 将来 | 打消 | 不可 | 可 | 将来 | 過去を推し量る | (説明な) らんかの約り | 見有 | 也 | ニテアリ | | | | | | | | | |

| | | | | |
|-----------------------|---------|-------|-------|--------|
| 落合直文「日本文典」明24・25 | 想像辞 | 不自然辞 | 想像辞 | 決定辞 |
| 林甕臣「開発新式日本文典」明24・26 | 人為將然 | 將來不自然 | 將來決定 | 將來想像 |
| 大宮宗司・星野三郎「日本小文典」明25・1 | 想像辞 | 想像辞 | 想像辞 | 既往想像 |
| 大久保初雄「警警国語文典」明25・2 | 正用辞 | 否定辞 | 正用辞 | 目前推測 |
| 落合直文・小中村義象 | 未來 | 打消 | 指定 | 未來 |
| 〔中等教育日本文典〕明25・3 | 未來 | 不自然辞 | 想像辞 | 現在 |
| 大久保初雄「普通日本文典」明25・11 | 未來 | 打消 | 指定 | 未來 |
| 木村春太郎「日本文典」明25・11 | 未來 | 打消 | 指定 | 未來 |
| 小田清雄「応用日本文典」明26・3 | 未然辞・想像辞 | 否不辭 | 指定辞 | 想像辞 |
| 大川真澄「普通教育日本文典」明26・4 | 將の字の意 | マイ | コロヒの心 | 確かに見定め |
| 村田鈔三郎「国語文典」明26・5 | 想像辞 | 不自然 | 決定 | 見明こと |
| 落合直文「普通日本文典」明26・5 | 想像 | 決定 | 想像 | 感嘆辭十あり |
| 秦政治郎「皇国文典」明26・8 | 想像 | 決定 | 想像 | 斷定 |
| 逸見仲三郎「漢本國語辭書」明26・11 | 未來 | 不可 | 可 | 將 |
| 平田盛胤「国語学教授書」明26 | 未來 | 不可 | 可 | 將 |
| 西田敬止「応用日本文典」明27・1 | 未來 | 推量未來 | 推量現在 | 有 |
| 大宮宗司「初等教育日本文典」明27・2 | 想像辞 | 推量未來 | 推量現在 | 有 |
| 東宮鉄真呂「語格要覽」明27・2 | 將 | 不可 | 可 | 將 |
| 林甕臣「日本文典」明27・3 | 將 | 不可 | 可 | 將 |
| 權田直助「語学自在」明27・4 | 將 | 不可 | 可 | 將 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|-----|----|-----|----|------------------------|-------|-----|-----|-----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 加部巖夫「語学教授本」明27・8 | 治定 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 田中義之「綴稿」日本文典問答「明27・11 | 将来辞 | | | | 不自然辞 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 邊園次郎・鈴木鶴「日本文典教科書」明27・11 | 将来辞 | | | | 想像辞 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 岡崎遠光「日本小文典」明28・1 | 未来 | 推量 | | 打消 | 打消 | 想像 | 想像 | 想像辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 關根正直「普通国語学」明28・3 | 未来 | | 否定 | | 打消 | | | 想像辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | |
| 遠藤国次郎「実用文典」明28・7 | 将来辞 | | 半否定 | | 打消 | 命令 | | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 服部元彦「中等教育日本文法」明28・8 | 将来辞 | | | | 打消 <small>（省略）</small> | 半断定 | | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 峰原平一郎「普通文典」明28・8 | 未来 | | 否定 | | 打消 | 未来 | 過去 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 新保馨次「中学国文典」明29・3 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 現在の想像 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大宮兵馬「日本語法」明29・3 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 渋谷愛太郎「てには入門」明29・4 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大槻文彦「広日本文典」明30・1 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大槻文彦「中等教育日本文典」明30・1 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 中島幹事「中学日本文典」明30・2 | 時刻 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 渡辺弘人「新撰国文典」明30・3 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 中等学科教授法研究会「中学教程日本文典」明30・3 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 鳥山讓「国文の栞」明30・7 | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 未来 | | 打消 | | 打消 | 推量 | 過去辞 | 推測辞 | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | |
|--------------------------|------------------------------|-----------------------------|----------------|--------------|-------|------|
| 岡直廬「中等教育国文典」明30・7 | 未来辞 | 打消辞 | 指定辞 | 過去辞 | 指定辞 | |
| 大久保初雄「日本中文典」明30・9 | 未来 推量 | 打消 | 指定 推量 | (熟語) | 推量 | 咏嘆 |
| 岡倉由三郎「日本文典大綱」明30・11 | 思惟法 推量 | 打消 <small>否勢の想像法</small> | 想像法 推量 | 過量時想像 | 想像法 | 断定法 |
| 大槻文彦「日本文典初歩」明30・11 | 未来 推量 | 打消 | 指定 推量 | 未来 | 推量 | 指定 |
| 和田萬吉「新撰国文典」明30・11 | 未来 | 拒否 | 指定 推量 | 想像 過去 | 現在 | 指定 |
| 塩井正男「中学日本文典」明30・11 | 未来 | 否定 | 推量 | 推量 | 現在 | 詠歎 |
| 中島幹事「中学普通文典」明31・3 | 時刻 | 決定 | 推量 | 時刻 | | 決定 |
| 三土忠造「中等国文典」明31・4 | 時 <small>(采葉)</small> 推量 | 打消 | 推量 | 想像 | 推量 | 指定 |
| 白鳥菊治「中等新撰日本文典」明31・4 | 未来 推量 | 打消 | 命令 推量 | 想像 | 推量 | (指定) |
| 椋下三郎・富永静「中等新撰日本文典」明31・4 | 時 <small>(未來)</small> 想像辞 | 否定 形状詞を造る | 想像 想像 | 想像 形状詞を造る | 想像 | 音調 |
| 柴田正蔵「中等教育皇国文典」明31・7 | 未来 | 否定 | 推量 | 想像辞 | | 決定辞 |
| 上谷宏「中等新撰日本文典」明31・8 | 未来 | 否定 | 命令 推量 | 推量 | | 感歎 |
| 大林徳太郎「中学日本文典」明31・12 | 未来 | 否定 | 推量 | 推量 | | (断定) |
| 関根正直「国文学」明31、32 | 現在 | 半拒否 | 命令 推量 | 推量 | | (決定) |
| 高田宇太郎「中等国文典」明32・3 | 未来辞 | 拒否辞 | 半決定 現在推量 | 想像辞 | 現在推量 | (決定) |
| 佐野敏子・後岡野野「女子教科普通文典」明32・4 | 未来 | 否定 | 決定辞 | 想像辞 | | (決定) |
| 四宮憲章「新解日本文法」明32・6 | 未来 | 否定 | 決定 | 推定 | | (現在) |
| 瓜生憲・瓜生壽「国文法詳解」明32・6 | 未来格 | 想像格 | 想像格 | 想像格 | | (現在) |
| 大平信直「中等教育国文典」明32・7 | 未来辞 | 不然辞 | 未来決意辞 現在想像辞 | 過量想像辞 | 現在想像辞 | 余情辞 |
| 藤井鏡「日本文法筌蹄」明32・7 | 未来 | 非否 | 指定 推量 | 推量 | 推量 | 感嘆 |
| 手島春治「新撰日本文典」明32・9 | 仮定 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | |

| | | | | | | | | | | |
|------------------------|-------|----|--------|----|----|-----|----|----|----|--------|
| 窪田亮吾「国文典講本」明35・8 | 未来 | 推量 | 打消 | 打消 | 決定 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 咏嘆 |
| 三石賤夫「日本文典」明35・9 | 未定 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 感嘆 |
| 鈴木暢幸「日本文法」明35・9 | 時(未定) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 非確定 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 佐々政一「日本文典」明35・10 | 未来 | 推量 | 非確定 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 感嘆 |
| 三石賤夫「文典の棗」明35・11 | 未来 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 感嘆 |
| 糸左近「雅俗語和漢の文典」明35・11 | 未来 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 決定 |
| 吉田弥平「国文典教科書」明35・12 | 時(未定) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 横地清次郎「国文法教科書」明36・2 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 詠歎 |
| 大宮兵馬「中等日本文典」明36・3 | 時(未来) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 永井一郎「国文法要義」明36・4 | 時(未定) | 推量 | 拒否 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 詠歎 |
| 富田良穂「てにをは俗解」明36・8 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 上村左川「新撰和英文典問答」明36・10 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (断定) |
| 警備研究会「師範教科国語典」明36・12 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 林彦兵衛「國語標準まなび伝授書」明36・12 | 時(未定) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (説明なし) |
| 千勝義重「国語早わかり」明37・1 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (説明なし) |
| 明治書院編輯部「女子日本文典」明37・2 | 時刻 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 畠山健「中等日本文典」明37・3 | 時(未来) | 推量 | 否定 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | (指定) |
| 松本龜次郎「曼文辭源日本文典」明37・7 | 時(未定) | 推量 | 否定(打消) | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 詠歎 |
| 蓮沼諄三郎「品詞捷徑」明37・8 | 時(未定) | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量 | 推量(詠歎) |

| | | | | | | | | |
|-----------------------------|--------|--------|--------|--------|------|-------|--------|----|
| 金澤庄三郎「日本文法講義」明40 | 未来 | 推量 | 打消 | 指定 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 松平静「文法及作文」明41・1 | 時(来悉) | 推量 | 推量 | 指定 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 山田孝雄「日本文法論」明41・9 | 時(来悉) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 藤沢倉之助「文語法」明41・10 | 時(来悉) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 三矢重松「高等日本文法」明41・12 | 想像(推量) | 打消 | 推量 | 想像(推量) | 推量 | 未来 | 推量 | 指定 |
| 本多龜三「普通文法集成」明43・2 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 堀江秀雄「日本文典問答」明43・6 | 未来の動作 | 未来動作推量 | 弱き意の否定 | 推量して指定 | 現在想像 | 動作を推量 | 根拠ある推量 | 詠歎 |
| 中等教科研究会「中等教科摘要国文典」明43・7 | 未来 | 打消 | 弱き意の否定 | 推量 | 未来 | 推量 | 推量 | 詠歎 |
| 八木立礼「歌文枢要」明43・7 | 未来の推量 | 打消 | 打消 | 推量 | 推量 | 現在 | 推量 | 現在 |
| 林治一「国文法解義」明43・8 | 時(来悉) | 推量 | 打消 | 推量 | 推量 | 現在 | 推量 | 詠歎 |
| 明治中学会「国文法講義」明44・4 | 未来 | 推量 | 打消 | 指定 | 推量 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 神谷保朗「増訂中等教科国文法要綱」明44・6 | 時(未来) | 打消 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 感動 |
| 教育研究会「小学校教員検定受験用国文法講義」明44・9 | 時(未来) | 打消 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 感動 |
| 藤岡勝二「中等日本文典」明44・11 | 時(来悉) | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 感動 |
| 芝野六助「語法要覽」明45・6 | 時(来悉) | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 感動 |
| 吉岡郷甫「文語口語対照語法」明45・7 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 指定 |
| 落合直文「普通文典」大4・7 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 指定 |
| 保科孝一「大正日本文法」大6・10 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 詠歎 |
| 吉沢義則「中等日本文法教科書」大6・11 | 未来 | 推量 | 打消 | 推量 | 未来 | 未来 | 推量 | 詠歎 |

後置詞「をもって」の機能

林 淳子

1. はじめに

動詞のテ形から派生した後置詞の機能は多次元にわたる。後置詞の機能が多次元にわたるとは、文のなかでどのような成分を示すかという観点からみて多様であるということである。全 2004 によれば、動詞テ形のもとの機能は複文の先行句節を形成することなのであるが、複文においては陳述の中心が後続句節にあることから先行句節は従属性を帯びやすい。その従属性が増すにしたがって述語性を失い、先行句節は後続句節の拡大要素となり、さらには陳述語や機能語へ移行するのである。このように動詞テ形の文法化が進み、そのそれぞれの段階で機能が固定されることによって、動詞テ形派生の後置詞は多次元にわたる機能を獲得したと考えられる。

そこで本稿は、動詞テ形派生の後置詞のなかでも文法化の度合いが高いと思われる「をもって」をとりあげ、その機能が従来の研究で指摘されてきた格表示機能だけでなく多次元にわたる様子を明らかにし、そのような「をもって」の複数の機能の相互はどのようにつながりがあって、ひとつの形式で多様な機能を実現しているのかを考察することを目的とする。その際、後置詞がはたらく次元として以下の三つを設定する。

- I. 文が描く事態の直接構成要素のひとつ（主語・補語）を示す。
- II. 文が描く事態に必須の要素ではないが、事態内容を豊かにする規定的要素（修飾成分）を示す。
- III. 事態を描き述べる部分から離れて、その事態を文として述べるときの態度や前提など事態にとって外在的な情報（状況成分・陳述成分）を示す。

ただし、以下で観察する「をもって」の機能が必ず次元Ⅰ～Ⅲのどれかだけに属するわけではないことに注意しなければならない。後置詞が文法化によって獲得した機能は幅広く、かつそのひとつひとつの機能が文が描く事態に対してどれほど直接的に構成要素としてかかわるかには段階があるが、連続的である。以上の三つの次元はその目安となるポイントにすぎない。

なお、本稿は格助詞との比較などの観点から「をもって」を単位とするが、その機能が格助詞的機能にとどまらないということから、複合格助詞ではなく、後置詞という名称を用いる。

2. 「をもって」の機能

まず、後置詞「をもって」が文のなかで何を示すかによって、その機能を以下のように分類する。¹

また、この機能の特徴をより明らかにするために、「置き換え」可能な格助詞を合わせて示す。後置詞と格助詞は、日本語において名詞を文中の他の語や部分とむすびつける機能語である点で共通し、ときにはある後置詞とある格助詞以外はすべて同じ要素が同じ語順で並ぶ、大きく意味の違わない二つの文を作ることがある。そのように後置詞と格助詞の「置き換え」が可能であるとき、当該後置詞の機能と当該格助詞の機能は非常に近いといえ、そこから後置詞の機能的特徴をより正確に把握できると思われる。そこで、「をもって」の各機能がどの格助詞に置き換え可能なのか、もしくはどの格助詞にも置き換え不可能なのかを調べることによって、各機能の後置詞の機能的特徴をより明らかにするとともに、機能分類の妥当性を確認することができる。なお、以下では紙幅を考慮して、それぞれの機能の文を示すときに「剣術をもって／で身をたてる」のように示す。このとき「／」の左側の「をもって」が用例の出典通りであり、右側は本稿筆者による置き換え操作の結果である。また「／」の右側の「×」は、操作の結果どの格助詞にも置き換え不可能であることを表す。

①動詞の項（対象）

動詞の項とは動詞の意味を充足して事態を構成する要素のことである。動詞の項がどのような意味をもって動詞の意味を充足するかは、動詞によって充足を必要とする意味も異なるし、動詞の項たる名詞の種類やとる格によっても異なる。「をもって」が動詞の項を示す場合、その意味は動詞が表す関係づけ・定義づけといった行為の対象である。

- (1) そこで、愛弟子の三沢千代太郎をもって／を後つぎとした。(剣客)
- (2) わたくしはこの作品をもって／を、山本さんの戦後第一段の躍進とみたい。(さぶ)
- (3) この涼しい顔は心臓をもって／を人体の一番高尚な微妙な器官だと信じこむところの思想に関係している。(焼跡)
- (4) ところがこの熊五郎は、戦後の不況が訪れだしたころ、急転直下、社会主義者をもって／を任じた。(楡家)

「をもって」の示す名詞が動詞とともに事態を構成するのは、(1)～(3)のように、「をもって」が示す名詞をA、ト格補語をBとすると「行為の対象AをBの状態にする(考える、感じる)」という意味構造をとる場合にほぼ限られる。この構造をとらない(4)において、この意味構造のBに当たる名詞を補うとすれば「自分の立場(と)」などのような主語「この熊五郎」を所有者とする再帰的要素となる。表面には現れていないこれをBと想定すると「A=B」という要素間の関係づけを動詞が行う点(1)～(3)の意味構造と共通しており、(4)の場合も「をもって」が示す名詞は事態を構成するのに必須の項である。このような動詞の項は②で扱う動詞の非必須項に比べて対象性が高い。また、「をもって」が示すのは行為によって定義づけられたり、変化を与えられたりする対象であるから、この「をもって」をすべて格助詞「を」に置き換えることができるのは当然であろう。

②動詞の非必須項(手段・道具)

後置詞「をもって」は、事態を成立させるのに必要な要素ではあるが動詞の意味を充足する必須性のない項を示す場合もある。このとき、「をもって」が示す名詞と動詞は①のように論理的な格関係をむすぶのではなく、「をもって」がその意味を媒介にして名詞を、既に格関係をむすばれた動詞と他の名詞のまとまり(他動詞と主語・目的語のくみあわせ、もしくは自動詞と主語のくみあわせ)にむすびつける、と言ったほうがふさわしい。このときの「をもって」が示す名詞の意味役割は、名詞の種類によって「手段」と「道具」に分けることができる。抽象的なことがら—実際にはそれを何らかの方法で具体的に行使することで手段たりうるのだが—を表す名詞は手段を、具体物を表す名詞は道具を表す。このとき、手段や道具は動詞が表す行為の具体的な内容(何を通して行為が実現するか)を規定しているとも言える¹¹⁾。「をもって」で示される名詞は意味を付与して事態内容を規定する点で、修飾成分に非常に近くなる。

a. 手段

- (5) 一栄の父の千賀氏は幕府天文方に属して、数学をもって／で仕えた。(焼跡)
- (6) 「剣術をもって／で身をたてるつもりならば、若いうちは女に気を散らしてはならぬ」(剣客)
- (7) オランダの提案による日本の連盟への加入を承認する。ついては、法令をもって／で貴国における一手輸入業者を定め、年間の所要量を知らせてもらいたい。
(人民)
- (8) 汚職事件で弟が上司を、死をもって／でかばったかどうか、もちろん知りません。
(点と線)

この機能の「をもって」はすべて、同じく手段を表すとされる¹²⁾「で」で置き換えることができる。

b. 道具

(9) はじめてのとき、わしは木刀をもって／で只ひと撃ちに打ち倒したものだ。(剣客)

(10) 惟光は、源氏がずんずんとしてゆくのであわてて馬の鞭をもって／で草の露を払いつつ、案内した。(新源氏)

(11) こっちは活眼をもって／で、たちどころに見やぶったね。(焼跡)

これも、道具を表すとされる¹³⁾「で」による置き換えが可能である。

道具を示す「をもって」はすべて「で」で置き換えることができるが、「身をもって」の形で慣用的に定着しているものが唯一の例外である。

(12) 私は別に私利私欲で医者になろうとしているのではありません、自分が永らく病気に悩み、女医の必要を身をもって／~~X~~体験したからこそです。(花埋み)

③限界

「をもって」が示す名詞が事態の時間的限界を表すことがある。

(13) 四十歳をもって／を初老とすることは東洋の智慧を示している。(人生論)

(14) これをもって／で、わたくしの信仰告白を終わらせていただきます。(塩狩峠)

(15) 七月八日にお預かり致しましたオパールの指輪は、来る十月七日をもって／で／に流質となりますので御知らせ致します。(冬の旅)

「四十歳」という時点において「初老とする」という事態が、「これ」という段階において「信仰告白が終わる」という事態が、「十月七日」という時点において「指輪が流質となる」事態が成立する。その一方で格構成に注目すれば、ト格補語をもつ(13)

(15)に顕在的なように、(13)～(15)の例は①動詞の項(対象)の場合のように「AをもってBとする」の形で「対象AをBの状態と定義する、考える」という意味構造をとっている。ただし、これらの例では時間軸上のある点が対象Aに据えられた結果、時間的限界を表現して状況成分になる点で①動詞の項(対象)とは一線を画される。こうして事態の構成要素となる場合と、事態を外側から特徴づける場合と、表現効果の結果としてそれぞれはたらく次元は異なっても「をもって」自体は対象を据えるという同じ役割を負ってはたらいっているものと見られる。また、(14)「わたくしの信仰告白」(15)「…オパールの指輪」のようにヲ格項で行為対象がしめされていることによって、「をもって」の示す名詞が①のように行為対象を示すのではなく、時間的限界を表すという表現効果への解釈が促進される。

格助詞への置き換えに関しては、動詞「(～と)する」の存在によって①と同様の意味構造が存在することが明確な(13)のような文においては、「をもって」は①動詞の

項(対象)の場合と同じく、行為対象を示す格助詞「を」で置き換えることが可能である。一方、(14)のように動詞の具体的・実質的な意味が強く現れることにより「定義する、関係づける」という意味が裏面化され、それに伴って「をもって」が行為対象を示すという色合いは薄れ、状況成分的に時間的限界を表す様相が強くなれば、限界を表す「で」で置き換えることができる。反対に、この場合には①動詞の項(対象)と同じ意味構造が裏面化されているために、①動詞の項や(13)の「をもって」のように「を」へ置き換えることはできない。「をもって」が示す名詞はまた、時間であるゆえに状況成分的でもあるから、(15)のように時間軸上の一点であることが明白な名詞は時間・空間を表す「に」で示すこともできる。こうなるともう、「定義する、関係づける」行為の対象であることは背景へ追いやられており、やはり「を」で示すことはできなくなる。

④付帯

「名詞+をもって」が事態に付帯することがらを示すことがある。

- (16) そして片腕を突いて掌に顔を埋め、ぼんやりと煙草などをくゆらせていると、表通りから出征を祝う人々のざわめきや、歌声や、万歳の叫びなどが、何とも言えぬ悲しげな余韻をもって／×聞えて来た。(草の花)
- (17) 井上に目の前でこうして明るさまにすばすばやられると、太郎自身、煙草など煙いばかりだと、実感をもって／×思うのである。(太郎)
- (18) 十六歳の娘は娘なりに男への夢を抱いていた。三年前、利根を上った時はそれはたしかな具体性をもって／×拵がっていた。(花埋み)
- (19) 仙吉に近づきたれでもを一応は疑惑警戒の眼をもって／で迎えるのが習性となり、(焼跡)

付帯することがらとは、その事態の中心たる行為・運動の主体(「出征を祝う人々のざわめきや、歌声や、万歳の叫びなど」「太郎自身」「男への夢」)がその行為・運動に際して伴っているものごとである。その点で、事態に付帯することがらは中心たる主体にくっついて事態の中に食い込んでいるともいえる。一方、事態が成立するか否かになんの影響も与えていない、あくまでそれに伴っているだけと考えれば事態の外側にあり、非常に副詞的だともいえる。そしてそのどちら寄りかということは連続的である。

(16)～(19)はいくらか事態の中に食い込んでいるように思える例であり、たとえば(18)では「たしかな具体性をもって」を抜きにして「それは拵がっていた」だけでは文として意味をなさないであろう。事態内容を規定する点で必須性の高い成分なのである。

しかし、(19)の「疑惑警戒の眼をもって」と同様に付帯することがらが主体の身体的様子であっても、(20)の「笑顔をもって」は完全なる修飾成分であり、「課長の外山三郎が加藤を迎えた」という事態はこのプラスアルファの要素がなくても成立する。

(20) 課長の外山三郎は笑顔をもって／で加藤を迎えた。(孤高)

これはつまり、「をもって」がどの次元ではたらくかに関しては、これが示す名詞の種類によって決定されるのではない、ということである。はたらく次元を左右するのはあくまでその名詞が事態の叙述においてどのような意味を、すなわちどのくらい必須の意味を担っているかということである。また、この「をもって」は「で」への置き換えが可能である。

具体的な身体の様子などでなく、「をもって」が示す名詞が抽象的な概念や感情を表すものになると、「名詞+をもって」全体で主体が事態に対して抱く態度を表すことになる。この場合も「で」へ置き換えが可能な例とどの格助詞にも置き換えが不可能である例がある。

(21) 以前の周二なら当然二の足を踏むような行為をも、彼は別人のように余裕をもって／で実行することができた。(楡家)

(22) 然るに頑固な彼は医者にはならない決心をもって／で、東京へ出て来たのです。(こころ)

(23) 正が確信をもって／×いうと、小ツルもまげようとはしない。(二十四)

(24) 彼もまたあすなるだなど、鮎太は好感をもって／×若いカメラマンを眺めた。(あすなろ)

(25) そうしてこの疑問には誰も自信をもって／×答える事が出来ないのだと思った。(こころ)

(26) ぼくは興味をもって／×元旦はここで観察してたもんです。(楡家)

そもそも事態に付帯することがらとは、事態に際して主体が伴っている身体の様子や感情・抽象的概念であるのだが、この「伴う」ということを表す後置詞「をもって」は、この後置詞の派生源の一つである動詞「持つ」の意味を多く残しているといえる。したがって、(21)～(26)のように「(名詞)を持つ／持っている」の形でその感情や概念を有する状態を言うことのできる名詞（「確信を持っている」「興味をもつ」）の例の「をもって」は、後置詞「をもって」の付帯の機能なのか動詞「持つ」の中止形がラ格項をとったものなのかを決するのが難しい”。ここに至って付帯の「をもって」は派生源の動詞「持つ」のテ形にもっとも近づくのである。

また、主体の付帯状況というよりむしろ、主体がある状態を付帯しているがゆえに、述語まで含めて事態全体がある状態を伴っていることを表す場合もある。この場合はす

べて「で」へ置き換えが可能である。

- (27) その言葉は森閑とした昼の中に異様な調子をもってで繰り返された。(こころ)
- (28) 機動隊もさるもの、巧妙に、機能的に、組織的に、いかにも市民の治安を維持する如き装いをもってで徹底的に弾圧してくる。(二十歳)
- (29) こんな単に紙と活字との集積にすぎぬ本を、非生産的な逃避の心境をもってで読みふけていてよいものなのか。(楡家)

このように、主体が行為に際して伴っているものごとを示す付帯の機能の「をもって」は、はたらく次元、すなわち事態へくい込む度合いに次元ⅠからⅢまで幅がある。しかし、格助詞への置き換え可能性は、はたらく次元に左右されない。どの次元ではたらく④付帯の「をもって」も「で」に置き換えられる場合とそうでない場合とがある。この置き換え可能性を左右するのは、「をもって」がはたらく次元ではなく、「をもって」が示す名詞が「だ」をともなって述語たりうる可能性である。「をもって」ではなく「で」が名詞に付いて付帯状況を示すとき、デ格の名詞全体は主体が付帯するものごとというよりむしろ主体の様態である。「で」と「をもって」それぞれの派生源を比べると、「で」の派生源「にて」「にありて」「にして」などⁱⁱⁱは④付帯の「をもって」の派生源「持つ」よりも素材的に無色透明であるがゆえに、名詞を状態述語化して修飾成分にし、様態を示すことができる。つまり、「で」で示される様態は「だ」を伴って状態を示す述語になりうる名詞に限られているのである。「で」への置き換えが可能なのは(22)は「頑固な彼は医者にはならない決心だ。」とすることができ、(27)は「その言葉が森閑とした昼の中に繰り返されるのは異様な調子だ。」とすることができ、置き換えが不可能な(24)は「*鮎太は彼もまたあすなろだなと好感だ。」とは言えない。このことは「をもって」がはたらく次元に関係なく共通のことであって、同様に「をもって」の「で」への置き換えが可能なのは(19)は「仙吉は疑惑警戒の眼だ」、(20)は「課長の外山三郎は笑顔だ。」のように「をもって」が示す名詞に「だ」がつくと様態を表す述語になるが、「をもって」の「で」への置き換えが不可能な(18)は「*それはたしかな具体性だ。」とは言えない。ということは、逆に考えれば、名詞が「だ」をともなって述語となりうるか否かにかかわらずその名詞を付帯状況として示すことが可能な「をもって」は、名詞の述語としての可能性を持ち出さないうまま、つまり名詞を名詞＝ものごととしたままで状況として示すはたらくき方をする点で「で」と異なるのだといえる。

以上、本節では後置詞「をもって」が多次元にわたって有する機能を観察し、さらにそれぞれの機能の「をもって」はどのような格助詞と置き換え可能か、その置き換え可

能性を左右する条件は何かを調べた。これをもとに以下では、第3節で「をもって」の機能が正確にはそれぞれの次元ではたらいっているのかをまとめたうえで、第4節で格助詞への置き換え操作から各機能の特徴そして「をもって」全体の機能的特徴を考察する。そして第4節における考察に基づいて、第5節でそれらの機能同士のつながりを考察する。

3. 「をもって」の各機能がはたらく次元

以上、後置詞「をもって」の機能として①～④を見た。これらの機能がどの次元ではたらいっているかに関しては、まず、①動詞の項（対象）を示す機能は次元Ⅰではたらいっている。②動詞の非必須項（手段・道具）を示す機能は、修飾語と補語を区別する立場では、普通手段や道具は補語の中に入るといって次元Ⅰだといえるが、動詞の意味を充足する必須性のない非必須項であるということは事態構成のなかでも周辺的な要素であるということであり、限りなく次元Ⅱに近いところの次元Ⅰである。一方、③限界は状況成分であり、事態の外側にある情報を提示しているので次元Ⅲである。④付帯の機能は、はたらく次元に幅が見られる。付帯はその名の通り、プラスアルファの要素であるけれども(16)～(19)のように「をもって」が示す名詞が事態の成立に不可欠で事態の中に食い込んでいると言える例もある。一方で、(21)～(29)のように、後続部分の事態と完全に切り離されて主体や事態全体の付帯状況を表す複文前件に近くなっている例もある。このように④付帯の機能は次元Ⅰ～Ⅲまでの連続のなかに散在している。このように「をもって」の機能が多次元にわたる様子を、第2節での格助詞への置き換え操作の結果とともに示すと以下の図のようになる。〔 〕内は置き換え相手の格助詞。「×」はどの格助詞にも置き換え不可能であることを示す。

| | | |
|-----|--------------------|---------------|
| 次元Ⅰ | ①動詞の項（対象）〔を〕 | (16) ～ (19) |
| 次元Ⅱ | ②動詞の非必須項（手段・道具）〔で〕 | (20) ④付帯〔で・×〕 |
| 次元Ⅲ | ③限界〔を・で・に〕 | (21) ～ (29) |

4. 置き換えから見る「をもって」の機能的特徴

前頁の図のうち、置き換え操作の結果に注目すれば、機能によって置き換え相手の格助詞が異なることから、第2節の機能分類の妥当性が確認される。さらに本節では、前頁の図のような格助詞への置き換え可能性から、「をもって」の機能的特徴について考えてみる。格助詞への置き換えにおける「をもって」の大きな特徴は、はたらく次元にかかわらず「を」あるいは「で」への置き換えが中心だということである。各機能の「をもって」が単一の格助詞「を」あるいは「で」としか置き換えられないならば、「をもって」の機能的特徴は「を」に置き換えられる系列と「で」に置き換えられる系列に大きく分けて考えることができるのではないだろうか。

まず、①動詞の項(対象)③限界は「を」へ置き換えが可能な系列である。格助詞「を」は、内的限定格対格の格助詞であるⁱⁱⁱ。第2節で既に述べている通り、③限界の「をもって」と①動詞の項(対象)の「をもって」は、「をもって」で示す名詞を対象に据えて、ト格補語で示される状態に定義づけるという意味構造ではたらく点が共通しているのであった。ここで、注1でも示したが「をもって」には二つの派生源、ヲ格の名詞をとる動詞「持つ」のテ形「(～を)持って」と漢文訓読由来の「(～を)以て」があることを思い出せば、①動詞の項(対象)と③限界の二つの機能は、「を」へ置き換え可能であることを根拠に、「(～を)以て」から派生した系列であると推察できる。派生源の「(～を)以て」の時点で、何らかの概念的意味をとりだそうとすればそれは対象や手段、原因・理由といった文法上の機能となる。①動詞の項(対象)と③限界の「をもって」が、内的限定格たる対格の格助詞「を」で置き換えることができるような、文法的に見て非常に機能語的な性格を有しているのは、このように派生源「(～を)以て」からして既に当然のことであると考えられる。ところで、③限界の「をもって」は「を」以外に「で」「に」への置き換えも可能であるが、これは時間的限界という表現効果からの類推で可能になるだけであって、「をもって」が③限界の機能ではたらくときの文の構造は基本的に①動詞の項(対象)の「をもって」の場合と同じであるから、「を」への置き換えが可能な系列としてまとめることは適切だといえる。

一方、「で」に置き換えることができる②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の「をもって」は、ヲ格の名詞をとる動詞「持つ」の中止形「(～を)持って」を派生源とする系列である。②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の二機能の「をもって」はすべて「伴う、付随する」という意味合いを付与しながら主体と手段・道具(②)や主体あるいはそれを含む事態とものごと(④)をむすびつけるのであるが、この「伴う、付随する」という意味合いは派生源の「持つ」の実質的意味に由来する。そして、このような「をもって」の機能は別の見方をすれば、「をもって」で示す名詞を内部的にしる外部的にしるその事態に添えるというむすびつけ方である。この「添える」機能は、

間淵 2000 が「動詞が表す事態への消極的参与」がその基幹的用法であると定義するデ格の説明、また菅井 1997 の「主格や対格に対して背景的側面を提示する」ものとする一般言語学における具格固有の特性の説明と通じるところがあるのではないだろうか。ここから、「(～を) 持って」系列の二機能の「をもって」と格助詞「で」の置き換えが可能な理由を説明できるのである。

上記の図のように①動詞の項(対象)の「をもって」と格助詞「を」、②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯の「をもって」と格助詞「で」はかなり高程度合いで機能を一致させる。そしてこの一致は後置詞「をもって」の派生源の二系列「(～を) 以て」「(～を) 持って」に応じたものであり、つまり根源的だからこそ高程度合いで一致するのだといえる。この高度な一致の帰結として、③限界の「をもって」がどの表現的側面が前面化するかによって「で」「に」に置き換え可能であったり、④付帯の「をもって」のうち名詞に述語性がない場合は「で」への置き換えが不可能であったりすることを除けば、本質的には各機能の「をもって」と単一の格助詞「を」もしくは「で」との対応を描けるのである。さらに、内的限定格の対格格助詞「を」と、「にて」という元々の形から考えれば格助詞としては論理的関係構築力が低い外的限定格の「で」という格助詞の体系のなかでも遠いところに位置する二つの格助詞が「をもって」の置き換え相手であることにしても、異なる二つの系列からの派生を根拠に説明でき、それがまた「をもって」全体の機能面での特徴であるといえる。

5. 「をもって」の機能同士の関係

以上の「を」「で」への置き換えがそのようになることの説明から、後置詞「をもって」には漢文訓読「(～を) 以て」由来の機能と動詞テ形「(～を) 持って」由来の機能があることが分かるが、そのことから「をもって」の複数の機能の相互がどのようにつながりあって、ひとつの形式で多様な機能を実現しているのかも明らかになる。第4節で「を」へ置き換えが可能な①動詞の項(対象)③限界の「をもって」は派生源が「(～を) 以て」の系列、「で」へ置き換えが可能な②動詞の非必須項(手段・道具)④付帯は派生源が「(～を) 持って」の系列ということが明らかになったが、それぞれの系列の内部はどのようにつながっているのでしょうか。

まず、「(～を) 持って」からつながるのは②動詞の非必須項(手段・道具)と④付帯の機能である。このうち④付帯の「伴う」という意味はまさに「(～を) 持って」を構成する動詞「持つ」の意味である。この④付帯は名詞と「をもって」全体でヲ格名詞をとる動詞「持つ」のテ形から修飾成分・状況成分へ移行したと考えることができる。第2節で観察したように④付帯の機能の「をもって」は次元Ⅲから次元Ⅰでまで幅広くはたらくという一方で、「をもって」の機能を次元Ⅰ～Ⅲまでに分布させる。

同じく「で」へ置き換え可能である②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」も、以下のような例から動詞「持つ」の中止形とのつながりが考えられる。

(30) 稽古場ではきびしくって、弓の柄を持って弟子の臀をぴしゃぴしゃぶって……。

(楡家)

特に(30)のような例は表記が「持つ」の中止形であるだけでなく、動詞「持つ」の語彙の意味から「弓の柄を持つ」と言えることと、後置詞「をもって」が道具を示す機能とが、「を持って」の中に重ね合わされ両立している。道具を示す「をもって」は具体物を表す名詞をとることからも、動詞「持つ」とのつながりを断つことはできないだろう。

一方で、「(～を) 以て」を派生源とするのは、「を」に置き換え可能であった①動詞の項（対象）③限界の「をもって」に加えて、②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」である。「行為対象」の意味も「手段」の意味も漢文中の機能語「以」がもともと有している意味である。後置詞「をもって」が「対象AをBと考える、定義する」という意味構造のなかに入っていれば、「以」がもともと有する意味のうち「行為対象」という、もともと機能語的な意味を得て事態構成要素を示すことになり、①動詞の項（対象）の機能を獲得する。一方、他の名詞によって既に対象が示されている意志動詞文、あるいは自動詞の意志動詞文においては、「行為対象」を表す機能語はあられわれず、「をもって」は「手段」を表す意味を得て、②動詞の非必須項（手段・道具）の機能を獲得することになる。そして、手段とは抽象・具体の違いはあるとしても文に添える意味は同類である道具にも用法が拡大するのである。

「(～を) 以て」を派生源とする系列の、残る③限界は、文の構造の点から①動詞の項（対象）のバリエーションと考えられる。なぜなら、③限界の例である(13)～(15)においても「対象AをBと考える」という意味構造が成り立っているからである。たとえば(14)は「これをもって終わりとする」という意味構造、(15)は「来る十月七日をもって流質とする」という意味構造だと言える。ただし、これらの例においてはAの部分にくる名詞が量や時間を表すものであり、一方で同じ文中ではヲ格名詞で行為対象も示されていることから、Aの対象性が裏面化し、「Aをもって」の部分が時間的限界を提示するような表現効果が生まれ、事態から切り離されて状況成分的に解されることになるのである。

こうして「をもって」の機能同士のつながりを考えるとき、②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」は、格助詞への置き換え可能性や「伴う」という意味合いからは「(～を) 持って」の系列と考えられる一方、手段という意味からは「(～を) 以て」の系列と考えることもできるということから、機能同士のつながりに関して二つの可能性がある。そのように二つの可能性があることこそが、注1で示したように二つの派生源が考えられる「をもって」が現代日本語の使用者にとってはひとつの後置詞なの

である、ということの現れであるといえるだろう。なお、この②動詞の非必須項（手段・道具）の「をもって」が「（～を）以て」の系列とも考えられるのにもかかわらず、「を」への置き換えが不可能なことに關しては、「（～を）以て」の本来の用法がヲによって表される対象性と一致することもあったが、それにとどまらない規定的な用法をも有していたという事実によっているのであって、「をもって」と「（～を）以て」のつながりを否定するものではない。

以上のように後置詞「をもって」の機能同士の関係を見てきたが、これを図で示すと以下のようになる。「を以て」系列の①動詞の項（対象）②動詞の非必須項（手段・道具）③限界はそれぞれ次元Ⅰ・Ⅰ～Ⅱ・Ⅲで、「を持って」系列の②動詞の非必須項（手段・道具）④付帯はそれぞれ次元Ⅰ～Ⅱ・Ⅰ～Ⅲではたらくので、結果として両方の系列が各次元に万遍なく機能を有していることになる。



6. まとめ

以上、本稿では動詞テ形派生の後置詞「をもって」を対象に、次元という概念を設定し、その機能が文中のどんな成分を示すかの点で幅があることを明らかにした。さらに、各機能の「をもって」がどの格助詞に「置き換え」可能であるかも調べたところ、機能によって置き換え相手の格助詞が異なることからこの機能分類の正確さを確認することができた。そして、「を」に置き換え可能な「をもって」と「で」に置き換え可能な「をもって」があるという事実からは、「をもって」の各機能同士がどのようにつながってひとつの形式で複数のはたらきを実現しているのかの説明も可能になった。

また、置き換え相手の格助詞から各機能の後置詞「をもって」の機能的特徴をより鮮明にすることもできたと思われる。論理的関係構築を本質とする格助詞「を」と、もとは「にありて」などであったという事実から考えれば格助詞のなかでもっとも後置詞に近いといえる「で」という、格体系のなかの離れた二者のそれぞれに近いはたらきを有するという事は、動詞テ形派生の後置詞「をもって」の特徴的な個性であるといえるだろう。

i 後置詞「をもって」には動詞「持つ」のテ形から派生したものと、漢文の「以」の訓読が日本語の文章に定着したものと、出自からいうと二種類が存在する。が、ここでは現代日本語の言語現象として「をもって」を扱うので、表記の違いによる区別はしない。現代日本語の使用者においてはもはや、後置詞「をもって」が派生源による差を意識されず、ひとつのものとして認識されており、「を持って」「を以て」「をもって」の3種は純粹に表記の選択の問題と思われるためである。ちなみに、「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」内の同じ調査対象から観察できた用例総数は、「をもって」197例、「を持って」32例、「を以て」67例である。

ii 三井正孝 1995 による。

iii 菅井三実 1997、間淵洋子 2000 参照。

iv 注iiiに同じ。

v 間淵 2000 は格助詞「で」が基幹的用法のひとつである場所格を抽象化させて獲得した用法として<限定>の用法があると主張している。

vi 内丸 2006 は動詞のテ形を伴う節をとりあげたものだが、そのなかで内丸は「花子はしゃがんで絵を描いた」のようなテ形節を付帯状況のテ形節と呼んでいる。また内丸 2006 の付帯状況のテ形節とほぼ同じ性質のテ形節を、南 1974 では「動作のようす、しかたなどを表すもので、いわゆる状態副詞に似た意味を持っている」従属句であるとする。

vii 添田 1970 では、上代から中世の資料中の「にて」に関して、用法別の出現数や出現状況などを調査した結果、「にて」の成立を(イ)「にありて」→場所をあらわす格助詞「にて」。(ロ) 助動詞「にて」→状態をあらわす格助詞「にて」→意味的わたり行きによる格助詞「にて」の、場所、原因以外の意味用法。(ハ)「によりて」→原因をあらわす格助詞「にて」。の三つに分けて説明する。

viii 格助詞や格関係の先行研究(川端 1959・1986、城田 1993、Barry J. Blake 2001、青木 1982・1989)では格関係を、論理的な関係構築を本質とする格と意味を付与することを本質とする格の大きく二種類に分ける。そこで本稿も格に質的に異なる二種があるという立場を踏襲し、「をもって」の置き換え相手となる格助詞がどちらであるかを「をもって」の機能的特徴を考える際の参考とする。なお、二種の名称は川端 1959・1986 を踏襲して内的限定格・外的限定格とする。

【参考文献】

- ・青木伶子 1982 「格と格助詞」『成蹊大学文学部紀要』18
- ・青木伶子 1989 「格と格助詞・再論—表層構造における—」『国語と国文学』66 巻 9 号
- ・内丸裕佳子 2006 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』2 巻 1 号
- ・川端善明 1959 「動詞文・格」『国語国文』28 巻 3 号
- ・川端善明 1986 「格と格助詞とその組織」『論集日本語研究(一)現代編』宮地裕編 明治書院

- ・城田俊 1993 「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編 くろしお出版
- ・菅井三実 1997 「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学運学部研究論集（文学）』43
- ・菅井三実 1998 「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」『名古屋大学文学部研究論集』130（文学44）
- ・全成龍 2004 「動詞のなかどめ「～して」の機能の変化と品詞の転換」『21世紀言語学研究 鈴木康之教授古希記念論集』白帝社
- ・添田建治郎 1970 「格助詞「にて」の形成と言語における交替現象」『語文研究』九州大学国語国文学会 29号
- ・間淵洋子 2000 「格助詞「で」の意味拡張に関する一考察」『国語学』51巻1号
- ・三井正孝 1995 「現代日本語におけるヲモッテ格の意味」『静岡英和女学院短期大学紀要』27
- ・三井正孝 2006 「格助詞らしからぬ複合格助詞>ーニツイテ、ニトツテ、ヲモッテ、トシテの場合一」『複合辞研究の現在』藤田保幸・山崎誠編 和泉書院
- ・南不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店
- ・Barry J. Blake 2001 "Case Second edition" Cambridge Textbooks in Linguistics Cambridge University Press

【用例出典】

用例はすべて「CD-ROM版 新潮文庫の100冊」から採集した。本稿に掲載した用例の出典は以下の作品である。括弧内は本文中での略称を示す。

『焼跡のイエス・処女懐胎』石川淳（焼跡）／『あすなろ物語』井上靖（あすなろ）／『剣客商売』池波正太郎（剣客）／『楡家の人びと』北杜夫（楡家）／『太郎物語』曾野綾子（太郎）／『新源氏物語』田辺聖子（新源氏）／『冬の旅』立原正秋（冬の旅）／『二十歳の原点』高野悦子（二十歳）／『二十四の瞳』壺井栄（二十四）／『こころ』夏目漱石（こころ）／『孤高の人』新田次郎（孤高）／『草の花』福永武彦（草の花）／『人民は弱し 官吏は強し』星新一（人民）／『点と線』松本清張（点と線）／『人生論ノート』三木清（人生論）／『塩狩峠』三浦綾子（塩狩峠）／『さぶ』山本周五郎（さぶ）／『花埋み』渡辺淳一（花埋み）

（はやし じゅんこ 大学院人文社会系研究科 修士課程2年）

承接形謙讓語に関する

適切性判断要因と尊敬語転用

—「お／ご～する」と「お／ご～される」をめぐって—

伊藤 博美

1. はじめに

承接形謙讓語の一つ「お／ご～する」は、菊地(1994)では「謙讓語A」として位置づけられ、

話手が補語を高め、主語を低める(補語よりも低く位置づける)表現である。(p.256)

とされている注¹。また、「お／ご～する」は、「お／ご」と「する」の組み合わせという、いわば有標性に乏しい形式であることから、成立当初より、いわゆる謙讓語として働く場合も含め、以下の三種類に用いられていたことが指摘されている注²。

(1) 謙讓語としての用法(「謙讓語A」としての用法)

「お話しする」「お訊ねする」等。

(2) 「尊敬語+する」としての用法

「ご利用する」「ご出発する」等。

(3) 「美化語+する」としての用法

「お休みする」「お料理する」等。

小松(1967)によれば、「お／ご～する」の成立は明治30年代で、待遇価値の上位を担う「お／ご～申す」に対して、下位を担うものとして、他の「お／ご～いたす」等とともに、次第に使用を拡大していったものとされている。また、成立当初から、上記(1)～(3)のような、謙讓、尊敬、美化の用法もあり、そうした実使用のありさまと規範的立場とのせめぎ合いの中で、次第に謙讓語形としての安定性を獲得していったものともされている。

現在「お／ご～する」は、謙讓語Aの代表的なタイプとなっているが、上記のような成立事情等を考えると、当初から謙讓語としての脆弱性を抱えていたということは否定できない。

また、敬語のいわゆる「対者敬語化」に伴い、「話題の敬語」が対者敬語化していく中でも、〈主語〉と〈補語〉、そして話手の三者の関係をとらえた謙讓語Aタイプは、関係認知の困難さもあって、今後変化していく可能性が高いとも言える。

そこで本稿では、「お／ご～する」形に関する認知要因について、尊敬語転用とも関連づけた上で考察を行うものとする。加えて、近年、尊敬語という意識で多用されるといわれる、「お／ご～する」の類似形「お／ご～される」の認知要因についても考察し、今後の方向性について探るものとした。

2. 先行研究

前述したように、「お／ご～する」の成立事情については小松(1967)に詳細な記述があり、そこでは当初から、尊敬語や美化語に使用されていたことが述べられている。また、菊地(1994)では、「お／ご～する」の尊敬語化の要因として、まず、「お／ご～する」と「お／ご～になる」とを比較し、謙讓語より多く使われる尊敬語の方が一拍長くなっている事実を挙げる。そして、〈語形〉的に短く、しかも簡単に作れる「お／ご～する」の方が、よく使われる尊敬語としての〈機能〉を果たすようになっていくという点について述べ、それを助長するファクターとして〈敬語の大衆化〉を指摘している。加えて、「お／ご～する」の将来像として、私見としつつ以下の4つのケースを挙げている。

- ① 尊敬語と謙讓語の区別がなくなり、とにかく「お／ご～する」といえば丁寧な趣が出る、つまり「お／ご～する」が尊敬語と謙讓語を兼ねて、結果として事実上は〈対話の敬語〉(ないし美化語)として機能するようになっていき、これまで近似的に三分法で捉えられたシステムは全く消失、事実上の〈対話の敬語〉だけが残りという可能性。
- ② 「お／ご～する」は代表的な尊敬語として使われるようになり、一般形としての謙讓語がなくなる、つまり〈話題の敬語〉としての尊敬語と〈対話の敬語〉である丁寧語(および美化語)だけが残るが、尊敬語も〈対話の敬語〉性を強めていくという可能性。
- ③ 〈お／ご～される〉が尊敬語、「お／ご～する」が謙讓語という役割分担ができ、「お／ご～する」の尊敬語化にブレーキがかかり、尊敬語と謙讓語の区別は保てて、敬語のシステムも今まで通り維持できる可能性。
- ④ 「お／ご～される」も「お／ご～する」と同系統の語形ということで、〈敬度が違うだけで、両者ともに尊敬語として一般化する〉という方向に向かう。つまり「お／ご～される」の一般化が「お／ご～する」の尊敬語化やそれに伴う前述のようなシステムの消失にますます拍車をかける可能性。

上記①および②はもっぱら「お／ご～する」について述べたものであるが、③と④では、類似語形「お／ご～される」との比較の観点からも述べている。

本稿では「お／ご～する」とその周辺の表現に関わる話者の適切性判断要因を探ることが目的であるが、「お／ご～する」とあわせて「お／ご～される」の認知要因を探ることにより、今後の変化傾向をさぐる上でも有益な示唆が得られるはずである。本稿での見解が直接に将来の方向性予測に結びつくものではないが、両表現に関する話者の認知要因を探ることは、今後の変化傾向予測と深く関わってくるものであるとは言えよう。

3. 調査

3. 1 調査方法等

以下の形でアンケート調査を実施した。

調査方法：質問紙による調査。有意サンプルにより実施。（「調査」に関わる被調査者の「負担度」等を考慮し、より適切であると判断したため。）

調査対象：秋田県由利本荘市の高校生と20～50代の成人。内訳は高校生50名（男23名、女27名）、20～50代の成人44名（男14名、女30名）の計94名。

調査期日：2002年10月下旬。

ランダムサンプリングではなく、母集団特性を推定するための標本であるとはいいたいが、調査項目が多岐にわたっており、調査の信頼度を上げるといった面から採用したものである。調査結果に関しては、他の全国調査や先行研究と比較し、あわせて信頼性係数等を算出、調査の信頼性と妥当性、データの一般性と被調査者の回答姿勢等の適切性を確認している。（詳細は以下に述べる。）

3. 2 調査対象者の特性

本調査ではあらかじめ、全国調査との結果比較を行い、調査対象者の特性を確認した上で、分析・考察を行うものとする。

以下に示すのは、文化庁文化政策課『国語に関する世論調査』（1997～2002）と本調査の同一調査文による調査結果を比較したものである。比較に用いた表現形は以下の通りであり、それぞれの表現について「正しい言い方」「正しくはないが自然な変化」「どちらでもかまわない」「誤用あるいは言葉の乱れ」の形で回答を求めた。ただし、項目f・gについては、本調査で独自に入れたものであり、比較から除外する。

文化庁調査と本調査との比較に用いた表現形

- a. 「来ることができる」という意味で、「来れる」を使うこと。
- b. 「おっしゃる」や「言われる」という意味で、「申される」と言うこと。
- c. 「花に水をやる」ということを「花に水をあげる」と言うこと。
- d. 「いらっしゃる」という意味で「おられる」と言うこと。
- e. 放送等で「電車がまいります」と言うこと。
- f. 「お求めやすい」と言うこと。
- g. 相手にたずねる場合、「あなたがお持ちしますか」と言うこと。

次に各表現形で「誤用あるいは言葉の乱れ」以外を回答した比率に関して、文化庁調査の結果と本調査の結果を比較して示す。いわば表現の受容度比較である。

表 3-1 各表現形の受容度（数値は％）

| 調査\表現形 | a | b | c | d | e | f | g |
|--------|------|------|------|------|------|--------|--------|
| 文化庁調査 | 69.9 | 73.8 | 83.1 | 64.4 | 72.0 | なし | なし |
| 本調査 | 75.0 | 62.0 | 88.2 | 67.7 | 71.7 | (80.5) | (25.0) |

bにおいて差が大きいと思われるが、これは、本調査での世代別人数比によるものである。高校生世代で「誤用あるいは乱れ」とする傾向が強く、高校生と社会人の平均値においてt検定^{注3}を行った結果、5%水準で有意差があることがわかっている。ただし、世代別の人数を補正することにより、文化庁調査とほぼ同じになることも確認している。また、aは、いわゆる「ら抜き言葉」であるが、東北地区では方言形との相互干渉もあり、関東、近畿等と比較して使用に抵抗感が少ないと言われている。文化庁調査（2001）でも同様な結果が出ており、主としてこれは地域的な特性であるといえる。そうした点から考慮すると、これらは、いずれも今回の調査結果の分析・解釈に対する直接的、あるいは大きな要因にはなっておらず、特に問題はないと言える。

次に、被調査者の敬語判断の一般傾向を確認する。上記例文について、順位相関係数行列(listwise)を表 3-2 に示す。

相関係数は、被調査者の敬語判断に関する一貫性を確認するために提示したものである。相関係数は、2変数の間に因果関係が存在しない場合でも観測されることがあり、相関をそのまま2変数の因果とみることにはできない。非因果的な共変部分が含まれている可能性もある。ただし、これらの組合せは特殊なペアではなく、敬語表現という同一カテゴリー内での比較であり、その意味で相関係数に因果性を認めてよいと言えるだろう。

表 3-2 各表現形の順位相関係数行列

| | a(来れる) | b | c | d | e | f | |
|----------------|--------|--------|--------|------|------|----------------------|--------|
| b. 申される | .208* | | | | | | |
| c. 花に水をあげる | .175 | .075 | | | | | |
| d. おられる | .189 | .431** | .082 | | | | |
| e. 電車がまいります | .110 | .272** | .346** | .144 | | | |
| f. お求めやすい | .252* | -.053 | .394* | .147 | .198 | | |
| g. あなたがお持ちしますか | .212* | .426** | .218 | .073 | .009 | .081 | |
| spearman の相関係数 | | | | | | ** :p<0.01 * :p<0.05 | N = 92 |

表を見ると、b「申される」と、d「おられる」およびg「あなたがお持ちしますか」の相関が高く、いずれも1%水準で有意である。このことは、いずれも「申す」「おる」「お～する」といった謙讓語形を含んだ表現に対し、カテゴリー認知に基づく正確な判断力が働いていることを示している。また、c「花に水をあげる」とf「お求めやすい」およびe「電車がまいります」との相関の高さがそれに続いているが、これは、一般的に受容度の高いとされる表現に対して、被調査者が統一した見解を持っていることを示している。ちなみに、これらは美化語あるいは丁寧語的に使用されているものでもある。

したがって、この数値からも本調査での被調査者が、敬語に対する基本的な判断力を有し、なおかつ調査全体に関して、一貫性を持った回答姿勢で臨んでいることが十分に想定できる。

関連して、本回答での信頼性係数^{注4}を算出したところ、0.563であり、本調査での被調査者の特性が全国データに近いものであり、回答姿勢においても協力的であったことが確認されている。

4. 「お／ご～する」「お／ご～される」形に関する認知判断と尊敬語転用

4. 1 「お／ご～する」の認知判断と尊敬語転用

はじめに、「お／ご～する」に関する認知判断と尊敬語転用に関して考察する。

調査に際しては、「お／ご～する」を謙讓語Aとみた場合の「正用」と「誤用」と合わせた様々な文タイプ、および「お／ご～する」の中に入る動詞のタイプを変えて調査文を設定した。

調査文中の下線部分は、「お／ご～する」以外の敬語要素も含んでいるが、それについては論の展開上で明らかにしていく。

「お／ご～する」の認知判断に関する調査文

- ① (住民が市役所に)「早急にご対処していただきたいと思います。」
 ② (住民が市役所で)「税務課にご案内していただけますか？」
 ③ (住民が市役所に)「〇〇の件についてお教えしていただけますか？」
 ④ (住民が市役所に)「〇〇実施の件、お約束してください。」
 ⑤ (市役所が住民に)「市民の皆様にもこれでご安心いただけると思います。」
 ⑥ (市役所が住民に)「市民の皆様も是非ご出席くださいますよう、お願い致します。」
 ⑦ (市役所が住民に)「市民の皆様にも是非ご利用していただきたいと思います。」
 ⑧ (市役所が住民に)「市民の皆様にもきっとご満足していただけると思います。」
 ⑨ (市役所職員が住民に)「そちらでお待ちしていただけますか。」

上記の①～⑨の下線部の表現に関して、「自然な言い方」「不自然な言い方」「どちらとも言えない」で回答を求めた。集計に関しては、「自然な言い方」を2点、「どちらとも言えない」を1点、「不自然な言い方」を0点として集計した。はじめに全体の得点状況について示す。

表 4-1 「お／ご～する」に関する自然度平均

| 調査に用いた表現形 (略記) | 平均値 | 標準偏差 |
|----------------|------|------|
| ①ご対処していただきたい | 0.37 | 0.75 |
| ②ご案内していただけますか | 0.43 | 0.82 |
| ③お教えしてください | 0.47 | 0.83 |
| ④お約束してください | 0.78 | 0.95 |
| ⑤ご安心いただける | 1.79 | 0.58 |
| ⑥ご出席くださいますよう | 1.78 | 0.59 |
| ⑦ご利用していただきたい | 1.72 | 0.67 |
| ⑧ご満足していただける | 1.64 | 0.74 |
| ⑨お待ちしていただけますか | 1.21 | 0.93 |

(N = 92)

まず平均値を見ると、一見して⑤・⑥・⑦・⑧・⑨が高いことがわかる。このうち⑤と⑥は「お／ご～する」の形式をとっておらず、いわゆる「正用」であり、その他は規範的立場からは「誤用」とされるものである。これを見ると、「正用」とされる表現形が「自然度」が高いのは当然としても、拮抗して⑦・⑧・⑨も高い値を示している。⑦・⑧・⑨の特徴を挙げてみる。

表 4-2 「自然度」の高い「誤用」表現の比較

| 調査に用いた表現形 (略記) | 自然度 | 謙譲語○× | 文末の表現形 |
|----------------|------|----------|--------|
| ⑦ご利用していただきたい | 1.72 | ×「ご利用する」 | と思います。 |
| ⑧ご満足していただける | 1.64 | ×「ご満足する」 | と思います。 |
| ⑨お待ちしていただけますか | 1.21 | ○「お待ちする」 | ませんか。 |

(注)「謙譲語○×

表 4-1 および表 4-2 から、「お／ご～する」の中に入る動詞のタイプが自然度に大きく作用していることがわかる。というのは、①～④は「お／ご～する」の形で謙譲語の用法を持つものであり、それらが自然度が極端に低いことを考えると、「お／ご～する」が謙譲語の用法を持たないものが尊敬語の「正用」として認知されやすい傾向にあることが予測できる。すなわち、「お／ご～する」が謙譲語の用法を持たないものは、謙譲語との干渉が起こらず、尊敬語として認知されやすいという予測である。

だが、それでは、⑨が「お／ご～する」で謙譲語としての用法を持ち（「お待ちする」）ながら、①～④と異なり自然度が高い理由は説明不可能である。蒲谷(1992)では、「お・ご～する」に関わる誤用の問題」として、以下のように述べている。

それが誤用かどうかの判断基準は、用いられる動詞や名詞が「お・ご～する」形式をとる際に客体上位語としての用法があるかどうか、ということになると思われる。あれば誤用、なければ誤用とは言いがたい（無論、正しい用法というのではない）ということである。

それに続けて、『ご指導して下さる』は誤用、『ご利用してください』は誤用とは言えない（同）とし、「お／ご」に後接する語の違いにより「お教えしてください」のような形は実際には出にくいとしている。

こうした見解に従うならば、確かに、③「お教えしていただけますか」は平均値が 0.47 であり、自然度は低い。だが、同タイプの⑨「お待ちしていただけますか」は自然度 1.21 である。このような大差が生ずる理由としては、以下の点が想定可能である。

「お／ご～する」に後接する表現形の違いによる影響]

1. 「くださる」と「いただく」がそれぞれ「くれる」と「もらう」の敬語形であり、それらに関する敬度の判断の違いが両者の自然度の差を生んだ。

[場面設定の違いに伴う人間関係に対する判断の影響]

2. ③では、「住民が市役所に」、⑨では「市役所職員が住民に」という場面設定上の違いがあり、場面に対する被調査者の認識・判断が自然度の差を生んだ。

[調査文の配列上の影響]

3. ⑨の前に自然度が高い表現が続いており、⑨の判断時にそれらからの影響（「キヤリーオーバー効果」）により、自然度が高くなった。

上記1～3の要因の影響により、③と⑨の自然度の差が出たことが想定できる。だが、これはあくまで根拠の乏しい推測、憶測に過ぎず、納得できる解釈になるとは言いがたい。

そこで、次に各表現について、自然度判断の背後にある潜在因子の探索、意識構造の解明の手段の一つとして、因子分析^{注5}を行った結果を提示する。因子分析を用いることにより、上記3のような影響（キヤリーオーバー効果）から自由な解釈が可能になるはずである。

以下に結果を示す。

表 4-3 「お／ご～する」に関する因子分析結果

| 調査に用いた表現形（略記） | 因子 | | |
|---------------|--------|--------|--------|
| | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 |
| ①ご対処していただきたい | 0.006 | 0.182 | 0.488 |
| ②ご案内していただけますか | 0.028 | 0.025 | 0.545 |
| ③お教えてください | 0.055 | 0.313 | 0.188 |
| ④お約束してください | 0.134 | 0.346 | 0.070 |
| ⑤ご安心いただける | 0.585 | 0.110 | -0.057 |
| ⑥ご出席くださいますよう | 0.588 | 0.171 | 0.125 |
| ⑦ご利用していただきたい | 0.693 | 0.153 | 0.214 |
| ⑧ご満足していただける | 0.592 | 0.290 | -0.200 |
| ⑨お待ちしていただけますか | 0.315 | 0.803 | 0.089 |
| 因子負荷量二乗和 | 1.640 | 1.045 | 0.689 |
| 寄与率（%） | 18.222 | 11.607 | 7.653 |

（注）因子抽出法は、主因子法を用い、バリマックス回転を行った。（KMO = 0.705）

KMOはKaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度であり、0.5以上で妥当性が確保される。

数値はそれぞれ小数第4位を四捨五入している。

因子分析の結果、3因子が抽出された。次にそれぞれの因子について検討・解読する。まず、第1因子であるが、一見して、⑦と⑧の因子負荷量が大きく、（それぞれ0.693と0.592）、拮抗して⑥と⑤の「正用」表現（それぞれ0.588と0.585）が続いている。その次にくるのが⑨であるが、他と比べて明らかに負荷量が小さい（0.315）ことから、別にして扱うことが可能である。よって⑤・⑥・⑦・⑧の表現形に含まれた要素を比較し

てみることにする。(⑤・⑥・⑦・⑧は、「お／ご～する」の部分が謙譲語の用法を持たないものである。)

表 4-4 第1因子に関わる表現形の比較

| 調査に用いた表現形 (略記) | 用法 | 謙譲語○× | 文末の表現形 |
|----------------|----|----------|----------|
| ⑤ご安心いただける | 正用 | ×「ご安心する」 | と思います。 |
| ⑥ご出席くださいますよう | 正用 | ×「ご出席する」 | お願い致します。 |
| ⑦ご利用していただきたい | 誤用 | ×「ご利用する」 | と思います。 |
| ⑧ご満足していただける | 誤用 | ×「ご満足する」 | と思います。 |

(注)「用法」欄は、「正用」か「誤用」か、の判断である。また、「謙譲語○×

欄はその形式が謙譲語として成立するか否か、であり、「文末の表現形」は調査文の下線部分の文末の表現形である。

表 4-4 を見るとわかるが、これだけでは、⑦と⑧の因子負荷量の大きさの説明は困難である。そこで、表現形の動詞部分に着目するものとする。すると、⑦と⑧は、動詞部分がそれぞれ「利用する」「満足する」であり、他の⑤と⑥と比較して、語彙的意味として、聞き手にとって利益性の高い内容となっている。例えば⑤の「安心する」は、本来そうあるべき状態(安心できる状態)に戻ったことを含意しており、その点で⑦と⑧と比較して、聞き手の利益性は低いと言える。リーチ(1987)では、「丁寧さの原則」として「他者に対する負担を最小限にし、他者に対する利益を最大限にせよ」としているが、聞き手にとって利益が大きいとみなされることは、必然的に高い待遇性をも有することになると言える。

このような点から言えば、「お／ご～する」形を持つ表現の自然度比較では、「お／ご～する」に関わる判断が主要因となりながらも、必ずしもそれだけではないことが指摘できる。動詞の語彙的意味が有する、「聞き手に対する利益の供与」という、いわば「物理的恩恵性」の大きさと、「くださる」「いただく」の違い、当該表現中の「お／ご～する」が謙譲語としての用法を有するか否か、それと、文末表現によって、総合的に判断されている可能性が高い。

つまり、「お／ご～する」に関わる判断を主要因としながらも、その他の要因も副次的に影響していると言えるのである。文末表現の「と思う」も、直接的に待遇価に関わる表現である想定されるが、この点についてはさらなる検討が必要であり、解釈の可能性といった形にとどめておきたい。

さて、以上の点から、第1因子についてまとめることにする。これまで因子解説に関わる可能性があるとして読みとってきた要素について整理すると、以下の3点が挙げられる。

- i) 「お／ご～する」形が謙譲語としての用法を持つものと持たないものの違い。
- ii) 表現形中の動詞の語彙的意味の持つ聞き手にとっての利益性の高さの違い。
- iii) 敬語要素「いただく」「くださる」から聞き手が感ずる待遇価の違い。

このうち、まず、⑤・⑥・⑦・⑧の、①・②・③・④に対する因子負荷量の大きさから、i が、次には⑦と⑧の因子負荷量の大きさから、ii が作用し、その周辺的なものとして、若干ながらiiiが関わっていることがわかる。

因子分析は、話者が自然度を判断する際にどのような要因が作用しているかを遡及的に想定するものであり、因子に対する総合的判断において恣意性が介入する危険性があることは否めない。そうした点も考慮し、ここでは解釈・判断の単純化は避けておきたい。以上が第1因子である。

次に第2因子に着目する。第2因子では⑨が因子負荷量(0.803)で突出している。⑨だけが突出する理由を挙げるならば、これが前述した調査票上の項目配列上の問題(「キャリアオーバー効果」)であると言える。よって特に第2因子はこの場合特に重要視する必要はない。

最後に第3因子である。第3因子では、①と②が高い。両者はともに要求・依頼文である。⑦と③がそれに続いているが、表現全体が有する聞き手に対する依頼の程度は①と②より小さいと言える。よって、第3因子は、聞き手に対する要求・依頼度の違いであると言える。要求・依頼も聞き手に対する負担度から、待遇価に関わってくる問題である。第3因子から読みとれることを整理すると、

- iv) 表現形の文タイプの違い。要求・依頼性が強いかな否かの違い。

ということになる。

このように、「お／ご～する」の自然度判断においては、その形が謙譲語の用法を持つかどうかを中心にして、表現形全体の待遇価の高さに対する判断が副次的に、かつ強さの違いを持って行われていることがわかる。

なお、調査の際、別の形で調査文として入れた「先生にご指導していただいたおかげで論文が書けました」も含めて、同方法で因子分析を行った結果、第1因子中の、⑦と⑧の次の群にランクされた。表現は「ご指導する」が使用機会が限られながらも(例えば趣味などに関して目上を指導する場合)謙譲語としての用法があることなども考えると、やはり、表現形全体の待遇価が判断に大きく影響していることが想定できる。

以上が、「お／ご～する」を含む表現形の自然度判断の要因と意識の分析結果である。

4. 2 「お／ご～される」の認知判断と尊敬語転用

次に、「お／ご～される」に関し、その認知判断と尊敬語転用について考察する。

これに関しても、文タイプ、および、「お／ご～される」の中に入る動詞のタイプを様々に変えて調査文を設定した。調査文は以下の通りである。

「お／ご～される」の認知判断に関する調査文

- ① (学生が教員に)「先生は明日ご出発されるのですか。」
- ② (学生が教員に)「先生はバスをご利用されていますか。」
- ③ (学生が教員に)「先生は何時の電車にご乗車されますか。」
- ④ (学生が教員に)「先生はもうあの方へはご連絡されたのですか。」
- ⑤ (学生が教員に)「先生はあの方とはお約束されたのですか。」
- ⑥ (学生が教員に)「先生はもうあの方にはお話されたのですか。」
- ⑦ (学生が教員に)「先生はもう〇〇市にお移りされたのですか。」

上記の①～⑦の下線部の表現に関して、「お／ご～する」同様に「自然な言い方」「不自然な言い方」「どちらとも言えない」の選択肢で回答を求めた。集計に関しても、「お／ご～する」同様、「自然な言い方」を2点、「どちらとも言えない」を1点、「不自然な言い方」を0点として集計した。なお、下線部分は、「お／ご～される」以外の要素も含んでいるが、いずれも質問形であり、「です・ます」を含んでいる点で共通している。

全体の得点状況について示す。

表 4-5 「お／ご～される」に関する自然度平均

| 調査に用いた表現形 (略記) | 平均値 | 標準偏差 |
|----------------|------|------|
| ①ご出発されるのですか | 1.13 | 0.94 |
| ②ご利用されていますか | 0.89 | 0.97 |
| ③ご乗車されますか | 0.95 | 0.95 |
| ④ご連絡されたのですか | 1.26 | 0.93 |
| ⑤お約束されたのですか | 1.32 | 0.92 |
| ⑥お話されたのですか | 1.28 | 0.94 |
| ⑦お移りされたのですか | 0.37 | 0.73 |

(N = 94)

「お／ご～する」の場合と比較して、総じて標準偏差の値が大きく、判断に個人差が見られる。菊地(1994)では、「お／ご～される」について、様々な類似形からの心理的影響を挙げた上で、「およそ敬語を使い慣れた人なら、まず使わない形である(あった)ということは、いえそうに思う。」(p.413)としている。文化庁調査(1997)では、「お／ご～される」を用いた形について、「正しく使われている」を回答した全体平均は72.6% (東北地域は77.4%)であり、中でも高校生の男子と40代以上の男女が全般的に高くなっている。表4-5に戻ると、⑦の「お移りされた」が他の表現より自然度が極端に低くなっており、標準偏差も小さい。予想されることとしては、⑦だけが、「お／ご～される」の「お／ご～」と「される」を切り離した際、「お／ご～」の独立性が低く(「お移り」)、単独で名詞として用いられない表現であることが挙げられる。

次に「お／ご～する」と同様、因子分析の結果を提示する。

表4-6 「お／ご～される」に関する因子分析結果

| 調査に用いた表現形(略記) | 因子 | | |
|---------------|--------|--------|--------|
| | 第1因子 | 第2因子 | 第3因子 |
| ①ご出発されるのですか | 0.526 | 0.343 | 0.005 |
| ②ご利用されていますか | 0.924 | 0.065 | -0.087 |
| ③ご乗車されますか | 0.654 | 0.184 | 0.237 |
| ④ご連絡されたのですか | 0.174 | 0.690 | -0.115 |
| ⑤お約束されたのですか | 0.324 | 0.743 | 0.084 |
| ⑥お話されたのですか | 0.022 | 0.535 | 0.251 |
| ⑦お移りされたのですか | 0.038 | 0.040 | 0.528 |
| 因子負荷量二乗和 | 1.695 | 1.473 | 0.426 |
| 寄与率(%) | 24.215 | 21.036 | 6.084 |

(注) 因子抽出法は、主因子法を用い、バリマックス回転を行った。(KMO = 0.690)

数値はそれぞれ小数第4位を四捨五入している。

以上のように、3因子が確認された。それぞれの因子について検討するものとする。第1因子では、②の因子負荷量が突出し、その次に③と①が続いている。①・②・③は、ともに「お／ご～」に「する」を付加した「お／ご～する」の形が謙譲語としての用法を持たないものである。ただし、⑦も「お移りする」とした場合、謙譲語の用法は持たないが、因子負荷量は小さい。

①と②および③を比較すると、②は、①と③に比較して、質問内容として、聞き手の判断領域に対する侵入度が低いということが挙げられる。というのは、①「出発する」と③「乗車する」は、それが義務的に決定している行為でない限り、行為の決定・遂行

権は聞き手に属しており、いわば聞き手領域性の強い表現^{注6}であると言える。他方、②の「利用する」は、聞き手の個人的行為でありながら、「バスを利用する」行為全体として見た場合、バス利用に関する一般性の高い質問ととれるものであり、①と③に比較して、聞き手領域に対する侵入度は低いといえる。とは言え、この解釈は②の突出性に関し、あくまで「可能性を持つ解釈」であり、根拠に乏しいことは事実である。

それでは、②の突出要因は何か。もう一度自然度の平均値を確認する。すると、④・⑤・⑥が高く、②はむしろ低い。また、⑦「お移りされた」の低さに関して、「お移り」の独立性が低いことは前に述べた。それらを考慮すると、「お／ご～される」の認知判断については、「お／ご～」と「される」とを一旦分割し、その後に加算しているという予測が可能である。

そのようにみた際、両者の間に入る語が問題となるが、この場合の「される」は「する」の尊敬語と解釈できるから、被調査者が「される」の前に挿入する可能性の最も高いものは「ヲ格」の格助詞ということになるはずである。つまり、被調査者の認知・判断に関して②と③を例にとり、前後を分割、ヲ格挿入すると、

(4) ②' *先生はバスをご利用をされていますか。

③' 先生は何時の電車にご乗車をされますか。

となる。ヲ格挿入により、②は、「バスを」のヲ格と「ご利用を」のヲ格という、いわゆる二重ヲ格制約に反することになり、非文になってしまう。このタイプは①～⑦の質問文の中で②のみであり、このことが、②が最も因子負荷量が大きくなっている理由であると考えられる。

つまり、第1因子では、「お／ご～される」を分割し、加算的に判断する際、二重ヲ格制約に反するかどうか、が主要因となっていると言えるだろう。そして、その次に、①・②・③に共通した因子負荷量の大きさから、「お／ご～」が「する」が結びついた際の謙譲語の用法を持つか否か、という点が挙げられる。そのように解釈すると、①および③に比較して②の因子負荷量が突出している要因と、①と③が拮抗してそれに続いている理由を整合的に説明できる。

菊地(1994)では、「ご説明される」を例に挙げ、「ご説明をされる」などの類推から「ご説明される」を作る心理が働くのだろう、との説明をしているが、この結果は、そうした類推を裏付けるものであり、認知判断の際に、それが最も大きな要因として作用していることが確認できるのである。被調査者は、「お／ご～される」について自然度判断する際、意識的にせよ、無意識的にせよ、前後を分割してヲ格挿入を行っており、その際に表現として自然なものかどうか、という判断を働かせているのである。

次に第2因子を見る。因子負荷量が大きいのは、④・⑤・⑥である。いずれも他の選択肢とは異なり、「お／ご～」と「する」を承接させると、謙譲語としての用法が成立するものである。

ちなみに、「お／ご～される」の尊敬語用法を「誤用」とする理由としては、次の二つの立場がある。

- | |
|---|
| a. 「お／ご～される」は過剰な二重敬語であり、不相当とする立場 窪田・池尾（1971）など |
| b. 謙譲語形「お／ご～する」に「れる」を付けた形にあたるので誤りという立場 文化庁『ことばシリーズ5』（1976）など |

上記 a は、二つの敬語要素を認めるという点で、「お／ご～される」を要素の加算的なものと捉える姿勢が根底にあり、他方 b は、「お／ご～する」がひとまとまりの表現であることを前提にしている。このうち、第 1 因子の分析結果は、a の立場を裏付けるものであり、また、b の立場に関わる要因は第 2 因子であると見ることができる。したがって a・b の立場はそれぞれ第 1 因子と第 2 因子に関連していることが確認できる。

最後に第 3 因子であるが、因子負荷量が大いなのは⑦である。⑦は、「お／ご～される」を分割して考えた際、「お／ご～」の部分の独立性が低いものであった。したがって⑦は、第 1 因子に関わる判断を行った際にふれた「お／ご～」部分の独立性の問題であることが確認できる。

以上、3 因子について被調査者の意識と関連づけて分析した。結果として、以下のことが確認できた。

- | |
|---|
| i) 「お／ご～される」を分割・加算的に判断し、ヲ格挿入を行った際、同格衝突を起こす（二重ヲ格制約に反する）か否かの違い。 |
| ii) 「お／ご～」が「する」と結びついた際、謙譲語としての用法を持つかどうかの違い。 |
| iii) 分割した際、「お／ご～」が独立した表現形となりうるかどうかの違い。 |

以上のように、「お／ご～される」を含む表現の自然度判断は、「お／ご～」と「される」とを分割する形で、敬語要素を加算的に捉えつつ、それに加えて、「お／ご～する」との干渉が働き、なおかつ「お／ご～」の部分の独立性が低いと不自然さが残るといった形で行われることがわかる。

なお、こうした判断に関する性別・年齢別の属性差、あるいは各種意識との関連性であるが、年齢層によって差があると思われる項目もあったが、各種検定の結果では、有意である、という程ではなかった。

以上が、「お／ご～される」を含む表現形の自然度判断の要因と意識の分析結果である。

4. 3 認知判断に関するその他の要因

ここまで、「お／ご～する」および「お／ご～される」の被調査者の認知判断の基準とそこに見られる意識構造について、特にそれらが尊敬語として受容されていく要因を中心に考察してきた。ここでは、それらに加え、認知判断に関する他の要因についてふれておく。

菊地(1994)では、「お／ご～する」について、

「…を(に・から・と・のために)」などにあたる〈補語〉を高め、相対的に主語を低める〈謙譲語A〉である。ただし、語によっては、「お仕事する・お料理する」などのように、謙譲語Aとしてではなく、単にいわば《上品》に述べるだけの美化語として使われるものもある。(p.282～p.283)

と述べている。「お／ご～する」が成立当初から尊敬と美化の用法が存在していたことは前述した通りだが、「お／ご～する」には現在も美化語として安定的に使用されているものも多く、「お／ご～する」の認知、判断にはそれらの存在が与える影響も考えられる。

また、尊敬語は、基本的に話手と〈主語〉の関係に属することであるが、謙譲語は、話手と〈主語〉それに〈補語〉の三者が関わるものであり、関わる方面についての認知・判断の負担は尊敬語に比して大きいことは確かである。そうした要因も「お／ご～する」の認知判断に関わっているはずである。

こうした「お／ご～する」形式と謙譲語に固有の問題もあることは確かであるが、それについては別の機会に論じたい。

5. まとめと考察

これまで述べてきたことを整理すると以下になる。

(I) 「お／ご～する」の自然度に関する認知判断

- i) 「お／ご～する」形が謙譲語としての用法を持つものと持たないものの違い。
- ii) 表現形中の動詞の語彙的意味の持つ聞き手にとっての利益性の高さの違い。
- iii) 敬語要素「いただく」「くださる」から聞き手が感ずる待遇価の違い。
- iv) 表現形の文タイプの違い。要求・依頼性が強いか否かの違い。

(II) 「お／ご～される」の自然度に関する認知判断

- i) 「お／ご～される」を分割・加算的に判断し、ヲ格挿入を行った際、同格衝突を起こす(二重ヲ格制約に反する)か否かの違い。
- ii) 「お／ご～」が「する」と結びついた際、謙譲語としての用法を持つかどうかの違い。
- iii) 分割した際、「お／ご～」が独立した表現形となりうるかどうかの違い。

上記のそれぞれを通時的な変化要因ともみなすことが可能ならば、それぞれについて以下のようにいえる。

「お／ご～する」(I)の尊敬語用法に歯止めをかける要因としてはi)が挙げられるが、その他は、尊敬語用法を容認するものである。

同様に、「お／ご～される」の尊敬語用法に歯止めをかけるものとしては、i)とii)が挙げられる。ただし、例えばi)について言えば、要因自体としては大きいものの、実際の発話および文において要因が作用する機会が少なければ、それは歯止め要因としては小さなものとなる。作用しなければ、むしろそれは、二つの敬語要素を持つという意味で、尊敬語化の加速化要因ともなりうるものであり、その事は、表現形④・⑤・⑥の自然度平均の高さに表れているとみることができるのである。その他の要因についても同様の面を持っていることは確認しておきたい。

敬語は、菊地(1994)にもあるように、〈語形〉〈機能〉〈適用〉の三つの観点でとらえることが必要であり、話者も実際の使用にあたっては、意識せずともこうした観点で総合的に判断しつつ使用しているものと思われる。それゆえ、話者の心理と認知・判断に基づく本調査での分析は、今後の謙譲語の変化傾向に有益な示唆を与える可能性を持っているのかもしれない。

ただし、今回の調査と分析は、被調査者を標本とみなした場合の現時点での意識・判断傾向であり、それをそのまま通時的な変化に適用することはできない。だが、現時点での話者の心理をふまえた認知・判断傾向が変化しないで今後も続いていくと仮定できるならば、予測すること自体は許されてよいだろう。

ここで、これまでの結果をもう一度確認しつつ、今後の変化の方向性について探るものとする。

まず、「お／ご～する」に関してであるが、上記(I)から、尊敬語としての使用を加速化する要因としては、ii)・iii)・iv)が考えられる(iii)とiv)は、「他の敬語要素」という形でまとめることが可能)。これらは、「お／ご～する」が含まれた表現について、「お／ご～する」以外の要素に着目するものである。これらの要因が強まると、「お／ご～する」は、謙譲語から尊敬語へ、というよりも、対者敬語化の流れに添う形で、

菊地(1994)のいう〈対話の敬語〉化し、「お／ご～する」と言えば丁寧な趣が出る、といった認識に変わってしまう可能性を持っている。他方で、「お／ご～する」を謙讓語として保持させる要因としてはi)がある。i)は、「お／ご～する」の形は基本的に謙讓語である、という認識の保持であり、「お／ご～する」の尊敬語化に歯止めをかける要因となっている。i)は他の要因と比較して、自然度の認知・判断に最も影響する因子である。

だが、例えば、『日本語基本動詞用法辞典』（大修館書店）を例にとると、謙讓語の「お／ご～する」となりうるのは、記載の全動詞の約2割弱である。尊敬語となりうる動詞の方が謙讓語となりうる動詞より比率が高いと思われることとあわせ考えると、「お／ご～する」が取り得る動詞の比率の低さは、i)の意識が働く機会の少なさと重なってくる。そうした面も考慮すると、「お／ご～する」は、頻用される一部の表現のみが、慣用的に謙讓語として残っていく可能性が高いとも言えるだろう。

次に「お／ご～される」(II)であるが、自然度の認知・判断の際、i)およびiii)から、「お／ご～」と「される」の部分に分割し、加算的に判断している傾向が確認されている。二重ヲ格制約は歯止めにはなるが、分割によって、後半部分「される」が、いわゆる「レル敬語」化する可能性が高く、今後の尊敬語使用を加速化する要因になるものと言えよう。尊敬語化に歯止めをかける要因としては、「お／ご～される」の「お／ご～」に「する」を付加した場合に謙讓語となるかどうか、という認知・判断であるii)が挙げられる。ただこれは「お／ご～する」の謙讓語としての機能の保持を前提として働くものでもある。したがって、単独で作用するものとは言い難く、「お／ご～する」の今後の変化と密接に関連しているのである。

以上、「お／ご～する」と「お／ご～される」の今後の変化に関する要因について、尊敬語としての使用を加速化する要因と、そうした傾向に歯止めをかける要因について整理した。

最後に認知・判断要因を今後の変化傾向と関連づけると図5-1のようになる。

6. 今後の課題

今回の結果と分析は、調査の一部に基づくものであるが、今後は、謙讓語固有の問題はもとより、話者の敬語使用に関する意識と関連させたものも含め、詳細に検討していく予定である。

また、被調査者の範囲を拡大、あるいは調査地域を変えて実施し、今回の調査・分析と有意差があるかどうかについても考察したい。

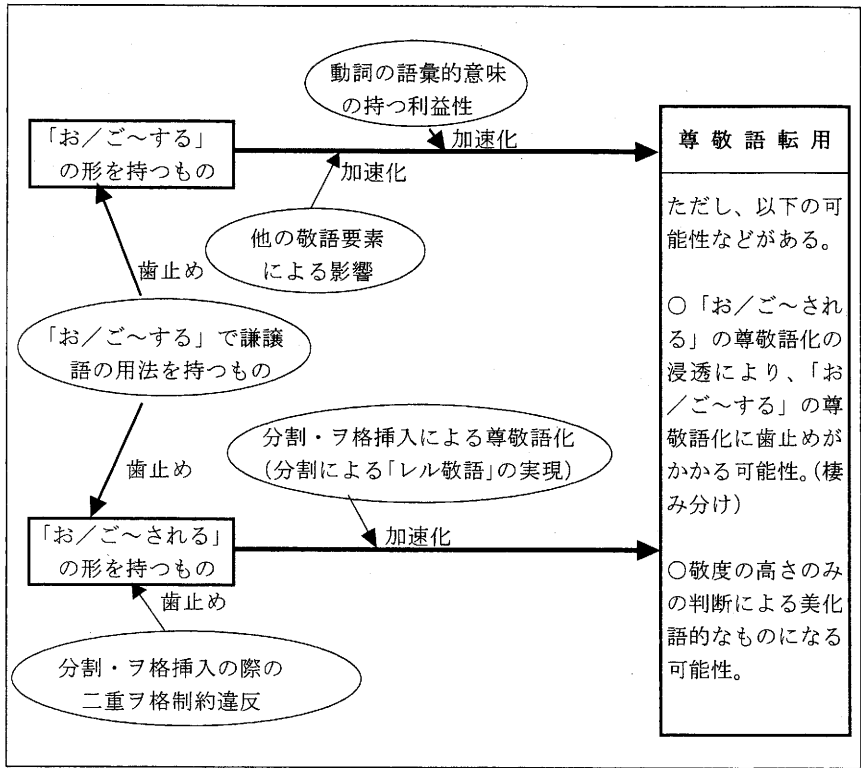


図 5-1 「お/ご~する」と「お/ご~される」の認知判断と尊敬語転用

(注) 上図の楕円は認知・判断に関わる要因であり、大きさはほぼ要因の大きさを表す。要因間で大小比較が不可能なものは、楕円の大きさを同じにしている。

「お/ご~される」に関わる各要因について補足説明する。

- ①「分割・ヲ格挿入の際の二重ヲ格制約違反」とは、「お/ご~」と「される」の分割に基づく自然度判断によるもの。例えば、「バスをご利用をされる」等になるため、「ご利用される」は不自然とされる。
- ②上記①に関連して、二重ヲ格制約に反しなければ、「お/ご~」に「レル敬語」が加わった形と判断されやすい。そのため、分割による判断は、積極的に尊敬語化の加速化要因として作用する面もあわせ持つ。

[注]

- 注1：本稿での用語および枠組みについては基本的に菊地(1994)に従うものとし、敬語上の主語を〈主語〉、「…を(に・から・と・のために)」にあたる高められる対象を〈補語〉とする。
- 注2：小松(1967)および小松(1968)に詳細な記述がある。
- 注3：t検定は、t分布という理論的に考えだされた分布に従う検定統計量を用いた二つの母集団の検定に用いるものであり、2つの母集団の平均値と標準偏差、各標本数によって決定する。
- 注4：信頼性係数は、関心下のテストが相対的にどの程度真の個人差を捉えることができるのかを表す指標である。ここでは、平均値と標準偏差、分散を用いたクロンバックの Alpha 係数を採用しており、信頼性係数が1に近いほどテストの信頼性が高いと考えられる。本論文での「お／ご～する」に関する調査、「お／ご～される」に関する調査の信頼性係数は、それぞれ、0.648、0.715となっており、十分に信頼性は高いと言える。
- 注5：因子分析は多変量解析の一手法であり、多数の変数から得られたデータを小数の因子とよばれるモデル上仮説的に構成された変数によって説明しようとするものである。各数値は変数と因子の相関係数の形で表される。なお、バリマックス回転によって得られた因子は、因子間の相関が0である。
- 注6：鈴木(1997)に〈聞き手の領域〉に関する段階性についての記述がある。

[参考文献]

- 菊地 康人 (1994) 『敬語』 角川書店 引用は講談社学術文庫版(1997)による
- 小松 寿雄 (1967) 「「お…する」の成立」『国語と国文学』44巻4号 東京大学国語国文学会
- 小松 寿雄 (1968) 「「お…する」「お…いたす」「お…申し上げる」の用法」『近代語研究』2集
- 蒲谷 宏 (1992) 「「お・ご～する」に関する一考察」
『辻村敏樹教授古稀記念 日本語史の諸問題』 明治書院
- 窪田 富男・池尾 スミ (著作権者は文化庁) (1971) 『日本語教育指導書 2 待遇表現』
大蔵省印刷局
- 文化庁 編 (1976) 『ことばシリーズ5 言葉に関する問答集2』 大蔵省印刷局
- G. N. リーチ (1987) 『語用論』池上嘉彦・河上誓作 訳 紀伊國屋書店
- 鈴木 睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」
『視点と言語行動』田窪行則 編 ころしお出版

[参考資料]

- 小泉 保・船城 道雄・本田 晶治・仁田 義雄・塚本 秀樹 編 (1989)
『日本語基本動詞用法辞典』 大修館書店
- 文化庁文化庁国語課 (1997,1998,1999,2000,2001) 『国語に関する世論調査』

(いとう ひろみ 大学院人文社会系研究科 博士課程1年)

活用形・付属語のアクセント

—東京方言と宮城県登米^{とめ}市方言を例に—

佐藤 奏

はじめに

本稿は、学校文法でいう“付属語”のアクセントの記述方法を提案するものである。

“付属語”（学校文法の用語法による場合は必ずこのように“ ”で括る）を「活用形」と「付属語」とに分ける。活用形については屋名池誠の述部の形態・アクセント記述を用いる。第1節で用語の定義をかねて概略的に示す。

第2節で付属語のアクセントの記述法について述べる。これは活用形とは独立の方法である。第1・2節の例示には東京方言を用いる。

第3節では宮城県登米市方言を具体例としてとりあげ、記述を試みる。この方言は一部の接辞と語尾および補助動詞が複雑なアクセントをとるので、それに関してやや詳しく述べる。第3節は前稿＝佐藤奏(2008.3)の続編という意味合いを併せ持つ。なお前稿から考えが変わった点があるので【補記1】【補記2】に述べた。

第4節では、“付属語”アクセントの記述方法について、本稿と関連づけながら先行研究を概観したのち、筆者の立場を明らかにする。主張は次の通りである： 付属語のアクセント記述は「アクセント単位」に着目することが必要である。そのことにより、当該方言の自立語アクセントとの一貫性、つまり一方のアクセント体系としての一貫性を持った記述ができる。

1. 活用形の形態・アクセント分析

本稿は「活用形アクセント」の記述に屋名池誠の一連の論考——屋名池(1986.10, 1987.1, 1987.9, 1988.1, 1988.2, 1988.3, 1988.9, 1988.11, 1989.2, 1992.6, 2005.10)——の述部活用形の形態・アクセント分析を利用する*1。議論の前提とし、また各種定義を行う都合上、やや長くなるが概略を整理して示す。

*1 同様の分析はほかに中山昌久により行われている。中山(1981.3, 1982.1, 1984.1, 1988.2, 1992.2, 1994.2, 1995.2, 1999.2)などを参照。

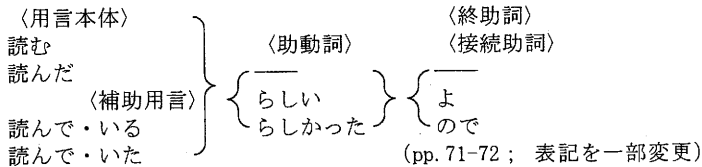
1.1. 活用形の形態分析

1.1.1. 概観

大まかな枠組みについては屋名池(2005.10)に従う。

(1) 述語＝用言複合体は

用言本体——補助用言——助動詞——終助詞・接続助詞
という構成をもっている。用言本体・補助用言・助動詞・助詞はそれぞれ「語」である。[…]



(2) 「語」の内部は、意味・機能を表す形態素を順次つないだ形をしており、それぞれの形態素の形はほとんど一定で変わらない。語形変化は形態素と形態素の境界部分で起こるにすぎないのである。

[…]

活用語を構成している形態素はその出現位置により、「語」の先頭に現れる「語幹」、末尾に現れる「語尾」、その中間に現れる「接辞」に分けることができる。接辞は一定の順で複数個現れることもある。

たとえば「読む」は'jom-u, 「読ませる」は'jom-ase-(r)-u, 「読ませられる」は'jom-ase-(r)-are-(r)-uと形態素に分解でき、'jom-が語幹、-ase-と-are-が接辞、語尾が-uである。(p. 72 ; 表記は本稿に合わせた)

これを受けて本稿では次のように規定する。

- (3) a. 「用言本体」「補助用言」「助動詞」「助詞」は屋名池の用語法による。
b. 助動詞・助詞およびコピュラは「付属語」。
c. 用言本体および体言は「自立語」。補助用言も一応自立語に入れる。

本稿で「活用」は

- (4) 語幹と語尾、あるいは語幹と接辞、接辞と語尾が結びつくこと、また、それによって1「語」を形成すること

をさし、そのようにしてできた語を「活用形」と呼ぶ^{*2}。たとえば/kakimasu/は動詞kakの活用形のひとつである。

参考までに、(2)のようにして東京方言の活用語を要素に分解した一覧は【表1】のようである。屋名池(1987.9)などを参照しつつ筆者の責任で作成した^{*3}。助詞は省略。記号 &, %, \$^{*4}は「動詞活用」「形容詞活用」「名詞活用^{*5}」を表す(屋名池1987.1, 1988.1, 2005.10を参照)。これら分解された活用形の要素とその連結は、表層音韻レベルより1段「奥」のレベルであり、/ /に入れずに示すものとする。助詞(や名詞)に関してはこのレベルを想定する必要はないが、活用語に揃えてこのレベルで記述することがある。

【表1】

| 《語幹》 | 《接辞》 | 《語尾》 |
|---|--|---|
| ◇用言本体 kak&, tob&, 'oki&, 'ake&, ... samu%, 'aka%, ... zaNneN\$, kiree\$, gaQkoo=\$, ... | are&, ase&, e&, soo\$, mas&, na%, ta%, 'jasu%, niku%, 'o——'itadak&, 'o——s&, 'o——ninar&, 'o——, qar& | u, e/o, una, eba, oo, N, zu, zuni, naide, ni, na, nagara, 'o——, ta, tara, tari, taQte, te(→補助用言へ), cja(a) i, kaQta, kaQtara, kaQtari, kereba, ku, kute, kuQte, kucjaa, kutaQte |
| ◇補助用言 (CVCVte) mora 'w&, 'jar&, 'aje&, kure&, 'itadak&, kudasar&, sasi'aje&, 'ik&, 'juk&, ku&, 'ar&, 'i&, 'iraQsjar&, 'ok&, mi&, sima'w&, hosi% | | |
| ◇助動詞 'joo\$, soo\$, rasi%, daroo, desu, desjoo, kamo-sirena%, ni-cinjaina% | | |

*2 屋名池(2005.10:72)の用語法に近いが、屋名池は補助用言の派生なども「活用」に入れる。本稿ではそのような「別「語」の派生」は「活用」に含めないことにする。後述する活用形アクセントは1語内≒1アクセント単位内での規則をさすことになるので、「活用(形)」の指すものもそれに揃えようとするものである。とはいえこの用語法にそれ以上のこだわりはない。なおコンピュータの語形変化は「活用」とは呼ばないことにする。

*3 屋名池とは違って喉音素素/' /を用い、長音に/R/は用いず、チ・ツとチャ行には(/ti, tu, tj-/ではなく) /ci, cu, cj-/を用いる。引用部分も適宜置き換えた。屋名池のとする表記方法は音韻的規則を記述する上での合理性をもにらんでいるのかもしれない。しかし本稿はアクセント記述に重点を置いており、また両者の記述法は1対1に置換することができることもあり、この変更は特に問題ないと考えた。また東京方言にもガ行鼻音/ŋ/を認める。

*4 屋名池の用いる・, -, ◦から変えた。

*5 名詞はコンピュータ以外に、単に助詞が接続することもあり、本稿はそれをも取り扱う。「名詞活用」の用語と記号\$は、あとに接辞やコンピュータが続くときのみ用いることにする。なお「名詞活用」の用語は屋名池(2005.10)では使われていない。

東京方言のコピュラは(5)のように語形変化する*6。

(5) da, na, ni, de, daQta, daQtara, daQtari

1.1.2. 具体例

以上に関して最小限の具体例を(6)に挙げておく*7。要素の結合は・で示す*8。動詞活用要素のあとでは「活用部」(屋名池1987.1を参照)を()で示す。||は「語」の境界。

(6) a. 用言本体

「書く」「起きる」 kak&(φ)・u, 'oki&(r)・u
「書かせます」 kak&(φ)・ase&(φ)・mas&(φ)・u
「寒い」「寒ければ」 samu%・i, samu%・kereba
「寒そうだ」「寒がる」 samu%・soo\$・da, samu%・nar&(φ)・u

b. 用言本体(語尾te)+補助用言

「書いてみる」 kak&(音便)te || mi&(r)・u
「起きてくれなかった」 'oki&(φ)・te || kure&(φ)・na%・kaQta

c. 用言本体+助動詞

「起きられただろう」 'oki&(r)・are&(φ)・ta || daroo
「書かれたかもしれない」 kak&(φ)・are&(φ)・ta || kamo || sirena%・i

d. 用言本体+補助用言+助動詞+終助詞

「起きてみたでしょうか」 'oki&(φ)・te || mi&(φ)・ta || desjoo || ka

これ以降活用部と「語」の境界表示は必要のない限り略し、「kak&・ta%・i daroo」などと表す。

1.2. 活用形のアクセント分析

屋名池(1987.9, 1992.6:34ff.)を筆者の責任で要約して示す。

1.2.1. +アクセント・-アクセント

用言のアクセントで、東京方言の「起伏式」に相当するものを+アクセント、「平板

6 屋名池(2005.10:77)。/de'wa, demo/*の*'wa, mo/*は助詞に入れた。

7 'wおわりの要素を活用させた結果生じる'wi, 'wu, 'we, 'wo*については'wを削除する。その他、音便形の形成、不規則動詞(いわゆる“変格活用”をその中心とする)など方言によって諸規則を設けるが、省略に従う。屋名池(2005.10)を参照。

*8 ハイフンは後述の-アクセントと紛らわしいため避けた。

式」に相当するものを「アクセントと呼ぶ^{*9}。この+/-を「アクセント素性」と呼ぶ。語幹あるいは接辞のもつアクセント素性を当該語形の前に表示する（アクセントを問題にしない場合は省略）。

(7) +hasir&, -susum&, +siro%, -' aka%

1.2.2. 活用形のアクセントの指定

活用形のアクセントは

(8) アクセントの+/-ごとに、かつ、語尾ごとに；後ろから計数する形で決まっている。よって語尾について、潜在的な核^{*}を(9)のように指定し、(10)のように定める。

(9) CV*Cu*na, CV*CVta*ri, CV*Cu, CV*Ce/o, CV*CVta, Co**o, na*ŋara

(10) +アクセント類についたときは左から1番目の潜在核を、-アクセント類についたときは左から2番目の潜在核を、アクセント核として出現させる（2番目がない場合は出現しない）

具体例は(11)。この潜在的な核を本稿では「潜在核」、2つを区別するときには「第1（潜在）核」、「第2（潜在）核」とよぶことにする。潜在核に対して、実際に出現したアクセント核を特にいうときは「顕在核」とよぶ^{*10*11}。

以上のような、アクセント素性と潜在核との組み合わせで活用形のアクセントを形成するはたらきを「活用形アクセント」と呼ぶことにする。以下にいくつか例を挙げる^{*12}。

*9 金田一語彙の第2類、第1類に相当する。ただし金田一語彙の類別は語ごとに固有のものであるのに対し、+アクセント/-アクセントはアクセントの実態の方に合わせる。たとえば第2類の語でも東京方言で平板式になっている語は-アクセントに入れる。

*10 (見)+mi&などの短い語幹の場合、たとえばCV*CVtaで第1核を実現するための音形がないので、核が後ろへ動き/mi]ta/と実現する。「どの方言アクセントでも、基底核 [=潜在核] で指定される位置に音形がない場合、実在の最初のCVまで核が後退してあらわれる」(屋名池1987.9:102)。

*11 一部の接辞は自身がアクセント素性を持つ。(走)+hasir&,(進)-susum&に対して、

(i) /hasirima]su, susumima]su/

CV*Cu, CV*CVtaの第1潜在核が実現しているから全体は+アクセントである。よって、

(ii) mas&, ŋar&が+アクセントの性質を持っており、それより前に出てきたアクセント素性が打ち消されている

とする。アクセント素性は後に出てきたものがそこまで全体の+/-を決める(ase&, are&などは前のアクセント素性をそのまま素通しする)。

*12 東京方言の形容詞のアクセントはゆれが大きいですが、一々記述せず適宜代表形以示す。ゆれは潜在核の位置の違いとして記述することができる。

/]/はアクセント核（下げ核^{*13}）, /=/は無核を表す。

- (11) (走) +hasir&・CV*Cu /hasi]ru/
+hasir&・ase&・are&・CV*CVta /hasirasera]reta/
+hasir&・ta%・+nar&・CV*CVta /hasiritana]qta/
(進) -susum&・CV*Cu /susumu=/
-susum&・ase&・are&・CV*CVta /susumaserareta=/
-susum&・ta%・+nar&・CV*CVta /susumitana]qta/
(寒) +samu%・CV*i /samu]i/
+samu%・CV*CV*kaQta /sa]mukaQta/
(赤) -'aka%・CV*i /'akai=/
-'aka%・CV*CV*kaQta /'aka]kaQta/

屋名池(2005.10)はここからさらに流れ図を用いた一般化を行うが、本稿では潜在核での表記にとどめておく。

1.2.3. アクセント単位

- (12) アクセントの面からは1「語」=1アクセント単位と概略いえる。

(屋名池1988.1:203)

とある。「1語」が概略1アクセント単位をなすとは、

- (13) アクセント単位境界は「語」境界と重なる；「1語」は原則として複数アクセント単位とも、また、1アクセント単位未満ともならない

ことにほかならない（ただし後接する語の影響で、その語が結果的に1アクセント未満となることはある）。つまり活用形アクセントは原則として「1アクセント単位の内部のアクセントがどのように決まるか」についての規則である。

活用する語は、語幹のみあるいは語幹と接辞のみで発話されることはなく、ちょうど語幹～語尾というひとまとまりを最小単位として実現する。それがアクセントの面からみて1アクセント単位となることは自然なことであるといえる。

この原則(13)は大きな傾向性から経験的に帰納されるものであり、少数ながら反例(=アクセント単位境界が「語」の境界と重ならない場合)も存在する。アクセント単位の境界を記号|で表すことにすると、たとえば鹿児島方言の「ゴチャッ」は「ゴ|チャッ」(木部暢子1989.5=2000.2:47ff.)、鹿児島県黒島大里方言の「ゴトアイ」は「ゴ|トアイ」(上野善道2001.10=2002.3:96)だという。本稿3.3.3節に述べる例も(13)の反例とせざるを得ない。

原則(13)は第2節以降で述べる付属語アクセント分析の前提ともなる。

*13 核の名称と定義は上野善道(1989.5:202注1)に従う。

1.3. まとめ

屋名池誠による述部活用形の形態・アクセント分析の概略を示した。述部に限らず活用語一般にこの規則が成り立つ。ここで述べられたことはすべて「1語=1アクセント単位内のアクセントがどう決まるか」についての規則である。

では、語に別の語が連なるときにはどのようなアクセントを形成するだろうか。次節で述べるのは、付属語が連なるときに、アクセントの面からみた「連なり方のタイプ」にどのようなものがあるか、ということである。これは活用形のアクセントとは独立である。

2. 付属語アクセント

「付属語」、すなわち「助動詞」「助詞」「コピュラ」のアクセントについて述べる。これらのアクセント記述は屋名池(1987.9)に示されたものだけでは不十分で、付属語内部のアクセントに加え「接続型」を記述する必要がある。

2.1. 「接続型」の必要性

たとえば「走らせられたらしかった」hasir&·ase&·are&·ta rasi%·kaqtaのアクセントについて、これまで述べてきた活用形アクセントから

$$(14) \quad +\text{hasir}\&\cdot\text{ase}\&\cdot\text{are}\&\cdot\text{CV}\cdot\text{CVta} \quad +\text{rasi}\% \cdot \text{CV}\cdot\text{CV}\cdot\text{kaqta} \\ \rightarrow /hasirasera]reta/ /ra]sikaqta/$$

となるが、全体の実現形としては

$$(15) \quad /hasiraseraretara]sikaqta/ \quad (\text{全体で1アクセント単位})$$

となる。つまり、自立語（あるいは付属語）に付属語が接続する場合、それぞれの語のアクセントを単純に並べるだけでは十分ではない。一般に付属語は自立語と違って必ずしも自分自身が独立したアクセント単位をなすとは限らず、rasi%のように「前接アクセント単位と融合し、かつアクセントを自分のものに引き寄せる」タイプなどがある。

付属語が前接語に対してアクセント上 どのように付くかという特徴を「れんせつがた接続型」と呼ぶことにする。「接続型」は後接する付属語側の特徴として記述されるものである。たとえばrasi%の活用形が前接語に対して付くときの上のような特徴は「rasi%の接続型」として記述される。

「接続型」はアクセント核に関する特徴ではなく、

$$(16) \quad \text{接続部分のアクセント単位構成上の特徴}$$

である。具体的には、「前のアクセント単位に融合するか、あるいは付属語自身が独立

して1単位をなすか」といった類別である。

付属語アクセントの記述は、付属語自身のアクセント(例, /rasili/)と「接続型」(例, 支配型)の記述とからなる。付属語が活用する場合は、自身のアクセントは活用形アクセントによって決まり、そのあとで(語幹の)接続型によって最終的なアクセントが定まる。

2.2. 「接続型」の定義

東京方言の付属語の接続型を次のように定義する。記号|はアクセント単位境界。

(17) a. 独立型 前接アクセント単位とは別の、独立した1アクセント単位をなす。

アクセント上は自立語と違いがない。無印

例, /daro]o/ : /'jama]/ + /daro]o/ → /'jama] | daro]o/
/'jama]/はそのまま1単位となり, /daro]o/は独立した別の1単位をなす。

b. 非独立型 前接アクセント単位と融合し、全体で新しい1アクセント単位となる。

b-1. 従属型 アクセントは前接アクセント単位のもの保存される。付属語自身は原則としてアクセント(核)をもたない。記号…

例, /…ŋa/ : /'jama]/ + /…ŋa/ → /'jama]ŋa/
/'jama]/に融合して新しいアクセント単位/'jamaŋa/を作る。アクセントは元の/'jama]/を保持する。

b-2. 支配型 アクセントは付属語側が決定する。前接アクセント単位を持つアクセント(核)は消される。記号⇒

例, /⇒ŋu]rai/ : /'jama]/ + /⇒ŋu]rai/ → /'jamaŋu]rai/
/'jama]/に融合して新しいアクセント単位/'jamaŋu]rai/を作る。アクセントは前接語に関わらず一律に, /-ŋu]rai/に変えてしまう。

「前接アクセント単位」は「前接語」と事実上ほぼ等価である。

ここで少し研究史にふれる。この3分類は筆者の創案ではない。同様の3分類を最初に提案したのはおそらく和田実(1969.12=1980.2:156ff.)で、「甲類(独立する辞)・乙類(従属する辞)・丙類(融合する辞)」がそれぞれ独立・従属・支配型に相当する。和田はその後和田(1971.10:557ff., 1984.2:450ff.)でも同様の分類をしている。ただし和田説は適用範囲が広く、本稿における「活用形」もこれで説明しようとする。また川上泰(1973.3:36)の「自立語を支配するもの・自分のアクセントをもつもの・積極的なアクセントをもたないもの」という3分類はそれぞれ支配・独立・従属型に相当する。上野善道(1981.11:116-117, 1992.10:159, 161)の「独立型・従属型・支配型」も同様の分類である。本稿では「従属型」「支配型」をまとめて「非独立型」とした。

「連接型」に似た概念は上記3者のほかに、榎垣実(1963. 3:41ff.)における「型」、木部暢子(1980. 11:46ff., 1982. 9:65ff., 1983. 9:28)における「式」、田中宣廣(2005. 10:96)における「式」がある。

この都合6説は「当該付属語と前接語との関係」に着目している点では同じであるが、和田・川上・上野説が「アクセント単位」によって定義するのに対し、榎垣・木部・田中説は核をどのように持つかあるいは動かすか、という形で定義し、「アクセント単位」はそもそも考慮していないという点に決定的な違いがある。しかしながら、付属語のアクセントを論ずるにあたってこの違いが積極的に語られることはなかった。筆者は「アクセント単位」を重視することによって自立語のアクセントとの関係が明らかになり、より統一性のある記述ができると考える。これが本稿の主眼である。詳しくは第4節で述べる。

連接型の説明に話を戻す。これら連接型の定義はあくまでアクセント単位の構成、および非独立型でのアクセントの「決定権」に関するものであり、アクセント(核)の様相(有核化する、無核化する、あるいは核をどこに動かす、など)を具体的に規定するものではない。非独立型における「付属語自身は原則としてアクセントをもたない」、「前接アクセント単位の持つアクセントは消される」といった規定も、無核(化)を意味するのではなく、当該のアクセント単位におけるアクセントの決定権がないという意味である*14。さらに、東京方言に限らず、付属語接続時のアクセント単位の構成としては論理的に「独立型/非独立型」の2タイプにまず分類されるであろうことが重要である*15。

活用する付属語には「⇒rasi%」のように活用形アクセント処理(潜在核表示)レベルにおいて連接型記号をも付すが、上でふれたとおり連接型の処理は活用形アクセントの処理後に行われる。

2.3. 「連接型」の具体例——東京方言の付属語のアクセント

「連接型」の具体例として、東京方言の付属語をとりあげる。あくまで例示であるため個々のアクセントの事実認定そのものにはこだわらない。音声レベルの表記はカタカナで行い、[は声の上げ、]は下げを表す。ガ行鼻音は区別しない。語例は体言では「友

*14 従属型は「無核」とは異なる。「無核」は「どこでも下がらない」というアクセント的特徴を持っているが、従属型付属語は究極的にいえば単に前接アクセント単位の長さを延長する要素で、アクセントに関しては前接語に依存する。島根県見島方言では、従属型付属語が付くことで前接語の隠れた核が現れる(上野前掲1992. 10)。

*15 ただし方言によっては特殊な挙動をとるものがあり(1.2.3節)、それは「特殊型」とせねばならない。4.2.2節も参照。

達, カマキリ, 唐傘, 弟] /tomodaci=, ka]makiri, karaka]sa, 'otooto]/, 用言では
「走る, 進む」 +hasir&, -susum&.

2.3.1. 助詞

(18) 独立型

a. /sa]'e/

ト[モダチサ]エ/tomodaci= | sa]'e/

[カ]マキリサ()エ/ka]makiri | sa]'e/

カ[ラカ]ササ()エ/karaka]sa | sa]'e/

オ[トート]サ()エ/'otooto | sa]'e/

b. /ma]de/

ス[スムマ]デ/susumu= | ma]de/

ハ[シルマ()]デ/hasi]ru | ma]de/

c. /▽daro]o/ (▽は「前接語が無核であるときのみそこに核が出現する」ことを表す。これを「下接性」と呼ぶことにする。2.3.3.1節を参照)

ス[スム]ダロ()ー/susumu | daro]o/

ハ[シル]ダロ()ー/hasi]ru | daro]o/

(19) 従属型

a. /…de/

ト[モダチデ/tomodacide=/
[カ]マキリデ/ka]makiride/
カ[ラカ]サデ/karaka]sade/
オ[トート]デ/'otooto]de/

b. /…▽ka/

ス[スム]カ/susumu]ka/
ス[スマレル]カ/susumareru]ka/
ス[スマサレタ]カ/susumasareta]ka/
ハ[シル]カ/hasi]ruka/
ハ[シラレ]ルカ/hasirare]ruka/
ハ[シラサ]レタカ/hasirasa]retaka/

(20) 支配型

a. /⇒ɲu]rai/

ト[モダチグ]ライ/tomodaciɲu]rai/

カ[マキリグ]ライ/kamakiriɲu]rai/

カ[ラカサグ]ライ/karakasaɲu]rai/

オ[トートグ]ライ/'otootoŋu]rai/

b. ⇒rasi%

ス[スムラシ]ー/susumurasi]i/

ス[スマサレタラシ]ー/susumasaretarasi]i/

ハ[シルラシ]ー/hasirurasi]i/

ハ[シラサレタラシ]ー/hasirasaretarasi]i/

(20b)で、rasi%自体のアクセントは活用形アクセントにより/rasi]i, ra]sikaŋta, …/などと決まる。これが前接語を支配して/-rasi]i, -ra]sikaŋta, …/という1単位にする^{*16}。支配型はアクセント的には接尾辞や複合名詞後部要素と共通点を持ち、むしろそちらの語類と考えることもできよう^{*17}。

また連体の/no/は基本的には従属型であるが、前接語の末位核を消す働きがあることがよく知られている。

2.3.2. コピュラとその周辺

コピュラは語形変化するが、アクセント上は助詞と同じように扱うことができる。東京方言のコピュラのアクセントは

(21) /…da, …na, …ni, …de, da]ŋta, da]ŋtara, da]ŋtari/

と書ける。たとえば「山」/'jama]/に対して

(22) /'jama]da, 'jama]ni, 'jama] | da]ŋta, …/

となる (daŋta以下、核が有核語のあとでも生きているかどうかはいま問題外)。

名詞活用の助動詞「'joo\$/soo\$+コピュラ」はアクセント上は「名詞 ('jo]o, so]o/) +助詞」相当として扱える。そもそも名詞は活用形のように潜在核表示のレベルを考える必要はなく、はじめから核の位置が決まっているから、動詞活用・形容詞活用をする

*16 川上 肇(1977. 12=2005. 2:346)には

(i) ア[ルカセラレナカッタラシ]ー/'arukaserarenakaŋtarasi]i/

という長い1単位の例が挙げられている。

また、支配型が2つ連なると次のような長い1単位をなす。

(ii) ポンドはいま120円ぐらいらしい。

/hjakunizju]u'eŋ/ + /⇒ŋu]rai/ + /⇒rasi]i/

→ /hjakunizjuu'eŋŋu]rai/ + /⇒rasi]i/

→ /hjakunizjuu'eŋŋurairasi]i/

なお、別に、2単位形 ハ[シ]ルラシ()ー /hasi]ru | rasi]i/ となる独立型もあるようである。まとめて書くには (⇒)⁺rasi% とする。

*17 仮に接続型記号を使うとすれば、たとえば接尾辞の「～的」は全体を無核化するので/⇒teki=/と書くことができる。

要素と同列に扱う場合にも] を用いて単に 'jo]o\$, so]o\$ と書くことにする*18。

接辞のsoo\$は問題がある。

- (23) +hasir&・soo\$・da /hasiriso]oda/
+hasir&・soo\$・daQta /hasiriso]o | da]Qta/ (/daQta/の核は存疑)
-susum&・soo\$・da /susumisooda=/
-susum&・soo\$・daQta /susumisoo= | da]Qta/

(23)のように+アクセントのときだけ/-so]o-/となる。この核は第1潜在核相当ということになるが、潜在核を設定すべき語尾がない。soo\$は接辞の中では最後尾にくる(名詞活用に付くjar&はsoo\$のあとにはこない)から、「soo+コピュラ」がひとまとまりで一種の語尾のような状態にある。よって暫定的な解釈として、潜在核でso'o\$と書くことにする*19。

2.3.3. 問題点

2.3.3.1. 「下接性▽」について

すでに記号▽で表しているとおり、東京方言の付属語では「下接性」という概念を立てねばならない。前接語が無核である場合に、その末位に核を置いた上で付属語が付くことを意味する*20。このタイプは従属型でもアクセント的にまったくの無色ではないことになる。なお、「付属語頭の何もないところにも核を認めている」ように見えるがそうではなく、あくまで前接語の末位に核を置くということである。

屋名池誠(1987.9:96)ではこの核を、前にくる語尾の潜在核として記述している。たとえば語尾u, ta, … は「CV*Cu, CV*CVta, …」のほかに「CV*Cu*, CV*CVta*, …」の場合があり、darooは後者に続く、というふうに。しかしこれはひとえに付属語側の問題であり、darooに「下接性」という属性を付して▽darooとした方が簡単である。

2.3.3.2. 東京方言における独立型無核／従属型の認定

東京方言の付属語で核を持たない「カラ」などは、独立型無核であるか従属型である

*18 屋名池は基底レベルでは記号「|」を用いてso|o\$と記述する(屋名池1987.9:96)。名詞のアクセントも同じようにし、名詞に続くコピュラや助詞の方には潜在核を設けて説明するが、その必要はないと考える。

*19 ただし-アクセントでも/-so]o-/と核を持つ場合もある。そちらはso'o\$と書ける。

*20 これは登米市方言の一部の従属型付属語におけるように[…]ka/とすることはできない(3.4節を参照)。東京方言は従属型だけでなく独立型の/daroo/なども下接性で▽daroo/となる(「行く」/'iku=/に対して/'iku | daroo/) ためである。

かの認定が難しい。基本的に音調型から判断することはできないのである。東京方言の助詞の問題を正面から扱った川上泰(1966)では、プロミネンスが置かれた音調なども考慮し、1モーラ助詞は本稿でいう従属型、2モーラ以上の助詞は独立型と一律に認定している。本稿も基本的にそれに従い、カラなどは一応「独立型無核」と見る。ただし、サエやマデを独立型とする(pp. 242-243)ことはともかく、カラを独立型とする(p. 244)ことについては、そう見なければならぬ(=従属型ではない)理由をはっきりとは述べられていない、ということに注意せねばならない。

音調型からアクセント単位をどの程度認定できるかは、方言によっても異なる。たとえば松江市方言の付属語は、句頭上昇の位置を名詞単独の形から動かすものと動かさないものがあり、それをもって独立型/従属型が分かれるようである(上野善道1981. 11:116)。

2.4. 活用形・付属語アクセントの全体像

活用形アクセントは「アクセント素性」と「潜在核」を用いて記述したが、それは原則として「1アクセント単位を構成するためのアクセント規則」であった。語幹～語尾からなる1アクセント単位は核を1個あるいは0個持つが、核の位置は一定でなく、活用によって移動する。その位置が語幹・接辞・語尾からどのように決定されるかを記述する。

一方「接続型」は、「いったんできあがった1つのアクセント単位に対して別の語が付くときに、それがアクセント上独立するか否か」という、アクセント単位の構成のしかたである。

この2つはレベルが異なり、活用する付属語は先に活用形アクセントによって核が決まったあと接続型の適用を受ける。

「補助用言」は一応自立語に入れるので本節では述べていないが、常に「用言本体」に先立たれてのみ存在するという点では付属語的でもある。そこでもし接続型を定めるならばすべて独立型ということにすればよい。

アクセントを形成する一連の手順をまとめる。たとえば「書かせたらしいけれど」は、まず「kak&·ase&·ta」, 「rasi%·i」は活用形アクセント, 「keredo」は自身の持つアクセントから(25)となり、(26)のようにアクセントが決まる。ついで「接続型」が処理され、結局(27)のようにアクセントが決定される。最後に「句音調^{*21}」がかぶさり(句を{ }で表す)、たとえば(28)という実現音調ができあがる。

(24) kak&·ase&·ta || rasi%·i || keredo

(25) +kak&·ase&·CV·CVta, ⇒+rasi%·CV·i, ke]redo

*21 川上泰(1961. 5=2005. 2:136ff., 2000. 9)や上野善道(1989. 5:183ff., 2002. 1:165ff.)を参照。

- (26) /kaka]seta/, /⇒rasi]i/, /ke]redo/
 (27) /kakasetarasili | ke]redo/
 (28) {カ[カセタラシ]ーケ]レド}

同様に「歩かせられなかったかもしれない」なら次の通り。(33a)は1句の場合、(33b)は「かもしれない」を強調的に発音し、2句になった場合の例。

- (29) ' aruk&·ase&·are&·na%·kaQta || kamo || sirena%·kute
 (30) +' aruk&·ase&·are&·na%·CV*CV*kaQta, ∇ka]mo, -sirena%·CV*CV*kute
 (31) /' arukaserare]nakaQta/, /∇ka]mo/, /sirena]kute/
 (32) /' arukaserare]nakaQta | ka]mo | sirena]kute/
 (33) a. {ア[ルカセラレ]ナカッタカ]モシレナ]クテ}
 b. {ア[ルカセラレ]ナカッタ} {[カ]モシレナ]クテ}

3. 登米市方言の活用形・付属語のアクセント

ここまで述べてきた枠組みを利用して、宮城県登米市方言の活用形と付属語のアクセントについて記述する。

本節は筆者（登米市石越町^{いしこしまち}出身、1984年生まれ）の内省と、筆者の母（登米市迫町^{はさまちよう}出身、1956年生まれ）と祖父（登米市石越町出身、1926年生まれ）への調査に基づく。

語形に関する注記。老年層（70歳以上）の言語を想定している。活用による'wの削除規則や音便形などは東京方言と同じである。そのほか、活用で生じた/si, ci, zi/はそれぞれ/su, cu, zu/になる^{*22}。語中では原則として/k, t, c/が有声化して/g, d, z/になる^{*23}。たとえば「語尾ta」とあっても、実際には有声化でdaとなることがある。taの場合、たとえばkasuta（貸した）など有声化しない場合があるので一般的に書く場合にはtaで書く。一方形容詞語尾のgaQtaはいかなる場合でも有声化した形しか現れないので、一般的に書く場合でも（kaQtaではなく）gaQtaで書く。

語中濁音の前鼻音は老年層では聞かれるが弱まっており、ことに付属語では現れにくい。記述するならば精査する必要があるため今回は省略した。

この方言に近いものとして、宮城県志津川町（現 南三陸町志津川）の用言のアクセントを記述した大西拓一郎(1990.3)がある。音調型は一部異なっている。

*22 これにより母音uおわりの動詞語幹ができる場合があるが（たとえば「落ちる」'ozu&, iおわりと同一視する。ただし筆者の世代は/si, ci, zi/を持っている。

*23 動詞「行く」は例外的に/'igu/のほかに/'iju/があり、老年層は併用（後者が優勢）、筆者の世代では前者のみ。以下 後者で代表させる。

3.1. 方言形について

活用形で共通語と異なる部分についてごく簡単に述べれば、

(34) 過去形に、ta形(第1過去形)のほかにはtaqta形(第2過去形)が認められる*24。

(35) 丁寧形は、

- a. 「ます」に相当する形としてsuがあり、「書きます」=/kagisu/、「書きました」=/kagisuta/などとなる。その否定はsenおよびそこから/s/が脱落した'eNで、形容詞的に活用し、/kagi'eN, kagi'eNkaqta/となる。
- b. 「(で)ございます」に相当する形として(de)gasuがあり、存在詞の丁寧形は/gasu/、また「本です」=/hoNde gasu/、「赤いです」=/'agegasu/、「白かったです」=/surogasuta/などとなる。その否定はgaseNおよびそこから/s/が脱落したga'eNで、形容詞的に活用し、/hoNde ga'eN, 'agegu ga'eN; -ga'eNkaqta/となる。

(36) 「(よ)う」に相当する形としてbe/peがある。これは活用せず助詞扱い。

このうち(34)(35)は筆者自身は持たないが、これは世代差によるもので、老年層の会話としては日常よく耳にする。活用体系に関して詳しいものとしては八亀裕美他(2005.1)*25、工藤真由美他(2005.2)*26、工藤(2006.11:114)、佐藤里美(2007.7)で論じられる登米市中田町方言に近い。

なお丁寧体命令は語尾asje(工藤他2005.2:24の「セ」に相当するが活用形が異なる)のほかにはa'eNという語尾があり、/(飲)noma'eN, (起)'ogira'eN, (受)'ugera'eN/などとなる(cf. 丁寧体否定の語尾'eNは/nomi'eN, 'ogi'eN, 'uge'eN/)。

以上に関して本稿は筆者の生育地で使われるものに合わせる。

形容詞+助詞相当beでは本来形容詞がカリ活用となって/-ganbe/となるが、本稿では単純に“終止形”語尾i/φ(3.3.1節を参照)に付くタイプのほうで取り上げる。

*24 第2過去形の意味するところは工藤他(2005.2:1)によれば「発話主体の体験性を明示する」とのことである。一方第1過去形は体験性に関して中立であるとされる。

*25 ただし筆者の生育地=石越町(中田町と隣接)ではtaqta形が用いられるのは動詞・存在詞にほぼ限られ、存在の否定「ない」や形容詞(第1形容詞)、「形容動詞」(第2形容詞)、コンピュータのダに対してtaqtaはまず使わない。

*26 「否定形(不可能形)は「しえない」から転じたであろう「サエネ」の形である」(p.15)とあるが、「サレナイ」の/r/の脱落であろう。/r/の脱落しない形も時々使われ、書けない/kaga'ene, kagarens/, 起きられない/'ogira'ene, 'ogirarens/などとなる。

「意志勸誘法」(p.23)の「ノムベス」「ノンデッベス」のsは「丁寧」の意ではなく終助詞的なものようである(大西1990.3:57補注)。

また「ゲンキデッカス」(元気である+丁寧; p.12)は筆者は聞いたことがない(「ゲンキデガス」は使う)。

3.2. 動詞・形容詞のアクセント

3.2.1. 概観

結論からいえば、動詞・形容詞の+/-アクセント素性は登米市方言では次のような特徴をもつ。

- (37) +アクセント：必ず核を出現させる。
-アクセント：必ずしも核を出現させない。出現させる場合、+アクセントよりも後ろ。

“終止形”で示せば以下の通り。

- (38) 動詞 +アクセント (戻) /modo]ru/ -②
-アクセント (進) /susumu=/ @*27
形容詞 +アクセント (白) /suro]i/ -②
-アクセント (赤) /'agε=/ @

結局、終止形に関しては東京と全く同じということになる*28。

3.2.2. 陳述イントネーション

ただしこの方言では「陳述イントネーション」がある。これは文末におかれた用言の末尾の音節が浮き上がるイントネーションで、上野善道(1980.7)で岩手県栗石方言について詳しく観察されているほか、山形県鶴岡方言(新田哲夫1994.9)、青森市方言(上野1986.3)などでもこれを立てた分析がなされている。

音調型は(39)の通りである。音声表記は便宜的に音韻表記を流用し、ピリオド(.)は文末であることを、!は]よりも幅の小さい下降(「半下降」)を表すものとする。さらに、陳述イントネーションがどこに被さっているかを示すために当該音節の母音に、'を付すことにする*29。

- (39) 動詞 (見) [mi!rù. /mi]ru/ +アクセント
(戻) mo[do!rù. /modo]ru/ +アクセント
(隠) kagu[re!rù. /kagure]ru/ +アクセント
(着) ki[rù. /kuru=/ -アクセント
(進) susu[mù. /susumu=/ -アクセント
(重) kasane[rù. /kasaneru=/ -アクセント

*27 @は丸ゼロの代用として用いる。

*28 「通る」などが/to]oru/と-③型になるのも東京と同じ。

*29 あくまで位置を明示するのみで、イントネーションの音調自体は[などによって表示。

| | | | | |
|-----|-------|------------|-------------|--------|
| 形容詞 | (無) | [nɛ̃. | /nɛ̃/ | +アクセント |
| | (白) | su[ro!i. | /suro]i/ | +アクセント |
| | (面白) | 'omo[sjẽ. | /'omosjẽ]/ | +アクセント |
| | (赤) | 'a[gɛ̃. | /'agɛ̃=/ | -アクセント |
| | (*30) | kika[nɛ̃. | /kikanẽ=/ | -アクセント |

たとえば [mi!rũ. は, [mi]ru の ru がイントネーションによって浮き上がるために、結果として下降幅が小さくなって [mi!ru となったものである。

「着た」と「見た」は /kita=/ と /mida]/ であるが、文末では

(40) ki[tã. ; mi[dã.

でまったく区別がなくなってしまう。区別が現れるのは連体修飾の場合などである。よって用言のアクセントは“終止形”言い切りではなく連体修飾などの環境を適宜作って調べた*31。

3.3. 活用形のアクセント

登米市方言の活用形のアクセントについて述べる。

3.3.1. 接辞・語尾のアクセント

接辞は(41)の通りで、自らがアクセント素性を持つものは s& のみである。語尾の潜在核は(42)(43)のように抽出される。

(41) ase&, a'e&(are&), nɛ̃%, dɛ̃%*32, 'jasu%, ŋadɛ̃%, niɣu%, ŋar&, +s&

(42) 動詞活用につくもの

CV*Cu, CV*Ce/o, CV*Cuna, CV*Cebã, nɛ̃'de, CV*CVsa, CV*CVni,
naŋã'ra, CV*ta*, CV*taqta*®, CV*tara*®, CV*tari*®, CV*te*®,
a'e*®N, asje*®, e*®N, e*®Nkaqta (※は3.3.2節で述べる)

(43) 形容詞活用につくもの

CV*i/φ, CV*gaqtã, CV*gaqtã'ra, CV*gaqtã'ri, CV*gerẽ'ba, CV*gu,

*30 「きかない」=気が強い意。

*31 上野前掲(1980.7)は「同じ単語が文末以外に立った場合」(動作の列挙など)を使っている。終止法のままで調べられるという利点があるが、筆者の発音ではその場合もイントネーションがかぶさった形になることがあったため避けた。

*32 願望の「～たい」に相当。東北方言の中には有声化しない地域もあるが、当方言では常に有声化。

また、この方言の活用形アクセントで注意すべきものは次の通りで、3.3.2～3.3.5節で述べる。

(44) 解釈が容易でないアクセント

- a. 語尾 ta, taQta, tara, tari, te
- b. 動詞+te+動詞
- c. 接辞s&
- d. 存在詞(丁寧形)/助動詞gas&

形容詞の“終止形”は共通語で/-ai/となるものがこの方言では/-ε/となる(赤い /'age/)。また共通語で/-sii/となるものは/-suu~-sui/でゆれる(苦しい/kurusuu~-sui/; 後者で代表させる)。よって“終止形”相当の語尾は「i, ただし-ε%語幹に対してはφ(無形態)」とし、「i/φ」と書く。ad hocな処置であり、なお検討の余地があるが、本稿の趣旨から外れるのでこれにとどめておく。

3.3.2. 語尾 ta, taQta, tara, tari, te

語尾 ta, taQta, tara, tari, te は核のとり方が複雑である。

3.3.2.1. 具体例

【表2】に、+/-のアクセント素性ごと、かつ、語幹末尾の子音別・母音別、母音おわりはさらに語幹の長さ別、に例を挙げる^{*34}。

+アクセント語幹では、後ろから数えた核位置が一定していない。基本的に3タイプに分けられ、仮にα・β・γとした。その内容は(45)の通り。γ'はγタイプの変種で、teのみ位置が異なるもの。

- (45)
- | | | | | | |
|------|----------|-------------|------------|------------|---------|
| α : | CV]CVta, | CV]CVtaQta, | CV]CVtara, | CV]CVtari, | CV]CVte |
| β : | CV]ta, | CV]taQta, | CV]tara, | CV]tari, | CV]te |
| γ : | ta], | ta]Qta, | ta]ra, | ta]ri, | te] |
| γ' : | ta], | ta]Qta, | ta]ra, | ta]ri, | CV]CVte |

*33 geは「(～シ)ナキヤ」の「キヤ」に相当する形。うしろに形容詞ne%をともない、

(i) 「動詞・ne%ge ne%～」=「(～シ)ナキヤナイ」=「～しなければならない」となる。具体的には次のとおり。

(ii) a. 書かななければならない +kag&ne%CV*ge⁺+ne%CV*i/φ → /kagane|ge|ne|/
 b. 行かななければならない -'iη&ne%CV*ge⁺+ne%CV*i/φ → /'iηanege|ne|/

*34 母音iおわりの長い語幹の動詞はたとえば「試みる」などがあるにはあるが、日常的でないためアクセントが共通語にひきずられ、確認しづらいので除いてある。

【表2】

| | ta | taQta | tara | tari | te | |
|-------------|-------------|----------------|---------------|---------------|-------------|----|
| +アクセント | | | | | | |
| (書)kag | ka]ida | ka]idaQta | ka]idara | ka]idari | ka]ide | α |
| (出)das | da]suta | da]sutaQta | da]sutara | da]sutari | da]sute | α |
| (立)tad | taQta] | taQta]Qta | taQta]ra | taQta]ri | ta]Qte | γ' |
| (読)'jom | 'joNda] | 'joNda]Qta | 'joNda]ra | 'joNda]ri | 'jo]Nde | γ' |
| (掘)hor | hoQta] | hoQta]Qta | hoQta]ra | hoQta]ri | ho]Qte | γ' |
| (起)'ogi | 'ogida] | 'ogida]Qta | 'ogida]ra | 'ogida]ri | 'ogide] | γ |
| (落)'ozu | 'ozuda] | 'ozuda]Qta | 'ozuda]ra | 'ozuda]ri | 'ozude] | γ |
| (見)mi | mida] | mida]Qta | mida]ra | mida]ri | mide] | γ |
| (諦)'agirame | 'agirame]da | 'agirame]daQta | 'agirame]dara | 'agirame]dari | 'agirame]de | β |
| (納)'osame | 'osame]da | 'osame]daQta | 'osame]dara | 'osame]dari | 'osame]de | β |
| (投)naje | naje]da | naje]daQta | naje]dara | naje]dari | naje]de | β |
| (出)de | deda] | deda]Qta | deda]ra | deda]ri | dede] | γ |
| -アクセント | | | | | | |
| (履)hag | haida= | haidaQta] | haidara] | haidari= | haide= | |
| (貸)kas | kasuta= | kasutaQta] | kasutara] | kasutari= | kasute= | |
| (※1)'odad | 'odaQta= | 'odaQtaQta] | 'odaQ tara] | 'odaQ tari= | 'odaQ te= | |
| (死)sun | suNda= | suNdaQta] | suNdara] | suNdari= | suNde= | |
| (踏)hum | huNda= | huNdaQta] | huNdara] | huNdari= | huNde= | |
| (売)'ur | 'uQta= | 'uQtaQta] | 'uQ tara] | 'uQ tari= | 'uQ te= | |
| (買)ka'w | kaQta= | kaQtaQta] | kaQ tara] | kaQ tari= | kaQ te= | |
| (借)kari | karida= | karidaQta] | karidara] | karidari= | karide= | |
| (着)ki | kita= | kitaQta] | kitara] | kitari= | kite= | |
| (重)kasane | kasane= | kasaneQta] | kasanedara] | kasanedari= | kasane= | |
| (止)'jame | 'jamed= | 'jamedQta] | 'jamedara] | 'jamedari= | 'jamed= | |
| (※2)ke | keda= | kedaQta] | kedara] | kedari= | kede= | |

※1 他動詞「おだてる」に対応すると思われる自動詞「おだつ」「ふざける」の意。

※2 「ける」<「呉れる」。物を「あげる」の意。補助動詞にも。

一方 -アクセント語幹では全ての場合で核位置が次のように一定している。

(46) ta=, taQta], tara], tari=, te=

接辞が入る場合、「語幹(+接辞…) +接辞」の全体を大きな1つの語幹とみればよい。たとえば「語幹(+接辞…) +nar&」は子音rおわりの大きな語幹と見ることができ、全体が+アクセントならば(掘)⁺hor&, -アクセントならば(売)⁻ur&と同じ挙動をとる。

3.3.2.2. 解釈

結論から言えば、βタイプが無標のものであると考える。これと(46)とを合わせて、潜在核は一般には

(47) CV*ta, CV*taQta*, CV*tara*, CV*tari, CV*te

で、CV部分の音形によって第1核が移動して実現し、 $\alpha \cdot \gamma / \gamma'$ の形が出る。

α タイプとなる条件は

(48) (a) CVが二重母音の副母音/i/ (=子音gおわり語幹) の場合

(b) CVが母音無声化音/su/ (=子音sおわり語幹) の場合

のいずれかである。これらは核がくることができない「弱」*35であるため、(47)の第1核が1拍前で実現したと見ることができる。

γ / γ' タイプが問題である。このタイプとなる条件は

(49) (a) CVが/Ci/ (=母音iおわり語幹) の場合…… γ

(b) CVが/Ce/ (=母音eおわり語幹) かつ1拍語幹の場合…… γ

(c) CVが/N, q/ (=子音m, n, b, d, r, 'wおわり語幹) の場合…… γ'

のいずれかである。

まず(c)の/N, q/は「弱」であり、第1核が1拍後ろで実現したと見ることができる(ただしteだけは1拍前に移動している)。そして(a)もこの場合は「弱」と同じ扱いを受けると考える。/i/は狭母音であり、狭母音拍が(ある条件のもとで)「弱」となる方言はいくつか知られている*36。登米市方言では狭母音拍一般が核を担えないわけではないが、これらの語尾の直前ではその制限がはたらいっていると考えればよいのではないか。

(b)は少なくとも共時的には説明がつけにくく、最も例外的といえる。また、「 α タイプでは核が前に移動するのに対して γ / γ' タイプでは核が後ろに移動するのはなぜか」、「 γ' タイプの語尾teだけ挙動が異なるのはなぜか」という点もいまのところ説明がつかない。

結局、問題の語尾の潜在核は(47)を基本とし、第1核は次の条件のときには移動して実現することになる*37。

(50) a. 「弱」による移動

a-1. CVが二重母音の副母音/i/あるいは母音無声化音の場合は第1核が1拍前で実現する

*35 上野善道(2003.6:80)。登米市方言の「弱」はモーラ音素と母音無声化音。

*36 雫石方言(上野前掲2003.6)、金沢方言(上野他1983.3)など。

*37 ところで、 α タイプは東京方言の

(i) /kalita, kalitara, kajitari, kajite;
da]sita, da]sitara, da]sitari, da]site /

と同様相を示すが、それに至るメカニズムは異なっていることがわかる。東京方言は

(ii) CV*CVta, CV*CVta*ra, CV*CVta*ri, CV*CVte

という潜在核から直接に(i)が出てくる。一方 登米市方言は(47)から核の移動の結果このようになるのである。

- a-2. CYが/N, Q/または/Ci/の場合は第1核が1拍後ろで実現する (/Ci/はこの場合のみ「弱」扱い)。
 a-2'. CYが/N, Q/かつ語尾がteの場合は1拍前で実現する。
 b. 母音eおわり1拍語幹につく場合, 1拍後ろで実現する。

3.3.3. 動詞+te+動詞

「動詞+te+動詞」のアクセントは複雑な様相を呈する。2番目の動詞が補助動詞である場合にはアクセント変化が起こる。一方補助動詞でない(「本動詞」)の場合には基本的にアクセント変化は起こらない。

以下、「動詞+te+非補助動詞」を「V1+te+V2」, 「動詞+te+補助動詞」を「V1+te+V'2」と書く。

3.3.3.1. 具体例

補助動詞V'2として使われる動詞について, アクセントは次の通り。

- (51) +ku&, +'a&, +mi&, +suma'w&, -'iŋ&, -'i&, -'og&, -mora'w&, -'jar&, -ke&*38, -suke&*39, -'idadag&

これらについて, 「V1+te+V'2」のアクセントを【表3】に示す*40。行論の都合上I~IVの領域を定義した。アクセント単位の境界|は, 境界認定それ自体が問題となるためしばらく書かず, 全体が無核である場合は/=を最後にのみ記す。

3.3.3.2. 問題の所在

V1が+アクセントの場合=「I・II領域」, およびV1が-アクセントでV'2が+アクセントの場合=「III領域」は問題がない。「V1+te+V'2」のアクセントは, 「V1+te」「V'2」のアクセントをそのまま並べたものである。

- (52) V1 V'2 V1+V'2
 I /naŋe]de, ku]ru/ : /naŋe]de | ku]ru/
 II /naŋe]de, 'ogu=/ : /naŋe]de | 'ogu/
 III /haide=, mi]ru/ : /haide= | mi]ru/
 (アクセント単位の境界は上の通り)

*38 前述。「～てける」で「～してやる」の意。

*39 助(す)ける。「～て助ける」で「～するのを手伝う/一緒に～してやる」の意。

*40 語尾teががらむのでV1が+アクセントのときは実際には(45)のようなパターンがあるが, V1が+アクセントならば以下の問題にそもそも関与しないので略す。βタイプの/naŋe]de-/で代表させた。

α, γ/γ'タイプはこの部分を/ka]ide-, mi]de-, 'jo]Nde-/などに置き換えるだけでよい。

【表3】

| | (投) +naje& | | (履) -hag& |
|-------|-----------------|----|-----------------|
| +V' 2 | naje]deku]ru | I | haideku]ru |
| | naje]de'a]ru | | haide'a]ru |
| | naje]demi]ru | | haidemi]ru |
| | naje]desuma]u | | haidesuma]u |
| -V' 2 | naje]de'iju | II | haide]'iju |
| | naje]de'iru | | haide]'iru |
| | naje]de'ogu | | haide]'ogu |
| | naje]demora'u | | haidemo]ra'u |
| | naje]de'jaru | | haide]'ja]ru |
| | naje]dekeru | | haideke]ru |
| | naje]desukeru | | haidesuke]ru |
| | naje]de'idadagu | | haide]'ida]dagu |

(/ /は略；太枠部分が後述する特殊なアクセント)

ところが、V1・V'2とも一アクセントでのとき、すなわち「IV領域」では、いま(履) -hag&を例にとって同様に挙例すると

(53) IV a 'inj&, 'i&, 'og&は、それらの前に核を挿入する。

/haide=, 'ogu=/ : /haide]'ogu/ (* /haide'ogu=/)

IV b -mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -'idadag&は、自身の中のある特定の場所に核を挿入する。

/haide=, mora'u=/ : /haidemo]ra'u/ (* /haidemora'u=/)

つまり、「-V1+te+V'2」が特殊なアクセントをとる、といえる*41。

3.3.3.3. 活用した場合

IV a, bをさらに活用させた場合を見よう。(履) -hag&で例示すれば、

(54) a. IV a の例

/ haide]'ogu
 haide]'oge
 haide]'oguna
 haide]'oge]ba]
 haide]'ogane]de
 ?haide]'ogisa *42
 ?haide]'ogini
 haide]'ogina]nara

b. IV b の例

haidemo]ra'u
 haidemo]ra'e
 haidemo]ra'una
 haidemo]ra'eba]
 haidemo]ra'wan]e]de
 haidemo]raisa
 haidemo]raini
 haidemo]rainan]ara

*41 たとえば東京方言では、「V1+te+V'2」はいかなる場合でも「V1+te」のアクセントと「V'2」のアクセントを単に並べるだけでよい。

*42 言うならこのアクセントだが意味的にはかなりありにくい。その下の-niも同じ。

| | |
|-----------------|----------------------------------|
| haide]’oida | haidemo]raQta |
| haide]’oidaQta] | haidemo]raQtaQta] |
| haide]’oidara] | haidemo]raQtara] |
| haide]’oidari | haidemo]raQtari |
| haide]’oide | haidemo]raQte |
| haide]’oga’e]N | haidemo]ra’wa’e]N ^{*43} |
| haide]’ogasje] | haidemo]ra’wasje] / |

IV a では、V’2の部分は活用させると通常の－アクセントの形をとっていることが分かる。V’2が－’inj&, －’i&でも同様となる。よってIV a は

(55) $\bar{V}1+te$ を末位核にする； $\bar{V}’2$ は通常の－アクセントと同じ

という性質である。V1が－アクセントのときにteに定位置の核があるから、結局teの潜在核が

(56) CV*te*

となっていることになる。アクセント単位は/haide/のあとに境界があり

(57) /haide] | ’ogu=, haide] | ’ogeba], …/

などとなる。

一方IV b かというと、V’2の中の/mo/にある核は活用しても動かない。これを単に $\bar{mora}’w\&$ とできないのはもちろんであるし、仮に $^+mora’w\&$ としても(54b)のようにはならない。ここで「補助用言 $mora’w$ は－アクセントではなくmo]ra’w&という定位置の核を語幹が持っている；語尾の潜在核はまったく実現しない」とできればまだしも単純であるが、そうはいかない。各活用形の末尾付近において

(58) eba, taQta, taraでは末位核^{*44}；それ以外の活用形では核を持たない

となっており、これはまさに－アクセントの特徴である。

よってこの $mora’w\&$ は－アクセントの性質は保持していると判断される。それに加えて、「V1が－アクセントのときに語幹部分のmoに定位置の核を持つ」のであるから、moにteの第2潜在核を設定して

(59) CV*te $\bar{m}o’ra’w\&$

ということになる。－’jar&, －ke&, －suke&, －’idadag&も同様で、できあがりの形を語尾uの場合で示せばそれぞれ/－’ja]ru, -ke]ru, -suke]ru, -’ida]dagu/である。一般

*43 このeNの核はあるかどうかやや疑わしいので以下の議論からは外す。その下のsjeも同じ。

*44 末位核であることは、次に自立語や付属語を続けて確認した。

(i) 「履いてもらえばいいのに」 haide[m]o]ra’eba]’i]ino. (2回目以降の下降ははっきりとは出ない)

(ii) 「履いてもらっタツタでしょう？」 haide[m]o]raQtaQta]be↑.

(iii) 「履いてもらったら(どうなの)?」 haide[m]o]raQtara]’wa↑.

((ii)(iii)で疑問形を使ったのは、そのほうが下降が明瞭に出るためである。)

化して書くならば

(60) CV*te (mo/' ja/ke/suke/' ida)*

となる。

アクセント単位の認定も問題である。2つの核が出ることがあるから、全体は2アクセント単位であると予想されるが、/haide/のあとで区切った

(61) */haide= | mo]ra'eba]/

は1単位の中に2つの核があることになり不可能である。そこで、やや奇妙であるが「/haidemo/までを1単位とし、それが末位核になっている」と解釈する。

(62) /haidemo] | ra'eba]/

同様に、/haidemo] | ra'u=, haidemo] | ra'e=, …/

IV a とIV b は

(63) 「-V1+te+-V'2」の、前半のアクセント単位を末位核にする

という点で共通することになる。「前半」と「後半」の境界線が、IV a ではちょうどteとV'2の間にあり、IV b ではV'2にまで食い込む、というわけである*45。

3.3.3.4. 本動詞の場合

2番目の動詞が補助動詞でない「V1+te+V2」では、たとえV2が語彙的には補助動詞にも使われるようなもの(mora'w&, 'og&など)であっても、上で述べたようなアクセントとはならない。たとえば次のa, bを比較。

(64) a. 「代わりに窓口に行ってもらった。」(V1+te+V'2)

ka'warini_ mado[nu]zusa 'iqte[mo]raQ[tà.*46

/ka'warini= | mado[nu]zusa | 'iqtemo] | raQta= /

b. 「書類は、窓口に行ってもらった。」(V1+te+V2, 受け取ったの意)

sjorui['wa] mado[nu]zusa 'iqte_ moraQ[tà.

/sjorui['wa] | mado[nu]zusa | 'iqte= | moraQta= /

非補助動詞の場合、mora'w&が/-mo]ra-/の形をとることはなく、単純な一アクセントの形となる。'og&や'jar&も、非補助動詞であれば

(65) /'iqte= | 'ogu=, 'iqte= | 'jaru=, …/

cf. 補助動詞なら /'iqte] | 'ogu=, 'iqte'ja] | ru=, …/

というアクセントをとる。結果的には、アクセントが(64a)のようになることが「V'2が補助動詞として使われている」ことのマーカーとなっている。ただし「V1, V'2がとも

*45 ここまでの一般化はやや確信が持てない。少なくとも、語尾eba, taqta, taraをとらないものについては/kite= | mo]ra'u, kite= | mo]ra'e, …/という解釈は一応妨げられない。

*46 記号 _ は低平調を示す。

に「一アクセントのとき」にしか発現しないものではあるが。

ところで、東京方言の「持って {いく/くる}」のアクセントは(66a)が期待されるが、実際には「持って」が無核化した(66b)も許容される。こちらはV1の方のアクセント変化ではあるが、補助動詞が関係してアクセント変化が起こるという点では上記の例と似ている。

- (66) a. /mo]qte | ku]ru, mo]qte | 'iku= /
b. /moqte= | ku]ru, moqte= | 'iku= / (あるいは1アクセント単位か)

3.3.3.5. まとめ

登米市方言の「V1+te+V'2」のアクセントは、「V1とV'2がともに一アクセントのとき」にアクセント変化を起こす。「-'in&, -'i&, -'og&」はそれらの直前に核を挿入する。「-mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -'idadag&」は、自身の中のある特定の場所に核を挿入する。IV a・bとも、一アクセントの特徴は発揮される。これら核挿入はV1が一アクセントのときの現象だから、「teの第2潜在核」であると解釈される。結局、「V1+te+V'2」一般についていえば、V'2の動詞の語彙によってteのもつ潜在核が異なり、

- (67) a. -'in&, -'i&, -'og&に対しては CV*te*
b. -mora'w&, -'jar&, -ke&, -'idadag&に対しては
CV*te (mo/'ja/ke/suke/'ida)*
c. その他のV'2ではCV*te (これが無標)

ということになる。(67a, b)におけるアクセント単位境界は

- (68) 核が挿入された位置 (=teの第2核の位置) にアクセント単位境界があり、V1の先頭からそこまでを1単位、そこからV'2の終わりまでを1単位とする2アクセント単位

と解釈する。(67c)の場合は活用形アクセントの規則どおり、「V1+te」までを1単位、V'2を1単位とする2アクセント単位と解釈する。

アクセント変化は「動詞+te+非補助動詞」の場合は原則として起こらない。

3.3.3.6. 補足:補助動詞でないにもかかわらず、アクセント変化が起こる例

登米市方言では、「補助動詞でないにもかかわらず、アクセント変化が起こる」例が存在する。

- (69) a. 「パジャマを着て寝る。」
pa[zja]ma kite[ne!rù.
/pazja]ma | kitene | ru=/
b. 「抱き枕を抱いて寝る。」
dagimagura_ daide[ne!rù.

/dagimagura= | daidene | ru=/

(アクセント素性は(着)^{-ki&}, (抱)^{-dag&}, (寝)^{-ne&})

この「～て寝る」は補助動詞ではないので

(70) /kite= | neru=, daide= | neru=/

が期待されるが、「着て／抱いて」が「付帯状況」の意味であれば(69)の形で出る^{*47}。mora'w&などと同様に自身の内部の定位置/ne/に核が挿入されている。同様の例をほかにはまだ見出していないので説明しにくい(よってアクセント単位境界の認定なども暫定的)が、補助動詞でないにせよ「着て寝る」「抱いて寝る」がそれぞれある程度一体化してひとまとまりの状況を表すに至っているためにこのアクセント変化が起こるのかもしれない。

3.3.4. 接辞s&の活用とアクセント

接辞s&(丁寧)は、東京方言のmas&に似て特殊な活用をする。筆者の世代はs&を持たないのでアクセントに関しては簡単に調査をしたが、語尾uがつく場合にゆれが認められる。/su/自体の無声化ということもからんで複雑である。結論からいうとs&は+アクセントである。

以下に(書)^{+kag&}, (行)^{-'ij&}へ接続した場合の音調とアクセント解釈を示す。なおこの3.3.4節に限って音声表記に母音無声化も記し、「su」が無声化するときは「su。」と書く。

(71) a. ⁺s&・CV^{*}Cu

kagi[su̥. /kagisu/]

'ij̥i[su̥. /'ij̥isu/]^{*48}

b. ⁺s&・CV^{*}ta

kagisu.[t̥a. /kagisuta/]

'ij̥isu.[t̥a. /'ij̥isuta/]

c. ⁺s&・CV^{*}taqta[˘]

kagisu.[taq!t̥a. /kagisuta]qta/

'ij̥isu.[taq!t̥a. /'ij̥isuta]qta/

d. ⁺s&・CV^{*}Cuna (丁寧形禁止)

kagi[su!n̥a. /kagisu]na/

^{*47} (70)も許容されなくはないが(69)の方が普通。ただし付帯状況でも「寝る」の方に表現上の焦点が置かれる場合、また、「着て、(それから)寝る」のように「継起」の意味の場合などは(69)は不可で、(70)で出る。

^{*48} (71a)は ka[gi!su̥./kagi]su/, 'i[ij̥!su̥./'ij̥]isu/ にゆれることが時折ある。

'iŋi[su!nà. /'iŋisu]na/

e. +s&•e**N (丁寧形否定; s脱落が普通)

kagi[sèN. /kagise]N/; kagi['èN./kagi'e]N/

'iŋi[sèN. /'iŋise]N/; 'iŋi['èN./'iŋi'e]N/

f. +s&•e**NkaQta (丁寧形否定過去; s脱落が普通)

kagi[seN]kaQ[tà./kagise]NkaQta/; kagi['eN]kaQ[tà./kagi'e]NkaQta/

'iŋi[seN]kaQ[tà./'iŋise]NkaQta/; 'iŋi['eN]kaQ[tà./'iŋi'e]NkaQta/

否定, 否定の過去はそれぞれseN, seNkaQtaとなる。ここからeN, eNkaQtaが語尾として取り出される。この語尾はほかに助動詞gas&に使われる。

(71)の解釈は実現音声からすぐには出てこないものが多いので以下説明する。

3.3.4.1 解釈

もっとも問題がないのは(71c, f)。(71c)はtaQtaの第1核が/su/の無声化により1拍遅れて実現している。語幹の+/-に関わらず核は同じ位置であるから, s&は+アクセントと予想される。

(71a, b, e)は陳述イントネーションを取り除かなければこの解釈に定まらない。そこでsu, suta, seN/'eNのあとに助詞be/peを付けてみると次の通り(↑, ↓は文末イントネーション)。

(72) a. +s&•CV*Cu pe

kagisu, pe ↑.

'iŋisu, pe ↑.

b. +s&•CV*ta be

kagisu, [ta]be ↑. /kagisuta]be/

'iŋisu, [ta]be ↑. /'iŋisuta]be/

c. +s&•e**N pe

kagi[seN]pe ↑. /kagise]Npe/; kagi['eN]pe ↑. /kagi'e]Npe/

'iŋi[seN]pe ↑. /'iŋise]Npe/; 'iŋi['eN]pe ↑. /'iŋi'e]Npe/

(72b, c)は/ta, se('e)/に核があることが分かり, ここから(71b, e)のアクセント解釈が出る^{*49}。(71b)は(71c)と同じく, /su/にくるはずの核が無声化のため/ta/に移動したのである。

(72a)はなお問題である。もし/su/に核がきていれば(71a)が確認されるが, /su/は無声化してしまう(=「弱」)ため核はこない。しかも/pe/に上昇イントネーションがあ

*49 ここまでで(71e, f)の核がともに定まった。後述のgas&の場合も考え合わせて, 潜在核はe**N, e**NkaQtaのように抽出される。

るので末位核か無核か判然としない。そこでさらに助詞kaを付けてみると、

- (73) kagisu[pe]ga ↓. /kagisupe]ga/
'iŋisu[pe]ga ↓. /'iŋisupe]ga/

で、これはpeに核がある。ここから(72a)は末位核

- (74) /kagisupe], 'iŋisupe]/

であったことが分かる。be/peは一般には核を持たないため^{*50}、(74)は/su/にくるはずの核が無声化によってpeに送られたと解釈できる。よつてもとの(71a)も/-su]/と解釈されるのである。

(71d)は簡単には説明がつかないが、s&が+アクセントと仮定し、次のように考える。CV*Cuの第1核が実現すると、その核はs&自身よりも前に出てくる(/-]suna/)ことになってしまふ。それを避けるように、核が/su/まで送られるのではないか。

一般に、「語尾」と「その語尾の持つ潜在核」との位置関係については、たとえばuに対するCV*Cuのように、いわば言語の線条性に反して、語尾u自身よりも前の位置に潜在核が設定されることがごく普通にある。一方「アクセント素性を持つ要素」と「そのアクセント素性によって選択・実現される(顕在)核」との位置関係については、核がその要素より前に来ることが許されにくい、といえるのではないか^{*51}。これは一般に成り立っているが、s&のような音形の短いもの以外ではそもそも問題とはならない。潜在核が核位置の候補にすぎないのに対して、アクセント素性は核を決定し発生させる立場であり、発生した核がアクセント素性(を持つ要素)自身より前に来るとは不自然であるためにこのような制限が生まれると考えられる。

3.3.4.2. まとめ

以上から(71)が得られる。s&は+アクセントで、潜在核は音形の短さや/su/の無声化などにより移動して実現する。

*50 たとえば(送)→'ogur&・ul]be/pe(+ka)が付くと

(i) 'ogurube ↑. /'ogurube=/(送ろう。)

(ii) 'ogurube[ga ↓. /'ogurubega]/(送ろうか。)

となる(語形そのものは/'ogu]pe(ga)/の方が普通だが比較の便のため)。be/peが核を持つなら(ii)では/-be]ga/が期待されるが、そうはなっていない。(i)'ogurube ↑. は音調上(72a)kagisu,pe ↑. と同じであるが、末位核ではなく無核なのである。なおkaは/…ka]/で、前が無核の場合のみ核が出る。

*51 これは短い語幹に語尾がついたとき、核が語形の存在する位置まで送られる一般的現象(東京方言で(見)+mi&・CV*CVtaが/mi]ta/となるような)をも含意する。

3.3.5. 存在詞(丁寧形)/助動詞gas&

共通語のゴザイマスにあたる形に「ガス」gas&がある。存在詞'ar&の丁寧形としてのほか、助動詞として使われる。形容詞活用に続くとき、肯定形では語幹に直接付くという特殊性がある。接辞s&と同じように活用し、存在詞は+アクセント、助動詞は-アクセントと分析される(存在詞と助動詞でアクセント素性が異なる理由は今のところ説明がつかない)。

(75) 存在詞として

- a. +gas&・CV*Cu
[ga!sù. /ga]su/
- b. +gas&・e**N (s脱落が普通)
ga[sèN. /gase]N/ ; ga[' èN. /ga' e]N/
- c. xgas&・ta (使わず) → +'ar&・+s&・CV*ta /' arisuta/ を使う。
- d. xgas&・taQta (使わず) → +'ar&・+s&・CV*taQta /' arisuta]Qta/ を使う。
- e. +gas&・e**NkaQta (s脱落が普通)
ga[seN]kaQ[tà. /gase]NkaQta/ ; ga[' eN]kaQ[tà. /ga' e]NkaQta/

(76) 助動詞として——1. 「名詞+コピュラde+gas&」の例

(gas&・u・taQtaはあまり聞かないので外す)

- a. 'amimono] …de] -gas&・CV*Cu
' amimo[no]de ga[sù. /' amimono]de | gasu=/
- b. 'amimono] …de] -gas&・CV*ta
' amimo[no]de gasu[tà. /' amimono]de | gasuta=/
- c. 'amimono] …de] -gas&・e**N
' amimo[no]de ga[sèN. /' amimono]de | gase]N/ ;
" ga[' èN. / " | ga' e]N/
- d. 'amimono] …de] -gas&・e**NkaQta
' amimo[no]de ga[seN]kaQ[tà. /' amimono]de | gase]NkaQta/ ;
" ga[' eN]kaQ[tà. / " | ga' e]NkaQta/

末位核についてはs&と同じく、あとに「be/pe (+ka)」を続けて確認した*52。

形容詞の肯定形に助動詞gas&が付く(「赤いです」などに相当、ただし過去形はgas&の方が過去になるのが普通)ときは語幹に直接付く格好になり、gas&の前でアクセント単位が分かれる。そのままだと形容詞部分のアクセントが実現しないので、語尾i/øに

*52 ただし(76b)に関しては/gasuta]be/となるようにも思う。(77b)(79b)も同様。もしそうだとすれば、「助動詞gas&も存在詞と同じく+アクセント; ただし語尾uのときだけ例外で、/gasu=/という可能性もある。その場合、語尾eN, eNkaQtaの第2核は記述の必要がないことになる。

【表4】

| 《語幹》 | 《接辞》 | 《語尾》 |
|---|---|---|
| ◇用言本体 +kag&, -tob&, +'ogi&, -'age&, … +kuro%, -'age%, … zaNneN=\$, kire]e\$, gaQko]o\$, … | a'e&(are&), ase&, e&, so'o\$, +mas&, ne%, de%, 'jasu%, nigu%, qar& | CV'Cu, CV'Ce/o, CV'Cuna, CV'Ceba', ne'de, CV'CVsa, CV'CVni, naŋa'ra, CV'ta, CV'taQta', CV'tara', CV'tari, CV'te(→補助用言へ続くときは場 合により第2潜在核もあり), a'e''N, asje''; e''N, e''NkaQta |
| ◇補助用言 (CV'CVte) +ku&, +'ar&, +mi&, +suma'w&, +hosu% (CV'CVte') -'in&, -'i&, -'og& (CV'CVte(mo/'ja/ke/'ida')) -mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -idadag& | | CV'i/φ, CV'gaQta', CV'gaQta'ra, CV'gaQta'ri, CV'gere'ba, CV'gu, CV'kute; CV'ge'; CV'φ |
| ◇助動詞 'jo]o\$, so]o\$, -gas&, daro]o, de]su, desjo]o, (⇒)+rasu% …ka]mo -sjene%, …ni +cuŋene% | | |

3.4. 付属語のアクセント

3.4.1. 助詞

助詞のアクセントを見ていく。

なお、助詞同士の接続については残念ながら結論が得られなかったので、議論の対象とはしないことにする。基本的には各々の助詞をそのまま続ければアクセントが得られるが、東京方言のように間に核が挿入されることもないとは言えず、精査が必要となる。

3.4.1.1. 助詞のアクセント

助詞のアクセントを【表5】に掲げる(/ /は略)。用言への接続は活用形に付いても同様。#は共通語的な語彙。

3.4.1.2. 問題点

全体に、2回目以降の下降についての判定がかなり難しい。下降がまったくなくなる(自然下降のみ)ほうが普通と思われるのである。それでもなお「有核に続くときは助詞は無核」とまではいえないと思われる。

さて、従属型で、無核に付くときにだけ核を持つものがある。核位置は多くが付属語末位で、/suka, Qte, Qcu/および/no準体, ka選択, ŋa接, su核, ka疑問/などがそれである。これを/…○○]/のように書く。(80)のとおり、有核の「見る」に付いた場合/suka/の

【表5】

| 助詞 | 体言へ | 用言へ | 助詞 | 体言へ | 用言へ | | |
|-------------|--------------|---------------------|--------|-------------------------------------|------|--|------|
| kara起点 | kara= | | ŋa格 共 | …ŋa | | | |
| kara理由 | | ka]ra | 'o格 共 | …'o | | | |
| made範囲 | made=, ma]de | | ni格 | …ni | | | |
| made期限 | ma]de | ma]de | sa方向 | …sa | | | |
| hodo | hodo= | | de手段 | …de | | | |
| dage程度 共 | dage= | dage= | no連体 | …no | | | |
| dage限定 共 | da]ge | da]ge | to格 | …to | | | |
| ŋure | (⇒)ŋure] | (⇒)ŋurs] | 'wa取立 | …'wa] | | | |
| nara | na]ra | na]ra | mo添加 | …mo | | | |
| dara接 | da]ra | da]ra | to並立 | …to | | | |
| Ndara接 | | Nda]ra | to引用 | | …to | | |
| node | | no]de | to報告 | | …to] | | |
| noni目的 | | no]ni | no準体 | | …no] | | |
| noni意外 | | no]ni | ka選択 | …ka] | …ka] | | |
| nado | na]do | na]do | ŋa接 共 | | …ŋa] | | |
| toga | to]ga | to]ga | su接 | | …su] | | |
| sa'e共 | sa]e | | ka疑問 | …ka] | …ka] | | |
| sage | sa]ge | | be推量 | | …be | | |
| 'jori | 'jo]ri | 'jo]ri | na終念押 | これらの終助詞は上昇イントネーションが被さるため、アクセントが判定困難 | | | |
| suka | …suka] | …sika] | ne終 | | | | |
| midε | midε] | midε] | 'jo終指示 | | | | |
| naNka | na]Nka | | 'jo終命令 | | | | |
| naNte | na]Nte | | zo終 | | | | |
| Qte | …Qte] | …Qte] | sa終 | | | | …sa] |
| Qcu | …Qcu] | …Qcu] | no終 | | | | …no] |
| daQte強意 | da]Qte | | | | | | |
| bagari | baga]ri | | | | | | |
| baQkari共 | baqka]ri | | | | | | |
| bari | …bari | …bari | | | | | |
| kedo, keQto | | kedo]~ke]do, keqto] | | | | | |
| Qcja終 | | …Qcja] | | | | | |
| teba終 | | te]ba | | | | | |
| Qsjo終 | Qsjo] | | | | | | |
| koQtara接 | | koQta]ra | | | | | |

東京方言と対応させれば次の通り：dage=だけ、ŋure=ぐらい、Ndara=のなら、toga=とか、sage=さえ、suka=しか、midε=みたい、bagari・bari=ばかり、kedo・keQto=けど、teba=ってば、koQtara=ならば、su=し。to報告は報告の意の文末表現「～って。」に相当。Qcjaは「よ(下降調) or じゃないか」など、Qsjoは「よ(下降調)」などに相当する終助詞。またno連体は東京方言のように末位核を無核にすることがあるが、そうでないことの方が多く、はっきりしない。

あとの下降は許されない。

(80) /suka/

a. 行くしかなかった

' iŋusu[ka]nega!Qtà. /' iŋu= | suka | nega]Qta/

b. 見るしかなかった

[mi]rusukanega!Qtà. /mi]ru | suka= | nega]Qta/

*[mi]rusuka]nega!Qtà.

これを末位核の自立語/' jama/と比較すると、

(81) a. 行く山(が)なかった

' iŋu' ja[ma]nega!Qtà. /' iŋu= | ' jama | nega]Qta/

b. 見る山なかった

[mi]ru' jama]nega!Qtà. /mi]ru | ' jama | nega]Qta/

こちらは「見る～」においても/' jama/のあとの下降は現れる^{*53}。さらに、

(82) /ka選択/

a. 冬休みか夏休み

hu' ju' jasumi[ga]nazu' jasumi. /hu' ju' jasumiga | nazu' jasumi=/

b. アクセントかイントネーション

[' a]kuseNtoga' iNtoneesjoN. /' a]kuseNtoga | ' iNtonee]sjoN/

*[' a]kuseNtoga]' iNto-

有核の/' a]kuseNto/につづく/ga/はやはり下降せず次に続く。

これは2回目以降の下降が「弱まる」こととは異なる。「弱まる」はあくまで「弱まる」であり、下降が禁止されているわけではないから、下降(核)そのものは存在すると見る。しかし上で述べたようなものは、有核要素に付く場合には下降が禁止されるから、核はないものと見る。

しかし、次のものなどは有核アクセント単位に付いた場合も下降が禁止されるとまでは言えず、微妙である。

(83) /…Qcu/

a. 冬休みというもの

hu' ju' jasumiQ[cu]mono. /hu' ju' jasumiQcu | mono]/

b. アクセントというもの

[' a]kuseNtoQcumono. /' a]kuseNtoQcu | mono]/

*53 (80), (81)は「なかった」の前に句切りがある2句をなす方が普通であるが、問題となる核と句の切れ目の位置が重なるので、念のため1句の場合の発音で検討した。これが1句になることはありにくい、「来るしか、ではなく、行くしか」「見る山、ではなく、行く山」のようなつもりである。

[¹a]kuseNtoQcu]mono. も可か (そうだとすれば, 独立型/Qcu)/。

また逆に, 独立型としているものでも, 有核アクセント単位に付いた場合に下降が現れることがあるかどうかが先述の通り微妙である。

東京方言で独立型の有核助詞は, 有核アクセント単位に付いた場合は下降が弱まったり消えたりすることがあるが, 依然として核を持っていると解釈される。それはプロミネンスを置いた音調において

(84) [ネ]コ[マ]デ, ウ[マ][マ]デ

などと下降が現れることが根拠の一つになっていた (川上 稔1966:242-243)。東京方言以外にも, たとえば松江市方言でプロミネンスを根拠として同様の解釈がなされている (上野善道1981.11:114)。

しかし登米市方言ではやや様相を異にする。/sage, 'jori/は/sa]ge, 'jo]ri/と解釈しているが, 有核の「猫」/nego/に接続させてかつ助詞にプロミネンスを置いた

(85) ?ne[go][sa]ge, ?ne[go][¹jo]ri

はやや不自然に感じられる*⁵⁴。助詞にプロミネンスを置くこと自体それほど多くはないのであるが, それでも東京方言におけるよりも不自然さが大きい。ピッチ変動のみを問題にする限り (「強さ」等は度外視), どれほどプロミネンスを置こうとも

(86) ne[go]sage, ne[go]'jori

と言いたい。とはいえ, 有核アクセント単位に続いたときに「いかなる場合でも下降が許されない」というほどでもなく, 微妙である。

以上, 【表5】はなお確信が持てず, 他の解釈の余地を残すものであることをお断りしておく。

3.4.2. コピュラ

コピュラはアクセント的には助詞と同じ資格である。1拍のもののみ, 前のアクセント単位と融合すると見る。

(87) /…da], da]qta, da]qtara, da]qtari, …na, …de], …ni/

/da, de/が無核に付くときだけ/-da], -de]/となる。

3.4.3. 活用しない助動詞

'joo\$, soo\$はそれぞれ'jo]o\$, so]o\$であるが, 後者は共通語的で, 普通はQcu (トイウに相当) に終助詞'jo, zoなどをつけて/ka]guQcu | zo=/ (書くトイウ+ゾ) などと表す。

*54 無核の「牛」/bego/に接続させ, 同じくプロミネンスを置いた bego [sa]ge, bego [¹jo]ri は特に問題なく容認される (『は大幅な上昇)。

daroo, desu, desjooはそれぞれdaro]o, de]su, desjo]o。これもdaroo, desjooは共通語的で、普通は「(da) be」などで表す。

3.4.4. 活用する助動詞

rasu%は東京方言のrasi%と同じく支配型・独立型の両形があり、

(88) (⇒)⁺rasu%

である。しかしこれも共通語的で、やはりqcuを用いるのが普通である。

カモシレナイに相当するのがkamo-sjene%で、前半は従属型（あるいは独立型/ka]mo/か）、後半はそこから独立した独立型の

(89) …ka]mo | -sjene%

である。moなしで…ka] | -sjene%にも言う。…ka]moのみで文を終止することも可能である。ニチガイナイはni-cujene%で、同じく

(90) …ni | +cujene%

であるが、書き言葉的である。

また可能表現では可能・不可能とも、子音おわり語幹には接辞e&（いわゆる可能動詞）が、母音おわり語幹には接辞are& (a'e&) が用いられるが、これは共通語の影響を受けている。本来は可能には

(91) …ni | +'i% (～するに良い)

を用いる。また不可能には語幹の子音おわり／母音おわりに関わらずa'e&・ne%を用いる。「*～するに良くない」や、子音おわり語幹に対する*a'e&・CV*Cuは用いられない。これら本来の可能・不可能表現は老年層では保たれているがそれより若い層では前述の共通語的なものに移行している。(92a～d)のそれぞれ上段がより方言的な表現。

(92) a. (書)kag&の可能

+kag&・CV*Cu …ni | +'i%・CV*i /ka]guni | 'i]i/
+kag&・e&・CV*Cu /kage]ru/

b. (書)kag&の不可能

+kag&・a'e&・ne%・CV*φ /kaga'ene]/
+kag&・e&・ne%・CV*φ /kagene]/

c. (開)'age&の可能

-'age&・CV*Cu …ni | +'i%・CV*i /'age]ni= | 'i]i/ (runi→Nniとなる)
-'age&・a'e&・CV*Cu /'agera'eru=

d. (開)'age&の不可能

-'age&・a'e&・ne%・CV*φ /'agera'ene=/ (この1通りのみ)

コンピュータの丁寧表現としてdesuのほかかにde gas&があり、

(93) …de] | -gas&

である (deはコピュラ)。gas&のアクセントはすでに述べた。

4. “付属語”アクセントの記述方法 ～先行研究と対照させて

和田実(1969.12=1980.2)の冒頭の文、「助辞接辞はア上の性質がややこしい。」^{*55}に象徴されるように、活用形・付属語はアクセント上複雑な振る舞いをする。その記述方法を提案することが本稿の目的であった。付属語アクセントが自立語(用言はその“終止形”をひとまず想定して)と決定的に異なるのは「前接語との関係が無視できない」という点であり、それをどう整理し記述するかが課題なのであった。

本節では、ここまで述べた活用形アクセント・付属語アクセントについて、先行研究とも対照させながら本稿の立ち位置を明らかにする。

といっても、活用形を含む“付属語”アクセント全体の研究史については田中宣廣(2005.10:53-78)が網羅的でかつ詳しいのでそちらにゆずる。本節ではその中で、本稿の「接続型」に類似する概念を扱った論考を主に取り上げる。

諸方言のアクセントの分類は上野善道(1989.5:179)に従う。「有アクセント方言」「多型/N型アクセント」は同論考の定義による^{*56}。

筆者は

(94) “付属語”アクセントは自立語アクセントとの一貫性(したがって当該方言のアクセント体系全体としての一貫性)のある記述をせねばならない

と考える。そのために、方法論的仮説として次を提示する。

- (95) a. 活用形アクセントと付属語アクセントを区別する。
b. 活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどう決まるかを記述するものである。付属語アクセントは、付属語内部のアクセントと「接続型」とからなる。接続型は大きく「独立型/非独立型」に2大別される。

この背後には次の考え方がある。

(96) 付属語アクセント記述においても、有アクセント方言の定義上「アクセント単位」という概念を踏まえなければならない。このことが(94)を満たすために必要である。

(95)は有アクセント方言すべてを射程に収めることを想定しているが、式特徴を持つ方言やN型アクセント方言を本格的に論じることは筆者の手に余る。また「昇り核」「上げ核」方言についても未検証である。よって「仮説」と位置づけるものである。第4節

*55 「ア」=アクセント。

*56 「有アクセント」とは、「アクセント単位」(事実上単語ないし文節)ごとに一定した、主として音調上の特徴が見出されるタイプを言う」(p.180)。

で取り上げるのは下げ核を持つ方言を中心とする。なぜ高々「下げ核・式なし」の方言の議論から仮定される方法に有アクセント方言一般への適用可能性を見るかといえば、もっとも記述が厄介なのが式を持たない多型アクセント方言であろうからである。4.3節で後述。

4.1. 「接続型」に関する先行研究と論点

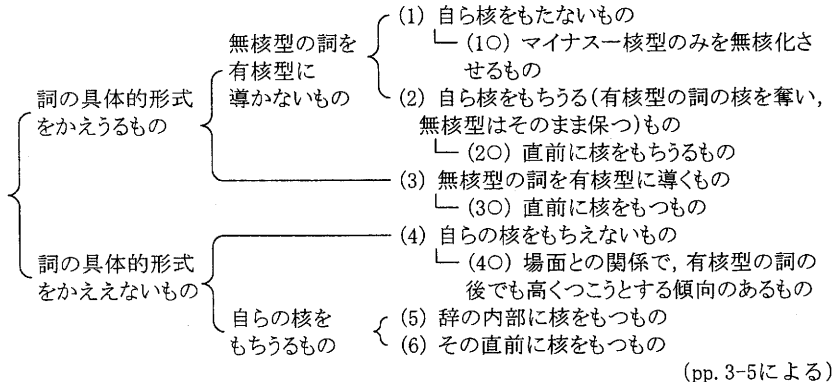
“付属語”アクセントにおいて「前の語との関係」を重視する研究はこれまでも多くあった。その定義は一見 論者間の異同は小さいように見えるが、実は本質的な違いを含んでいる。第4節では便宜上、各論者の立てる「前の語との関係」の類別をすべて「接続型」と呼ぶことにし、以下、主要な先行研究について述べる。ちなみに本稿とちがって活用形をも「接続型」で説明する論考がある（ラレルは〇〇型、など）。

4.1節で扱うのは式を持たない多型アクセントの論考を中心とする。他のタイプの方言については4.3節で言及する。

4.1.1. 奥村三雄(1956.9)

奥村三雄(1956.9)は、「付属語においては、《そのアクセント形式がその語性職能を反映している》という可能性が極めて大きい」(p.2)とし、東京方言と京都方言の付属語アクセントをそれぞれ体系化し、方言間での対応を考える。橋本文法に則り、活用形を含めた“付属語”(「辞」とも)を「《その前にある詞の形式との関係》及び、《その辞自らの形式》」(p.5)の2点から分類している。たとえば東京方言では次のようである。

(97)



4.1.2. 榎垣実(1963.3)

京都市方言の、活用語・派生語・複合語・文節・連文節というそれぞれのレベルにお

ける音調の法則について述べられている。活用形を含めた“付属語”のほか、接尾語なども一括して扱う。なお、「高平・低平」は「高起式無核・低起式無核」の意。

- (98) 「融合型」：上の語の型に融合して、全然影響を及ぼさない。そして、上の語が高平型であれば接尾辞も高平型になり、上の語が低平型であれば接尾辞も低平型になって最終拍に核を持つ。

「添着型」：どの語についても、いつも低平型。

「融着型」：付属語の一部分だけが名詞に融合同化し、あとの部分が低く平らに続く。

「吸着型」：高起式の名詞に接続すると、尾低型の名詞をも高平型にしてしまうし、低起式の名詞に接続すると中高型の名詞をも低平型にしてしまう。

(pp. 41-52)

4.1.3. 和田実(1969.12, 1971.10, 1984.2)

和田実(1969.12=1980.2)は、「東京アクセントにおける辞(助詞, 助動詞, 接辞, 造語成分のたぐい)を, 整理分類し, (直接的な記号)であらわす」(p.145)ことを主眼とする。

- (99) 甲類 独立する辞 —— ①, ②, ③, @
乙類 従属する辞 —— (順), (低), (特の)
丙類 融合する辞 —— (前), (一), (二), (三), (無), (特保), (特転)
(pp.156-157による; 丸囲みの「0・一・二・三」を@・(一)・(二)・(三)に変えた)

- (100) 甲類では, 自立語と辞とがそれぞれ一ア単位で, あわせて二ア単位になる。
[...]

乙類丙類では, 辞(助詞・助動詞のほか, 接辞・造語成分のたぐい)をも含めて, かりに辞と呼ぶ)が自立語にくっついて, あわせて一ア単位になる。

(p.157)

(100)から, (99)はアクセント単位を基準とした分類であることが分かる。甲・乙・丙類は本稿の独立・従属・支配型にほぼ相当する。

和田(1971.10)は辞書のアクセント記号の様式をまとめたものであるが, 第七節で同様の案を提出している。和田(1984.2)は神戸のアクセント(下げ核・式あり)についての論考で, やはり同じ分類によって活用形と付属語について述べている。下位分類など, 東京と多少違う点がある。

4.1.4. 木部暢子(1980.11, 1982.9, 1983.9)

木部暢子(1980.11)は北九州方言(下げ核・式なし)の活用形と付属語を奥村(1956.9)

の分類基準を利用して次のように分類する。

(101) 助動詞

(1) 詞の式を変えうるもの (有核型の無核化)

(a) 平板式の詞に付いて自ら核を持ちえないもの, (b) 平板式の詞に付いて自ら核を持つもの

(2) 詞の式を変えないもの (有核型を無核化しない)

(c) 自ら核を持ちえないもの, (b) 自らその内部に核を持つもの, (e) 辞の直前に核を持つもの

助詞

(1) 詞の式を変えうるもの (有核型の無核化)

(aO) 辞自ら核を持たないもの, (b) 辞自ら核を持つもの

(2) 詞の式を変えないもの

(c) 自ら核を持ちえないもの, (cO) cのうち時として高接し, 卓立型をつくるもの, (d) 自ら辞の内部に核を持つもの, (e) 辞の直前に核を持つもの

(pp. 46-51による; 改行位置変更; 助動詞で(2)の(b)とあるのは(d)の誤りか)

木部(1982.9)は木部前掲論文の(a)~(e)を「接尾辞式・従属式・低接式」にまとめなおす。これは東京方言にも適用される。

木部(1983.9)は、東京方言の活用形・付属語について次のように分類する。

(102) 「複語尾式」: 独立しない形に続いて語形変化のあるもの

「接尾辞式」: 独立しない形に続いて語形変化のないもの

「助動詞式」: 独立する形に続いて語形変化のあるもの

「付属語式」: 独立する形に続いて語形変化のないもの

ここからさらに、語形変化(活用)をするかどうか、するならば活用の形、アクセントは前接語が決めるか付属語が決めるか、核を持つかどうかで分類される。

4.1.5. 川上夔(1966, 1973.3)

川上は「連接型」を他の論者ほど明確に規定しているわけではないが、それに相当することが述べられている箇所がある。

川上夔(1966)は2.3.3.2節でふれたとおり、東京方言では原則として1モーラ助詞は「従属型」相当, 2モーラ以上の助詞は「独立型」相当とみる。

川上夔(1973.3)は

(103) アクセントの面から見ると、付属語には

(1) 自立語を支配するもの (2) 自分のアクセントをもつもの (3) 積極的なアクセントをもたないもの

の三種類がある。

(p. 36; 改行位置変更)

(104) (3)に属する付属語は、みな一拍の語である。(p. 39)
と述べる。この(1)～(3)は本稿の支配・独立・従属型に相当すると考えられ、それぞれ「ぐらい」、「まで」、「に」などが挙例されている。活用形は含まず、本稿でいう「付属語」のみに適用されているようである。

4.1.6. 上野善道(1981.11, 1992.10)

上野善道(1981.11)は松江市方言(下げ核・式なし)で「従属型・独立型・支配型」を規定している。独立型は「自立語が続くときと全く同じで […] アクセント上独立する」、従属型は「全体として一単位」とあり、アクセント単位を基準とした分類である(pp. 116-117)。適用の範囲については「いわゆる助詞と助動詞のうち分離性の比較的強いもの」(p. 113)とあり、挙例を見ると概略 本稿における「付属語」相当の語という意味と推定される。なお型の判定にこの方言の上昇位置に関する規則(p. 110ff.)の観察が利用されている。

上野善道(1992.10)は島根県見島方言(下げ核・式なし)でやはり「従属型・独立型・支配型」を立てる。従属型は「名詞+付属語でアクセント的に1単位」とある(以上, pp. 159-161)。適用範囲は助詞とコピュラである。

4.1.7. 田中宣廣(2005.10)

田中宣廣(2005.10)は、信州大町方言(下げ核・式なし)・東京方言・京都方言・鹿児島方言(2型)・陸中宮古方言(昇り核・式なし)について、接続型(付属語の「式」と呼ばれる)と付属語内部のアクセントとによって付属語内部のアクセントを記述する(p. 91-117)。適用範囲は活用形をも含む。

(105) 「付属語のアクセント」とはすべての付属語で統一的に
第1観察点：前の語からの音の高低関係上の続き方(付属語アクセントの「式」)
第2観察点：付属語内部のアクセント(どこで音調の下降が生ずるかなど)
という2段階の観察をしなければならない。(p. 95)

(106) 「従接式」：前接自立語にそのまま続く。付属語には下がって続くことがある。
「声調式」：前接自立語の声調が及ぶ。
「独立式」：前接語からアクセント上独立する。
「下接式」：前接自立語が平板型なら下がって続き、起伏型なら下がらず続く。
「支配式」：前接語のアクセントに関わりなく、自身の型に引きつけてしまう。
「共下式」^{ともさげ}：その付属語の1拍前から下がる。

(p. 96; また、これらのうち2種が連続する「複合式」がある)

どの式があるかは方言によって異なる。付属語内部に関しては、信州大町・東京・京都・陸中宮古方言は核で、鹿児島方言の独立式はA/B型で記述する。

本節で取り上げた奥村・楳垣・木部・上野の各論考における接続型相当のタイプ分けが、田中のいう「式」に相当するとする (p. 96)。しかし4.2節で述べるようにこれらの論者の立場は大きく2つに分かれる。

田中論文は付属語アクセントを本格的に扱った論考である。付属語アクセント記述に必要な種々の概念が明確に定義され、踏み込んだ記述がされているが、それだけに問題点もいくつかある。

4.1.7.1. 接続型における下降の直接的記述は妥当か

多型アクセントの分析において、田中説のみ特異な点がある。下降を核以外で記述する部分がある点である。

各論者の接続型の規定を見ると、奥村・木部は核で記述していた。和田・川上・上野(および本稿)はそもそも接続型の規定に核のことを盛り込まない。和田の下位分類(付属語専用)に立てられた諸記号)も基本的に核から離れない。

それに対して田中の「下接式」「共下式」は、「下がって続く」あるいは「“付属語”の1拍前から下がる」ことを、(下げ)核とは区別する。これには疑義がある。この下降は核によるものであると本稿の筆者は考える。

共下式についてはひとまず論評を控える。「下接式」を「“付属語”頭に核のあるもの」と区別する理由として次の2点が述べられる(田中は核のことを「さがりめ」と呼ぶ)。

(107) ①方法論上の統一性

[...] 前の語との接続点の音調特徴を、その語の「前の語からの音の相対的高低関係上の続き方」として捉えるべきである。よって、下がって付いていればそこに『下接』という特徴が導き出されることになる。

②『さがりめ』との区別

[...] 第2観察点を「付属語内部のアクセント」としたが、その「内部」にある『さがりめ』を「下接式」の下がって付く性質とは区別するからである。それは方法論上の意味もあって①のとおりであるが、中には「下接式」であって内部に『さがりめ』のある付属語)があるからで、そのような例において、付属語アクセントの「式」と内部の『さがりめ』を形式上も明確に峻別しておく必要が方法論上あって、また「式」と「さがりめ」は、「下接式」以外の「式」でのことまでも勘案するとはっきり区別した方が分かりやすい。その例は京都方言の名詞に付く/^(F)baqka]ri/である。[...] (p. 113; 記号は変更; 「式」の記号は頭文字をとって(F)などに置き換える)

しかしながら①②とも「下接式」が核でないことの理由にはなっていない(/^(F)baqka]ri/

の例については後述)。

東京方言において「山なら」「行くなら」は

- (108) ヤ[マ]ナラ
イ[ク]ナラ (ナラが ~ナ]ラ かどうかはいまは問題外)

であるが、田中に従えば名詞に続くナラは従接式/^(従)na]ra/, 動詞に続くナラは下接式/^(下)nara/であるから

- (109) 「山なら」は/'jama]na]ra/
「行くなら」は/'iku^(下)nara/

と書くことになる。/nara/内部の下降の有無はいま問題外として、/'jama/のあとの下降は核(名詞本来の)であるが、/'iku/のあとの下降は核でないとされるため/'iku]nara/とはできず、このように書かざるを得ない。しかし、それでよいのだろうか。田中の「下接式」「共下式」以外の式(=連接型)、そして他の論者の立てる全ての連接型は、具体的な核の配置によって解消されるものであるが、この「下接式」の下降は核ではないからそのまま「下接式による下降」として残らざるを得ないわけである。

東京方言は、自立語単体であっても付属語が加わっていても、アクセント記述は基本的に核のみでできる。このことは他の論者が下降をすべて核で記述していることから分かる。それにもかかわらず下降の説明に核以外の要素を持ち込むためには、(107)は説得力に欠ける。加えて、田中の挙げる5方言を見渡すと(pp. 270-276, 312-316, 342-345, 363-366, 411-415)、次のことが分かる。

- (110) 「下接式」が存在するとされるのは信州大町・東京・京都方言であるが、これらはいずれも下げ核を持つ方言であり；
一方 下げ核を持たない陸中宮古方言(昇り核)・鹿児島方言(2型アクセント)には下接式もない。

これもこの下降が(下げ)核である可能性を示唆する*57。

なお、京都方言の/^(下)baQka]ri/に関しては、本稿でいう独立型で低起式の/LbaQka]ri/と見られる。始点の下がりには低起という式特徴によるものである。田中は/baQkari/の内部には漸昇調があることを述べている(p. 329)。しかし「下接式」の規定に漸昇調は含まれていない。漸昇調はまさに/baQkari/が低起式であることを支持する事実であり、これをただ「下接式」と処理することについて田中が何も述べていないのは不思議である*58。筆者は付属語でも独立型であれば(高起/低起の)式特徴を持つと考える。

*57 ちなみに田中の挙げる5方言の中で「下接式」でかつ内部に下降のあるものは京都方言の/baQkari/のみである。

*58 田中は京都方言では“付属語”に高起/低起式を認めない。これに関して、木部暢子(2009. 1:70ff.)も参照。

共下式については語尾における潜在核で解決できそうである。たとえば/(*)heN/は屋名池(1992. 6:49)によればCV*CVheNという語尾である。

4.1.7.2. アクセント的な積極性・消極性

田中宣廣(2005. 10)は川上葵(1973. 3:36)の3分類(103)について次のように述べる。

(111) アクセント節の各構成要素のアクセントと実現音調との関係の正しい理解をするためには、あたかもアクセントの力の大きさに差があるように、「この語は積極的だが、あの語は自らのアクセントをもたない」とはしないで、前接語からの続き方の『力』はどの種類も同じであって、その『内容』に違いがあると捉えるのが、方法論上正当である。自立語のアクセントでは積極的か否かということを問題にすることはないので、付属語でだけ問題にする合理的理由はない。

[...]「-ŋa」や「-kara」のように自立語のアクセントが実現音調となる付属語は、その付属語には積極的なアクセントの力がないのではなく、そのアクセント節の実現音調の中で自立語のアクセント型をそのまま実現させるという『内容』のアクセントを立派に備えていると考えるべきである。

(p. 100; 下線は原文)

本稿は「積極的／消極的」というとらえ方を支持する立場である。

「[積極的か否かを] 付属語でだけ問題にする合理的理由」はある。自立語と違って付属語は必ず何らかの語に先立たれる形で存在するのだから、前接語のアクセントを生かし、自身はアクセント上透明であるというあり方が可能であり、実際に存在する。これを「積極的でない」と表現する^{*59}のは、「自立語のアクセント型をそのまま実現させる」といういわば虚なる「内容」を認めるよりも素直な解釈であると考えがどうか。

田中は「どの付属語も、アクセントに関して等し並に扱う」という方針をとることを言いたいだけなのかもしれない。一方川上や本稿の考え方は、そもそも等し並には扱わない。非独立型で、「積極的でない」のが従属型、付属語側がアクセントの決定権をもつのが支配型、というふうに「アクセントの決定権がどちらにあるか」を見ているのであり、「力」の差こそ重要であるという考え方である。このように考えるならば「積極的なアクセントを持たない」というのは合理的である。

本稿では接辞の多くも自らのアクセントを持たないとするが、やはりそれも同じこと

*59 あるいは次のようにも言える：従属型はアクセント的には「前接アクセント単位の長さを延長するだけ」の働きしかもたない。「山」/jama/に「が」/…ŋa/が付くとき、「が」は2拍のアクセント単位/'jama/を3拍の/'jamaŋa/にするだけである。

である。

4.2. 本稿で提示する仮説

仮説(95)と、その背後にある(96)について述べる。

4.2.1. 「アクセント単位」とアクセント記述

(96) 付属語アクセント記述においても、有アクセント方言の定義上「アクセント単位」という概念を踏まえなければならない。このことが(94)を満たすために必要である。

奥村・榎垣・木部・田中は「アクセント単位」を用いておらず（接続型の定義のみならず、議論の中にそもそも出てこない）、一方 和田・川上・上野は「アクセント単位」を接続型の類別に用いている。この違いは見えにくいだが、前4者と後3者が決定的に立場を異にしていることを意味する。

上野善道(1989.5:179)の規定は次の一般則として整理できる。

(112) 《有アクセント方言における一般則》

任意の語連続はいくつかのアクセント単位からなり；
アクセント単位ごとにアクセント的特徴（核，式，音調型）が定まっている。

(112)は、活用形・付属語が含まれる場合でも維持されるべきであり、したがって活用形・付属語の記述はアクセント単位（の境界）を意識したものでなければならない。

4.2.2. 活用形アクセントと付属語アクセント

(95a) 活用形アクセントと付属語アクセントを区別する。

川上・上野は、少なくとも前掲各論考を見る限りでは接続型の議論に活用形を入れていないようである。他の論者は活用形をも接続型で説明しようとする、つまり、1つの記述法で全てを説明する。記述そのものは後者の立場でもできないわけではないが、本稿は前者の立場をとり、それをより明確化しようとするものである。

まず、拠って立つところの文法理論は学校文法よりも第1節で概観した屋名池の理論の方が合理的と考えられる。学校文法との大きな違いとして、“終止形”語尾としてuを分析することが挙げられるが、これはアクセントの観点からは、たとえば東京方言で次のような共通性を見ることに役立つ。

| (113) 起伏式 (+アクセント) | 平板式 (-アクセント) |
|--------------------|---------------|
| mirare]ru | kikareru= |
| kakare]ru | ka'wareru= |
| 'okirare]ru | 'aterareru= |
| tatakare]ru ; | 'okurareru= ; |

misase]ru
kakase]ru
'okisase]ru
tatakase]ru
…

kisaseru=
ka'waseru=
'atesaseru=
'okuraseru=
…

(/ /は略)

学校文法によるならば、ここから抽出されるのは

(114) 起伏式：/-rare]ru, -sase]ru, …/ 平板式：/-rareru=, -saseru=, …/
云々といった，“助動詞”ごとのアクセントの共通性である。しかしここで語尾uを抽出すれば、用言単体の“終止形”/mi]ru, ka]ku, …; kiku=, ka'u=, …/をも含めて「CV*Cu」というより大きな共通性を抽出できる。

そして、分析をこのようにするならば、活用形アクセントの分析と付属語アクセントの分析は自ずと別扱いとせねばならない。活用形アクセントは「語」未満の要素（語幹・接辞・語尾）の結合に関わるものである一方、付属語アクセントは語と語の接続に関わるのだからそもそもレベルが異なるわけである*60。

このようにして区別された2つのアクセント規則は、アクセント単位の構成に関しても立場が異なる。

(95b) 活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどう決まるかを記述するものである。付属語アクセントは、付属語内部のアクセントと「接続型」とからなる。接続型は大きく「独立型/非独立型」に2大別される。

一般に、あるアクセント単位に対して別の語形が接続するとき、アクセント的なあり方としては独立/非独立という2種しか通常ありえず、これが「接続型」の根本的な2種である。ただし1.2.3節で挙げたような「アクセント単位境界が「語」の境界とずれる」ものについては「特殊型」などとして扱わねばならないが、数は多くない。

darooのようなものははじめから定位置の核/daro]o/を持っているが、活用する付属語では、それに相当する核が活用形アクセントによって決まる。そして、たとえば東京方言のrasi%は支配型であり、活用形アクセントによって決まったこの核でもって前接アクセント単位を支配する。活用する付属語はこうした2段構えの記述が必要である。

*60 純粋にアクセント的に見ても、接辞や語尾は「1アクセント単位未満の要素（語幹あるいは語幹+接辞）」に付くものであるのに対し、付属語は「いったんできあがっている1つのアクセント単位」に付くという違いがある。

ところで、活用形と付属語という異なるレベル間にある種の共通性があることも事実である。すなわち、アクセント素性をもつ接辞+mas&や+gar&は、それまでに出てきたアクセント素性を打ち消す働きがあり、付属語の「支配型」と共通する面がある。またアクセント素性を持たない接辞are&やase&は、付属語で原則としてアクセントを持たない「従属型」と共通する面がある。このような点を重視して“付属語”を統一的に記述する方法があるかどうかは興味のあるところである。

4.2.3. まとめ

活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどのように形成されるかという規則であり、付属語アクセントは「接続型」によりアクセント単位の構成の仕方を記述する。「アクセント素性」「潜在核」「接続型」といった記述装置は活用形や付属語専用にあつらえられてはいるが、活用形・付属語が自立語とは異なる独自の世界を持っていることを意味するのではなく、むしろ逆である。それらは最終的に「アクセント単位と、それに対して定まっているアクセント核」へ解消され、よって、一般則(112)は活用形・付属語が関係しても維持される。活用形アクセント・付属語アクセントの分析はここにおいて(94)「自立語アクセントとの一貫性」をみることができるのである。

4.3. 他の方言への適用

本稿で取り上げたのは「式を持たない下げ核」方言が中心であったが、導かれた仮説は有アクセント方言一般に適用できる可能性を持つ。

“付属語”アクセントの記述は「式を持たない多型アクセント」方言において最も複雑ではないかと思われる。かかる方言では「アクセント素性(と本稿で呼ぶもの)の実現のしかたが語尾によって異なる」(つまり、2つの潜在核が語尾ごとに固有)からである。ところが、たとえば京阪方言では、アクセント素性が単体で低起/高起式に反映し、語尾とは関わらない(語尾はそれぞれ固有の \vee をもつが、1つだけで、それがそのまま核となる: 屋名池1992.6:47ff.)。鹿児島2型アクセントではアクセント素性は単体でB/A型として実現し、あとはアクセント単位の境界位置さえわかればアクセントが決まってしまう。

京阪方言は屋名池(1992.6)で記述されているので、ここではN型アクセントの一例として鹿児島方言を見よう。鹿児島方言の“助詞・助動詞”は、木部暢子(1989.5=2000.2:41)によれば次のように分類される。

(115) (I)アクセントを持たないもの(従属式)

(ラ)スック<使役>, (ラ)ルック<受身>, ン<打消>, タ<過去>, バ<仮定>, ガ<が>, オ<を>, ズイ<まで>, セカ<さえ>, バッカイ<ばかり>, ……

(II)アクセントを持つもの(独立式)

A型 ト<準体助詞>, チョック<進行態・既然態>

B型 ジャ・ジャライ<指定>, ジャロ・ジャロダイ<推量>, ……

X型 ド<伝達>, ガ<伝達>, ……

(III)特殊型

ゴチャック<様態>

(p.41より抜粋)

(II)は「そこでアクセント単位が区切れ、新たなアクセント単位を立ち上げる助詞・助

動詞」(p. 40), それに対して(I)は「自身がアクセントを持たずにまったく前接語に従う助詞・助動詞」(同)とされる。特殊型のゴチャットはすでに述べた(1. 2. 3節)。X型はイントネーションが強く関与するためにアクセントを定めがたい語類(p. 47)である。また前接語を後ろからアクセント的に支配する「支配型」相当の語はない。

鹿児島方言のアクセントを記述するには、アクセント単位の境界位置と、それぞれの単位がA型・B型のいずれであるかが分かれば必要十分である。(115)によればそれが分かるので、鹿児島方言の“付属語”アクセント記述は基本的に(115)で必要十分である。田中(2005. 10:348-369)も同じ方法をとる(ただし従属式は「声調式」との位置づけ)。

これはここまで述べてきた本稿の枠組みの中で記述が可能である。(II)が独立型付属語に、(I)が接辞・語尾と従属型付属語に入る。用言のアクセント素性は+/-がそのままB/A型になり、接辞と語尾はアクセントをまったく持たない、とすればよい。

以上を簡単に比較すると次のようになる。

| (116) | 活用形アクセント | | 付属語アクセントの接続型 |
|------------|--------------------|---------------|--------------|
| | アクセント素性の語尾への関与 | 語尾のもつアクセント的特徴 | |
| 東京方言・登米市方言 | あり：語尾の潜在核を選択 | 潜在核(2つ) | 独立／従属／支配 |
| 京阪方言 | なし：単独でアが実現(低起/高起式) | 核(1つ) | 独立／従属／支配 |
| 鹿児島方言 | なし：単独でアが実現(B/A型) | なし | 独立／従属 |

(A=アクセント)

4. 4. まとめ

“付属語”のアクセント分析では「前の語からの続き方」という視点を持つことが有効であり、そのように分析した研究が多くある。しかしながらそれは論者によって少しずつ規定が異なる。本稿は、活用形と付属語を別扱いとして記述するようにし、「前の語からの続き方」=「接続型」は後者に対して適用した。

たとえば東京方言の活用形・付属語アクセントは

活用形に対しては、語幹・接辞について「アクセント素性」を、語尾について2つの「潜在核」を；

付属語に対しては、「接続型」とそれに応じたアクセント核を

指定する。ここで設定した「アクセント素性」「潜在核」「接続型」は「アクセント単位の構成」および「それぞれの単位内における核の配置」に解消され、最終的には「アクセント単位ごとに1個または0個の核」という、自立語と一貫した形に記述することができる。またこの枠組みは他の方言に対しても記述力をもつと考えられる。

おわりに

“付属語”のアクセントは把握しにくく、さまざまな記述法が提出されてきた。本稿は活用形については屋名池誠の述部のアクセント記述に注目し、一方 付属語はそれとはレベルが異なるものとして、独立型／非独立型という2種を基本にした類別を考えた。最終的に、一方言のアクセント体系として一貫した形になることを目指した。

第3節では登米市方言の記述を試みた。活用形アクセントは、この方法論を採るならば、当該方言の活用体系を記述できた上で語らなければならない。今回登米市方言の活用体系については十分詰めることができず、動詞末尾の/ru/が後続の音形によって/N, Q/に変化することや、変格活用の動詞についてはふれることができなかった。これは反省すべき点である。

東京方言でも登米市方言でも「2回目以降の下降」は判定しにくい。“付属語”アクセント記述の最終的な問題はそこにあるのではないか。研究の進展が待たれる。

【補記1】

佐藤奏(2008.3)ではアクセントを音節単位で記述したが、早田輝洋(1999.2)および上野善道(2001.3)に従いモーラを認める。

- (i) 日本語には、東北諸方言も鹿児島方言も含めて、すべてその区別が有ると考えられる。[…]長音節を2と数え、短音節を1と数える単位をモーラという(早田輝洋1999.2:7)
- (ii) a. [モーラの定義]軽音節と重音節の音韻的区別があれば、その言語は「モーラ」をもつとして、そこに「1対2」の関係も「等時性」も要求しない
b. 日本語東北方言も、軽音節と重音節の対立はあるので、[…]非等時的モーラをもつ(上野善道2001.3:14)

/ε/を何モーラとするかなど、多少問題があるが、これについて詳しく検討することは趣旨から外れるので避けた。本稿ではアクセント核を担う単位を「拍」と呼んだ。

【補記2】

佐藤奏(2008.3)の「語頭核制限」=(i)を撤回する。

- (i) 原則：2音節以上では、語頭の軽音節は核を担えない。
例外1：2音節語は/軽]軽/が存在する。
例外2：語頭が軽音節であっても、続く第2音節が無声化母音を持つ場合は事実

上の重音節となり、/軽]無○(…)/の形で語頭核が許容される。(p.149)

上記のような規定であったが、反例、すなわち

(ii) /○]◎…/ (○=モーラ, ◎=非モーラ音素かつ非無声化音)

がいくつか見つかったので挙げる。佐藤(2008.3)「注11」で「^{うるこめ}稷米」/u]rukome/の例があったことを述べたが、その後次が見つかった。

(iii) さておき/sa]te'ogi/, 次々/cu]ŋicuŋi/, 五時間/go]zukaŋ/,
(敵も)然る者/sa]rumono/*⁶¹

(上野善道1987.3, 1988.3の語彙リストによる; 網羅的に調べたわけではない)

また上野(1985.2:54-55)に岩手県粟石方言の3・4モーラ名詞で頭高型のものが列挙されている。この方言は/○狭広/(狭=狭母音, 広=広母音)の「狭」に核が来ないことが関係して頭高型が多く出る。登米市方言ではそのような制限がないが、それでもリストの中で(ii)に該当するものとして少なくとも(iv)がある。ただし並列的な構造(次々, 猿蟹, 鶴亀, 読み書き)や複合語というほど熟していないもの(五時間, 然る者, 間もなく)ばかりではあるが, あることはあるわけである。

(iv) 猿蟹/sa]rukani/, 鶴亀/cu]rukame/, 読み書き/'jo]mikagi/,
間もなく/ma]monagu/;
酔の物(これは前稿でもふれた)/su]nomono/, 菜の花/na]nohana/,
火の玉/hi]notama/

前稿の副題の「南奥特殊アクセント」は頭高型が極めて少ないことをもって用いたものであるが, あわせてこれも撤回する。

(追記)

3.3.3節で述べた登米市方言の「動詞+te+補助動詞」のアクセントについて, 【表3】のII領域の下半分は, IV領域bに準ずる次のようなアクセントの可能性もあり, どちらか判然としない。筆者は特にteのあとで一瞬ポーズを置くところから出ることがある。

/naŋe]demo]ra'u, naŋe]de'ja]ru, naŋe]deke]ru, naŋe]desuke]ru,
naŋe]de'ida]dagu/

もしそうであれば解釈の変更が必要になるが, たとえば活用させた結果想定される/nəŋe]de'ida]daida]qta]/は, 理論上3アクセント単位とせねばならない。現実の音声では2回目以降の下降のはっきり出ず検証困難である。よって判断を保留せざるを得ない。

*61 感動詞も含めればさらに さてさて/sa]tesate/, これこれ/ko]rekore/, しめしめ/si]mesime/ がある。

また「-V1+te+⁺suma'w&」について、/su/に核を置くIV領域b相当の発音を耳にしたことがあり(たとえば(履)/haidesu]ma'u/)、【表3】で挙げたものと併用されているかもしれない。

【引用・参考文献】

- 榎垣 実(1963.3)「音調差異とその法則 一京都市方言を例として一」、『国語研究』15:17-65
- 上野善道(1977.8)「日本語のアクセント」, 大野晋・柴田武(編)『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店:281-321
- 上野善道(1980.7)「アクセントの構造」, 柴田武(編)『講座言語1 言語の構造』大修館書店:85-134(上野善道1984.10:265注1に誤植訂正)
- 上野善道(1981.11)「松江市方言のアクセント 一付属語を中心に一」、『日本海域研究所報告』13:109-136
- 上野善道・新田哲夫(1983.10)「金沢方言におけるアクセントと語音の関係」、『日本海文化』10:左1-43
- 上野善道(1985.2)「地方アクセント研究のために」, 加藤正信(編)『新しい方言研究 愛蔵版』至文堂:47-64
- 上野善道(1986.3)「青森市方言の動詞のアクセント」、『日本海文化』13:1-51
- 上野善道(1987.3)「アクセント調査語彙用参考資料 一4モーラ体言改訂版(1)一」、『アジア・アフリカ文法研究』15:233-39
- 上野善道(1988.3)「アクセント調査語彙用参考資料 一4モーラ体言改訂版(2)一」、『アジア・アフリカ文法研究』16:99-247
- 上野善道(1989.5)「日本語のアクセント」, 杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院:178-205
- 上野善道(1992.10)「見島方言の付属語のアクセント」、『日本海域研究所報告』24:157-167
- 上野善道(2001.3)「日本語のモーラ, ラテン語のモーラ, 英語のモーラ」、『国語研究』64:8-16
- 上野善道(2001.10)「鹿児島県黒島大里方言の活用形アクセント」、『言語と人間』5:5-31 = 上野善道(2002.3)『消滅の危機に瀕したアクセントの緊急調査(「環太平洋の言語」成果報告書A4-006)』大阪学院大学情報学部:94-134に収録
- 上野善道(2002.1)「アクセント記述の方法」, 飛田良文・佐藤武義(編)『現代日本語講座3 発音』明治書院:163-186
- 上野善道(2003.6)「アクセントの体系と仕組み」, 北原保雄(監修)・上野善道(編)『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店:61-84
- 大西拓一郎(1990.3)「宮城県志津川町方言の用言のアクセント 一動詞の変化形を中心に一」、『日本文化研究所研究報告』別巻27:82-57
- 奥村三雄(1956.9)「辞の形態論的性格」、『国語国文』25/9:1-14
- 川上 泰(1961.5)「言葉の切れ目と音調」、『國學院雑誌』62/5:67-75 = 川上泰(2005.2):130-142に収

録

- 川上 蔡(1966)「体言につく一拍の助詞のアクセント」、『音声の研究』12:239-253
- 川上 蔡(1973.3)『音声学シリーズ5 日本語アクセント法』学書房出版
- 川上 蔡(1977.12)「アクセント単位の大きさ、強さ」、『国語学』111:78-82 =川上蔡(2005.2):346-354
に収録
- 川上 蔡(2000.9)「具体音声から抽象されるもの」、『国語と国文学』77/9:1-14
- 川上 蔡(2005.2<1995.3)『日本語アクセント論集(第3版)』汲古書院
- 木部暢子(1980.11)「北九州方言のアクセント —助詞・助動詞—」、『純真紀要』21:45-57
- 木部暢子(1981.5)「助動詞のアクセントと文法的性格 —北九州方言を例として—」、『日本方言研究会
第32回研究発表会発表原稿集』:10-18
- 木部暢子(1982.9)「連接する助詞のアクセントについて」、『文献探求』10:63-72
- 木部暢子(1983.3)「助詞のアクセントについて(国語学会研究発表会発表要旨)」、『国語学』132:85-86
- 木部暢子(1983.7)「用言の活用形とアクセント」、『文献探求』12:73-64
- 木部暢子(1983.9)「付属語のアクセントについて」、『国語学』134:23-42
- 木部暢子(1989.5)「鹿児島二型アクセントにおける助詞・助動詞のアクセント」、『奥村三雄教授退官
記念国語学論叢』桜楓社:左1-16 =木部暢子(2000.2)『西南部九州二型アクセント
の研究』38-51に収録
- 木部暢子(2009.1)「書評: 田中宣廣著『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』」、『日本
語の研究』5/1:66-73
- 工藤真由美(2005.2)「体験の過去をめぐって —宮城県登米郡中田町方言の述語構造—」、『阪大日本語
研究』17:1-25
- 工藤真由美(2006.11)「アスペクト・テンス」, 小林隆(編)『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
:93-136
- 齋藤孝滋(1990.12)「岩手方言における語中子音有声化現象 —音環境・語彙的事情・世代の観点から
—」、『国語学研究』30:120-107
- 佐藤里美(2007.7)「宮城県中田方言の過去形」、『国文学解釈と鑑賞』72/7:113-118
- 佐藤 奏(2008.3)「宮城県登米市石越町方言のアクセント —「南奥特殊アクセント」の分析—」、『日
本語学論集』4:154-143
- 田中宣廣(2005.10)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 中山昌久(1981.3)「動詞活用の種類とその記述方法」、『国語と国文学』58/3:60-78
- 中山昌久(1982.1)「動詞の語形特徴」、『学苑』505:264-247
- 中山昌久(1984.1)「強式について」、『国語と国文学』61/1:41-58
- 中山昌久(1986.8)「微分としての古典文法」、『国文学解釈と鑑賞』51/8:107-122
- 中山昌久(1988.2)「活用形・v・1」、『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』39:65-76
- 中山昌久(1992.2)「活用形・v・2」、『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』43:169-191

- 中山昌久(1994.2)「活用形・v'・3」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』45:41-50
- 中山昌久(1995.2)「活用形・v'・4」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』46:45-72
- 中山昌久(1999.2)「活用形・v'・5」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』50:221-254
- 新田哲夫(1994.9)「鶴岡方言のアクセント」, 国立国語研究所(1994.9):81-140
- 服部四郎(1973.6)「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは? —日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって, “調素”の単なる連続にあらず—」,『言語の科学』4:1-61
- 早田輝洋(1965.4)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」,『文研月報』15/4:30-39, 73, 付表1-3
- 早田輝洋(1999.2)『音調のタイポロジー』大修館書店
- 八亀裕美・佐藤里美・工藤真由美(2005.1)「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム —方言のスペクト・テンス・ムード体系記述の試み—」,『日本語の研究』1/1:51-63
- 屋名池誠(1986.10)「述部構造 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述—」, 松村明教授古稀記念会(編)『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院:583-601
- 屋名池誠(1987.1)「活用 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]—」,『学苑』565:208-194
- 屋名池誠(1987.9)「述部のアクセント —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[3]—」,『学苑』573:106-91
- 屋名池誠(1988.1)「語 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[4]—」,『学苑』577:209-199
- 屋名池誠(1988.2)「述部のアクセント・第2 —現代日本語方言による記述方法の検証と拡張—」,『学苑』578:110-97
- 屋名池誠(1988.3)「活用・再論 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺—」,『学苑』579:91-79
- 屋名池誠(1988.9)「活用論 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (1)諸説便覧」,『学苑』585:96-86
- 屋名池誠(1988.11)「活用論 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (2)諸説の批判的検討」,『学苑』588:76-67
- 屋名池誠(1989.2)「活用論 —現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (3)諸説の批判的検討(承前)」,『学苑』591:98-87
- 屋名池誠(1992.6)「上方ことばのアクセント」, 大阪女子大学国文学研究室(編)『上方文庫13 上方の文化 上方ことばの今昔』和泉書院:1-59
- 屋名池誠(1998.2)「教詞のアクセント —現代東京方言のばあい—」, 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会(編)『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院:1234-1214
- 屋名池誠(2004.8)「平安時代京都方言のアクセント活用」,『音声研究』8/2:46-57
- 屋名池誠(2005.10)「活用の捉え方」 「活用とアクセント」, 社団法人日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店:71-80

和田 実(1969.12)「辞のアクセント」、『国語研究』29:1-20 =徳川宗賢(編)(1980.2)『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版:145-159に収録

和田 実(1971.10)「日本語辞書のアクセント記号」, 金田一博士米寿記念論集編集委員会(編)『金田一博士米寿記念論集』三省堂:529-565

和田 実(1984.2)「辞のアクセントの記号化」, 金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会(編)『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂:454-434

(さとう そう 大学院人文社会系研究科 修士課程2年)

日清戦争に使用された朝鮮語会話書

—その特徴と日本語の様相—

成 琬 珂

1. はじめに

明治期朝鮮語会話書は、文化の受け入れのための西洋の会話書とは違い、主に社会情勢や政治的状况によって出版目的も変わってきた。明治10年代と20年代の前半までは、日本と朝鮮、両国の貿易や外交のためのものであった。しかし、日清戦争が始まる明治27年からは、戦争にただちに活用できる軍人用の会話書が主となる¹⁾。形式の面でも、日朝会話書から日清朝会話書へ、外交・貿易のためのものから戦争への活用のためのものへ、ハングルと片仮名による表記から片仮名のみの表記へとその内容、表記などの変遷が認められる²⁾。

本稿では、近代語資料としての活用のための、朝鮮語会話書の検討作業の一環として、日清戦争への活用のために出版された朝鮮語会話書を特に取り上げて考察し、その特徴とこれらに表れた日本語について述べる。

2. 日清戦争と朝鮮語会話書

成(2008b)で考察したように、朝鮮語会話書は日清戦争の前後である明治25年から明治28年の間に多数出版されている³⁾。戦争が始まった明治27年(1894)7月には、商武学校や近衛歩兵第一旅団などから『实用朝鮮語 正編』・『朝鮮俗語早学』・『兵要朝鮮語』が、宣戦報告をした8月には、『新撰朝鮮会話』・『従軍必携朝鮮独案内』・『速成独学 朝鮮日本会話篇』・『日韓会話』が出版される。『従軍必携朝鮮独案内』の自叙に「聊カ従軍人士ノ实用ニ便セント欲ス」とあり、本書が軍人の実用の便宜を供するものを目的としていることを明らかにしている。

また、同年9月には、日本軍の中国大陸へ進出に合わせて『独学速成 日韓清会話』・『日清韓三国会話』・『日清韓三国対照会話篇』・『日清韓対話便覧』・『旅行必用 日韓清対話自在』のように日本語・中国語・朝鮮語の3ヶ国語対訳の会話書が多数出版される⁴⁾。

多くの朝鮮語会話書の序などには当時の情勢やその出版目的が詳しく書き記されているのでここに転記する。

「宣戦ノ大詔此ニ煥発シ、日清ノ間砲煙彈雨相接セリ。此時ニ方リ苟モ日本帝國臣民タル者ハ清韓ノ言語ニ通曉シ、以テ予メ時ニ処スルノ準備ナカル可ラス」
（『独学速成日韓清会話』緒言）

「本書ハ我軍人及ヒ発行諸士ノ便宜ヲ計リ朝鮮八道府、州、郡、県、ヨリシテ軍人用語及ヒ日用会話其他雑語等詳細ニ記述セシ者ナレバ軍人及ビ発行諸士ノ本書ヲ誦読スルアレバ日清韓ノ談話ニ其用ヲ弁シ得ベシ」
（『日清韓三国会話』凡例）

「本書は朝鮮及び支那の内地を往来する人のために彼地に於て通用する所の日常必要の言語文句を集めたるものなり」
（『旅行必用日韓清対話自在』凡例）

これら、日清戦争への活用を目的として出版された会話書は、『実用朝鮮語正編』・『従軍必携 朝鮮独案内』・『朝鮮語独案内 全』・『日清韓三国通語』の凡例や序に記しているように、急遽出版に至ったのがほとんどである。

「本書ハ急遽編纂セシヲ以テ順序ヲ正スノ暇ナシ看者之ヲ諒セヨ」

「修飾校訂の暇なし故に魯魚頂倒深く咎むる勿れ」

「本書ハ将来益々朝鮮語ノ必要アルニ迫ラレ浅学ヲモ省ミス急遽編纂セシヲ以テ固ヨリ完全ナラズ聊カ朝鮮語未知者ヲ裨補シ以テ国家ニ報ゼンコトヲ願フノ微衷ナルノミ他日尚ホ其不完全ヲ補ヒ其誤謬ノ如キモ又当サニ訂正ヲ加ヘテ謝セントス看者姑ク之ヲ諒セヨ」

「日清韓三国の通語の必需日一日より急なり余喜んで此書を作る」

『日清韓対話便覧』の場合は、日本が清に対しての宣戦布告である「詔勅」までも附されており、出版目的が専ら日清戦争への活用であることを端的に表している。翌年の明治 28 年（1895）3 月に戦争が合意で終わるまでに、『朝鮮通語独案内』・『朝鮮語学独案内』・『清韓三国通語』・『日清韓語独稽古』のような、戦争への活用のための会話書は引き続き出版される。『朝鮮語学独案内』の緒言には、「本書編纂ノ意ハ第一、出征ノ軍人ニ便シ、第二、貿易ノ商人ヲ利スルニアリ故ニ用語ハ勉メテ平易簡單ヲ主として且ツ朝鮮語未知者ガ師ニ就カズシテ独リ学ビ得ベキ様副詞、形容詞ノ如キモノモータ之

ヲ載セ頗ブル心ヲ用キタリ故ニ名ヅケテ朝鮮語学独案内ト称セリ」とある。また『日清韓三国通語』の序にも、「我軍連戦連勝すでに鴨緑江を越え、九連城難なく陥り、鳳凰城亦將に我占領に帰せり。猶進んでは奉天を陥き、直ちに彼乃王都北京を衝き、その城頭に旭章旗の翻を見ること一瞬間にあらんのみ。然る時は清の四百余州は我が往来すべき地となるや必せり。日清韓三国の通語の必需日一日より急なり。余喜んで此書を作る」と記してあり、当時の情勢やその出版目的が窺える。

3. 日清戦争への活用のための朝鮮語会話書の特徴

3. 1. 形態の特徴

これら軍人用の会話書の特徴としては、独学のためのものが主流をなし、学習内容の難易度も低いと言える²⁵⁾。これらの形態的な特徴に、携帯しやすく（いわゆるポケット版）、頁数が少ない点、ハングルの文字の不採用などがあげられる。

| 題名 | 頁数 | 大きさ |
|--------------|-----------|------|
| 朝鮮国海上用語集 | 12p | 14cm |
| 実用朝鮮語 正編 | 56p | 13cm |
| 朝鮮俗語早学 | 42p | 14cm |
| 兵要朝鮮語 | 67p | 12cm |
| 新撰朝鮮会話 | 162p | 15cm |
| 従軍必携 朝鮮独案内 | 21p | 13cm |
| 速成独学 朝鮮日本会話篇 | 62p | 16cm |
| 日韓会話 | 256p | 13cm |
| 独習速成 日韓清会話 | 50p | 13cm |
| 日清韓三国会話 | 139p, 49p | 17cm |
| 日清韓三国対照会話篇 | 99p | 16cm |
| 日清韓対話便覧 | 35p | 13cm |
| 旅行必用 日韓清対話自在 | 127p | 13cm |
| 朝鮮通語独案内 | 8p | 18cm |
| 朝鮮語学独案内 | 204p | 16cm |
| 日清韓三国通語 | 118p | 13cm |
| 日清韓語独稽古 | 8p | 17cm |

<表> 日清戦争への活用のための朝鮮語会話書の頁数と大きさ

〈表〉でみるように、大きさは横 15cm 以下の袖珍判でいわゆる小型本、ポケット本と呼ばれるようなものが多い⁶⁾。頁数も 100 ページを超えるものは、『新撰朝鮮会話』・『日韓会話』・『日清韓三国会話』・『旅行必用日韓清対話自在』・『朝鮮語学独案内』・『日清韓三国通語』の 6 点に過ぎない。少ないものは 10 ページ程度の分量のものも存する。

『従軍必携朝鮮独案内』（凡例）には、「此書固より従軍人士の懐中用便ぶ供せんとす故を以て記事略図ともに成るべく簡易を主として唯た其大要を示明するのみ韓語の如きに至りては殊に然りとす」と携帯用として作ったため簡易なものになったと記している。編著者は先駆的意味を意識していたかとは別に、この大きさや分量は軍人が常時持参し、いつでも出して活用できる利点があったのではなかろうか。

これらの戦争への活用のため朝鮮語会話書のもう一つの特徴は、朝鮮語会話書であるのにもかかわらず、文字であるハングル（諺文）の表記がなされていないものが多いということである。上の会話書の中でハングルが示されているのは『日韓会話』と朝鮮語学独案内の 2 点のみで、時間的制約から文字よりは、取りあえずの戦地で必要な言語や言い方を音で覚えさせ、必要最低限の意味伝達さえできればいいという考え方が背景にあったと推察される。

3. 2. 朝鮮語会話書における特有の表記と句読点

『兵要朝鮮語』および『日韓会話』・『朝鮮語学独案内』には、「カキクケコ」と「ガギグゲゴ」の中間音として「カ° キ° ク° ケ° コ°」を、「ツ° ツ°」の中間音として「ツ°」という表記をするなど、日本にはない朝鮮語の発音の新たな日本語表記を工夫している。

『日韓会話』の緒言に「諺字ハ其上下ノ影響及口調ノ抑揚ニ依リ本音ヲ失ヒ又ハ長短緩急ノ差ヲ生ス故ニ傍訓ハ以テ直チニ基本音ト認ムヘカラス」「傍訓に「カ° キ° ク° ケ° コ°」アルハ「カキクケコ」ト「ガギグゲゴ」トノ間音「ツ°」ハ羅馬字ニテ TU 或ハ DU ト同一ノ発音ナリ元来本邦ノ仮名ハ以テ悉ク彼国ノ音ヲ現ハス能ハス故ニ今之ヲ仮造シ以テ発音ノ便ニ供ス」と、原音に近い発音としての新たな表記を作っているという。

次いで、明治前期の朝鮮語会話書における句読点について調べてみる。明治前期の会話書には読点は付けられているが、句点は付けられていない。また、読点に「、」が用いられた場合と「。」が用いられた場合がある。

会話書には日本語・朝鮮語両方に句読点を付ける場合、両方とも句読点をつけていないもの、そして次の用例のように朝鮮語のカタカナ表記のみに句点を付け⁷⁾、日本語には付けていない場合もある。ちなみに、日本語に句読点をつけて朝鮮語には付けてい

ない場合は見当たらない。

○左様デスカ私モ矢張ソウデス クロンハーヲ、ナト、ドハン、クロケ、サングカ
クハヨツソ (『新撰朝鮮會話』 p.52)

○今年ハ平安道ニ御出ニナリマセンカ クムニヨヌン ピョーカ° ンドアンカー
シーヨ (『日韓會話』 p.17)

○ちんせんは、いくらか サクチェヌン、オルマニヤ

(『従軍必携朝鮮独案内』 p.19)

○火輪船ハ。イツ頃。来ルト申シマスカ ハーロンソン。ランチエーチュム。ラン
タ、ハーナーヨ (『速成独学朝鮮日本會話篇』 p.34)

『速成独学朝鮮日本會話篇』(凡例)に、「書中朝鮮語及日本語ニ「。」句読ヲ用ヒタルハ一語宛ニ離シテ其訳語ノ了解シ易キ為ニス又朝鮮語中「、」句読ヲ附シタルハ連語ニシテ誦読シ難キ所ヲ読ミ易カラシメ為ナリ」と句読点をつけた理由について説いている。朝鮮語會話書の日本語における句読点は明治 10 年代には句読点が全く付いてなかったのが、20 年代に入り読点だけを付けるようになる。ただ、會話書における読点は形態素・単語などといった文法的な概念による原則はなく、分りやすいところで用いられている。つまり、句読点の採用により読みやすく、朝鮮語や日本語の意味がわかりやすくすることにより、短期間に学習効果の向上を狙ったものと推察される。

3. 3. 會話の特徴

こられの戦争への活用のための會話書には、内容の面から、①命令・禁止・許可・確認の表現の多用、②平易簡略な言葉、③軍人が現地で必要とする言葉や軍隊に関連した會話、軍人の士気を盛り上げる會話の掲載という特徴がある。

①命令・禁止・許可・確認表現の多用

『實用朝鮮語 正編』に、「本書編纂ノ意ハ吾儕軍人ノ軍務執行ヲ補助スルニアリ本書中ノ訳語ハ命令詞多キニ居ル上流者ニ向テ之ヲ使用スル時ハ失礼ニ涉ラザル様注意ヲ要ス」(凡例)と述べているように、戦争への活用のための會話書には次のような命令表現が多いため、目上の人などには適さず、かえって失礼を犯す恐れがあると注意を促している。

- 後^{うしろ} に向^むけ ヲーロツヘンヘラ (『實用朝鮮語正編』 p.49)
- 我^{われ} に 渡^{わた}せ ナイコイ、チューオラ (『兵要朝鮮語』 p.19)
- 我^{ワレ} ト一^コ所ニ来イ カツチカー、ちや、ニヤルタラヲナラ
(『日清韓對話便覽』 p.25)

また、これらの会話書には、禁止、許可、確認の表現も多用されている。大陸に進出をするために朝鮮に渡航するようになった日本の軍人には、生存、軍事物資を調達のために、命令、脅迫、確認、禁止のごく短い文章が必須であったようで、下記のような用例が多い。

- たわけを、言うな ホンマル、マルラ (『従軍必携朝鮮独案内』 p.14)
- 騎兵ハ。沢山。居リシカ クイビョーグン。マーニー。イツソ
(『日清韓三国会話』 p.99)
- 降参ヲユルス ハングボクハーヲ (『日清韓三国対照会话篇』 p.61)
- 騷^{サワ}グト斬^キルゾ チャークナン、チルハーミヨン、ポーピリチョー、チョーネ、サラミー、インナ (『日清韓對話便覽』 p.25)
- 彼処ニ。支那ノ。伏兵ハ。居ラヌカ チョウクイ。チュグク、ポクビョーグン。
インヌーニヤア (『朝鮮語学独案内』 p.144)

『朝鮮国海上用語集』・『實用朝鮮語 正編』・『朝鮮俗語早学』・『兵要朝鮮語』・『日清韓對話便覽』・『朝鮮通語独案内』・『日清韓語独稽古』には、丁寧な表現は全く用いられていない。『兵要朝鮮語』の凡例に、「本書は兵用を主とせるを以つて。儘ま粗俗に渉るの語あり。是れ尋常会話と其撰を異にする所以なり」と記し、兵士などが用いる言葉が多いため、荒っぽく、下品な言葉づかいも含まれており、日常の言い方とは異なる面があると述べている。また、[M 20-8]『従軍必携 朝鮮独案内』にも、「朝鮮語中二三応答を除く外故さらに賤語を用ゐて敬語を用ゐず蓋し専ら戦地実用を主として樽俎応酬を後にする」(凡例)と、敬語を用いず、専ら戦地で活用できることを目的として作られたことを明らかにしている。

②平易簡略な言葉

朝鮮での活用を目的とするため、簡単に覚えやすい会話文が盛り込まれている。『朝鮮語学独案内』のその緒言に「本書編纂ノ意ハ第一、出征ノ軍人ニ便シ第二、貿易ノ商人ヲ利スルニアリ故ニ用語ハ勉メテ平易簡單ヲ主トシ」と簡潔で平易な会話にを載せた

と記している。戦争での即座活用でき、基本的意思疎通に重点をおいたものといえる。

- 冷い ソンソンハラ (『朝鮮俗語早学』 p.12)
- 味が。大層。塩カライ マーシー。メーウー。スウコプタ
(『速成独学朝鮮日本会話篇』 p.45)
- 甚^{ハナハ}ダ弱^{ヨハ}イ シムイヤクホン (『独習速成日韓清会話』 p.38)
- 酒アルカ スルイスソ (『日清韓対話便覧』 p.32)
- 名はなに イロムモイラ (『朝鮮通語独案内』 p.6)
- 御兄弟ハ御^{オイクタリ}幾人です メーツ、ヘングテーヨ (『日清韓三国通語』 p.90)

③軍人に必要とされた表現

『日韓会話』の緒言に、「本書纂述ノ目的ハ朝鮮語未知ノ軍人ヲ利スルニ在リ。故ニ用語ハ務メテ平易簡略ヲ主トシ、成ルベク軍隊必要ノ言語ヲ撰録セリ」と、その対象は軍人で、軍隊に必要な言葉を選んだことを明らかにしている。『實用朝鮮語正編』にも、「支那及朝鮮語統編ハ正編ニ於テ遺漏セシ必要語ヲ編纂シ及發音ヲ便スル爲訓点ヲ付シタル者ナリ改正地圖ハ専ラ明瞭ト保存トニ注意シ軍人ノ實用ニ充タシムル爲メ出版セリ」と軍人に利用されることを目的としている。その凡例には、「本書編纂ノ意ハ吾儕軍人ノ軍務執行ヲ補助スルニアリ」と記しており、本書がもっぱら軍人の軍務執行のために編纂されたことが窺える。

- 槍持テ戦フ軍士モアリマスカ チヤク° カーチコサーウムハヌンクーンサトイ
ツソ (『日韓会話』 p.144)
- 支那ノ兵士ハ。皆。何処ニ。進テ。行キマシタ リユグククピヨグサーヌンター。
チヨウクイ。ヌーロー。カツスムネータ (『日清韓三国会話』 p.79)
- 逃^{ニグ}ルト 鉄^{テツボウ} 砲^{ウツ}デ射ゾ ターラナーミヨン チュング、ノツチー
(『日清韓対話便覧』 p.26)
- 其砲台に大砲があるか ク、ポーダイエー、タイワングーカー、インナ
(『旅行必用日韓清対話自在』 p.61)

軍人が戦地で武器や資源の調達や徴兵、敵兵の威嚇、手伝いの要請など、様々な場面を想定している。また、次のように、情勢に関する話題、日本軍人の心構えや士気を鼓舞させるための用例なども取り上げられている。

- 支那が非常にまけたさうです チェングキー、タイダニー、チェッタプデーヨ

(『従軍必携 朝鮮独案内』 p.21)

○国ノ為メ。戦場ニ於テ。死トテ。何ノ恨トイタシマセウカ

(『速成独学 朝鮮日本会話篇』 p.60)

○日本ノ兵士ハ。至敵ニシテ。質朴デス イルボンピョグサーヌン。チイラムハー
コー。チルパーキーヨ (『日清韓三国会話』 p.77)

その他、次のように朝鮮語を直訳した日本語、朝鮮の人物に関する話題、韓国式漢字熟語なども見受けられ、朝鮮や朝鮮語の知識がない人には、相当困難な学習内容ではなかったであろうかと推定されるものも含まれている。

○其言葉ハ。誠ニ。野俗デス クー、マルスームン。チュグマル。ヤーソク、ホー
ワーヨ (『速成独学 朝鮮日本会話篇』 p.57)

○白骨。難忘デゴザル ペクコル。ナンマグ、イロセータ

(『速成独学 朝鮮日本会話篇』 p.62)

○問：額字は誰が書きましたか ソンパン、クルシカー、ヌイ、クルシーヨ

答：大院君の字です タイウワングーヌイ、クルシーヨ

(『旅行必用 日韓清対話自在』 p.28)

4. 日本語の様相

4. 1. 語彙

これらの会話書には、「大日本(だいにほん)・仏蘭(ふつこく)・独逸(どいつ)・英国(えいこく)・露国(ろこく)・伊国(いこく)・米国(べいこく)・清国(しんこく)・朝鮮(ていせん)」(『日清韓三国会話』)のように、当時の国名、「祖父(そふ)・祖母(そぼ)・叔父(しくふ)・叔母(しくぼ)・親(おや)・母(は) 父(ち) 長男(ちやうなん)・長女(ちやうぢよ)・娘(むすめ)・姉(あね)・弟(おと) 妹(いもと) ¹⁰」(『日清韓三国会話』)といった親族呼称、その他に、「髪(かみげ) ¹¹・茄子(なすび) ¹²」(『従軍必携朝鮮独案内』)のように、当時の言い方がわかる語彙、また戦争への活用を目的としているため、「兵営(へいえい)・軍艦(ぐんかん)・兵隊(へいたい)・大砲(たいほう)・小銃(てつぱう)・弾丸(たま)・火薬(フヤク)・太刀(たち)・陸軍(りくぐん)・海軍(かいぐん)・剣(けん)・槍(やり)・矢(や)」と軍隊関連用語が共通的に収録されている。

『従軍必携朝鮮独案内』の「ごきかぶり・蠅(はひ) ¹³・生鮑(あをび)・南瓜(とうなす) ¹⁴」といった語彙からは、出版地や編著者により偏差が見受けられる。

人称代名詞には一人称に「我(ワレ)나・私(ワタクシ)・／我等(ワレラ)우리들・私共(ワタシドモ)우리」が二人称に「汝(アンタ)나・老兄(キミ)노형・御前(オマヘ)네・当身(タウシン)당신・貴下(アナタ)당신・貴君(キクン)귀군・貴殿(ソナタ)자네・尊君(アナタ)존군・貴君(アナタ)・／貴公(アナタ)공・貴公ガタ(アナタガタ) 공네／汝等(アンタガタ) 네들・御前方(オマヘガタ) 네희들・貴下ガタ(アナタガタ)당신네・君等(キミラ)공・들」(『朝鮮語学独案内』) が用いられている。朝鮮語対訳からみると、「アナタ」は「공 コーン」、
「ソナタ」は「자네 ツァーネー」になっており、「アナタ」が敬意の強い語として上位者に対して用いられ、「ソナタ」が同等、もしくは下位者に対して用いられている¹⁶。

これらの会話書には「あの奴 クーノム・この奴 イーノム・この畜生 イノマー」(『従軍必携朝鮮独案内』) といった卑罵語もみうけられる¹⁷。

表記面では「蠅(はい)¹⁸・御名前(おなまい)・御前(おまい)」(『日清韓三国通語』) とエのイ表記がされており、また「うま(馬)」を「むま」と表記している会話書(『日清韓三国会話』²⁰、『日清韓三国通語』) と「うま」と表記している会話書(『独習速成日韓清会話』、『日清韓三国対照会話篇』) がある。

これらの会話書には振り仮名が振られているものが多数あり、「○功名(コウメイ)ヲ遂(ト)ゲマシタ(p.12)／○問屋(トヒヤ)ニ荷物(ニモツ)ガ集ツテアリマス(p.12)／○三味線(サミセン)ヲ善(ヨ)クヒキマス(p.6)」(『独習速成日韓清会話』) のように、当時の漢語の読み方がわかる資料として活用できる。

4. 2. 命令

本資料群には命令には基本的に四段動詞は命令形(已然形)で、上一段動詞と下一段動詞はヨで表す。ところが、四段動詞に命令形+ヨ、そして上一段動詞はロ、下一段動詞にロ・イ・語幹のみの用例も混在している。

○大 袍たいほの形かたちは何どの様やうでありしか話はなせ タイボウモーヤーギーオツトンカイ
ルーラ (『実用朝鮮語』 p.35)

○成ナル丈ダケ。早ハヤク。飯メシヲ。焚ダケ トイトイロク、オーソー、パプ、チョーラ
(『朝鮮語学独案内』 p.158)

○水ヲ汲ネンデ来レヨ ムルトオナラ (『独習速成日韓清会話』 p.33)

○汝ナンヂハ。双ソウ眼ガン鏡キョウヲ。持モツテ。適ミ地チヲ。視ミヨ ソーヌン、サーカンキョーク。ル、
カーチョー、チョクチ、ポーシーヨ (『朝鮮語学独案内』 p.170)

○牛ギョウニク肉ニク。ト。葱ネギヲ。煮ニヨ ソーコーキ、ハコ、パーウル、サムラ
(『朝鮮語学独案内』 p.190)

○内に居る チベイツソ (『実用朝鮮語』 p.50)

○腹帯ヲシツカリシメヨ パイツ・イル、タンダーニ チャルローラ
(『日韓会話』 p.149)

○油をつげ キールム、プラーラ (『旅行必用日韓清対話自在』 p.89)

○彼処ニ舟ヲツケロ チョー、クイ、パイ、タイ、ヨーラー
(『日清韓対話便覧』 p.26)

○牛肉一斤クレイ ソーコーキハンゲンチューオ (『日韓会話』 p.241¹²¹)

サ変動詞とカ変動詞は各々「セヨ」「コイ」を用いているが、「セイ」「コヨ」の例もまれにみられる。

シナ マフリモノ キ ハヤ ホバク
○清国ノ。間 謀ガ。来マシタカラ。早く。捕縛セヨ チョングク、タムゾーク
ーニ、ワツスニ、オーソー、キヨルパクハンラ (『朝鮮語学独案内』 p.172)

○御客ハ豚肉ヲ御上リニナランカラ牛肉ラウマク調理セヨ クローミョン、トヤー
ヂコーキル、チャグマン、ハヤーラ (『日韓会話』 p.208)

○御前御 酌をしる ヤイ、スル、デョラ (『日清韓三国通語』 p.96)

コムギコ アス モツ コ
○小麦粉も。アルナラバ。明日。共ニ。持テ。来イ ミルカルト、イツスミョ
ン、ナイイル、アーオーロー、カチョー、オナラ (『朝鮮語学独案内』 p.127)

○二千ノ兵士ヲ。呼テ。来ヨ フルロー。ヲナーラ (『日清韓三国会話』 p.72)

4. 3. 文末 (断定)

断定を表す文末には「デス」が用いられているが、『独習速成日韓清会話』のように「デス」28例、「デアル」が41例で「デアル」が優勢である会話書もある。「ダ」は『実用朝鮮語正編』1例、『日韓会話』7例、『独習速成日韓清会話』4例、『日清韓三国会話』1例、『日清韓三国対照会話』6例、『旅行必用日韓清対話自在』2例、『日清韓語独稽古』1例で多いとはいいいにくい。「ジャ」は『従軍必携朝鮮独案内』・『旅行必用日韓清対話自在』に各々3例ずつのみである。「デゴザル」の用例は『日清韓三国会話』・『朝鮮語学独案内』・『日清韓三国通語』に各々4例、12例、4例、そして『日清韓対話便覧』・『旅行必用日韓清対話自在』に1例しか見受けられない。

○長独轎一つと歩轎二つじや デヤグドツキョー、ハンチャイ、ハコポーキョ、ゾ
ーツチ (『旅行必用日韓清対話自在』 p.78)

- 天地開闢以後無キ事ダ チヨンデーカイビョクイーフーロオブヌンニーリター
(『日韓会話』 p.37)
- 清国ノ軍士ヲ。ジキニ。破ル事ハタシカダ パール。パンハンタ。イーリーカー
ヨーニヨ (『日清韓三国会話』 p.80)
- アノ。道ハ。近イデスケレ・。大 層。險阻デス チョー、キーリー、カツカ
ーオナー、マイウー、ホムハオ (『朝鮮語学独案内』 p.146)
- 号令ガ。寛カナニヨリ。兵隊ガ。不規律デス ホーリョク・イ。ラムスクチアニ
ホニ。クンビョグイ。ヘイウイホラー (『日清韓三国会話』 p.77)
- 彼者ハ老人デアアルガナゼニ笠ヲ被リマセンカ クノームンノーイーニンデーウ
オイカツスルアンスオ (『日韓会話』 p.132)
- ソレハ。定価通りデアリマス クコスン、チヨンク・カ、ガー、イツソ
(『朝鮮語学独案内』 p.195)
- 其品ハ。真ニ。上 等 品 デ御座イマス クヌン、チャム、ホーピーミー、
オルシダ (『朝鮮語学独案内』 p.197)

また、次に示すように動詞に「デス」が接続する用例も見受けられる。

- 所謂。日本固有ノ。日本魂ガ。アルデス ソーウイ。イルボンコーユーホン。イ
ルボンマーウーミー。インヌンデーヨ (『日清韓三国会話』 p.82)
- 一当百ニ当ルデス イルタグペーキーヨ。(『日清韓三国会話』 p.80)
- 止メタデス (『独習速成日韓清会話』 p.10)

5. 日露戦争に使用された会話書

明治 20 年代の日清戦争時には、朝鮮語と中国語、日本語の 3 カ国語が同時に収録されて
いたものが、明治 30 年代の日露戦争(明治 37 年 2 月～明治 38 年 9 月)時にロシア語や
満州語の会話に加えられ、『日露清韓会話自在法』・『対訳日露清韓會話軍人商人必携』
・『袖珍実用満韓土語案内』・『日露清韓会話早まなび』・『日露清韓会話自在』・『日韓清
英露五国単語会話篇』といった、4 カ国語ないしは 5 カ国語のものが登場する。『対訳
日露清韓会話 軍人商人必携』には、「三ヶ国以上のものは、絶て無いのである。然る
に今回の時局は、名は日露の衝突といふが、其戦争の地は、寧ろ清韓に於て開かれるの
である、して見ると、この時局について、最も必要なのは、日露清韓四国の会話と、其
地図とであることは、今更いふまでもない」という述べてあり、これらは明らかに大陸
進出を念頭に置いて編纂していることが見てとれる。

『実用袖満韓土語案内』には「本書ハ主トシテ満韓両地ニ於ケル軍隊行動ノ使ニ資セ

シガ為メ特ニ軍事的着眼ヲ以テ編纂セリ、故ニ其目的ニ合スルモノト誤ムルノミヲ蒐集
連結シ彼ノ麗語敬辭ノ如キハ一切之ヲ省ケリ」(凡例)と記しており、日清戦争への活
用のために出版された会話書同様、軍隊行動に重点を置いた言い方を掲出していること
を明らかにしている。

○何処に魯国兵は居るか チョクピョーギオーテーイツソ

(『対訳日露清韓会話 軍人商人必携』斥候²³⁾)

○皆持つて来い モトカチヨオナラ (『日露清韓会話早まなび』p.170)

○相 当の賃 銭ヲ与フルゾ サングタングハンサークルチュルラ
サウタクウ チンセン アタ

(『日露清韓会話自在』p.66)

一方、日清戦争への活用を目的とした会話書には常体の言い方が多いのに対して、こ
れらには、常体を含め、次のように「デス・マス」の敬体や「オ～ナサイ」「オ～ニナ
ル」などの丁寧な言い方が増加する。

○日本は島国で土地は狭くとも人の精神が違います (『日露清韓会話自在法』p.29)

○海軍は英国が第一でしやう ヘイクーン。イヨンギー。チェーイーリーヲ

(『日露清韓会話自在法』p.27)

○御這入りナサイ (『日韓清英露五国単語会話篇』p.28)

○何処にお出でになりかすか オーテロカーオ

(『対訳日露清韓会話軍人商人必携』旅行)

○貴君は何処にお 住 なされますか オテケイシヨ
あなた どこ すまゐ

(『日露清韓会話早まなび』p.126)

○金子ト品 物デ御座イマス (『日露清韓会話自在』p.52)
カネ シナモノ

6. おわりに

以上、明治20年代の日清戦争への活用のために編纂された朝鮮語会話書の特徴と
日本語について概観した。

明治20年代の日清戦争への活用を目的として出版された会話書の特徴としては、
朝鮮語会話書特有の表記や句読点が工夫されている。また、形態の面では、①軍人
の携帯のために作られたこと(いわゆるポケット版)、②分量が少ないものが多く、内容
の面では、①命令・禁止・許可・確認表現の使用 ②平易簡略な言葉 ③軍人に必
要な言い方(物資や食料調達など)の使用、が挙げられる。その言語は、敬語を用い

ず、荒っぽく、下品な言葉づかひも含まれており、日常の言い方とは異なる面もある。

日清戦争への活用の会話書が日清朝3カ国語の収録していたが、明治30年代の日露戦争への活用のための朝鮮語会話書には、ロシア語や満州語が加えられ4カ国語ないしは5カ国語の収録するようになる。内容の面では日清戦争への活用のための会話書と類似しているが、その言語には丁寧な言い方が増加する傾向を見せる。

日清戦争への活用のための朝鮮語会話書は、時期的に早い語法の用例や膨大なデータが得られる資料とはいいいくいが、他の資料とは異なる明確な特徴のある資料として、当時の近代日本語の様相を窺える資料として看過できないものであろう。

[注]

- *1 筆者が調査した明治20年代の朝鮮語会話書は21点であるが、そのうち16点が戦争への活用のためのものである。
- *2 朝鮮語会話書の題名にも、こういった推移が反映され、明治10年代の「韓」「善隣」「交隣」が、明治20年代に入り日清戦争を契機に「朝鮮」「兵用」「従軍」といった語が用いられる。
- *3 櫻井義之(1964)によると、明治の初年より日韓併合にいたる約半世紀にわたる間に出版された文献資料が600余冊に上るなど、当時朝鮮に対する日本の関心がかなり高かったことがわかる。内容から見ると、経済・残業部門が圧倒的に多く、事情一般・政治・歴史・地誌・語学の順序を示し、当時の日本が大陸に何を求めたいたかが窺える。
- *4 以下に考察対象とす明治20年代における日清戦争への活用を目的として出版された朝鮮語会話書の一覧を示す。題名、出版年月、編著者、出版地、出版社、所蔵場所の順で記す。①朝鮮国海上用語集 1894(明治27.6) 田村宮太編 東京 水交社 国会 ②実用朝鮮語 正編 1894(明治27.7) 中島謙吉編 東京 尚武学校編集部 国会 ③朝鮮俗語早学 1894(明治27.7) 松栄玄訓堂 金沢 三余堂 国会 ④兵要朝鮮語 1894(明治27.7) 近衛歩兵第一旅団編 東京 明法堂 国会 ⑤新撰朝鮮会話 1894(明治27.8) 洪爽鉉著 東京 博文館 国会 ⑥従軍必携 朝鮮独案内 1894(明治27.8) 栗林次彦著 熊本 国会 ⑦速成独学 朝鮮日本会話篇 1894(明治27.8) 阪井武堂校閲 東京 叢書閣 国会 ⑧日韓会話 1894(明治27.8) 参謀本部編 東京 国会・東経大・大府中央・阪大⑨独習速成 日韓清会話 1894(明治27.9) 吉野佐之助 大阪 明昇堂 国会 ⑩日清韓三国会話 1894(明治27.9) 坂井鈞五郎著・多田祖閣 東京 松栄堂 国会 ⑪日清韓三国対照会話篇 1894(明治27.9) 松本仁吉著 大阪 中村鍾美堂 国会 ⑫日清韓対話便覧 1894(明治27.9) 田口文治著 仙台 田口文治 国会 ⑬旅行必用 日韓清対話自在 1894(明治27.9) 太刀川吉次郎 東京 鳳林館 国会 ⑭朝鮮通語独案内 1894(明治27.11) 池田勘四郎著 香川 池田勘四郎 国会 ⑮日清韓三国通語 1894(明治27.12) 天淵著 東京 薫志堂 国会 ⑯日清韓語独稽古 1895(明治28.3) 漢学散人著 東京 宇都宮民太郎 国会
- *5 『日清韓三国対照会話篇』の凡例に「本書載スル所ノ言語ハ現今尤モ必要ナル清韓両国語ヲ本那語

ニ対照シタモノニシテ初学独習ノ便ニ供センコトヲ期セリ」とある。

- *6 『従軍必携朝鮮独案内』に「此書固より従軍人士の懐中用便ぶ供せんとす故を以て記事略図ともに成るべく簡易を主として唯た(マ)其大要を示明するのみ韓語の如きに至りては殊に然りとす(凡例)と記してある。
- *7 朝鮮語はハングルとハングルの発音を片仮名で示しており、二通りの方法がある。ここでは、両方のどちらかに句読点を付けていれば、朝鮮語に句読点が付けられていると見なした。
- *8 雑誌「軍事界」(1902年)に「兵語としての口語及文章語に就て」によれば「兵語」とは「簡單明瞭」「勇壯活発」「教育上の方法が容易」であるべきだと述べたうえで、軍隊でも統一された文語、口語が要請されるという。つまり、命令が正確に伝わらないことには、戦闘もできないという趣旨であろう。
- *9 「。」は、本文中の日本語の一つの文章の区切りをわかりやすくするためだと著者の松岡馨は述べている。
- *10 『日清韓三国通語』・『日清韓三国対照会話』・『日清韓三国会話』には、「妹(イモト)・弟(ヲト)」とあり、『日清韓語独稽古』には「弟(おとうと)・妹(いもうと)」と表記されている。
- *11 『言海』に「かみ(名)|髪|〔上髪(カミゲ)上髪ノ略ナラムト云フ〕とある。
- *12 『言海』「なす(名) 茄子(ナスビ)茄子の略」
- *13 『言海』に「はへ(エ)へ(名)|蠅|訛シテハイ(後略)」とある。
- *14 『言海』カボチャ(名)|南瓜|(初メ Cambodia.(柬埔寨)ヨリ来ル)中略(東京ノ称)京都ニ、タウナスビ
- *15 友人に対する語という解説が付いている。
- *16 『従軍必携朝鮮独案内』にも「あなた コーン ・ソナタ ツアーネー」になっている。
- *17 当時身分社会制度があった朝鮮では上位者が下位者に普通に卑罵語を使っていたようである。
- *18 文明本節用集に「蠅 ハイ」とある。物類称呼に「蠅は関西にてはへ 関東にてははい」とある。
- *19 日国によると、「おまい」は千葉で用いられたという。
- *20 本書には「梅」は「うめ」と表記している。
- *21 ○牛肉一斤くれ ソーコーキハンゲンチューオ (『旅行必用日韓清対話自在』p.50)
- *22 本書には頁が付されていない。

[参考文献]

- 梶井陟(1978)「朝鮮語学習書の変遷」(『季刊三千里』第16号)
- (1984)「日本人の朝鮮語学習史—明治から日本の敗戦まで—」(『季刊三千里』第38号)
- 久保田優子(2005)『植民地朝鮮の日本語教育—日本語による「同化」教育の成立過程—』九州大学出版会
- 桜井隆(2005)「植民地教育史研究における言語の問題」(『植民地国家の国語と地理』) 皓星社
- 桜井義之(1956)「空迫繁勝の朝鮮語学書について—附朝鮮語学書目—」(『朝鮮学報』第9集)
- (1974)「日本人の朝鮮語学研究(一)～(二)」(『韓』第3巻第7号～第8号)

- 成玗珂 (2006) 『交隣須知』にみられる語法の変化」(『国語と国文学』第 83 卷 12 号)
—— (2007) 「近代日本語資料としての『日韓通話』」(『日本語学論集』第 3 号)
—— (2008a) 「近代日本語資料としての『日韓日新会話』」(『日本語学論集』第 4 号)
—— (2008b) 「[研究ノート] 日本語資料としての朝鮮語会話書 [明治前期]」(『日本語の研究』第 4 卷 2 号)
—— (2008c) 「明治期における会話書『独習新案日韓対話』」(『近代語研究』第 14 集) 武蔵野書院
浜田敦 (1970) 『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
山田寛人(2004) 『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策』不二出版

(ソン ユンア 大学院人文社会系研究科 博士課程)

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----------------|-----------------|---|---|
| 55 | 下 15 | T.S.Pineo "Pineo's Primary Grammar of the English Language | T.S.Pinneo "Pinneo's Primary Grammar of the English Language |
| 6655 | 上 下 1120 | The Conjunction, The Interjection which distinguish the <i>time</i> for what it affirms. | The Conjunction, The Interjection which distinguish the <i>time of</i> what it affirms |
| 67 | 下 11 | (yesterday, or last week, or many year <i>since</i>) | (yesterday, or last week, or many year <i>since</i>) |
| 7574737268 | 下 下 111919 | 渡辺約郎『皇国小文典』 | 渡辺約郎『皇国小文典』 |
| 7574737268 | 上 上 111919 | 「面白い第二未来は(明治十二年七月) | 「面白い第二未来は(明治十二年(一八七八)七月) |
| 7574737268 | 下 下 8 8 11 | 不定法、願示法(直説法) | 不定法、願示法(直説法) |
| 7574737268 | 上 上 8 8 11 | 本邦俗言「デアラウ」デアモア | 本邦俗言「デアラウ」デアモア |
| 7675 | 下 下 16 | 栗野忠雄『英文典直訳』 | 栗野忠雄『英文典直訳』 |
| 7675 | 上 上 6 16 | 心なり。」メリの説明に、 | 心なり。」メリの説明に、 |
| 76 | 上 上 15 | 『副玉緒延約』のラシの説明に、 | 『副玉緒延約』のラム・ラシの説明に、 |
| 8380797976 | 上 上 17 19 | このひかたいろくあれども | このひかたいろくあれども |
| 8380797976 | 下 下 17 19 | 研究者をいわゆる推量助動詞の | 研究者をいわゆる推量助動詞の |
| 8380797976 | 上 上 181417 7 19 | 陳述をなすに用いるらるゝなり。」 | 陳述をなすに用いるらるゝなり。」 |
| 8380797976 | 上 上 181417 7 19 | 福井久蔵(一九四二・二)『国語学』 | 福井久蔵(一九四二・四)『国語学』 |
| 147 (48) | 13 | 「(は)う」に相当する形としてbe | 「(は)う」に相当する形としてbe |
| 147 (48) | 13 | がある。 | がある(直前の音によつて)beで |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | 「ganbe」になるが、 | 「ganbe」になるが、 |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | 形容詞の「終止形」は共通語で… | 形容詞は「終止形」について、 |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | (中略)…後者で代表させる。 | 東京方言の「ai, ui, oi, sui」は |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | よつて「終止形」相当の語尾は | 対応するものがおぼやかり、ui |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | (語によつては-iが普通) -oi, - |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | sui ~ sui (後者で代表させる)と |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | なる…赤く/age; 白く/hurui |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | く/awari; 黒く/kuroi; |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | 若く/kurusuu ~ sui。また語 |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | 尾gu (kute, …) がつた場合が |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | 次のようである: 赤く/agegu, |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | agagu; 白く/hurugu, 黒く/war |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | igu, warugu; 黒く/kurogu; |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | 若く/kurusugu。一赤く/awari |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | の併用形はいずれも前者で代表さ |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | せる。したがつてこれらの語尾は |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | age, huru, wari, kuro, kuru |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | suiとする。また「終止形」相当 |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | の語尾は |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | teのみ位置が異なるもの(ただし |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | 「te」とカタインで出ることもある。 |
| 144147 (51)(48) | 9 22 | | (前接) |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | か かる方言では「アクセント業性 | たとえは東京方言では「アクセン |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | :: (中略) …2つの存在が語尾 | ト業性…(中略) …2つの存在が |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | ごとに固有)からである。核が語尾 | 語尾ごとに固有)からである。核が |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | モーラを認める。 | モーラの存在を認め、原則として |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | | モーラが核を担うものとして記載 |
| 166130 (79)(65) | 表 14 5 | | した。 |
| 144 (81) | 15 | | |

